

令和二年（西暦 2020 年）度

国際仏教学大学院大学

博士学位論文

珍海の三論教理思想の研究

指導教員 藤井 教公 教授

仏教学研究科 博士課程

学籍番号 15112 王 奇

目 次

凡 例	3
序 論	5
一 問題の所在	5
二 先行研究	9
三 本論文の構成と研究方法	12
本 論	15
第一章 珍海の生涯と著作	15
小結	20
第二章 珍海における三論宗著作の特徴	21
小結	35
第三章 『一乗義私記』について	37
第一節 『一乗義私記』の内容構成	39
第二節 「破三」と「帰一」	44
第三節 一乗と涅槃仏性について	47
第四節 『一乗義私記』と『大乘玄論』「一乗義」との比較	55
小結	72
第四章 珍海における中道思想	75
第一節 『大乘正観略私記』の概観と内容	76
第二節 二諦と中道	79

一 二諦について	82
二 中道について	95
三 正観について	102
第三節 二智と二諦	107
一 吉蔵の二智義について	110
二 珍海における二智義の継承	118
三 二智と二諦について	126
小結	128
第五章 珍海の教判と三論宗教理思想の特徴	132
第一節 三転法輪について	133
第二節 教迹と論迹に関する解釈	139
一 教迹について	139
二 論迹について	145
第三節 珍海における三論宗教理思想の特徴	153
一 珍海の速疾成仏思想について	153
二 逆罪滅除について	159
三 逸文である吉蔵の『大般涅槃經疏』に関する引用	171
小結	182
結論	186
参考文献	191
珍海の三論教理思想の研究・資料編	196

凡 例

- 一、本論文に用いるテキストはすべて『大正蔵』に所録されたものである。
- 二、経名、書名は『』を附し、論文名は「」を附す。
- 三、經典、著書、論文などの引用文は「」を附し、本文中にある割注は〈〉を附す。
- 四、経論の引用文の中の漢字は正字のまま提示して、書き下し文、及び本論文の漢字は略字で表す。例えば、

「若教理俱存、乃是眞無所得也」

(若し教と理と俱に存すれば、乃ち是れ眞の無所得なり)

- 五、注記について、
典拠の表記は以下のようである。
まず著者名と經典名・論書名を挙げて、次に所属経蔵と卷数を挙げ、最後にページ数、段及び行数を挙げる。例えば、

吉蔵『三論玄義』『大正蔵』卷四十五. p. 10c14-17

- 著作と論文の表記は以下の通りである。
著書の場合、まず作者名と著作名を挙げて、次に出版社と出版年を挙げる。
例えば、

平井俊榮『中国般若思想史研究—吉蔵と三論学派—』春秋社. 1976

- 論文の場合、まず作者名と論文タイトルを挙げて、次に雑誌名と卷数を挙げ、最後に発行年とページ数を挙げる。例えば、

菅野博史「『大乘四論玄義記』の基礎的研究」『印度学仏教学研究』第 57 号. 2008. pp. 512-504

序 論

一 問題の所在

本論文は日本平安末期の僧、珍海（1092 年－1152 年）の三論宗関係の著作を中心資料として、先行研究を踏まえて珍海における三論宗思想について考察したいと思う。

珍海は平安末期の学僧として、三論、法相、華嚴、因明、浄土に通じ、『八識義章研習抄』三卷、『菩提心集』二卷、『俱舍論明眼抄』六卷、『決定往生集』二卷、『安養知足相對抄』一卷、『因明大疏四種相違抄』二卷の著作があり、また、三論宗に関する『大乘正觀略私記』一卷、『三論玄疏文義要』十卷、『一乗義私記』一卷、『大乘玄問答』十二卷、『三論名教抄』十五卷の著作が著され、後世の三論宗思想の研究にその文献資料を提供している。

今まで、珍海に関する先行の研究は主に浄土思想に集中して、研究を勧められ、彼の三論宗思想については、今の段階においてほとんど言及されていない。

珍海の三論宗著作を見渡すと、「抄」と「私記」というような形式で表すのが著作の特徴である。例えば、『三論玄疏文義要』と『三論名教抄』の両著作は共に三論宗における重要な名目を挙げて解釈するものであるが、異なるところは、『三論名教抄』は三論宗の重要な名目に対して解釈することを重視し、珍海自身の考えがほとんど見られない。これに対して『三論玄疏文義要』はその名目を解釈した後、珍海自身の考えがよく見られる。これは珍海における三論宗思想の研究について重要な資料となるのである。

しかしながら、珍海の『三論玄疏文義要』の中には、三論宗の大成者吉蔵（549 年－623 年）の著作だけを引用するのではなく、数多くの別の著作も引用し、多数の見解を参照した上で、珍海自身の観点を述べるのは普通の流れである。また、『三論玄疏文義要』の最終的に完成した年代について、第三卷の「三種方言」に対する割注から見れば「猶可別尋之。保延六年九月二十六日始得意之」と述べていて、珍海は保延六年（1140 年）の時、始めに三種方言の義を習得し、三論宗の重要な名目として『三論玄疏文義要』の中に写した可能性があり、巻末に記載している保延二年（1136 年）であるとは限らないと考える。

また、『三論玄疏文義要』の中では、珍海は速疾成仏と神通乗というような観点を述べた。速疾成仏の概念は吉蔵が自分の著作の中には述べたことがないし、神通乗によって成仏することができるような教説を論述したこともない。珍海がこのように述べた理由は何であろうか。神通乗ということは一体何を指すのであろうか。

また、速疾成仏のほか、珍海は『三論玄疏文義要』の中に、懺悔滅罪ということについて論述し、正観懺悔こそ重要であり、悪業が全て滅除できると述べた。珍海がこのように述べた根拠は何であろうか。また、正観懺悔が重要であるとするならば、相対的に珍海が批判した深刻ではない懺悔は何であろうか。このような問題をめぐって考察したい。

また、『三論名教抄』について『大蔵経全解説大事典』では、「(『三論名教抄』は) 中論疏の中の必要なる名目を列举してこれを解釈したもの」と述べているが、実は、『三論名教抄』の冒頭に

「今、欲令玄・事兼明、且出玄疏名教耳。附本八科於其法門、凡有一百四十餘篇。初二諦之中有二十五義……次八不義中有七義、佛性義中有五義、一乘中有五十六義、涅槃義中有十三義、二智中有二十二義、教迹中有八義、論迹中有六義。」

(今、玄・事をして兼ねて明かさんと欲さば、且く『玄疏名教』を出るのみ。本の八科を其の法門に於いて附し、凡そ一百四十餘篇有り。初めの二諦の中には二十五義有り……次の八不義の中には七義有り、仏性義の中には五義有り、一乗義の中には五十六義有り、涅槃義の中には十三義有り、二智の中には二十二義有り、教迹の中には八義有り、論迹の中には六義有り。)

と述べている。文中に挙げられた「二諦」「八不」「仏性」「一乗」「涅槃」「二智」「教迹」「論迹」などの八義は正に吉蔵の『大乘玄論』に説かれている八の項目である。このことから見れば、『三論名教抄』の主旨は吉蔵の『大乘玄論』の八義¹に基づいたのではないだろうかと思わざるを得ない。

¹ 『大乘玄論』の中に説かれている二諦、八不、仏性、一乗、涅槃、二智、教迹、論迹という八義について

実は、『三論名教抄』だけではなく、珍海の『三論玄疏文義要』の中にも『大乘玄論』の八義に対する解釈が見られる。更に、珍海は『大乘玄論』に対して『大乘玄問答』という問答体の著作を著し、それに『大乘玄論』「一乗義」に対する解釈文『一乗義私記』がある。それぞれの著作は『大乘玄論』と関係があり、当時の社会において『大乘玄論』の重要さと、珍海にとっての重要度が分かるであろう。

また、珍海における中道思想について、珍海は『大乘正観略私記』一卷を著し、この著作は珍海の三論宗関係の諸著作において唯一の名目の抄録ではなく、『中論』を中心として論述したものである。この著作の中に珍海は正観の大意、三論宗の承習、中道不二の思想などについて論じ、三論宗における重要な教説である四重二諦、十種二諦、三種方言などにも言及している。しかし、漢文の表し方によって、内容の意味を取りにくいところがあり、珍海が言及した二諦と方言の義においても、ただその名目を取り挙げ、解釈はしなかったのである。したがって、珍海における中道思想の様態はどのようなものであろうか。そして、『大乘正観略私記』の中に言及した四重二諦、十種二諦、三種方言に関する解釈は如何なるものであろうか。更に、正観とは何であろうか。等の問題を考えつつ珍海の『大乘正観略私記』を読む時、彼の別の著作『三論玄疏文義要』と『三論名教抄』を参照しなければならない。

また、吉蔵の『大乘玄論』「一乗義」に基づいて著された『一乗義私記』について、いくつかの観点から簡略に述べたい。

まず、珍海の『一乗義私記』は吉蔵の『大乘玄論』巻三の「一乗義」に対する解釈であり、内容的に乗、乗体、三車、仏の三身など『法華経』に説かれる教義をめぐって珍海自身の見解を述べた著作である。

『一乗義私記』に対する検討によって、筆者は吉蔵の『大乘玄論』には別の異本が存在したのではないかと疑念を抱くようになった。

例えば、『一乗義私記』では

て、日本の学者伊藤隆寿氏が『三論宗の基礎的研究』（大蔵出版 2018）の中において八義科と呼ばれており、義科という文句は中国仏教にはほぼ見られない。また、珍海は『三論玄疏文義要』の中に「已上大乘玄論義科之要也。又別章三卷、唯明二諦。二諦是今家之旨歸耳。餘玄疏等、皆隨所應知其宗致矣。」と、『大乘玄論』の八義を義科と呼ばれている。

「言七軸者、即法華一部。」

(七軸と言うは、即ち法華一部なり。)

と述べているのに対して、『大乘玄論』では

「迷之則八軸皆壅。」

(之れに迷えば則ち八軸皆壅ぐなり。)

と述べている。珍海が記している七軸は『法華經』七巻本のことである。しかしながら、吉蔵が『大乘玄論』において依用したのは『法華經』八巻本である。また、『一乗義私記』の中で五仏性について述べている際に

「更可考他本之」

(更に他本の之を考すべき。)

と説かれている。さらに、『一乗義私記』の内容構成について、ほぼ『大乘玄論』「一乗義」に従う随文解釈の形で展開されるが、『一乗義私記』の冒頭にある文章と『大乘玄論』「一乗義」の冒頭の内容と比べると目立つ違いがあり、『大乘玄論』に他の版本があった可能性が極めて高いと考えられる。近年、『大乘玄論』の内容構成と吉蔵真撰の問題については多くの学者によって疑問が提起されるし、珍海自身も『三論玄義文義要』の中に『大乘玄論』は元に二十巻あり、内容的にも相違があつて異本が存在すると述べている。そして、吉蔵が依用した『法華經』は七巻本であろうか、八巻本であろうかの問題はすでに菅野博史氏、伊藤隆壽氏などの学者が疑念を表明した²。

また、珍海は『一乗義私記』において、吉蔵の『大乘玄論』と『勝鬘宝窟』及び慧遠の『大乘義章』を引用して、『法華經』の中心思想である三乗と一乗との関係について論述した。珍海の三論宗思想はほとんど吉蔵に由来するが、三

² 菅野博史「『大乘四論玄義記』の基礎的研究」『印度学仏教学研究』第57号、2008、pp. 512-504

乗と一乗との思想について、珍海の観点は何であろうかを考察したい。

二 先行研究

先行研究の成果をいくつか挙げる。

参考著作

従来、三論宗に関する研究は吉蔵を中心として進められ、彼によって説かれた教判、二諦、八不中道、仏性、涅槃などの教義に焦点が当てられてきた。近年日本と中国においては、吉蔵の諸著作の内容と思想の分析、及び三論宗思想の日本における受容と展開について、いくつか重要な研究がなされた。その中では、平井俊榮氏の『中国般若思想史研究——吉蔵と三論学派——』（春秋社 1976）があり、内容について全面的に三論宗の成立、理論の構造、思想の伝承について詳細に論じている。平井氏は本書の「第四章、三論教義に関する二、三の問題」の中で

「吉蔵においては八不も二諦に他ならないのであるから、三論の宗義は、結局二諦に帰着せざるを得ないのである。」

と、二諦は八不を包摂し、三論宗の中心思想であると見なし、真俗二諦と八不中道の共通点を明らかにした。

そして、珍海は『三論玄疏文義要』巻一の中で『大乘玄論』について

「更有一本、八不次安二智、境智因果、所詮能詮等次第也……有異本不同、又文有増減之異也」

と説き、現行の『大乘玄論』の八義の順次と異なっていると説いた。

これに対して平井氏は二諦、八不、二智の関係を考察して、『三論玄義』「破邪顕正」の正の義を用いて、非真非俗の理は体正であり、つまり八不である。真俗の教は用正であって、更に真俗の教をまた体と用に分け、体は二諦、用は

二智であると解釈しており、二諦義、二智義のような順序にするべきであると指摘した。氏の指摘は極めて重要であり、珍海の立場を理解する上でこの三義についての解釈は示唆的であった。この著作は三論宗を研究する学者にとって、見過すことのできない研究書であろう。

また、坂上雅翁氏は「珍海一画僧と学僧一」『浄土仏教の思想』七（講談社 1993）の中で、珍海の生涯や画僧としての修学など詳しく論じている。思想方面はほとんど浄土教関係であるが、珍海の事跡については重視すべき参考資料である。

また、『法華経』の注釈書について論じているのは、菅野博史氏が著した『法華とは何か・『法華遊意』を読む』である。本書の序論の部分には、『法華経』に関する概観及び経典についての構造が整理して述べられている。本文の部分には『法華遊意』の本文が解説されており、『法華経』の中に説かれている教義と吉蔵の法華思想の主旨、特に三乗と一乗の関係を捉えることに役に立つ。

また、近年、伊藤隆壽氏により著された『三論宗の基礎的研究』（大蔵出版 2018）は、三論宗についての文献を幅広く網羅した一書である。三論宗研究の上で伊藤氏の見解と、氏がまとめた先行研究の成果は極めて参考価値がある。

伊藤氏は本書の「第四章、『大乘玄論』成立の諸問題」の中で、横超慧日氏や奥野光賢氏などの先行研究を踏まえて、『大乘玄論』諸義の比較を通して、日本編纂説を提案した。理由として、その時点で三論宗の宗義を確立させ、僧衆に学習させる必要があり、他宗との論争対抗のためにも三論宗の綱要書が要請されて編纂されたとの仮説を立てた。

また、中国においては、董群氏、廖明活氏などの先行研究がある。董群氏は『中国三論宗通史』（鳳凰出版社 2008）を著し、本書の始めに般若經典を取り上げ、三論宗の中心思想としての般若空観思想の形成とその背景を明らかにした。本書は閩河三論学派から摂山学派まで、さらに吉蔵の三論学説の形成と三論学派と仏教諸宗の繋がりについて詳しく論じており、重要な参考書である。

また、廖明活氏の『嘉祥吉蔵学説』（台湾学生書局 1985）は、吉蔵の破邪顕正の方法論と教判について論じており、仏性について氏は、吉蔵の五種仏性に対する解釈は『浄名玄論』と『中観論疏』などに散見できるけれども、『大乘玄論』巻三の「仏性義」にある「簡正因」と「釈名」によって最も詳細に述べられて

いると指摘した。

また、李勇氏の『三論宗仏学思想研究』（宗教文化出版社 2007）において、二諦思想の形成、四重二諦の内容、及び吉蔵における教判について論述しており、二諦思想の様態を考察することにおいて役に立つ。

参考論文

吉蔵『大般涅槃經疏』逸文の整理について、平井俊榮氏の先行研究の成果「吉蔵著『大般涅槃經疏』逸文の研究」（上・下）がある。平井俊榮氏の研究により、珍海が引用した『大般涅槃經疏』は吉蔵の著作であり、現在まで伝わらない南本『涅槃經』対する注疏である。当時、安澄（763 年-814 年）の『中觀論疏記』、玄叡（?-840 年）の『大乘三論大義抄』、珍海（1092 年-1152 年）の『三論名教抄』と『三論玄疏文義要』、澄禅（1227 年-1307 年）の『三論玄義檢幽集』などの著作の中において、吉蔵の『大般涅槃經疏』の引用文が数多く見られている。八世紀から十四世紀までの長い間に、吉蔵の涅槃經思想は日本三論宗に大きく影響を与えたことが分かった。

『大乘玄論』の内容構成について、三桐慈海氏の「慧均撰四論玄義八不義について―大乘玄論八不義との比較対照―」（1）と「大乘玄論の八不義―慧均撰八不義について―」（2）がある。

三桐氏はこの二つの論文において、『大乘玄論』の八不義と『四論玄義記』の八不義の比較を行い、『大乘玄論』が慧均の八不義のそのままではない要素が加味されて成り立ったものであると指摘された上、『大乘玄論』の著者について三つの可能性を挙げた。

一つ目は、後に吉蔵の門弟によってその八不義が『大乘玄論』に編入されたのである。

二つ目は、吉蔵が自ら慧均の八不義を取り入れたのである。

三つ目は、八不義はそもそも吉蔵の師である法朗の著したものともではないのであると推測されたのである。

この二つの論文は、『大乘玄論』の内容に対する理解において極めて参照する価値がある。

また、奥野光賢氏が『大乘玄論』に関する諸問題―「一乗義」を中心として―において、『大乘玄論』の「一乗義」と吉蔵の別の著作『勝鬘宝窟』、『法華玄論』、『法華遊意』などと比較を行い、『法華論』の引用について、『法華義疏』や『勝鬘宝窟』には一度も「晚見法華論」のような「晚見」という用例がなく、その引用は「奇異な感じがする」と指摘され、『大乘玄論』「一乗義」は吉蔵の先行する著作の多くの文脈に依拠して成立しており、そこには機械的とも思われ繋がれ方も散見されたと指摘された。この論文は『大乘玄論』「一乗義」の内容構成について考える上で有用であり、奥野氏の観点は極めて参考する価値がある。

以上挙げたいくつかの先行研究を踏まえて、筆者は以下のように本論文を述べる予定である。

三 本論文の構成と研究方法

本論文は珍海の『三論玄疏文義要』、『大乘正観略私記』、『一乗義私記』を主な研究資料として、珍海における中道思想に対する理解、四重二諦と十種二諦の様態、正観と無礙の繋がり、珍海の教判及び教述と論述に対する把握、仏性と一乗に関する受容と解釈、珍海の独自性がある速疾成仏と懺悔滅罪について検討を行い、『大乘玄問答』と『三論名教抄』を補助資料として用い、三論宗に関する珍海の諸著作を総合的に網羅して、彼の三論宗思想を分析したい。論文の構成は全体として五章に分けられ、内容は以下のようなものである。

序論

- 一、問題の所在
- 二、先行研究
- 三、本論文の構成と研究方法

本論

第一章、 珍海の生涯と著作について検討する。

本章において、まず小野玄妙氏と坂上雅翁氏の先行研究の結果を踏まえて、

珍海の生没年代について考察した。また、現存する歴史資料を参考しつつ、珍海の修学と思想の継承について明らかにしてみたい。

第二章、 珍海における三論宗著作の特徴を検討する。

本章においては、まず『三論玄疏文義要』の中に述べた内容からこの著作の完成年代について検討したい。

また、『三論玄疏文義要』の概観と内容の構成を検討していきたい。

第三章 『一乗義私記』について検討する。

本章では、まず『一乗義私記』の内容構成について検討を行い、珍海が一乗義を解釈する意図と一乗に対する理解を明らかにしたい。

次に、『法華経』の中心思想と言える三乗と一乗との関係について、珍海における思想の受容を考察し、その様態を明らかにする。

また次に、一乗と仏性について、珍海の継承様態を考察する。

また次に、『大乘玄論』「一乗義」と『一乗義私記』を中心資料として、両著作の内容構成をめぐって比較を行い、相違するところを明らかにしたい。

第四章 珍海における中道思想を検討する。

本章において、筆者はまず、珍海の『中論』を趣旨として論述した『大乘正観略私記』の著作概観と書誌情報を紹介しておきたい。

次に、『大乘正観略私記』と『三論玄疏文義要』を互いに参照しつつ、珍海における二諦思想の継承様態を明らかにしたい。特に四重二諦と十種二諦という『大乘正観略私記』の中に名目だけを取り挙げた二種類の教説を考察したい。

また次に、珍海における中道思想を考察し、二諦と中道との関係、及び中道の種類について検討する。

また次に、珍海が『大乘正観略私記』の中に説かれた正観の意義をめぐって考察する。正観の定義と働きを明らかにしたい。

また次に、二諦と二智について検討する。本項において二智と八不、及び二諦との関係を明白することを目的として、珍海に関する二智義の継承様態を明

らかにしたい。

第五章 珍海の教判と三論宗教理思想の特徴について検討する。

本章では、まず珍海における教判思想について検討を行い、また、珍海の三論宗教理思想の特徴をめぐって考察する。

教判において、まず珍海の教相判釈に対する解釈を分析して、また吉蔵の教判思想と比較を行い、その相違するところを明らかにしたい。

また次に、珍海における「教迹」と「論迹」について検討する。

三論宗教理思想の特徴において、珍海の独自性がある速疾成仏思想と懺悔滅罪の観点という二つの方面から検討を行い、珍海に関する成仏思想の不同、及び懺悔滅罪の方法を明らかにしたい。

また次に、珍海における涅槃經思想の継承と、吉蔵の『大般涅槃經疏』の逸文を補充する。

結論

参考文献

資料編

凡例

『大乘正觀略私記』訳注

本論文の最後に、資料編として珍海の『大乘正觀略私記』の訳注研究の結果を附す。理由は、『大乘正觀略私記』は珍海における唯一の『中論』を趣旨として論述を行った著作であるし、漢文の語順が中国文と違いがある。また、内容の方面から見ると、珍海は簡略に三論宗の名目だけを挙げたり、取意に別の著作内容を引用したりするところが多いので、理解しにくいからである。そのために、訳注を本論文の最後に附す。

本 論

第一章 珍海の生涯と著作

珍海（1092 年－1152 年）は平安末期の南都浄土教を代表する学僧としてよく知られている。近年、珍海の著作、及び画僧としての仏画功績は多くの仏教学者に注目されて研究が進められている。それらの先行研究の中、珍海の生涯に関する先行研究の結果は小野玄妙氏の「珍海已講の事跡とその芸術」³がある。小野氏は「珍海已講の事跡とその芸術」において、平子鐸嶺氏が『國華』に発表された論文「珍海已講」に対して補述を行い、的中しなかったところを是正した。小野氏はさらに珍海が維摩会の堅義と講師を勤めた年から逆算して、珍海の生没年が確認でき、寛治六年（1092 年）から仁平二年（1152 年）までと指摘した。

また、もう一つの先行研究の結果は坂上雅翁氏の論文「珍海—画僧と学僧—」⁴である。坂上氏は「珍海—画僧と学僧—」において、珍海の父母、兄弟、及び珍海の絵技の伝承について検討を行った。氏は、現在「珍海筆」「珍海已講筆」と書かれている「醍醐寺三宝院十二天様」という十二天の画像はいずれも珍海の自筆ではなくても、その画技は後世に模写されて作風を後世に伝えていると指摘した。珍海は土佐派の祖と呼ばれる父藤原基光の影響を受け、画僧としての功績が認められた。

このように、珍海の生涯についての先行研究は少ない、その生没年代が近年小野氏の研究によって明らかになり、研究の方法は画僧の位置付けにした。坂上氏は「珍海—画僧と学僧—」において、画僧として珍海の位置付けを検討した上、珍海の南都浄土教思想についても論述した。

一方、近年、珍海を画僧と南都浄土教に位置付けて研究を行うことと違い、珍海の三論宗著作も多くの学者に注目され、研究を行っている。例えば、平井俊榮氏は『中国般若思想史研究—吉蔵と三論学派—』の中、珍海の著作を多数に引用して検討を行った。また、最新の研究として、奥野光賢氏の論文「禅那

³ 小野玄妙「珍海已講の事跡とその芸術」『小野玄妙仏教芸術著作集』第十巻、pp. 926-944. 開明書院. 1977

⁴ 坂上雅翁「珍海—画僧と学僧—」『浄土仏教の思想』七、pp. 179-252. 講談社. 1993

院珍海の研究」⁵は、珍海の現存する著作について、年代順に以下のように並べている。

- ① 『八識義章研習抄』 三卷・元永二年（1119 年）『大正蔵』 卷七十
- ② 『菩提心集』 二卷・大治三年（1128 年）『浄全』 卷十五
- ③ 『俱舍論明眼抄』 六卷・大治四年（1129 年）『日仏全』 卷八十六
- ④ 『大乘正観略私記』 一卷・長承三年（1134 年）『大正蔵』 卷七十
- ⑤ 『三論玄疏文義要』 十卷・保延二年（1136 年）『大正蔵』 卷七十
- ⑥ 『決定往生集』 二卷・保延五年（1139 年）『大正蔵』 卷八十四
- ⑦ 『一乗義私記』 一卷・保延六年（1140 年）『大正蔵』 卷七十
- ⑧ 『安養知足相对抄』 一卷・久安二年（1146 年）『大正蔵』 卷八十四
- ⑨ 『大乘玄問答』 十二卷・久安五年（1149 年）『大正蔵』 卷七十
- ⑩ 『三論名教抄』 十五卷・成立年代不明『大正蔵』 卷七十
- ⑪ 『因明大疏四種相違抄』 二卷・成立年代不明『大正蔵』 卷六十九

上に挙げられた先行研究からわかる、珍海についての研究は最初画僧としての位置付けと、南都浄土教の僧としての位置付けに集中していた。近年になると、珍海における三論宗の思想が多くの学者に重視され研究が進むことになった。また、珍海の諸著作から見ると、その思想は浄土教と三論宗に止まらず、法相、因明にも通じ、関係ある著作も残っている。珍海が多宗派の著作を著したきっかけは、恐らく平安末期、当時南都仏教界の多宗兼学の背景と分けられないかもしれない。

このように、多宗兼学の学僧である珍海の三論宗思想は、中国から将来した三論宗思想を継承した上、他宗からの影響を受けて特色がある三論宗思想になった。本論文は珍海の三論宗思想が成り立った背景と経過を最大限度で表わそうとするため、本章において、小野氏と坂上氏の先行研究の結果を整理して珍海に関する生涯について触れておきたい。

まず、珍海の生没年に関しては、彼自身が著した『八識義章研習抄』 卷上の末に記された識語に

⁵ 奥野光賢「禅那院珍海の研究」『駒澤短期大学佛教論集』第 12 号. 2006

「保安元年十二月二十九日刪削畢。去年爲御堂堅義所抄。云云。以此善根力、往生安養、奉觀彌陀、慧眼開明、達見佛性矣。珍海生年二十九」⁶

（保安元年十二月二十九日刪削畢る。去年御堂で堅義のため抄する所なり。云云。此の善根力を以て、往生安養し、弥陀を奉觀し、慧眼を開明して、仏性を達見なり。珍海は生年二十九なり）

とある。保安元年は西暦 1120 年であり、珍海は二十九才とある。これから逆算すれば、珍海の生まれ年は 1092 年である。また、宮内庁書陵部編『維摩講師研学堅義次第』巻中の記載によると、

「康治元年壬戌、講師珍海、年五十一藹……」⁷

（康治元年壬戌、講師珍海、年五十一藹なり）

と述べている。康治元年は西暦 1142 年であり、この年珍海は五十一才とある。これから逆算すると、その生まれ年は 1092 年である。

しかし、『宇槐記抄』の記載によると

「仁平二年十月五日、東大寺已講珍海患寸白⁸殊甚云云。……十一月廿三日、今晚、東大寺已講珍海、年六十二入滅、依寸白也」⁹

（仁平二年十月五日、東大寺已講珍海、殊甚寸白を患う、云云。……十一月二十三日、今晚、東大寺已講珍海、年六十二にて入滅す、寸白によるなり）

とある。仁平二年は西暦 1152 年であり、『八識義章研習抄』と『維摩講師研学堅義次第』の記載による逆算すると、珍海は六十一才とあり、『宇槐記抄』の記

⁶ 珍海『八識義章研習抄』『大正蔵』巻七十. p. 665b11-15

⁷ 『維摩講師研学堅義次第』吉川弘文館. 1971

⁸ 隋巢元方『巢氏諸病源候総論』巻一八「寸白虫候」に「寸白者。九虫内之一虫也。長一寸。而色白。形小扁。因府藏弱而能発動。（中略）其発動則損人精氣。腰脚疼痛。又云。此虫生長一尽。則令人死。」とある。「寸白虫候」は、現代では「真田虫、条虫、條虫」と呼ばれ、寄生虫の病である。

⁹ 『史料大観』記録部. 台記別記『宇槐記抄』巻中. pp. 512-513. 哲学書院. 1898

載と比べると一才の差がある。

そしてまた、坂上氏の「珍海—画僧と学僧—」の文末に附した珍海略年譜から見れば、珍海の生年について同じく一才の差がある。一つは享年六十二才である仁平二年（1152年）から逆算して、生年は寛治五年（1091年）である。もう一つは『八識義章研習抄』と『維摩講師研学堅義次第』の記載に従えば、珍海の生年は寛治六年（1092年）である。珍海における生涯や事績が完璧に記録された文献資料は見当たらないので、今までの研究成果は珍海自身の著作、或いは関連ある歴史資料を整理して推測するしかないのである。珍海の生存年代については、一年前後の差がある。

小野氏と坂上氏はこれらの資料を参考にして、逆算の方法で珍海の生没年を推測され、その生年を寛治六年（1092年）とし、没年は仁平二年（1152年）で確かであると思われる。

また、珍海の修学については『本朝高僧伝』巻第十二に

「釈の珍海は廷臣園基光の子なり。早くより学樹に従つて其の肯綮を究む。器度清敏にして人に問ふことを好む。華嚴、法相、因明を研核し、三会の講を歴て師席に登る毎に詞鋒俊利、敢て當る者なし。時人はみな歎曰く、文殊の應化なりと。仁平年中、禪那院に住して、法華、維摩、勝鬘經を講ず。暮年に暨んで又浄業を修せり……珍は丹青を善くし傳法院の学いん鉞¹⁰と割席の遇有りて金剛界大日像を畫きて以てこれに贈る。余は禪那院にいた抵つて写照を瞻礼するに鼻頭隆準にして口角方廣仍つて其の異人なることを知るなり」¹¹

とある。『本朝高僧伝』の記録から見ると、珍海は絵師として活躍したほか、「維摩会」、「御斉会」、「最勝会」の三会を経た講師であることが分かった。この三会の講師とは、平安時代において確立した僧侶制度であり、興福寺の維摩会、宮中の御斉会、薬師寺の最勝会の三会の講師を経た者は僧綱職に任ぜられ、已講と呼ばれた。珍海はこのような三会の講壇に登り、仁平年中に禪那院に住し、

¹⁰ 「鉞」字は『本朝高僧伝』において「鋏」とする。『大日本仏教全書』102. p. 199

¹¹ 『本朝高僧伝』『国訳一切経』史伝部 21. p. 212. 大東出版社

『法華經』、『維摩經』、『勝鬘經』を講じた。

また、『醍醐寺新要録』『禪那院編』の記録により

「康治二年、前大僧正後七日御勤仕裏書云、凡今年真言院所、大阿闍梨定海・御齋会講師珍海・太元阿闍梨賢覚法橋、是皆醍醐寺住僧、定海之門弟也」¹²

（康治二年、前大僧正後七日の御勤仕の裏書に云わく、「凡そ今年真言の院所、大阿闍梨定海・御齋会の講師珍海・太元阿闍梨賢覚法橋、是れ皆醍醐寺の住僧、定海の門弟なり」

とある。この記録から見れば、珍海は已講になる前の康治二年（1143年）の時、定海、法橋三人とも醍醐寺の住僧であり、珍海と法橋の二人は定海の弟子であったことが知られる。この定海は天承元年（1131年）に醍醐寺の三宝院において結縁灌頂の道場である灌頂院を建立した密教の僧侶であった¹³。つまり、珍海は御齋会の講師を勤めた時、密教僧としても活躍したことが確かである。しかし、珍海は三論宗の学僧及び浄土教の学僧としてよく知られ、その関係の著作もたくさん残っているが、密教関係の著作は一切存在しない。

また、東南院系三論法脈¹⁴により、珍海の三論宗思想の師資相承は「永観一珍海一敏覚」の流れを記録している。永観と珍海とともに、当時南都浄土教を代表する東大寺三論宗の学僧であり、二人とも維摩会講師として講壇に登ることがあった。そして、永観は三論を学ぶ当時に、唯識学と因明などに取り組み、さらに、法相学にも精通していた¹⁵。珍海も三論、法相、因明に通じ、『八識義章研習抄』三巻と『因明大疏四種相違抄』二巻などが現存する。恐らく、平安時代の多宗兼学の影響を受けたほか、珍海は仏教思想において永観の影響も受けたのではなかろうかと考えられる。

以上述べたように、珍海は絵師である藤原基光の子として生まれ、父の影響を受けて仏画絵師として活躍したことがわかった。また、珍海は学僧として密

¹² 『醍醐寺新要録』下巻. pp. 812-813. 醍醐寺文化財研究所. 法蔵館. 平成3年

¹³ 稲垣栄三『醍醐寺の密教と社会』山喜房佛書林. 1991

¹⁴ 『日本佛教教学史』第七編. pp. 253-254 中山書房. 1976

¹⁵ 大谷旭雄「永観一念仏宗の人一」『浄土仏教の思想』七. 講談社. 1993

教の教理を学習したことがあって、さらに、永観の影響を受けて、三論、法相、因明にも通じ、関係ある著作をたくさん著したのである。その諸著作の中に、三論関係の著作が多く、凡そ半分近くを占めている。それは次のようである。

『三論玄疏文義要』十卷

『三論名教抄』十五卷

『大乘正観略私記』一卷

『一乗義私記』一卷

『大乘玄問答』十二卷

さて、これらの三論宗著作において、珍海のどのような思想様態を表したのか。また、これらの著作は後世の三論宗研究の学者にとって役割を果たしている。

小結

以上、珍海における生涯と三論宗関係の諸著作について整理して挙げた。その要点は以下の四点にまとめられる。

一、珍海の生年は二つの可能性があるかと推測でき、一つは享年六十二歳である仁平二年から逆算して、生年は寛治五年（1091 年）である。もう一つは『八識義章研習抄』と『維摩講師研学堅義次第』の記載により、生年は寛治六年（1092 年）である。

二、珍海は父藤原基光の影響を受け、画僧としても活躍した。

三、珍海は御齊会の講師を勤めた時、密教僧としても活躍したことが分かった。

四、珍海は平安末期の学僧として、当時の時代背景の下で三論、因明、法相、華嚴、密教、浄土等多宗の教義を兼修したことが分かった。しかも、珍海の諸著作の中において三論宗関係の著作は多く、それらの著作は後世の三論宗研究の学者にとって役割を果たしている。

第二章 珍海における三論宗著作の特徴

前述したように、珍海には三論宗関係の著作が幾つか残っている。その中の『三論玄疏文義要』は珍海によって天承年間（1131 年）から保延二年（1136 年）までの間に著された三論宗関係の著作である¹⁶。珍海はこの著作において、吉蔵の著作のほとんどすべてを用いて、三論宗の思想要点をまとめて取り挙げたのである。ところが、『三論玄疏文義要』の内容を検討した結果、二つの問題点が浮かび上がってくる。それは『三論玄疏文義要』の著作年代についてのことと、珍海における三論宗思想の所依ということである。

まず、『三論玄疏文義要』の著作年代について、『大正蔵』第七十巻に収録された『三論玄疏文義要』巻十末の識語によると、

「保延二年七月一日抄竟。自天承之比時、待暇隙兩三于之間抄之。近日分卷。三論學沙門珍海記之。」¹⁷

（保延二年七月一日に抄し竟ぬ。天承の比時より、暇隙を待ち兩三于（年か）の間にこれを抄す。近日において巻を分く。三論學沙門珍海これを記す。）

とある。つまり、『三論玄疏文義要』は天承年間（1131 年）から保延二年（1136 年）までの約四・五年間の時間をかけて完成した著作である。しかし、『三論玄疏文義要』巻三の「三種方言」の義においては、

「猶可別尋之。保延六年九月二十六日始得意之。」¹⁸

（猶別してこれを尋ぬるべし。保延六年九月二十六日始めてこの意を得。）

と述べている。巻十の識語から見れば、『三論玄疏文義要』は天承年間（1131 年）から保延二年（1136 年）までの間に著した著作であるが、巻三の内容からみれ

¹⁶ 珍海『三論玄疏文義要』『大正蔵』巻七十, p. 378b27-29

¹⁷ 同上

¹⁸ 珍海『三論玄疏文義要』『大正蔵』巻七十, p. 238b17

ば、保延六年（1140 年）の時、珍海が始めて三種方言の義を習得し、三論宗の重要な名目として『三論玄疏文義要』の中に写したわけである。このようにすれば、『三論玄疏文義要』の著作年代は少なくとも 1131 年から 1140 年までに延びることになる。

また、『三論玄疏文義要』第巻一にある裏書によれば、

「仁平二年、最勝講覺長、問明海已講云、勝天王般若者、嘉祥釋云、舍衛國説。云云。（中略）講師答云、般若非一時一會説、故爾也。」¹⁹

（仁平二年、最勝講覺長、海已講に明かして問うて云く、勝天王般若とは、嘉祥は釈して云く、舍衛國の説と。云々。（中略）講師答えて云く、般若は一時一会の説に非ず、故にしかなり。）

と述べている。この裏書の「問明海已講云」と「講師答云」から見ると、これは珍海の自筆ではなく、弟子により入れられた可能性が高い。また、内容から見れば、仁平二年（1152 年）、つまり、珍海は最晩年の時、三会の講師として『三論玄疏文義要』を用いて三論宗の宗義を講じたことがあったであろうと推測できる。

『三論玄疏文義要』の著作年代に関しては、上に引いた巻三の内容と巻一の裏書の内容から推測すると、『三論玄疏文義要』は 1131 年から 1140 年までの八、九年間をかけて完成した著作であり、完成した後、珍海は最晩年の時まで、『三論玄疏文義要』を講じたり、内容を訂正したりしたことがあったと考えるのである。現在に伝わる『三論玄疏文義要』は恐らく珍海だけの思想ではなく、弟子の思想を混合した著作であるとも推測する。

また一方、『三論玄疏文義要』においては、珍海自身の考えを加えて論述するところが多く見られると共に、数少ない裏書も見られる。それらの裏書において珍海により引用された別の著作に対する評価があるし、引用文に対する解釈もある。例えば、『三論玄疏文義要』第一巻の中に、珍海が吉蔵の著作『淨名玄論』の内容を引いて、

¹⁹ 珍海『三論玄疏文義要』『大正蔵』巻七十、p. 217b24-27

「名玄七云、依釋論意、明華嚴爲大菩薩説、小乘不聞。淨名等通爲大小淺深人説、故二乘得聞。即華嚴明不思議事深。云云。」²⁰

（『名玄』七に云く、釈論の意に依れば、大菩薩の為に華嚴を説くことを明かし、小乗は不聞なり。淨名等は通じて大小浅深の人の為に説き、故に二乗は聞くことを得。即ち華嚴は不思議の事を明かして深し。云云。）

と述べている。また、この引用した内容について、珍海が

「今案、法華猶化二乗、故應淺。華嚴又同爲菩薩故、應無異決之。」

（今案ずるに、法華は猶二乗を化し、故に浅すべき。華嚴は又た同く菩薩の爲が故に、応に異なること無し之を決すべし。）

と、彼自身の考えを解釈していた。更にこの文章の続きは

「裏書云、華玄三云、○華嚴任道平正、無所行奪、究竟圓滿。望前諸教、謂根本法輪。般若、法華、涅槃、三部皆是釋迦屈曲爲縁、故深隱説法。云云。言望前諸教者、上明般若、法華、涅槃、三部宗趣已、故云爾。既而華嚴爲究竟、亦名根本。法華爲屈曲爲縁、亦爲深隱。准此二經、非無淺深。今案、准波若、法華相對三意、此亦有三義。一者、華嚴是勝、任道平正故。二者、法華是勝、二乗根熟、同入佛惠、一道顯了故。三者、無別、二經同明一乘法故。可具悉之。已上裏書。」²¹

（裏書に云く、『華玄』三に云く、華嚴は任道平正なり、行奪する所無し、究竟圓滿となり。前の諸教を望めば、根本法輪と謂うなり。般若、法華、涅槃、三部は皆是れ釈迦が縁の爲の屈曲になる故に、深く隠して法を説く。云云。前の諸教を望めばと言うは、上に已に般若、法華、涅槃、三部の宗趣を明かし、故に云う爾なり。既而して華嚴は究竟と爲り、亦た根本と名づく。

²⁰ 珍海『三論玄疏文義要』『大正蔵』卷七十. p. 207b5-7

²¹ 珍海『三論玄疏文義要』『大正蔵』卷七十. p. 207b8-21

法華は縁の為の屈曲と為し、亦た深隱と為す。此の二經を准じれば、浅深無きに非ず。今案ずるに、波若、法華の相對の三意を准じれば、此れも亦た三義有り。一には、華嚴は是れ勝なり、任道平正の故なり。二には、法華は是れ勝なり、二乗の根は熟なり、仏恵に同入り、一道顕了の故なり。三には、無別なり、二經は同じ一乘法を明かす故なり。具に之を悉すべき。已上裏書なり。)

と、華嚴、般若、法華、涅槃などの教法についての位置づけを裏書の所において吉蔵の『法華玄論』の内容を引いて述べた。

以上述べた「裏書」や「今案」というところは、『三論玄疏文義要』の重要な組成部分であり、珍海が『三論玄疏文義要』の中に引用した諸著作の内容と珍海自身の考えとの区分、及び数多くの裏書は珍海の自筆かどうかの判定はなお重要になる。

このことから、『大日本仏教全書』第九十七巻の解題を調べて見ると、現在『大正新修大蔵經』第七十巻に所収されている『三論玄疏文義要』十巻の底本は東京深川本誓寺の蔵本である。しかし、本誓寺が震災と戦争の火事で、多くの物が焼失してしまい、『三論玄疏文義要』の蔵本も焼却して見る事が不可能ということである。そのゆえ、本論文は『大正新修大蔵經』第七十巻に所収された『三論玄疏文義要』のテキストを用いることになり、この著作の総体的内容を確認する上、珍海の引用傾向とその三論宗教理思想の様態を検討していきたい。

まず、『三論玄疏文義要』の総体的内容を確認する。珍海は『三論玄疏文義要』の巻首ごとに、毎巻の内容を目次のように示している。その目次は以下のようである。

第一巻：一、大意〈無得正觀宗〉

大乘玄義科次第〈竝綱要文〉

教相〈三轉法輪傍正二藏教〉

大乘經無淺深

般若非三乘通教

般若涅槃相對〈花嚴法華相對、無淺深、顯密、傍正〉
頓漸二教
三轉法輪〈大品、維摩攝何〉
教相異說〈四時五時等、五味正釋十二部經〉
他宗立教〈天台四教、用邪、淨影、四宗、法相、三時教、三時
正意〉
諸經說時
般若部類
大品金剛前後
二夜經〈般若說時〉²²

第二卷：二、造論緣起〈龍樹、提婆造論、人正、法正〉

中百論先後
四論三論稱〈廣略、通別〉
諸論通別
三論具立破
三論所破有幾宗
毘曇部類
成實論宗
幾人迷大乘二諦
同世五師二十部等〈五百部〉
方廣道人何人
小乘四門〈毘勒門〉
地攝唯識等論、爲今論所破歟〈瑜伽顯揚等、如何掌珍比量、可
依乎〉
今論顯空宗歟〈羅睺等不空〉
龍樹提婆破後代論
別簡論空〈中論以二諦爲宗等〉

²² 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十, p. 199c10-23

大分深義
百論罪福兩捨〈捨罪福詩〉
宗家以空爲宗極歟〈新古說異〉
十二因緣獨菩薩法
獨空〈絕待、正用、眞如〉
假因緣法即空〈眞空、三宗、贈僧、正論〉
許唯識無境義耶
淨影意不破因緣生滅之歟肇公本無義
中道何義
不壞假名義
三論大宗淺深²³

第三卷：三、山門相承以二諦爲宗〈爾二諦者何〉就教諦有幾種〈四種二諦〉

涅槃經十番二諦〈涅槃疏爲六重〉涅槃非以有爲眞諦

佛果位二諦攝不攝

佛果空不空

佛果二諦異說

二諦不二〈涅槃經、仁王經等文、瓔珞八不文〉

三種并觀〈橫豎得失等〉

地論師無漏法林

三種方言〈猶可別尋之、保延六年九月二十六日始得意之〉

衆因緣生法之偈〈花首經文、三是等釋〉

阿字本不生

四悉檀〈前三可破〉

四、八不義〈經中文、中假、傍正、眞俗〉

中論八不誰人置耶

無畏論

正觀論〈中論〉

²³ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十, pp. 218c2-219a3

中道有幾種〈內外通論幾、大乘內二幾〉

四種釋義

邊偏同異²⁴

第四卷：五、二智〈四種二智〉

二智於因果通局

般若名正翻〈有無〉

十對門二智〈又、五時、二智〉

實相般若境智

般若方便二道位別

因中方便變名種智

二智斷惑〈有無、又二惠中何斷〉

佛智斷惑

金剛心有惑無惑

初地中自開無礙解脫

大頓悟小頓悟

容入義〈本相如故〉

容入實不實〈時長短〉

有爲般若無爲般若

二智惠相知

竝觀義何位

攝智門〈一智、二智、三智、四智、乃至七十七智等〉

正後二智今家用歟

圓鏡等四智古譯有

轉法輪義〈生滅、無生滅觀〉

初轉法輪得益

初轉法輪時五比丘俱得初果歟〈一人、五人相違〉

三轉法輪於大千〈大小乘中、何樂勸證、自轉他轉〉

²⁴ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十, p. 238b7-27

智所生者何處

二乘人空不著

辟支佛智從遠離生〈緣覺果人、界內迴心、緣覺種類、華嚴說、說法益人、二乘同異中、乘斷習無經說等〉²⁵

第五卷：六、八識〈列名眞妄〉

七法不住〈淨影釋異〉

略明八門

染淨緣起四句〈無明住地是妄識等文〉

有始無始文

性染有無

心數有無

八識非究竟

勝鬘二藏

三性三無性

相識見識

種子義〈不失法〉

依方等懺悔滅定業不二障

五住

性成煩惱

無始無明

凡位起無明地不

無明住地體²⁶

第六卷：七、佛性義〈大意〉

五性佛性諍論〈五性佛性、論自誰起〉

楞伽寂滅樂門

²⁵ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十. pp. 254c8—255a7

²⁶ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十. p. 272b14—c3

佛性十一家異說

宗家正因佛性〈五佛性〉

深蜜五性〈楞伽、瑜伽〉

攝論一乘

智度中觀畢竟不成文

十住婆沙、二乘不成佛、草木佛性成佛〈衆生無佛性〉

十地菩薩不知衆生佛性〈佛菩薩見性意〉

中道種子〈釋〉

涅槃經悉有佛性、非據理性

法華一乘、惡人亦成佛

依何經論立悉有佛性

地持法爾種子

八、有二乘、無二乘事

初業不愚、後業不愚

五果迴心入何位

一乘體〈乘體不同、事無所得、善爲佛因事、中論釋涅槃佛性〉

三車四車〈八證六文、二義何正〉²⁷

第七卷：九、菩薩地位義〈略廣〉

十信不同

退不退義

眞悟十地〈初發心時、便成正覺〉

無生忍位

五十二位名〈大乘七賢華嚴幾位〉

修行時量〈何以入僧祇、三祇配位〉

等覺地

僧祇數有異說

三祇劫劫量〈僧祇數、善行僧祇〉

²⁷ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十, p. 290a2-22

速疾成佛有無〈超劫、大頓悟、小頓悟〉
有爲般若
四依位分得義多少
三種意生身〈同異有、有生死〉
大力菩薩〈初地反易〉
爲物反易〈自報反易、爲物反易〉
斷惑分齊²⁸

第八卷：十、三佛義〈經論立名不同〉
法報二身差別〈十異私集〉
攝論法華論法身同異
攝論三身合迹歟
內應外應〈地前菩薩見內應身歟〉
二乘曲見
三身中法身因位見耶
法身隱顯不同
法身說法〈修成報佛說法多寶佛法身〉
三身常無常〈隆海律師佛智常住記〉
法身有色無色
釋迦成佛久近〈新成佛說久成義不〉²⁹

第九卷：十一、淨土義〈五種土、十種土〉
四種淨土〈三種土〉
法身內應所居同異
無障礙土
大小同住土實報土同異
獨菩薩土當實報土

²⁸ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十. pp. 309c27—310a15

²⁹ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十. p. 330b18—29

安樂國九品生皆凡夫有歟
安樂國五門〈常、無常、乃至有胎生、無胎生〉
十信前人生西方淨土
三福業
安樂二種生死何
彌陀身量相好
五逆謗法闡提生不
小乘意明十方佛不〈輪王〉
釋迦說彌陀二經
觀地水滅罪
品生得無生位
極樂同處三途
（淨土）體
凡聖土有無
（一）質二處等句
一質異見等句〈質體強弱〉
佛菩薩見衆生土耶
人成結成事成
付四重淨土〈大小同住、何處唯獨菩薩、上唯界外歟〉
安樂淨土是何
淨土經事
聖眼幢世界上品土
十二、涅槃義〈有番、無番、相待、絕待〉
性淨方便淨〈三點四〉
性淨涅槃萬德
三修八倒
有餘無餘
醉入無餘有無

佛舍利³⁰

第十卷：雜問答并前大科餘殘等〈此猶不盡也、三論、法華問答在別〉

十三、問答三十許

法華品有無前後等〈通他宗難〉

大悲代受苦

四弘願

菩薩逼惱衆生

共食生不共食滅

雜華經釋華嚴題佛

菩薩護戒事

伽耶山頂經四種發心〈龍女〉

十住菩薩見生死始終

一佛度一切

迦葉佛不說涅槃經

授記事〈鴿鳥聲聞實成佛歟〉

毛道衆生

調達造逆先後

菩薩位立煖等四心

四依位分〈供佛得義〉

菩薩五位

道場量

自宗行業

祖師血脈

玄疏本末録³¹

上に挙げた『三論玄疏文義要』巻一から巻十までの内容から見ると、大体毎

³⁰ 珍海『三論玄疏文義要』『大正蔵』巻七十. p. 345a25－c2

³¹ 珍海『三論玄疏文義要』『大正蔵』巻七十. p. 362b16－c10

卷の始めのところに、一から十三までの数字で記すところがある。これらの数字を入れるところは文章要点の範囲を区切るところであると考え。ところが、よくこれらの数字を付けるところを見てみると、三の山門相承の二諦義、四の八不義、五の二智義、七の仏性義、八の有二乗と無二乗の義、十二の涅槃義は吉蔵の『大乘玄論』の主旨、則ち八義科の中においての六義科（二諦義、八不義、二智義、仏性義、一乗義、涅槃義）と一致する。

このことから、『三論玄疏文義要』の趣旨を表わす第一卷、第一の大意のところを調べて見ると、珍海は吉蔵の『大乘玄論』の八義科について以下のように述べている。

「佛教有詮、詮謂二諦。諦正以中、中即八不。中爲佛因、因是佛性。由性起行、行爲一乘。行乃得果、果名涅槃。涅槃帶照、照乃二智。因智說經、經稱教迹。教迹須通、通唯論迹。」³²

（佛教は詮有り、詮は二諦と謂うなり。諦の正は中を以てす、中は即ち八不なり。中は佛因と爲し、因は是れ佛性なり。性に由り行を起こし、行は一乗と爲す。行は乃ち果を得、果は涅槃と名づく。涅槃は照を帯び、照は乃ち二智なり。智に因り經を説き、經は教迹と稱す。教迹は通を須う、通は唯だ論迹のみなり。）

つまり、仏教に説かれた真理は真俗二諦の理である。この真俗二諦はまた中道の理を正とし、中道の理は即ち不生不滅、不常不断、不一不異、不来不去のことである。更に、中道の理はまた仏になる因であり、因は即ち衆生の仏性である。また、仏性によって修行を行えば、一乗に達することができるのである。更に言えば、仏性をもって修行を行った結果は仏果であり、この仏果は涅槃と称するのである。この涅槃と称する仏果は権実という二智に伴い、衆生を教化する時、権実の二智をもって經を説くのである。換言すれば、二智をもって説いた經は教迹のことを指すのである。更にこの教迹を通じたいならば、教迹を会通するために書かれた論書を研鑽するほかならないと珍海がこのように考え

³² 珍海『三論玄疏文義要』『大正蔵』卷七十, p. 200a22-25

ているのである。このような繋がりから、珍海にとっての二諦義、八不義、仏性義、一乗義、涅槃義、二智義、教迹義、論迹義という八義科の間の様態と関連、及び珍海の修学方法が窺える。

また、珍海のもう一つの著作『三論名教抄』を参照して見てみると、その著作の劈頭のところにおいて、

「今欲令玄事兼明、且出玄疏名教耳。附本八科於其法門、凡有一百四十餘篇。初二諦之中、有二十五義（中略）。次、八不義中有七義、佛性義中有五義、一乘中有五十六義、涅槃義中有十三義、二智中有二十二義、教迹中有八義、論迹中有六義。」³³

（今玄事をして兼ねて明かにせしめんと欲さば、且く『玄疏』の名教を出だすのみ。本の八科をその法門において附し、凡そ一百四十餘篇有り。初めの二諦の中、二十五義有り（中略）。次に、八不義の中に七義有り、佛性義の中に五義有り、一乗の中に五十六義有り、涅槃義の中に十三義有り、二智の中に二十二義有り、教迹の中に八義有り、論迹の中に六義あり。）

と述べている。『大蔵経全解説大辞典』の中に『三論名教抄』は『中観論疏』の中の必要な名目を例挙してこれを解釈したものであると述べているが、上に挙げた珍海の記述から見ると、『中観論疏』の名教は玄・事を両方とも明かすために、関連がある名目を抄録したわけである。しかし、『三論名教抄』の抄録は『中観論疏』を用いるだけではなく、本の根本とする『大乘玄論』の八義科にも基づいていることがわかった。

さらに、上に引かれた内容にと止まらず、珍海は問答体をもって『大乘玄論』に対する論釈書『大乘玄問答』を、及び『大乘玄論』巻三の「一乗義」に対する解釈文『一乗義私記』を著した。以上のことから見れば、珍海は三論宗の教義を解釈する際、『大乘玄論』の中に説いている八義科を軸として論じている傾向があると考え、珍海は『大乘玄論』の八義科をどれ程重視するかを見難くない。

³³ 珍海『三論名教抄』『大正蔵』巻七十、p. 693a6-19

小結

本章では、珍海における三論宗関係の著作について考察を行った。検討した結果は以下の通りである。

一、『三論玄疏文義要』の著作年代について、第三卷の「三種方言」に対する割注、即ち「猶可別尋之。保延六年九月二十六日始得意之」³⁴から見れば、珍海は保延六年（1140 年）の時、始めて三種方言の義を習得し、三論宗の重要な名目として『三論玄疏文義要』の中に写した可能性が高く、この著作は 1131 年から 1140 年までの間に完成したと推測できる。なお、第一卷の裏書「仁平二年、最勝講覺長、問明海已講云、勝天王般若者、嘉祥釋云、舍衛國說。云云。（中略）講師答云、般若非一時一會說、故爾也」³⁵によると、珍海は最晩年の時にも、三会の講師として『三論玄疏文義要』を講じたり、内容を訂正したりしたと考える。

二、『三論玄疏文義要』全十巻に対する分類から見れば、この著作は内容構造の上に、大体十三項目に分けられ、十三項目の範囲を区切るところは、以下のようである。

- ① 大意
- ② 造論緣起
- ③ 山門相承以二諦爲宗
- ④ 八不義
- ⑤ 二智義
- ⑥ 八識義
- ⑦ 仏性義
- ⑧ 有二乗、無二乗事
- ⑨ 菩薩地位義
- ⑩ 三佛義

³⁴ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十. p. 238b17

³⁵ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十. p. 217b24-27

- ⑪ 浄土義
- ⑫ 涅槃義
- ⑬ 問答三十許

この中において、三の山門相承の二諦義、四の八不義、五の二智義、七の仏性義、八の有二乗と無二乗の義、十二の涅槃義は吉蔵の『大乘玄論』の主旨と一致する。

また、『三論玄疏文義要』の趣旨を表わす第一卷、第一の大意のところに「佛教有詮、詮謂二諦。諦正以中、中即八不。中爲佛因、因是佛性。由性起行、行爲一乘。行乃得果、果名涅槃。涅槃帶照、照乃二智。因智說經、經稱教迹。教迹須通、通唯論迹」³⁶と述べていることから、珍海は吉蔵の『大乘玄論』の八義を極めて重視し、それを用いるところが多いということが分かった。

三、珍海は三論宗の重要な名目に対して解釈した『三論名教抄』十五巻と、『大乘玄論』に対して著した『大乘玄問答』十二巻と、『大乘玄論』巻三の「一乗義」に対して解釈した『一乗義私記』一卷があり、これらの著作はいずれも吉蔵の『大乘玄論』と関係があることが分かった。

³⁶ 珍海『三論玄疏文義要』『大正蔵』巻七十、p. 200a22-25

第三章 『一乗義私記』について

『一乗義私記』は珍海が吉蔵撰とされる『大乘玄論』巻三「一乗義」に対する解釈である。全部は一巻であり、内容は「釈名門」、「出体」、「同異門」、「寿量果」という四つの部分に分けられている。形式上は「玄云、～～乃至～～」という形で、まず『大乘玄論』巻三「一乗義」の原文を挙げ、そして続いて珍海自身の見解を述べていくものである。

前述したように、珍海における三論宗教理思想の継承はほとんど吉蔵から受けるのである。ところが、珍海が解釈した『大乘玄論』の内容構成と吉蔵真撰かどうかの問題について、近年、多くの学者に疑問を提出され、研究を行っている。今までの研究結果は、例えば、三桐慈海氏の「慧均撰四論玄義八不義について―大乘玄論八不義との比較対照―」(1)³⁷と「大乘玄論の八不義―慧均撰八不義について―」(2)³⁸がある。三桐氏はこの二つの論文において、『大乘玄論』の八不義と『四論玄義』の八不義の比較を行い、『大乘玄論』が慧均の八不義のそのままではない、要素が加味されて成り立ったものであると指摘された上、『大乘玄論』の著者性について三つの可能性を挙げた。つまり、一つ目は、後に吉蔵の門弟によってその八不義が『大乘玄論』に編入されたのである。二つ目は、吉蔵が自ら慧均の八不義を取り入れたのである。三つ目は、八不義はそもそも吉蔵の師である法朗の著作ではないかと推測されたのである。

また、菅野博史氏は「『大乘四論玄義記』の基礎的研究」において、吉蔵は一貫して七巻本の『法華経』によっていることに対して、『大乘玄論』には七軸を八軸に変えていることについて論述された³⁹。

また、奥野光賢氏が「『大乘玄論』に関する諸問題―「一乗義」を中心として―」において、『大乘玄論』の「一乗義」と吉蔵の別の著作『勝鬘宝窟』、『法華玄論』、『法華遊意』などと比較を行い、『法華論』の引用について、『法華義疏』や『勝鬘宝窟』には一度も「晚見法華論」のような「晚見」という用例がなく、

³⁷ 三桐慈海「慧均撰四論玄義八不義について―大乘玄論八不義との比較対照―」(1)『仏教学セミナー』第12号、1970、pp31-45

³⁸ 三桐慈海「大乘玄論の八不義―慧均撰八不義について―」(2)『仏教学セミナー』第17号、1973、pp. 30-37

³⁹ 菅野博史「『大乘四論玄義記』の基礎的研究」『印度学仏教学研究』第57号、2008、pp. 512-504

その引用は「奇異な感じがする」と指摘され、『大乘玄論』「一乗義」は吉蔵の先行する著作の多くの文脈に依拠して成立しており、そこには機械的とも思われ繋がれ方も散見されたと指摘された⁴⁰。

また、伊藤隆壽氏が『三論宗の基礎的研究』において『大乘玄論』について検討を行い、『大乘玄論』の中に述べている「二諦義」、「八不義」、「仏性義」、「一乗義」、「涅槃義」、「二智義」、「教述義」、「論述義」という八義科は全部吉蔵の撰述ではなく、仮説としては、八世紀中頃において、三論宗の人により当時の仏教界の状況・議論等を考慮し、内容は吉蔵の著書において特にまとめて論述されているテーマを中心として、慧均の『四論玄義』の義科と内容も参照して選び、両者にまとまった論述がない場合、例えば、教述義と論述義は新たに義科を設けて成り立ったと推測された⁴¹。

⁴⁰ 奥野光賢「『大乘玄論』に関する諸問題―「一乗義」を中心として―」『駒沢大学仏教学部研究紀要』第70号、2012、pp. 138-120

⁴¹ 伊藤氏による『大乘玄論』全八義科についての検討結果は次のようである。

「二諦義」：『大乘玄論』における重複部分は「八不義」の「第五に単複中仮義を弁ず」と「二諦義」の「中道を明かす第六」中の「第二に二諦に就いて中道を明かす」段で、両者はほとんど同文であると指摘された。

「八不義」：『四論玄義』の「八不義」をそのまま編入したものである。吉蔵自身が編入することはないと指摘された。

「仏性義」：本義科の全体にわたり『四論玄義』の「仏性義」を参照していると思われる。冒頭に掲げられる科門も順不同のところがあるが項目は対応しているし、「異釈第二」は『四論玄義』の「第三弁体」に該当し、そこで紹介される南北朝時代の学説は全く一致する。ただし、慧均は仏性の体についての異説として紹介するのに対して、「玄論仏性義」では一貫して正因仏性についての異釈として扱う点が相違する。また、慧均は十三家の全てに人名または地論師・摂論師といった名前を明示するが、「玄論仏性義」では「就十一師皆有名字、今不復據列、直出其義耳」としているのは『四論玄義』のを参照していることを暗示していると思われる。

「一乗義」：この義科も同様、慧均の『四論玄義』を参照していると推測され、更に菅野博史氏と奥野光賢氏の研究結果を挙げられ、その疑問点を強調された。

「涅槃義」：弁体第二は『中観論疏』巻十本や『四論玄義』巻二「断伏羲」などを参照して書かれていると推測され、八倒第三は、『中観論疏』巻九末の抄出要約である。そして最後の「自有中伏仮断」からこの義科の終わりまでの文は、『浄名玄論』巻五の「二智義」の八断伏門中の文と同文であると指摘された。

「二智義」：古くから指摘された吉蔵の『浄名玄論』巻四、巻五の「二別积二智」を全面的に編入したものである。

「教述義」：教相判釈であり十二部経の説明が入るが、中間に部派の分裂について述べるのは『三論玄義』での扱い方と相違する。吉蔵は真諦三蔵訳として認められている『部執異論』に依拠しているが、『大乘玄論』の「教述義」では『十八部論』に依っているのであると指摘された。『三論宗の基礎的研究』

このように、『大乘玄論』の内容構成と著者の問題について様々な問題が存在している。しかし、前章の検討から分かるように、珍海は極めて吉蔵の思想を重視しており、『大乘玄論』においても肝心な著作として『大乘玄問答』と『一乗義私記』を著し、更に、珍海の別の著作の中でも『大乘玄論』の義科を頻繁に引用して論述している。

本章では、珍海の『一乗義私記』を中心として検討を試み、この著作の内容構成を明らかにしたい。

第一節 『一乗義私記』の内容構成

珍海における一乗義を検討する前に、その依用した吉蔵の『大乘玄論』巻三の内容について先に確認する。

『大乘玄論』巻三の内容構成は「仏性義」、「一乗義」、「涅槃義」という三つの部分により成り立っている。高野淳一氏は『中国中観思想論—吉蔵における「空」—』においてこのような内容構成について「この三つが同一の巻に収められているのは、それらがいずれも中道ということに主に関わる事柄だからと考えられる」と指摘された⁴²。高野氏の指摘したように、吉蔵における仏性義は中道をもってこそ正因仏性であり、悟りの大本である。また、仏の説く正しい教えとする中道を実質とする。更に、中道の正法を涅槃の実質とするのである。この三つの義科はいずれも中道ということを主として解釈している⁴³。これに関して、筆者はこの三つの義科を一巻の中に収められているもう一つの重要な理由は、吉蔵が仏性、一乗、涅槃を平等にして、同義語として用いているのではないであろうかと考えている。なぜなら、吉蔵は『大乘玄論』巻三の中に、

2018. pp464-481

⁴² 高野淳一『中国中観思想論—吉蔵における「空」—』大蔵出版. 2011. p. 46

⁴³ これらの結論はいずれも吉蔵の著作『大乘玄論』によるものである。

「所以佛性、非因非果、而説因説果。不因而因、開境智故有二因。謂因與因因也。不果而果、開智斷故有二果。謂果與果果。至論正因、豈是因果。故非因非果、即是中道名爲正因。故以中道爲正因佛性」『大正蔵』巻四十五. p. 38a15-19

「一乗體者、正法中道爲體」『大正蔵』巻四十五. p. 42b24

「今以中道正法爲涅槃體」『大正蔵』巻四十五. p. 46b19-20

「經中有明佛性、法性、眞如、實際等、並是佛性之異名。何以知之。涅槃經自說佛性有種種名、於一佛性亦名法性涅槃、亦名般若一乘、亦名首楞嚴三昧、獅子吼三昧。故知、大聖隨緣善巧、於諸經中說名不同。故於涅槃經中、名爲佛性。則於華嚴、名爲法界。於勝鬘中、名爲如來藏自性清淨心。楞伽名爲八識。首楞嚴經名首楞嚴三昧。法華名爲一道一乘。大品名爲般若法性。維摩名爲無住實際。如是等名、皆是佛性之異名（中略）平等大道爲諸衆生覺悟之性、名爲佛性。」⁴⁴

（經の中に仏性、法性、眞如、實際等を明かすことあり、並びに是れ仏性の異名なり。何を以てこれを知るや。涅槃經に自ら仏性は種々の名有るを説き、一の仏性に於いて亦た法性涅槃と名づけ、亦た般若一乗と名づけ、亦た首楞嚴三昧、獅子吼三昧と名づく。故に知んぬ、大聖は隨緣善巧にて、諸經中に於いて名を説くこと不同なり。故に涅槃經の中に於いて、名づけて仏性と爲す。則ち華嚴に於いて、名づけて法界と爲す。勝鬘の中に於いて、名づけて如來藏自性清淨心と爲す。楞伽は名づけて八識と爲す。首楞嚴經は首楞嚴三昧と名づく。法華は名づけて一道一乘と爲す。大品は名づけて般若法性と爲す。維摩は名づけて無住實際と爲す。是の如き等の名、皆是れ仏性の異名なり（中略）平等の大道は諸の衆生の覺悟の性となれば、名づけて仏性と爲す。）

と説いている。吉藏は『大般涅槃經』の仏性説を挙げて、一乗はまた仏性、涅槃、法性、眞如、實際等とも言えると述べている。このようなことから吉藏には『大般涅槃經』仏性説からの影響が窺える。これ以外、『法華經』一乗説と『大般涅槃經』仏性説との受容について、吉藏の『法華遊意』の中にも見られる。即ち、

「若此經但有一乘名故不明佛性者、蓋是未識一法多名。故生此謬耳。涅槃云、佛性有五名、一乘則五中之一。又言、佛性亦一非一。云何爲一。一切衆生同

⁴⁴ 同上『大正藏』卷四十五. p. 41c14-28

一乗故爲一。云何非一。非數法故。則知佛性與一乗皆是異名。」⁴⁵

(若し此の經(『法華經』)但だ一乗の名有るが故に仏性を明さざるは、蓋し是れ未だ一法に名は多きことを識らず。故に此の謬を生ずるのみ。涅槃に云く、仏性は五名有り、一乗則ち五中の一なり。又言く、仏性は亦一にして一に非ず。如何が一と為すや。一切衆生同じ一乗なるが故に一と為す。如何が一に非ずや。數法に非ざるが故なり。則ち仏性と一乗皆是れ異名なるを知る。)

である。つまり、仏性は更に五つの名称に分けることができ、一乗は五つの名称においての一つである。吉蔵の場合、仏性は一乗の法であり、一切衆生は一乗に帰するので、実際には皆同義語であると考えられている。

そこで、吉蔵の『大乘玄論』と『法華遊意』の内容から考えると、吉蔵が「仏性義」、「一乗義」、「涅槃義」の三つを『大乘玄論』卷三の一巻の中に収めているのは、この三つを平等にして、同義語として理解した意図が強いと考える。

一方、珍海の『一乗義私記』を見てみると、その冒頭において、

「一箇之破三明一、自具二義。謂破三者、背昔也。歸一者、向今也。餘義齊爾。」⁴⁶

(一箇これ三を破して一を明かし、自ずから二義を具す。三を破すと謂は、昔に背くなり。一に帰すとは、今に向かうなり。余義は齊しく爾なり。)

と述べている。「一箇」とは、恐らく『大乘玄論』卷三に説いている「一乗義」のことを指すであろう。珍海は一乗説を「破三」と「帰一」という二義を主として解釈している⁴⁷。また「余義は齊しく爾なり」と述べていて、その余義は即ち「仏性義」と「涅槃義」とのことを指すであろう。つまり、珍海においても「仏性義」、「一乗義」、「涅槃義」の三つは平等の関係であると考えたのであろうと推測する。

⁴⁵ 吉蔵『法華遊意』『大正蔵』卷三十四, p. 642b3-7

⁴⁶ 珍海『一乗義私記』『大正蔵』卷七十, p. 637a6-7

⁴⁷ また吉蔵は『大乘玄論』卷三の「一乗義」において「一乗者、乃是佛性之大宗、衆經之密藏、反三之妙術、歸一之良藥」と説き、一乗とは仏性のおおもととするのである。『大正蔵』卷四十五, p. 42b13-14

また、『一乗義私記』の内容構成を見てみると、「釈名」、「出体」、「同異」という三つの部分に分かれている。

珍海は第一の「釈名」において、主に『法華經』をもって三乗と一乗との関係を解釈しているが、文中にはまた吉蔵の『勝鬘宝窟』に説いている三乗・一乗の文句と、慧遠の『大乘義章』に説いている一乗を解釈する文句を挙げている。その内容は以下のようである。

「又、寶窟上卷明有七義。一者對昔三故名一。如法華云、爲聲聞說四諦、爲緣覺說十二因緣、爲菩薩說六波羅蜜、爲對彼三是故明一。二者破三明一。三者會三歸一。四者本來無別故言一。以三乘人同一法身故。五者三即是一。悟三即是一相。六者覆三明一。謂常有三一之兩緣、今爲一緣覆三明一。七者非三非一、歎美爲一〈取意略抄〉義章一乘義有四義。一簡別名一。二破別名一。三會別名一。四無別名一。具如文。七中對別與彼簡別名異義同。七中破別與彼破別名義相當。會三歸一即會別一也。餘義同異可尋思之。或同或異可類攝。」⁴⁸

（又、『宝窟』上卷に七義有ると明かす。一には、昔の三に対する故に一と名づく。『法華』に云うが如き、声聞の為に四諦を説き、緣覺の為に十二因緣を説き、菩薩の為に六波羅蜜を説き、彼の三是对する為が故に一を明かす。二には、三を破し一を明かす。三には、三を会して一に歸す。四には、本来別無きが故に一を言うなり。三乗人は同一法身を以ての故なり。五には、三は即ち是れ一なり。三は即ち一相と悟る。六には、三を覆して一を明かす。常に三一の両緣有ると謂い、今一緣の為に三を覆して一を明かす。七には、三に非ず一に非ず、美を歎じて一と為すなり。〈取意略抄〉『義章』に一乗義は四義に有り。一、簡別して一と名づく。二、別を破するを一と名づく。三、別を会するを一と名づく。四、別無きを一と名づく。具には文の如し。七の中の對別と彼の簡別と名異なるも義同じ。七の中の破別と彼の破別の名義相當す。三を会して一に歸すは即ち會別一なり。余義の同異は尋ねてこれを思うべし。或いは同或いは異して類攝すべし。）

⁴⁸ 珍海『一乗義私記』『大正藏』卷七十, p. 637a21-b11

『勝鬘宝窟』に説く（一）対昔三故名一、（二）破三明一、（三）会三明一の三項は『大乘義章』に説く（一）簡別名一、（二）破別名一、（三）会別名一の三項と同じ意義を持つ部分である。

しかし、『勝鬘宝窟』のほうはまだ、（四）本來無別故言一、（五）三即是一、（六）覆三明一、（七）非三非一歎美爲一の四項が残っており、『大乘義章』のほうはまだ、（四）無別名一の一項があつて、珍海はこれらについては詳しく論及していない。ところが、『勝鬘宝窟』と『大乘義章』との引用からみると、珍海は三乗・一乗の解釈において、吉蔵と慧遠からの影響を受けたことが推測できる。

第二の「出体」において、珍海は主として吉蔵の教義に従って乗を乗体と乗用の二種に分け、乗体は中道、乗用は六度等の万善諸行であると述べている。内容は即ち、

「以乗體用並爲體也。此有二種。一者乗體、謂是中道（中略）二者乗用、即六度等萬善諸行。」⁴⁹

（乗の体用を以て並びに体と爲すなり。此れ二種有り。一には乗体、是れ中道と謂うなり。（中略）二には乗用、即ち六度等の万善の諸行なり。）

である。

第三の「同異」において、珍海は

「同者、明同舊説。異者、捨古顯今。」⁵⁰

（同とは、明かすことは旧説と同なり。異とは、古を捨て今を顕わす。）

と説く。つまり古義と今義との論釈である。更に「同異」において三假三車、別明索車、一乗寿量という三つの部分に分けている。第一の三假三車と第二の

⁴⁹ 珍海は『一乗義私記』『大正蔵』卷七十. p. 638c17-20

⁵⁰ 珍海は『一乗義私記』『大正蔵』卷七十. p. 639c13-14

別明索車というタイトルは『一乗義私記』においては見当たらないが、随文解釈の内容から見ると、『一乗義私記』の「同異門」は『大乘玄論』の「一乗義」の「同異第三」に相当する。ただし、『一乗義私記』「同異門」においての引用文句の繋がりから、珍海に依用された『大乘玄論』のテキストには「金光明經云、應化二身無常者。開迹合本」という内容は恐らくなかったと推測するのである⁵¹。第三の「一乗寿量」は実は『一乗義私記』の第四「寿量果」に相当するのである。

まとめ

以上、『大乘玄論』「一乗義」を参照しながら、珍海の『一乗義私記』の内容構成を検討してみた。結果として、珍海は吉蔵と同じ仏性、一乗、涅槃の三つを平等に見なし、中道をもって仏性としていることが明らかになった。そして、三乗・一乗の理解において、吉蔵と慧遠との影響を受けたことが分かった。以下は珍海における三乗と一乗との関係、及び一乗と涅槃仏性についての受容を考察してみたい。

第二節 「破三」と「帰一」

前述したように、珍海は「一乗義」を「破三」と「帰一」という二義として概括している。彼が『一乗義私記』において三乗と一乗の関係を論じた時、

「玄云。三一開會凡有十門、乃至十者無三辨一也〈文〉。」⁵²

(玄に云く、「三一開会は凡そ十門有り、乃至十者無三辨一なり」と〈文〉。)

と、このように、三一開会は凡そ十門あると、『大乘玄論』「一乗義」の文を引いて提起する。三乗と一乗とは『法華經』に説かれる三乗方便と一乗眞実を表す教説である。三乗は声聞乗、縁覺乗、菩薩乗のことを指し、一乗は仏乗を指

⁵¹ 『一乗義私記』『大正藏』卷四十五. p. 46a3-4

⁵² 珍海『一乗義私記』『大正藏』卷七十. p. 637a25-26

すのである。吉蔵は『法華遊意』を著し、三乗と一乗との関係を十門に分けて論釈し⁵³、珍海が引いた『大乘玄論』の文は『法華遊意』の文とほぼ同じである。換言すれば、『大乘玄論』に説かれている三乗と一乗との趣旨は『法華遊意』と一致すると言えるのである⁵⁴。しかし、珍海の三乗と一乗との関係についての解釈は内容的違いがある。詳細に調べてみるとその内容は下表のようである。

『大乘玄論』『大正蔵』卷四十五. p. 43b3-20	『一乗義私記』『大正蔵』卷七十. pp. 637c27-638a8
開三顯一者、開昔三乘是方便、示今一乘是眞實。故云開三顯一也。	開三顯一者、約昔顯今。
會三歸一者、會彼三行、歸一佛乘。故云汝等所行是菩薩道也。	
廢三立一者、廢昔三教、立今一乘教。故云、於諸菩薩中、正直捨方便、但説無上道也。	廢三立一者、止昔用今。
破三明一者、破其執三異之情、以明一乘之道也。	
覆三明一者、如來趣三一兩縁、當有三一之教。昔則以三覆一、今則以一覆三。	覆三明一者、隱昔顯今。

⁵³ 吉蔵は『法華遊意』の中に三乗と一乗について「開三顯一者、開昔三乘是方便、示今一乘是眞實。故云 開三顯一也。會三歸一者、會彼三行歸一佛乘。故云汝等所行是菩薩道也。廢三立一者、廢昔三教、立今一乘教。故云、於諸菩薩前、正直捨方便、但説無上道也。破三明一者、破其執三異實之情、以明一乘之道也。故文云、 唯一乘法、無三也。覆三明一者、如來赴三一兩縁、當有三一之教。昔則以三覆一、今則以一覆三。三前明一者、未趣鹿苑之説三前、寂滅道場已明一實之教、謂三前一也。三中明一者、從趣鹿苑、説於三乘。佛乘第一、縁覺第二、聲聞第三。謂三中明一也。三後明一者、三乘之後、法花教門以會彼三乘、同歸一道。謂三後明一也。絶三明一者、如無言世界、外則無言無示、内則無慮無識。故不論一三而已。即以此爲佛事故則復是一。故云絶一也。無三辨一者、如香積菩薩云、彼土 無有二乘名字、謂無三辨一也」と論じている。『大正蔵』卷三十四. p. 647a3-21

⁵⁴ 『大乘玄論』「一乗義」の構成について、奥野光賢は『大乘玄論』に関する諸問題―「一乗義」を中心として―において、「一乗義」全体が、吉蔵の『勝鬘宝窟』『法華玄論』『法華遊意』などの先行する著作と大きく重なりあっている」と「全体的に見て「一乗義」の構成は、これら先行する吉蔵の著作を機械的に並べたような印象がどうしても否めない」と指摘された。『駒澤大學佛教學部研究紀要』第70号. 平成24.

三前明一者、未趣鹿苑說三之前、寂滅道場已明一實之教。謂三前明一也。	三前明一者、對末顯本。
三中明一者、從趣鹿苑說於三乘、佛乘第一、緣覺第二、聲聞第三。謂三中明一也。	三中明一者、於末捺實。
三後辨一者、三乘之後法華教門。以會彼三乘同歸一道。謂三後一也。	三後辨一者、望前辨後也。
絕待一者、如無言世界、外則無言無示、內則無慮無識。故不論一三而已。即此爲佛事故、則復是一、故云絕待一也。	
無三辨一者、如香積佛土、彼土無有二乘名字。謂無三辨一也。但有清淨大菩薩衆謂有一也。	
	所言對三名一者、待權談實。〔『勝鬘寶窟』〕
	歎美爲一者、以理成教也。〔『勝鬘寶窟』〕
	簡別名一者、與廢三立一其義大同。亦與對三名一同也。〔『大乘義章』〕

以上示したように、珍海の三乗と一乗に関する理解は吉蔵と慧遠の思想を融合した上、自身の見解を加えたのである。例えば、三乗と一乗との関係において、珍海は吉蔵の会三歸一、破三明一、絶待一者、無三辨一の四つを取らず、その代わりに『勝鬘寶窟』に説かれている対三名一と歎美爲一、及び『大乘義章』に説かれている簡別名一という三種類を引用して、三乗と一乗との関係について全九種類に整理した。しかも、これらはともに教門によって明らかにすると説いている⁵⁵。

それでは、珍海が整理した九種類の三乗と一乗との関係について解釈を試みると、以下の通りである。

開三頭一：昔の三乗旧説に対して、今義の一乗新説を顕わす。

⁵⁵ 珍海は『一乗義私記』の中に「此等並依教門以明」と説いている。『大正蔵』卷七十. p. 638a1

廢三立一：昔の三乗旧説を捨て、今義の一乗新説を用いて教義を顕わす。

覆三明一：昔の三乗旧説を覆い隠して、今義の一乗新説を顕わす。

三前明一：三乗を末とし、一乗を本とする。三乗の枝末の教説に対して一乗の根本の教説を顕わす。

三中明一：三乗中の仏乗を真実として説く。

三後辨一：三乗に対して、一乗の仏道に帰することを強調する。

対三名一：三乗が方便であることに対して、一乗が真実であることを説く。

歎美為一：美とは真実である一乗のことを指し、この一乗の教説をもって仏道に帰する教門とする。

簡別名一：以上説いた廢三立一及び対三名一とほぼ同じ意味である。

珍海が説いている三乗と一乗との関係についての検討を通して、次のことが知られる。彼にとって三乗の教説は破折すべき旧説に属して、一乗は所依すべき一乗の教説である。この観点から見ると、珍海は多少なりとも三乗の教説を軽んじる意図があると考えられる。

まとめ

以上、珍海における三乗と一乗との関係について検討を行った。珍海は吉蔵の『大乘玄論』と『勝鬘宝窟』の文を引いて三乗と一乗との関係を解釈した上、慧遠の『大乘義章』の内容も引き、三乗と一乗との関係を九種類に分けて論述した。これは吉蔵の『大乘玄論』に説かれた十門三乗一乗義と明らかに相違することが分かった。次は珍海における一乗と涅槃仏性の受容について検討してみたい。

第三節 一乗と涅槃仏性について

仏性について古くから多くの異説があり、吉蔵は『大乘玄論』第三卷の中に、仏性について十一家⁵⁶の正因仏性説を羅列する。詳しくは以下のようなものである。

⁵⁶ 吉蔵『大乘玄論』『大正蔵』卷四十五. p. 35b22-c17

「第一家云、以衆生爲正因佛性。」

(第一家に云く、衆生を以て正因仏性と為す。)

「第二師以六法爲正因佛性。」

(第二師は六法を以て正因仏性と為す。)

「第三師以心爲正因佛性。」

(第三師は心を以て正因仏性と為す。)

「第四師以冥傳不朽爲正因佛性。」

(第四師は冥伝不朽を以て正因仏性と為す。)

「第五師以避苦求樂爲正因佛性。」

(第五師は避苦求樂を以て正因仏性と為す。)

「第六師以眞神⁵⁷爲正因佛性。」

(第六師は真神を以て正因仏性と為す。)

「第七師以阿梨耶識自性清淨心爲正因佛性也。」

(第七師は阿梨耶識自性清浄心を以て正因仏性と為す。)

「第八師以當果爲正因佛性。」

(第八師は当果を以て正因仏性と為す。)

「第九師以得佛之理爲正因佛性也。」

(第九師は得仏の理を以て正因仏性と為す。)

「第十師以眞諦爲正因佛性也。」

(第十師は真諦を以て正因仏性と為す。)

「第十一師以第一義空爲正因佛性。」

(第十一師は第一義空を以て正因仏性と為す。)

更に吉蔵はこの六朝時代の十一家の仏性説を破折するに、河西道朗と曇無讖の仏性説を受け入れ、中道をもって仏性とし⁵⁸、自ずから第十二家とする⁵⁹。

⁵⁷ 『国訳一切経』の注釈により、真神とは『四論玄義』の第四家にて、梁武帝蕭太子の説である。即ち帝説のことを指す。真神は心識の上の神我の体、即ち神我を仏性とするのである。『国訳一切経』漢和撰述 諸宗部一. p. 147

⁵⁸ 吉蔵は以上の十一家の仏性説を述べた後、また「但河西道朗法師與曇無讖法師共翻涅槃經。親承三蔵作

「無常無斷名爲中道。只以此爲中道佛性也。若以此足前十一師、則成第十二解。」⁶⁰

（無常無斷は名づけて中道と爲す。只だ此れを以て中道仏性と爲すなり。若し此れを以て前の十一師に足せば、則ち第十二解と成ず。）

第十二家の仏性説はつまり常断から離れた中道をもって仏性と見なす。

これについて、珍海のほうを見てみると、彼が『三論玄疏文義要』の第六卷において『大乘玄論』卷三の内容を引いて、

「問、破他可爾、今時何者爲正因耶。答、一往對他、則須併反。彼悉言有、今則皆無。乃至故云非眞非俗中道爲正因佛性也。」⁶¹

涅槃義疏、釋佛性義。正以中道爲佛性。爾後諸師、皆依朗法師義疏、得講涅槃乃至釋佛性義」と説く。
『大正藏』卷四十五. p. 35c19-22

⁵⁹ 珍海も吉蔵と同じ立場に立ち、『三論玄疏文義要』の第六卷において、まず十一家の仏性義を挙げて、各異説を述べている。後に道朗の中道仏性の義を引いて中道をもって仏性とすることを明らかにした。「問見佛性義。有異説耶。答。玄明正因佛性。出十一家異説矣。第一師云。以衆生爲正因佛性。故經言正因者。謂諸衆生。緣因者。謂六波羅蜜。又經説。言一切衆生悉有佛性也。大師破云。有衆生者。是妄想。何名佛性耶。又云。衆生有佛性。不言衆生是佛性耶。第二師云。以六法爲正因佛性。故經云。不即六法。不離六法。○者。五陰及假人也。破云。非即六法。非離六法。何時明六法是佛性耶。第三師云。以心爲正因佛性。故經云。凡有心者。必定當得無上菩提。以心識異於木石。研習必成佛故也。破云。經心是無常。佛性常故。心非佛性。經分明言心非佛性也。第四師云。以冥傳不朽爲正因佛性。謂心識之上有冥傳不朽之性。説此用爲正因耳。心家用故。同前破之。第五師云。以避苦求樂爲正因佛性。一切衆生心無不有此用。即以爲正因耳。故經言。無如來藏者。不得厭苦求樂涅槃也。時人盡引涅槃經。彼經無避苦求樂之文。勝鬘有此説者。此明佛性力故。厭苦求樂非云厭苦求樂是正因佛性也。又心家用故。同前破之。第六師云。以眞神爲正因佛性。若無眞神。何得成眞佛。故知神是正因也。此亦是心故。同前破也。第七師云。以阿梨耶識自性清淨心爲正因佛性也。攝論云。生死根本。故知。非佛性也。世諦之理也。云云。第八師云。以當果爲正因佛性。即當果之理也。古舊多用。破云。始有可無常。第九師云。以得佛之理爲正因佛性也。零根僧正所用評云。此義最長。然無佛資相傳。又無經説之。第十師云。以眞諦爲正因佛性也。和法心師小亮法師所用。破云。無佛説並承習之。第十一師云。以第一義空爲正因佛性。故經云。佛性者。名第一義空也（中略）玄出十一家釋已云。但河西道朗法師。與曇無讖法師共翻涅槃經。親承三藏。作涅槃義疏。釋佛性義。正以中道爲正因佛性。爾後諸師皆依朗法師義疏。得講涅槃。乃至釋佛性義。師心自作。各執異解。云云。今案。此文正取朗師中道佛性義爲正也」『大正藏』卷七十. pp. 291c28-292c20

⁶⁰ 吉蔵『大乘玄論』『大正藏』卷四十五. p. 37b25-27

⁶¹ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十. p. 292c21-23

（問う、他を破するは爾るべき、今時何者を正因と為すや。答う、一往他
に対し、則ち須らく並びに反すべし。彼悉く有と言ひ、今則ち皆無。乃至
故に非真非俗の中道を正因仏性と為すを云うなり。）

と述べ、中道仏性が十一家の仏性説を破折すると同時、多くの仏性説の中にお
いて正因とするのである。そして中道を正因とする理由は、中道をもって成仏
できるからであると述べている。即ち、

「問、一切衆生、正由何義成佛耶。答、由中道成佛、故云正因佛性也。一
切衆生、皆有中道正法故、一切皆悉終成佛道也。問、何故由中道正法得成
佛耶。答、失一味佛性、即有六道異。若悟一味本性、即還本原故、名成佛
也。」⁶²

（問う、一切衆生、正に何義より成仏するや。答う、中道により成仏す、
故に正因仏性と云うなり。一切衆生、皆中道正法有るが故、一切は皆悉く
終に仏道を成ずるなり。問う、何故中道正法により成仏することを得んや。
答う、一味仏性を失えば、即ち六道の異有る。若し一味本性を悟らば、即
ち本源に還るが故、成仏と名づくるなり。）

である。つまり、中道をもって成仏でき、なお中道は一切衆生において皆持つ
ているので、正法であり正因であるという。更にこの中道は本性であり本源で
あるといい、また中道を一味法（即ち一乘法）とし、中道を悟れば成仏でき
ると述べている。実はこのような解釈はあくまで「一切衆生悉有仏性」に基づい
て説いたのであると考える。なぜなら、珍海は後の文章において「本性は常恒
不変なり」⁶³といい、更に、

「衆生内由佛性、外值善友。一切皆待因縁、悉得成佛也。」⁶⁴

（衆生は内に仏性により、外に善友に値う。一切は皆因縁を待ち、悉く成

⁶² 珍海『三論玄疏文義要』『大正蔵』卷七十, p. 293b20-25

⁶³ 珍海『三論玄疏文義要』『大正蔵』卷七十, p. 293b26

⁶⁴ 珍海『三論玄疏文義要』『大正蔵』卷七十, p. 293c2-3

仏を得るなり。)

と述べている。換言すれば、一切衆生は自ら仏性があり、自身の仏性の力と客観世界の善因縁を加えるとするならば、皆成仏できると言えるのである。

また、上文に述べた仏性が因縁と相待して成仏することから、珍海は更に仏性を三種子に分け、『三論玄疏文義要』の第六巻において以下のように述べている。

「法華義疏方便品云、佛種從縁起者、種子有三。一、以一乗教爲種子故、譬喩品云、斷佛種故、即是破教也。二、以菩提心爲種子故、華嚴云、下佛種子於衆生田、生正等覺芽。三、以如來藏佛性爲種性。今初偈正以菩提心爲種子。」⁶⁵

(『法華義疏』「方便品」に云わく「仏種は縁により起こるは、種子に三有り。一には、一乗教を以て種子と為すが故に、「譬喩品」に「仏種を断ずるが故に、即ち是れ破教なり」と云う。二には、菩提心を以て種子と為すが故に、『華嚴』に「衆生の田に仏種子を下して、正等覺の芽を生ず」と云う。三には、如来藏仏性を以て種性と為す。今初偈に正に菩提心を以て種子と為す」と。)

つまり、因縁があるからこそ仏性の役割を発揮することができ、成仏できるというのである。そして種子は一切衆生の内に持つものとして、一乗教種子、菩提心種子、如来藏仏性種子という三種類があり、種子と因縁と結合して成仏することができるという。珍海における成仏思想もこの三つの種子性に基づいたからこそ、単独に一乗義を取り挙げ『一乗義私記』を著し、また『大乘正觀略私記』において発菩提心の重要さを強調し、更に専ら中道仏性を如来藏として重視したのであろう。

また、仏性について吉蔵は『大乘玄論』の中に、『大般涅槃經』に説かれてい

⁶⁵ 珍海『三論玄疏文義要』『大正蔵』卷七十、p. 293c9-14

る因、因因、果、果果、そして非因非果⁶⁶の五種仏性説を理乗、行乗、果乗の三種類の乗体と融合して、

「問、乘以何爲體。答、經論雖種種説、不過三種、謂理行果。」⁶⁷

（問う、乗は何を以て体と為すや。答う、經論には種々に説くと雖も、三種を過ぎず、謂はく理行果なり。）

と説いている。つまり、吉蔵は理乗、行乗、果乗をもって衆生を仏道に導く乗の大本と見なしている。また、

「乘有三種、理乘即是中道佛性。行乘即是緣因佛性。果乘即是果佛性。因因性境界性屬正因、果果性屬果性。故不開五性也。」⁶⁸

（乗に三種有り、理乗は即ち是れ中道仏性。行乗は即ち是れ因縁仏性。果乗は即ち果仏性なり。因因性と境界性とは正因に属し、果果性は果性に属す。故に五性を開かざるなり。）

と述べ、中道が仏性であることを仏道に導く理乗とし、十二因縁を中心とした仏性は行乗であり、菩提果である果仏性は果乗であるという。吉蔵は因縁仏性（因）と十二因縁により発生した観智仏性（因因）とを正因と呼称していて、大涅槃が果果仏性であることを菩提果の果仏性に属するとする。換言すれば、十二因縁の観智の修行を通して、中道仏性の理乗を開発し、菩提果の果乗を得れば、大涅槃の境界に入ることができるというのである。

一方、珍海はこのような融合についてどのように考えるかと言うと、彼は『一乗義私記』において、

⁶⁶ 南本『大般涅槃經』に「佛性者、有因、有因因、有果、有果果。有因者、即十二因縁。因因者、即是智慧。有果者、即是阿耨多羅三藐三菩提。果果者、即是無上大般涅槃。善男子、譬如無明爲因、諸行爲果、行因識果、以是義故。彼無明體、亦因亦因因、識亦果亦果果、佛性亦爾。善男子、以是義故。十二因縁、不出不滅、不常不斷、非一非二、不來不去、非因非果。善男子、是因非果、如佛性是果非因、如大涅槃是因是果、如十二因縁所生之法非因非果、名爲佛性」とある。『大正藏』卷十二. p. 768b14-24

⁶⁷ 吉蔵『大乘玄論』『大正藏』卷四十五. p. 42c10-11

⁶⁸ 吉蔵『大乘玄論』『大正藏』卷四十五. p. a25-28

「乗有三種等者、顯說一乘、即說佛性。以佛性是理乘故也。凡論有五佛性、出涅槃經。謂因性十二緣、因因性六度、果性菩提、果果性涅槃、正性謂中道也。言因因性境界性屬正因者、十二因緣爲境界性、以中道觀因緣故、以境界屬中道正因也。然舉因因性者、即是行乘。已別說之、更不可攝屬正因。亦其義不相應也。應是文誤。更可考他本之。果果屬果、或以涅槃從菩提、果乘不相離故、或合菩提涅槃二果、總爲果乘故、不別開也。」⁶⁹

（乗には三種有る等は、顯に一乗を説き、即ち仏性を説く。仏性を以て是れ理乗の故なり。凡そ論ずるに五仏性有り、涅槃經に出ず。謂わく因性十二因緣、因因性六度、果性菩提、果果性涅槃なり、正性を中道と謂うなり。因因性境界性は正因に属すと言うは、十二因緣を境界性と爲し、中道を以て因緣を觀ずるが故、境界を以て中道正因に属するなり。然るに因因性を挙ぐるは、即ち是れ行乗なり。已にこれを別に説く、更に正因に摂して属すべからず。亦た其の義相應せざるなり。應に是れ文の誤りなり。更に他本のこれを考すべし。果果は果に属し、或いは涅槃は菩提により、果乗相離れざるが故、或いは菩提と涅槃の二果を合し、総じて果乗と爲すが故、別に開かざるなり。）

と述べている。珍海の理乗、行乗、果乗についての理解は吉蔵のそれとほぼ同じであるが、ここに留意すべきなのは珍海の行乗に対する解釈である。彼が中道をもって十二因緣を觀察する因だけが正因であると考え、因因である因中の因は十二因緣の境界により起こしたものであるもので、正因ではないと述べている。この点について、珍海はすでに別として説いたと自釈して、文誤であるとしている。

一方、吉蔵が説いている簡正因という部分を確認してみると、珍海が文の誤りと考えたのは確實である。吉蔵は『大乘玄論』「仏性義」において、

「問、先明四句、後説三句、有正因不。答、未有正因。問、若前明四句、後説三句、既並非正因者、未知何者爲正因耶。答、前四句所明因果、因是傍因、

⁶⁹ 珍海『一乗義私記』『大正蔵』卷七十、p. 643c14-24

果是傍果義。所以然者、因則異果、果則異因。豈非是傍義。故先言有因、有因因、有果、有果果、皆未是正因。若言非因非果、乃是正因耳。後說三句、是因非果、是果非因、是因是果、皆未名正。若言非因非果、此乃是正。故經云、非因非果、名爲佛性也。故於四句中、更足第五句、方是正因。於三句中、更足第四句、方是正因。」⁷⁰

（問う、先に四句を明かし、後に三句を説く、正因有りやいなや。答う、未だ正因有らず。問う、若し前に四句を明かし、後に三句を説くは、既に並に正因に非ざれば、未だ知らず何者を正因と為すやと。答う、前の四句の明かす所の因果、因は是れ傍因、果は是れ傍果の義なり。然る所以は、因則ち果に異なり、果則ち因に異なる。豈に是れ傍義に非ざるや。故に先に因有り、因因有り、果有り、果果有りと言うも、皆未だ是れ正因ならず。若し非因非果と言わば、乃ち是れ正因なるのみ。後の三句に説く、是因非果、是果非因、是因是果、皆未だ正と名づけず。若し非因非果と言わば、此れ乃ち是れ正なり。故に經に云く、非因非果、名づけて仏性と為すなり。故に四句の中に於いて、更に第五句を足せば、方に是れ正因なり。三句の中に於いて、更に第四句を足せば、方に是れ正因なり。）

と述べていて、『大般涅槃經』に説かれている因、因因、果、果果という因果性がある仏性は皆正因仏性ではなく、中道の教義をもって説かれている非因非果の仏性こそ正因仏性である。更に、是因非果、是果非因、是因是果という因縁性がない因果関係の仏性も正因ではなく、非因非果というのは正因仏性であると説いている。

まとめ

以上、珍海における仏性説について検討を行った。彼は吉蔵と同じ河西道朗と曇無讖の中道仏性の説を受け入れ、これを正因仏性とすることが分かった。また、中道仏性を正因仏性とする理由として、珍海は「一切衆生悉有仏性」という観点から解釈し、中道を一味法（一乘法）とし、本性であり本源であると

⁷⁰ 吉蔵『大乘玄論』『大正藏』卷四十五. p. 38a4-14

する。中道の理を悟れば成仏できるという。

更に、仏性種子について、珍海が仏性因縁の立場から吉蔵の『法華義疏』の内容を引いて、一乗教種子、菩提心種子、如来蔵仏性種子という三種類に分け、一切衆生は内において仏性種子を持っていると強調した。

なお、珍海における成仏思想もこの三つの種子性に基づいたと推測した。このことに基づいて珍海が単独に一乗義を取り挙げて『一乗義私記』を著し、また『大乘正観略私記』の中に発菩提心の重要さを強調し、更に専ら中道仏性を如来蔵として重視したと考える。

また、因、因因、果、果果、非因非果という五種仏性及び理乗、行乗、果乗という三種類の乗体に対す検討を通して、珍海が吉蔵と同じ、中道仏性を仏道に導く理乗とし、十二因縁を中心とした仏性は行乗であり、菩提果である果仏性を果乗としたことが分かった。

更に、因、因因、果、果果という因果性がある仏性は皆正因仏性ではなく、中道の教義をもって説かれた非因非果の仏性こそ正因仏性であるということが分かった。

第四節 『一乗義私記』と『大乘玄論』「一乗義」との比較

『一乗義私記』は珍海による吉蔵の『大乘玄論』「一乗義」に対する解釈である。前述したように、珍海は『一乗義私記』において『大乘玄論』の文に誤りがあるような観点を示した。実は、『一乗義私記』に対する分析を通して、文脈の構成と内容との違いから、珍海が依用した『大乘玄論』「一乗義」は大正蔵経テキストに収録されたものとは同一でないことが分かった。この点について、伊藤隆寿氏はすでに『三論宗の基礎的研究』「第四章『大乘玄論』成立の諸問題」において、『大乘玄論』の構成について「珍海（1092年—1152年）の『一乗義私記』（大正蔵第七〇巻所収）と対比すると、珍海所用のテキストと現行本との相違が認められる。釈名第一と出体第二に文章の前後する部分があり、恐らく現行本に混乱があるかと思われる」と指摘された⁷¹。したがって、『一乗義私記』

⁷¹ 伊藤隆寿『三論宗の基礎的研究』大蔵出版、2018、p. 472

の依用したテキストの原型を考慮した上、筆者は本節において伊藤氏の先行研究を踏まえ、『一乗義私記』と大正蔵経テキスト『大乘玄論』「一乗義」との内容構成を比較して、その相違を明らかにしたい。

まず、両著作の相違する部分を対照して以下のように示す。(テキスト中に段落の変わり目に該当する『大正蔵』の頁数と段を示す。『大乘玄論』の下線部分は『一乗義私記』の引用部分であり、引用する範囲は()で示す。マル数字は珍海が引用した『大乘玄論』の引用文である)

『大乘玄論』「一乗義」「釈名」

一乗義三門 一釋名門 二出體門 三同

異門 釋名第一、一乗者、乃是佛性之大宗、
衆經之密藏、反三之妙術、歸一之良藥。迷之
即八軸冥若夜遊、悟之即八軸如對白日也。

釋名者、唯有一理、唯教一人、唯行一因、唯感
一果、故名爲一。法華論云、一謂同義、如來法身、
聲聞法身、緣覺法身、三乘同一法身、故名
爲一。乗者、運出爲義。運出有三種、一者以理
運人。從因至果、如大品云、是乗從三界出、到
薩婆若中住。二者以德運人。如法華云、得如
是乗、令諸子等喜戲快樂。三者以自運他。如
涅槃云、乗涅槃船、入生死海。濟度群生矣

『大正蔵』卷四十五. p. 42b12-23

『一乗義私記』「釈名」

一箇之破三明一、自具二義。謂破三者、背
昔也。歸一者、向今也。餘義齊爾。

① 玄云、乘以運出者乃至運則趣涅槃〈文〉此別釋
乗名、運之與出各是一義、然運是總。就此
文之中、且以運之與出各配二義。謂以出

運中、有運出生死義、及運到涅槃義也。此動義、謂約化他論之。故統略云、車之運動、必由於牛。大乘化物要是慈悲。〈文〉亦有縱任自在故名爲運。此約果德、受用自在義說爲運。故法華玄第四云、若縱任自在明運者、果德具有此運也。〈文〉今此文中且約因乘故、無慈悲運動及縱任等義也。

② 玄云。若通明乘乃至所成留滯也〈文〉此別釋乘義之文殘也。通論五乘、皆有出義。人天出三途、二乘出三界、大乘出二死。〈此是傍義也〉然此中意、五乘善根竝望佛果、皆得爲因。以有所得是無所得之初門故也。〈此是正意也〉若別言之、大乘正是乘、即一乘也。十信以上所有善法皆爲佛果、其餘人天二乘則非也。

『大正藏』卷七十. p. 637a8-24

以上の両著作の内容から見れば、『大乘玄論』「一乘義」の中には下に引かれた①と②の文章は見当たらない。

① 「玄云、乘以運出者、乃至、運とは則趣涅槃。」⁷²

（玄に云く、乗は運出以てとは、乃至、運則ち涅槃に趣く。）

② 「玄云、若通明乘、乃至、所成留滯也。」⁷³

（玄に云く、若し通じて乗を明かさば、乃至、成ずる所は留滯なり。）

珍海の「乘以運出者」という①の引用文が、『大乘玄論』の中には見られないほか、同じ①の「運則趣涅槃」という引用文は、『大乘玄論』において「如涅槃云、乘涅槃船、入生死海。濟度群生矣」というようになる。

⁷² 珍海『一乘義私記』『大正藏』卷七十. p. 637a8

⁷³ 珍海『一乘義私記』『大正藏』卷七十. p. 637a18

『大乘玄論』「一乗義」において「乗とは、運出を義と為す」というような文句があるが、その内容についての論述は更に三つに分けて論釈している。即ち、

「乗者、運出爲義。運出有三種。一者、以理運人。從因至果。如大品云、是乘從三界出、到薩波若中住。二者、以德運人。如法華云、得如是乘、令諸子等喜戲快樂。三者、以自運他。如涅槃云、乘涅槃船、入生死海、濟度群生矣。」

74

(乗とは、運出を義と為す。運出に三種有り。一には、理を以て人を運ぶ。因より果に至る。『大品』に云うが如き、「是の乗三界より出で、薩波若中に到り住す」と。二には、徳を以て人を運ぶ。『法華』に云うが如き、「是くの如くの乗を得、諸子等をして喜戲快樂しむ」と。三には、自を以て他を運ぶ。『涅槃』に云うが如き、「涅槃の船に乗せ、生死の海に入る。群生を濟度するなり。)

ところが、珍海の①に関する解釈文は運と出とは別々に二義を配するのである。即ち、

「且以運之與出各配二義。謂以出運中有運出生死義、及運到涅槃義也。」⁷⁵

(且く運と出を以て各二義を配す。出運の中に運出生死の義、及び運到涅槃の義有りと謂うなり。)

である。珍海の解釈文から見ると『大乘玄論』「一乗義」の釈名の内容は極めて短く、脱文がある可能性が高いと考える。

『大乘玄論』「一乗義」「出体」

④⑩ (出體第二。一乗體者、正法中道爲體。攝論云、性乗行乗果乗。中邊分別論云、乗具五義、一

⁷⁴ 吉蔵の『大乘玄論』『大正蔵』卷四十五. p. 42b19-23

⁷⁵ 珍海の『一乗義私記』『大正蔵』卷七十. p. 637a10

乘本謂眞如佛性。二乘行即福慧等。三乘攝
謂慈悲等。四乘障謂智障無明。五乘果即佛
乘也。唯識論云、乘三體六義。三體者、一自性。
二乘隨。三主得。六義者、一、體如空出離四謗。
二者、因謂福慧。三者、攝一切衆生。四者、境界
眞俗。五者、障即皮肉心。六者、果謂無上菩提。
十二門論云、乘具四事。一者、乘本謂諸法實
相。二者、乘主由波若導萬行得成。三者、乘行
餘一切行。四者、果謂薩婆若。法華論云、亦明
三種。一者、乘體謂如來平等法身。即是佛性。
二者、乘果謂如來大般涅槃。三、乘緣即是六度
了因。此猶三種佛性。不說果果性者、果果性
屬果門。境界性者、屬因門故。廣說有五、略說
唯三也。問、乘以何爲體。答、經論雖種種說、不
過三種。謂理行果、今以正法爲體。問、理是不
動、云何名運出耶。答、以其不動故。能令衆生
運出。別而論之、順忽爲運、得無生忍爲出。通
論一一皆運出。因乘自運運他、果乘與理乘、
自不運而能運他。問、此經明乘、正以何爲體。
答、若就因果用、以果爲宗。若就正法體、即以
正法爲宗。今明若因若果皆正法故、運故以
正法爲宗。有人言、此經萬善爲乘體。有人言、
以果萬德爲宗。有人言、境智爲宗。今明、就用
非無此義、而不得乘深體故。以正法中道爲
經宗、爲一乘正體。問、三論學者恒彈有所得
義、云何稱用異說耶。答、若言破相爲宗、是有所
得義。今申無所得、諸師義皆得皆非。得用
不得體、異執永消、同歸一極。無執不破、無義
不攝。巧用如甘露、拙服成毒藥也。問、大品明

理教行果四乘、與今何異耶。答、彼經不明開權、與此爲異。問、勝鬘法華何異。答、法華會三乘、爲漸悟菩薩說、正對三乘。勝鬘爲頓悟菩薩說、不對聲聞緣覺、但對人說、與此爲異。問、若爾法華究竟說、何故須涅槃教。答、失心子須涅槃、不失心子不須涅槃。但爲純根衆生故說、是以大通智勝佛燃燈佛。不說涅槃、利根衆生故。又此經明三事、一車、二牛、三僮從。車因果萬行萬德。牛亦通因果。中道正觀、離斷常垢、爲白牛。由正觀故、引萬行出生死。此即婆若導成萬行。問、婆若是乘、云何喻牛耶。答、一法兩義、引導如牛。運義如車、餘不爾。運出故有車義。無引導之能、故無牛義。界內爲僮從果地牛者、眞慧爲牛、六通無垢爲白牛。駕遊五道運出衆生。僮從者、即界外因爲僮從。問、此經未明正因佛性、此義何耶。答、此人不得經味。法華論云、七處明正因性。今略出四處、諸法從本來常自寂滅相、此明自性住佛性。又云同入法性、此是佛性之異名。又云開示悟入佛之知見、論釋知見明佛性。普賢菩薩及授惡人記有正因性故。問、有人言、此經未明常住、此義云何。答、此是小乘氣分。此經諸法從本來常自寂滅相、此是法常住義。常在靈鷲山、明人常義、我淨土不毀、此名依報常義。依報正報人法皆常、云何是無常耶。依論釋壽量品文、三身壽量法報二身是常。問、有人言、遣三而一存、此義爲得。答、此是有所得義。大品云、非三非一故名大乘。此經不可示。言辭相寂滅。此以超四句百非洞遣。強說

明乘。三一爲二、非三非一爲不二。二不二爲
龜、非二不二爲妙。二不二非二非不二爲龜、
言忘慮絕爲妙。

③③（三一開會、凡有十門。一者、開
三顯一。二者、會三歸一。三者、廢三立一。四者、
破三明一。五者、覆三明一。六者、三前明一。七
者、三中明一。八者、三後辨一。九者、絕三明一。
十者、無三辨一也）④（**開三顯一者**、開昔三乘是
方便、示今一乘是真實。故云開三顯一也。會
三歸一者、會彼三行歸一佛乘。故云、汝等所
行是菩薩道也。廢三立一者、廢昔三教立今
一乘教。故云、於諸菩薩中、正直捨方便、但說無
上道也。破三明一者、破其執三異之情、以明
一乘之道也。覆三明一者、如來趣三一兩緣、
當有三一之教。昔則以三覆一、今則以一覆
三。三前明一者、未趣鹿苑說三之前、寂滅道
場、已明一實之教。謂三前明一也。三中明一
者、從趣鹿苑說於三乘、佛乘第一、緣覺第二、
聲聞第三。謂三中明一也。三後辨一者、三乘
之後、法華教門、以會彼三乘同歸一道。謂三
後一也。絕待一者、如無言世界、外則無言無
示、內則無慮無識。故不論一三而已。即此爲
佛事故、則復是一故、云絕待一也。無三辨一
者、如香積佛土、彼土無有二乘名字、謂無三
辨一也。但有清淨大菩薩衆、謂有一也。前之
五種、就義論一。後之五種、約時處。諸文不同、
教門差別、**故開五也）**⑤（**問、云何名會三歸一。**答、
若識會三歸一、先須知開一爲三。開一爲三

者、昔指大乘之因說、爲小乘究竟之果也。今還指小乘究竟之果、即是大乘之因。故名會也) ⑥ (問、小乘人謂是究竟、爲是迷因、爲是迷果乎。答、實是大因謂是小果故是迷因也) ⑦ (問、以何義故明一乘是三乘中佛乘。復以何義明一乘非是三乘中佛乘耶。答、若明三乘、攝出世乘盡、故對二乘之方便、明佛乘是真實。故文云、唯此一事、實餘二即非真。所以明一乘是三乘中之一也。就佛乘中、復開真應、昔爲二乘人說佛方便身、故佛乘是方便身、則以今教明佛身是真實故。真實之乘異方便佛、如師子坐長者異著弊垢衣長者。是以約今昔兩教、明佛有權實不同。是故一乘非三乘中之一也) ⑧ (問、此經中始末、或言佛以方便力示以三乘教、則三乘並是方便。又云、唯此一事實、餘二則非真、則二是方便。兩文相違、何以會通耶。答、此二文猶是一義、無相違也。於一佛乘方便說三。次云一乘是實、二是方便。如人手內實有一果、方便言三果。次第論者、一菓是實、二是方便。故方便說三及二。是方便猶是一義、不相違也) ⑨ (問、爲會三歸一、爲會二歸一。答、此亦是一義。智度論云、於一佛乘開爲三分、如人分一斗米爲三、聚亦得合三聚爲一聚。亦得言會二聚歸一聚。會三會二、猶是一義不相違也)

◎若究竟爲言、中道

爲宗、論云性乘。若就用爲談、萬善爲乘體、萬善之中、以般若爲體) ⑪ (報習兩善、取習因爲乘

體、報因住生死不取。問、若爾不應會人天五乘爲一乘。答曰、人天是報果、而此乘體。有習因義故會、乃是增上緣義) ⑫ (別而爲論、有漏善非乘體、無漏善爲乘體。乘有二種、有漏善爲遠乘無漏善爲近乘) ⑬ (乘有二種、一者、動乘。二者、不動乘。萬行爲動乘、如來藏佛性中道爲不動乘。問、乘以運出爲義、中道佛性不運出、云何名爲乘體。答、以其不動故、能令萬善動出。亦令行者動出生死、住彼涅槃、故名爲乘) ⑭ 小乘 (初教以果爲乘。故言三車在門外、此是盡無生智果、大乘因與果爲乘。問曰、若大乘因果爲乘者、何故經言於佛果上、更無說一乘法事。答曰、此約自不運義、不言不運他

『大正藏』卷四十五. pp. 42b24-44a5

『一乘義私記』「釈名」

③ 玄云。三一開會凡有十門乃至十者無三辨一也〈文〉以下廣釋一乘之名義、即此下一紙餘文。與法華遊意文同也。又寶窟上卷明有七義。一者、對昔三故名一。如法華云、爲聲聞說四諦、爲緣覺說十二因緣、爲菩薩說六波羅蜜、爲對彼三是故明一。二者、破三明一。三者、會三歸一。四者、本來無別故言一。以三乘人同一法身故。五者、三即是一。悟三即是一相。六者、覆三明一。謂常有三一之兩緣、今爲一緣覆三明一。七者、非三非一、歎美爲一。〈取意略抄〉義章一乘義有四義。一、簡別名一。二、破別名一。三、會別名一。四、無別名一。〈具如文〉七中對別與彼簡別

名異義同。七中破別與彼破別名義相當。會三歸一即會別一也。餘義同異可尋思之。或同或異可類攝。

④ 玄云。開三顯一者乃至故開五也〈文〉開三顯一者、如經云、此經開方便門、示真實相也。昔以三乘覆一乘、今說三爲方便故。一乘真實乃顯、名爲開方便門、是開三顯一也。會三歸一云、汝等所行是菩薩道者、是藥草文也。義疏云、今指小果爲大因故。二乘之果是菩薩道。〈文〉問、法華論解種子無上云、汝等所行是菩薩道者、謂發菩提心、退已還發、前所修行善根不滅、同故得果故。〈文〉論疏釋云、今即取前後菩提心爲種子無上。文云、種子無上即菩提心。〈文〉今此文中、直取小果、爲菩薩道者、便違論意耶。答、義有多途、亦有傍正。法華玄第七解論意云、此意明取菩提心、善根是菩薩道耳。二乘善根智類、皆是菩薩道之遠緣。〈文〉論中正取菩提心耳。而二乘善根是遠緣故、雖非種子、亦是菩薩道。今會三中、取爲緣義也。又一義云、若約時論之、不取中間退大之時。故論疏云、彰聲聞人有三時。〈云云〉若論善根體、即指小果爲菩薩道。雖取小果爲菩薩、但約後時發菩提心、不論退時。故經義疏引論已云、此意明、本菩提心不滅故、此善根即無上種子故。今聞法華即是雲雨。後得成佛。云云。意云、經中正意指小乘果是菩薩道。論則舉其前後發心、釋成小果即大因義。問、此二義中以何爲是耶。答、義有傍

正、前是傍義、後是正意也。問、若爾、法華玄文如何。如但云二乘智斷、是菩薩道之遠緣。不言即是菩薩道耶。答、二乘智斷是遠緣者、即會之意也。論云、菩提心之善根者、發菩提心時、所有大乘小乘善根、皆成菩薩無所得善。二乘善根亦是實相之氣分故。而言遠緣者、且緣退時爲言耳。若還發心便成近因。又菩薩道有二門、謂發菩提心、修菩薩行。論意正取初發菩提心爲種子無上。餘竝資助、如雲雨等。〈見佛聞法等屬其雨歟。聞種子故義如其雨耳〉然取小行亦爲種子無上體。故義疏云、故此善根、即無上種子、乃至若轉悟者、則會而不破。〈文〉此善根者、菩提心善根也。言轉悟者、轉悟大乘時、即小乘果會而不破、便成無所得。是種子無上、以發心爲主屬。發菩提心乃爲種子也。廢三立一者、捨方便教置而不用。不同破三、破彼情執。破三明一其義易知。覆三明一者、還約教論三一互覆。但今以一覆三耳。今案、開三顯一、廢三立一、覆三明一、三前明一、三中明一、三後辨一、〈已上六義見今文也〉對三名一、及歎美爲一、〈寶窟出之〉簡別名一、〈義章出之〉此等並依教門以明。開三顯一者、約昔顯今。廢三立一者、止昔用今。覆三明一者、隱昔顯今。三前明一者。對末顯本。三中明一者、於末捨實。三後辨一者、望前辨後也。所言對三名一者、待權談實。歎美爲一者、以理成教也。簡別名一者、與廢三立一其義大同。亦與對三名一同也。問、三後辨一者、以會彼三同歸一道。云

與會三歸一有何異耶。答、三後辨一、約教門論。故云、三乘之後法華教門。〈云云〉會三歸一爲行、故云對昔三善、故言會三。〈文〉又會三者、正約義論之。三後者、約時言之。所望異故、別立爲二。故云、前之五種就義論一、後之五種約時處也。〈云云〉言會三歸一者、正約行。言破三明一者、破執顯實。言絕三無三者、約處顯實。就此絕三者、顯理。無三者、顯行。舉人顯行而已。寶窟所言無別者、約理明一。三即是一者、約解明一。非三非一、歎美爲一者、約教明理。皆應寄思。言無言世界者、言香積佛土者、維摩經所說衆香世界也。香積即佛名也。

⑤ 玄云。問云何名會三歸一耶乃至故名會也 〈文〉

已下盡釋名門、總有五番問答。此初也。歸會是一乘大宗也。故別問答而已。昔開一爲三、今還合三爲一、是答意也。

⑥ 玄云。問小乘人乃至是迷因也 〈文〉前答云還指

小乘究竟之果也。是唯佛說、而小乘人執爲決定。故今問云、且執爲迷因、爲迷果耶。答、云迷因也。此義如非因計因、戒禁取迷、苦諦也。

⑦ 玄云。問以何義故乃至非三乘中之一也 〈文〉問

中意云、開三顯一者、分權實也。故云一乘在三中、或在三外。然何以義故爾耶。此越而問也。正應問云、一乘爲三中一、爲三外。即應答云有二義、須如此問答已。方可問、以何義故也。然今直問何以故。即顯前重之答已。爲文略、故越而問答而已。答

中意云、若就出世乘、明有無之權實者、一實二權。權者、實無權有。有者、真是有也。若就佛乘中復開真應、應非究竟、真是究竟。此爲權實非有無也。若約三車言之、亦是牛車、是三車中牛車。復是三車外牛車也。故化城喻品疏云、問、三車中、大車爲是實、爲是權耶。答、具有二義、若道理無二、唯有一者、則二權、一是真實、乃至二者、云一乘是真實、三乘是方便。密遣二人、故二乘是方便。脫珍御服、著弊垢衣、以是方便、得近其子。此之佛乘亦是方便。〈云云〉此文既云、佛乘亦有方便、故三車中、牛車亦爲是權。即四車義也。問、三車四車、本來二義、故云爾歟。答、四車義所引、佛以方便力、示以三乘教等、並非四車、唯是三車取捨而已。然就信解品意、更解三車。則三車外、別有大車。此非三車之大宗、唯是傍義耳。故法華玄第六卷、索車義云、正就三乘有無義明索、不就佛乘具足不具足明索義也。文。傍正之義、此文顯矣。師子座、長者喻、舍那身佛、即是本也。垢衣長者喻釋迦身佛、乃爲迹也。此雖並是迹、而迹中更分本迹也。

⑧ 玄云。問此經中始末乃至不相違也 〈文〉問中舉二文顯違嚴通意云、上既明二權一實、三權一實、具有二義。人聞此語、以方便示三乘。亦以三乘俱非實義有。今恐有此謬、故作此問答。明示三乘教者、但就總說、以三爲權。若次第別說、三中一實二權也。問、准化城疏、具有二義。何不約三乘皆權義、釋

方便説三之文耶 答、此等説文、並明大宗。

故但三乘一實二權。然論傍義、准信解品

亦有四乘、今廢不論。

⑨ 玄云。問爲會三歸一爲會二歸一至不相違

也〈文〉此亦恐濫問答以顯。但以二權會。於

此義中、得言會三爲會二也。智度論者、

『大正藏』卷七十. pp. 637a25-638c14

上の両著作の内容構成から見ると、『一乗義私記』において、数字を付けた③から⑨までの引用文と前述した①と②との引用文を加えると、『一乗義私記』の「釈名」の部分に相当する。

③ 「玄云、三一開會凡有十門、乃至、十者無三辨一也。」⁷⁶

(玄に云く、三一開会は凡そ十門有り、乃至、十には、無三辨一なり。)

④ 「玄云、開三顯一者、乃至、故開五也。」⁷⁷

(玄に云く、開三顯一とは、乃至、故に五に開くなり。)

⑤ 「玄云、問、云何名會三歸一耶、乃至、故名會也。」⁷⁸

(玄に云く、問う、云何が会三歸一と名づくるや、乃至、故に会と名づくなり。)

⑥ 「玄云、問、小乘人、乃至、是迷因也。」⁷⁹

(玄に云く、問う、小乗の人、乃至、是れ因に迷うなり。)

⑦ 「玄云、問、以何義故、乃至、非三乘中之一也。」⁸⁰

(玄に云く、問う、何の義を以ての故、乃至、三乗中の一に非ざるなり。)

⑧ 「玄云、問、此經中始末、乃至、不相違也。」⁸¹

⁷⁶ 珍海『一乗義私記』『大正藏』卷七十. p. 637a25-26

⁷⁷ 珍海『一乗義私記』『大正藏』卷七十. p. 637b12

⁷⁸ 珍海『一乗義私記』『大正藏』卷七十. p. 638a22

⁷⁹ 珍海『一乗義私記』『大正藏』卷七十. p. 638a26

⁸⁰ 珍海『一乗義私記』『大正藏』卷七十. p. 638b2

⁸¹ 珍海『一乗義私記』『大正藏』卷七十. p. 638c2

(玄に云く、問う、此の經中の始末、乃至、相違せずなり。)

⑨ 「玄云、問、爲會三歸一、爲會二歸一、至、不相違也。」⁸²

(玄に云く、問う、会三歸一と爲すや、会二歸一と爲すや、至、相違せずなり。)

また、『一乗義私記』「釈名」という部分の内容は『大乘玄論』「一乗義」において「出体」の中で後半の部分⁸³㉔に当たっている⁸⁴。

下に列している『一乗義私記』「出体第二」の㉔ら㉔までの内容は小異があるが、ほぼ『大乘玄論』「一乗義」の「出体」の後の部分㉔に相当する⁸⁵。ただし、珍海に引かれた第㉔の引用文は「出体」の最初の部分㉔に相当⁸⁶すると推測できるが、㉔の引用文の終わるところは『大乘玄論』「一乗義」においては見当たらない。

⑩ 「玄云、出體第二、至、以波若爲體。」⁸⁷

(玄に云く、出体第二、至、波若以て体と爲す。)

⑪ 「玄云、報習兩善、至、増上縁起。」⁸⁸

(玄に云く、報習の両善、至、増上縁起こり。)

⑫ 「玄云、別而爲論、至、爲近乗。」⁸⁹

(玄に云く、別して論を爲す、至、近乗と爲す。)

⑬ 「玄云、乗有二種、至、故名爲乗。」⁹⁰

(玄に云く、乗に二種有り、至、故に名づけて乗と爲す。)

⑭ 「玄云、初教以果爲乗、至、不至佛果。」⁹¹

⁸² 珍海『一乗義私記』『大正蔵』卷七十. p. 638c12-13

⁸³ 『一乗義私記』の③から⑨までの引用文は『大乘玄論』p. 43a28-c19 に相当する。

⁸⁴ 本節の初めに述べたように、伊藤隆寿氏はすでに釈名第一と出体第二に文章の前後する部分があると指摘された。

⁸⁵ 吉蔵『大乘玄論』『大正蔵』卷四十五. pp. 43c19-44a2

⁸⁶ 『一乗義私記』の㉔の引用文は『大乘玄論』p. 42b24-43a22 に相当する。

⁸⁷ 珍海『一乗義私記』『大正蔵』卷七十. p. 638c16

⁸⁸ 珍海『一乗義私記』『大正蔵』卷七十. p. 638c22

⁸⁹ 珍海『一乗義私記』『大正蔵』卷七十. p. 639a2

⁹⁰ 珍海『一乗義私記』『大正蔵』卷七十. p. 639a6

(玄に云く、初教は果を以て乗と為す、至、仏果に至らず。)

また、その次の同異門から寿量果までの引用文は『大乘玄論』「一乗義」の同異門とほぼ一致する。

『一乗義私記』と『大乘玄論』「一乗義」との段落構成を以上のように整理して挙げた。両著作は構成の前後する部分があるほか、脱文の部分もある。それだけではなく、『大乘玄論』「一乗義」の「釈名」の部分⁹²については、珍海の『一乗義私記』の中には見当たらないと言えるか、内容が不完全であると言えるか、それは特定できないものの、両著作が異なっている部分があることが窺える。

次に、両著作の内容について留意せざるを得ないところは、『大乘玄論』中の『法華経』八巻本の引用の問題である。菅野博史氏によって、吉蔵は一貫して七巻本の『法華経』によっていることについて、“七軸”を“八軸”に変えているのは、八巻の『法華経』が流行した、吉蔵より後の時代の影響を感じると指摘された⁹³。『大乘玄論』「一乗義」において八軸というような表現は全部で二箇所がある。

一、「一乗者、乃是佛性之大宗、衆經之密藏、反三之妙術、歸一之良藥。迷之即八軸冥若夜遊、悟之即八軸如對白日也。」⁹⁴

(一乗とは、乃ち是れ仏性の大宗、衆經の密藏、反三の妙術、歸一の良薬なり。これに迷えば即ち八軸冥きに夜遊するが若く、これを悟らば即ち八軸白日に対するが如し。)

二、「評曰、三車四車、諍論紛綸由來久矣。了之則一部可通、迷之則八軸皆壅。」

95

(評して曰く、三車四車、争論紛綸として由来久しきなり。これを了すれば則ち一部通ずべく、これに迷えば則ち八軸皆壅ぐ。)

⁹¹ 珍海『一乗義私記』『大正蔵』卷七十. p. 639a11

⁹² 吉蔵『大乘玄論』『大正蔵』卷四十五. p. 42b12-23

⁹³ 菅野博史「『大乘四論玄義記』の基礎的研究」『印度学仏教学研究』第57号. 2008. pp. 512-504

⁹⁴ 吉蔵『大乘玄論』『大正蔵』卷四十五. p. 42b13-15

⁹⁵ 吉蔵『大乘玄論』『大正蔵』卷四十五. p. 44a25-27

ところが、これに対して、珍海は『一乗義私記』においての解釈文は以下のようである。

「言七軸者、即法華一部。」⁹⁶

(七軸と言うは、即ち法華一部なり。)

このことから、珍海が当時に依用したテキストは確かに七巻本の『法華経』によって説かれたことが分かった。七軸を八軸に変えたのは恐らく異本の誤伝であると推測できる。珍海自身も『三論玄疏文義要』の中に、

「更又有一本、八不次安二智、境智因果、所詮能詮等次第也。此大乘玄論、總有五卷、義科次第、有異本不同、又文有増減之異也。」⁹⁷

(更に又一本有り、八不の次二智を安ず、境智因果、所詮能詮等の次第なり。此の大乘玄論、総じて五卷有り、義科の次第、異本の不同有り、又文に増減の異有るなり)

と述べ、『大乘玄論』の内容構成はテキストの異りにより相違があることが推測でき、珍海が依用した『大乘玄論』のテキストは現在の大正蔵経テキストと異なることが分かった。

まとめ

以上、本節において吉蔵の『大乘玄論』「一乗義」と珍海の『一乗義私記』との比較を行った。結果としては、珍海が『一乗義私記』の中に引用した釈名の文章は『大乘玄論』の中では見られない部分があり、内容に対する解釈も相違し、脱文があることが分かった。

また、文章の段落構成について、釈名と出体の前後矛盾する部分も明らかに

⁹⁶ 珍海『一乗義私記』『大正蔵』巻七十、p. 640b17

⁹⁷ 珍海『三論玄疏文義要』『大正蔵』巻七十、p. 200a26-28

し、珍海が依用した『大乘玄論』テキストは七巻本の『法華經』によって宗義を説くことに対して、現在『大藏經』テキストに収録した『大乘玄論』のほうには八巻本の『法華經』によって宗義を説き、両著作が同一テキストを依用していないことが分かった。

小結

以上、吉蔵の『大乘玄論』「一乗義」と珍海の『一乗義私記』との比較を通して、珍海における三乗と一乗との関係、及び仏性と一乗に対する理解を明らかにした。更に両著作の比較を通して、珍海の『一乗義私記』の内容構成、及び『大乘玄論』「一乗義」と『一乗義私記』の相違するところが明瞭になった。

それでは、本章の検討した結果をまとめると以下のようなものである。

一、『一乗義私記』の内容構成について、「釈名」、「出体」、「同異」という三つの部分に分けている。その内容は即ち、

「釈名」において、主に『法華經』をもって三乗と一乗との関係を解釈する。

「出体」において、珍海は主として吉蔵の教義に従って乗を乗体と乗用の二種に分けて論述した。

「同異」において、珍海は三假三車、別明索車、一乗寿量にして三つの部分に分かれて述べた。

また、『大乘玄論』第三巻の内容⁹⁸から見れば、一乗はまた仏性、涅槃、法性、真如、實際等とも言えると吉蔵が述べている。つまり、吉蔵にとって仏性、一乗、涅槃を平等にして、同義語として用いることが分かった。これに関して、珍海は「一箇これ三を破して一を明かし、自ずから二義具す。三を破すと謂は、昔に背くなり。一に帰すとは、今に向かうなり。余義は齊しく爾なり」と述べ

⁹⁸ 吉蔵の『大乘玄論』の中に「經中有明佛性、法性、眞如、實際等、並是佛性之異名。何以知之。涅槃經自說佛性有種種名、於一佛性亦名法性涅槃、亦名般若一乘、亦名首楞嚴三昧、師子吼三昧。故知、大型隨緣善巧、於諸經中說名不同。故於涅槃經中、名爲佛性。則於華嚴、名爲法界。於勝鬘中、名爲如來藏自性清淨心。楞伽名爲八識。首楞嚴經名首楞嚴三昧。法華名爲一道一乘。大品名爲般若法性。維摩名爲無住實際。如是等名、皆是佛性之異名（中略）平等大道爲諸衆生覺悟之性、名爲佛性」とある。『大正藏』卷四十五. p. 41c14-28

ていて、「一箇」は「一乗義」であると推測でき、「余義」は即ち「仏性義」と「涅槃義」であると推測した。そのために、珍海が『大乘玄論』の「仏性義」と「涅槃義」ではなく、「一乗義」だけに対して解釈した意図は、仏性義を重視するほか、仏性、一乗、涅槃の三つは平等であると考えたからであろう。

二、三乗と一乗との関係についての検討から、珍海はそのまま吉蔵の三乗・一乗の教説を受けたのではなく、慧遠からの影響も受け、両者の教説を受容して、九種の三乗・一乗の教説を整理して説かれたことが分かった。しかも、珍海にとって三乗の教説は破折すべき旧説に属して、一乗は所依すべき教説であることが分かった。

三、珍海は吉蔵と同じ河西道朗と曇無讖の中道仏性の説を受け入れ、これを正因仏性とすることが分かった。また、中道仏性を正因仏性とする理由として、珍海は「一切衆生悉有仏性」という観点から解釈し、中道を一味法（一乘法）とし、本性であり本源であるとする。中道の理を悟れば成仏できるという。

更に、仏性種子について、珍海が仏性因縁の立場から吉蔵の『法華義疏』の内容を引いて、一乗教種子、菩提心種子、如来蔵仏性種子という三種類に分け、一切衆生は内において仏性種子を持っていると強調した。

なお、珍海における成仏思想もこの三つの種子性に基づいたと推測した。このことに基づいて珍海が単独に一乗義を取り挙げて『一乗義私記』を著し、また『大乘正観略私記』の中に発菩提心の重要さを強調し、更に専ら中道仏性を如来蔵として重視したと考える。

また、因、因因、果、果果、非因非果という五種仏性及び理乗、行乗、果乗という三種類の乗体に対す検討を通して、珍海が吉蔵と同じ、中道仏性を仏道に導く理乗とし、十二因縁を中心とした仏性は行乗であり、菩提果である果仏性を果乗としたことが分かった。

更に、因、因因、果、果果という因果性がある仏性は皆正因仏性ではなく、中道の教義をもって説かれた非因非果の仏性こそ正因仏性であるとしていることが分かった。

四、珍海『一乗義私記』と吉蔵『大乘玄論』「一乗義」との対照を通して、両著作の相違するところを明らかにした。その結果を以下の四点にまとめて示す。

①内容の上、『一乗義私記』「釈名」に解釈した内容は、『大乘玄論』「一乗義」の「釈名」において見当たらない部分がある。そして、『大乘玄論』「一乗義」の「釈名」の内容は極めて短く、脱文がある可能性が高いと考える。

②両書の「出体」に関する内容について、『一乗義私記』「釈名」という部分の内容は『大乘玄論』「一乗義」において「出体」の中から後半の部分に当たっていることが分かった。

③『一乗義私記』「出体」の内容はほとんど『大乘玄論』「一乗義」の「出体」の後の部分に相当することが分かった。

④『一乗義私記』と『大乘玄論』「一乗義」との対照を通して、珍海の当時の『大乘玄論』は、現在の大正蔵経テキストと異なるものがあつたと確認でき、七軸を八軸に変えたのは恐らく異本の誤伝であると推測できる。

第四章 珍海における中道思想

周知のように、三論宗の思想体系はインド龍樹（2-3 世紀）の『中論』、『十二門論』、及び弟子である提婆（2-3 世紀）の『百論』を所依として成り立ち、その思想の中核は即ち八不中道である。

吉蔵は『中觀論疏』「因縁品」の中に、八不中道は正觀を生ずることができ、龍樹は大乗の立場に立って『中觀論』を著したと解釈しており、八不は大乗の諸方等經を包摂すると述べている⁹⁹。

また、『大乘玄論』巻五の中に、中道実相を体悟すれば正觀が生まれ、この正觀をもって断常を取り除くことができると述べている¹⁰⁰。

つまり、吉蔵の場合、八不は即ち正觀、正觀とは中道実相を体得することによって生じ、さらにこの中道実相によって生じた正觀をもって断常の二辺を離れるのである。

吉蔵が述べた正觀に対して、珍海は『大乘正觀略私記』¹⁰¹一卷を著し、内容的に「第一大意門」、「第二諸門分別」、「第三総結宗帰」に分け、正觀の趣旨を論述しているのである。また、珍海のほかの著作『三論玄疏文義要』十巻と『三論名教抄』十五巻の中にも八不中道について言及している。

前章に述べたように、珍海は吉蔵の三論宗思想を継承すると同時に、他師の思想を受けることもあり、自分自身の考えを加えることもある。三論宗の思想的な様態は珍海の時代に至ると、吉蔵と完全に同じとは言えないのが状況となった。

このような事情から、八不中道について珍海はどのように継承しているだろうか。本章では、珍海の『大乘正觀略私記』を中心として、『三論玄疏文義要』を参照しつつ、珍海における八不中道の思想様態を考察したい。

⁹⁹ 吉蔵は『中觀論疏』の中に「初經生論者、八不即是方等經。論主體八不中道、發生正觀、方得作論。故是經生論」と述べている。『大正蔵』巻四十二. p. 32b10-12

¹⁰⁰ 吉蔵は『大乘玄論』の中に「體中實發生正觀、只以此正觀能淨斷常、是故名論、所以名中觀論」と述べている。『大正蔵』巻四十五. p. 74b23-24

¹⁰¹ 珍海『大乘正觀略私記』『大正蔵』巻七十. pp. 195a4-199c3

第一節 『大乘正観略私記』の概観と内容

今まで、珍海の『大乘正観略私記』に関する先行研究がないため、珍海における三論宗思想の教義を検討する前に、『大乘正観略私記』の概観と内容について紹介しておきたい。以下、その書誌情報に関して記せば、原写本¹⁰²は快盛により天文十二年（1543）十月十三日に南都東大寺の観音院において写され、現在高野山正智院に所蔵されている。テキストの対校本としてのもう一つの甲写本¹⁰³は元文三年（1738）に写され、現在薬師寺に所蔵されている。高野山正智院経蔵史料集成二『正智院聖教目録』上巻¹⁰⁴の記録によると、快盛は大永八年（1528）二月、東寺において灌頂を受けており、同書にある文書「両部傳法灌頂印信」により、正智院灌頂道場において、快盛が両部灌頂の印を伝法したとある¹⁰⁵（年月日なし）。この記録により、『大乘正観略私記』を写した快盛は正智院の学僧として、密教の灌頂を受け、かつて密教の僧として活躍したことがあったことがわかる。

また、両写本テキスト巻末の識語から見ると、正智院に所蔵された原本には、

「右、天文十二年十月十三日、於南都東大寺、以観音院御本馳惡筆。是併爲三論結縁也。求法沙門快盛。」¹⁰⁶

（右、天文十二年十月十三日に南都東大寺に於いて、観音院の御本を以て悪筆を馳す。是れ併に三論の結縁と為すなり。求法沙門快盛。）

と書かれており、それに対する欄外注記のところに、薬師寺の甲写本の巻末には

¹⁰² 正智院蔵古写本

¹⁰³ 元文三年写薬師寺蔵本

¹⁰⁴ 山本信吉編『正智院聖教目録』巻上「大永八年二月二十六日、快勝授快盛東寺十二重灌頂」『高野山正智院経蔵史料集成』巻二. p. 392. 吉川弘文館. 2006

¹⁰⁵ 同書「於正智院灌頂道場、授両部傳法灌頂快盛法印畢」p. 411. 吉川弘文館. 2006

¹⁰⁶ 珍海『大乘正観略私記』『大正蔵』巻七十. p. 199c1-3

「承元四年三月八日亥時書訖。以禪那院御自筆之草本所寫之地、追得再治本者、必交點之。予、雖入龍樹之門葉、未辨一宗之旨歸。以寫此書之功、爲謝彼咎之基矣。羊僧實親。」¹⁰⁷

(承元四年三月八日亥時書き訖る。禪那院御自筆の草本所写の地を以て、追って再治本を得ば、必ずこれに交点せん。予、龍樹の門葉に入ると雖も、未だ一宗の旨帰を辨ぜず。此の書を写すの功を以て、為に彼の咎の基に謝せん。羊僧実親¹⁰⁸。)

と記されている。使用するテキストの冒頭の注により推測して、薬師寺に所蔵された甲写本が校訂本であると分かった。

また、テキスト中に原文より一字下げた十九行の小文字があるが¹⁰⁹、欄外注記によると、薬師寺所収の写本の中には書かれていない。内容の検討により、これはほぼ『三論玄疏文義要』¹¹⁰の第一巻から引いた文章であることが確認できた。ただし、この引用は原文の全てではなく、省略した引用である。恐らくこれらの小文字は珍海ではなく、写した快盛、或はそれ以前に誰かが『三論玄疏文義要』を踏まえて珍海の著作に補充したのであろう。

また、『大乘正観略私記』の内容構成を見てみると、全篇は一巻であり、内容的に三つの部分に分けている。

第一は、大意門である。この段階の冒頭に中道正観の大意は如何¹¹¹という問いが設けられ、「正観」という言葉をもって大意を明らかにする。更に「中道正観」を解説するに

「云何一向作無所得観耶。答、考尋聖人興世、諸所施爲爲顯中道。令因中發観滅諸煩惱。」¹¹²

¹⁰⁷ 珍海『大乘正観略私記』巻末注 18 の欄外注記を参照する。『大正蔵』巻七十. p. 199c1

¹⁰⁸ 羊僧は唾羊僧ともいい、愚かな僧侶のこと。ここでは謙遜語として用いられている。実親は僧名である。

¹⁰⁹ 珍海『大乘正観略私記』『大正蔵』巻七十. p. 196a1－a19

¹¹⁰ 珍海『三論玄疏文義要』『大正蔵』巻七十. p. 199－378

¹¹¹ 珍海『大乘正観略私記』『大正蔵』巻七十. p. 195a10

¹¹² 珍海『大乘正観略私記』『大正蔵』巻七十. p. 195b15－b17

（云何にして一向に無所得の觀を作すや。答う、聖人世に興こるを考尋し、諸所に施しをして為に中道を顕わさんと為す。中に因りて觀を發し、諸の煩惱を滅せしむ。）

と述べていて、無所得（無執着）をもって中道としての正理を顕すと述べている。

第二は、諸門分別である¹¹³。これは十門に分けられ、各教門の内容については以下の通りである。

1. 立教門—声聞藏と菩薩藏を立つ。
2. 師宗承習—三論宗の法脈を示す。
3. 宣通大概—六つの方面¹¹⁴から吉藏が經論を説明する時の形式には一つではないと述べる。
4. 立宗本教—三論宗の所依經論を論じる。
5. 理内理外—理内は無所得、理外は有所得であると述べている。
6. 法門名数—三論宗において重要な名目を挙げられる。
7. 遣蕩究竟—破邪と顕正。
8. 道門宗極—二諦中道の理を述べる。
9. 仏道遠近—成仏の遠近。
10. 大乘無礙門—諸法無礙、正觀無礙、身通無礙、言說無礙などを論じる。

第三は、総結宗帰である。最後の宗帰を総結するとして、珍海は『中觀論』の八不偈を強調して、中道はまるで月のように正觀の水を照らすと述べており、無所得である中道の正理を全篇に貫くのである。

まとめ

以上、珍海の『大乘正觀略私記』の概觀を二つの方面からまとめると以下のようである。

一、書誌情報によると、『大正藏』テキストに依用された『大乘正觀略私記』

¹¹³ 珍海『大乘正觀略私記』『大正藏』卷七十. pp. 195c15—199b14

¹¹⁴ 珍海『大乘正觀略私記』『大正藏』卷七十. pp. 196b10—197a12 を参照

の写本は二つある。一つは、快盛により天文十二年（1543）十月十三日に南都東大寺の観音院において写され、現在高野山正智院に所蔵されている原写本である。もう一つは、元文三年（1738）に写され、現在薬師寺に所蔵されている対照本である。

二、内容から見ると、『大乘正観略私記』は全部で一巻であり、大意門、諸門分別、総結帰宗という三つに分けられ、中道正観を趣旨として論述するのである。

第二節 二諦と中道

以上、『大乘正観略私記』の概観を示した。それでは、八不中道について珍海の継承様態はどのようなものであろうか。まず、『大乘正観略私記』では、

「問、三論以何經爲本耶。答、此有三門。一者、論初標八不。八不雖散出諸經、而正舉二經。謂瓔珞經佛母品、涅槃經師子吼品文也。故知、正申涅槃、瓔珞二經部也。二者、以般若爲宗。故八不義云、故相傳云、中論是釋論骨髓也。四論云、玄義文亦同之。智論既解般若一部。故知、此論正解般若。然名通論者、不解一部文。但以般若實相正觀、以爲論宗。然般若最大故義含諸部。論中亦引花首之文、兼釋涅槃之義。故名通論。然正以般若爲論宗歸。日本古徳、謂三論宗、爲般若宗¹¹⁵。三者、一切大乘以爲論宗。此論既是大乘通論。以花首經三是之偈、顯一部大乘。又釋涅槃悉有佛性。十二門論初明六義大乘、通冠諸部。故知、三論非唯般若。四諦品疏大師自云、此偈即釋涅槃經文。故不應言但申般若。」¹¹⁶

（問う、三論は何の經を以て本と為すや。答う、此れに三門有り。一には、論の初めに八不を標す。八不は諸經に散出すると雖も、而も正しく二經を挙く。謂く『瓔珞經』の「仏母品」¹¹⁷、『涅槃經』の「獅子吼品」¹¹⁸の文なり。

¹¹⁵ 『大正蔵』テキストは「宗見」とあるが、欄外対校記に正智院写本は「見」字がない。意味上から、「見」字ないのほうに通じやすいので、今「見」字を取る。

¹¹⁶ 珍海『大乘正観略私記』『大正蔵』卷七十. p. 197a288-b3

¹¹⁷ 竺仏念訳『菩薩瓔珞本業經』「仏母品第五」の中に八不について、以下の様に説かれている。「佛子。二

故に知んぬ、正しく『涅槃（經）』、『瓔珞（經）』二經を申ぶる部なり。二には、『般若』を以て宗と為す。故に「八不義」に云わく「故に相伝して云わく、『中論』は是れ『釈論』の骨髓なり」¹¹⁹と。『四論』に云わく「玄義の文も亦之と同じ」と。『智論』は既に般若一部を解す。故に知んぬ、此の論は正しく般若を解すと。然るに通論と名づくるは、一部の文を解せず。但だ般若実相の正觀を以て、以て論宗と為す。然るに般若は最大なるが故に義は諸部を含む。論中に亦『花首』の文を引き、兼ねて涅槃の義を釋す。故に通論と名づく。然るに正しく般若を以て論宗の歸と爲す。日本の古徳は、三論宗と謂い、般若宗と爲す。三には、一切の大乘を以て論宗と爲す。此の論は既に是れ大乘の通論なり。『花首經』の三是の偈を以て、一部の大乘を顯す。又涅槃の悉有佛性を釋す。『十二門論』の初めに六義大乘を明かして、諸部を通冠す。故に知んぬ、三論は唯般若に非ず。四諦品の疏（『中觀論疏』の四諦品）に大師自ら云わく「此の偈即ち涅槃の經文を釋す。故に應に但だ般若を申ぶるのみと言うべからず」と。）

と述べている。

つまり、三論宗は八不と般若をもって宗の根本とし、『中論』を大乘の通論とするのである。「論初標八不」とは、『中論』の最初に説かれた「不生亦不滅、不常亦不斷、不一亦不異、不來亦不出、能說是因緣、善滅諸戲論、我稽首禮佛、諸說中第一」という八不の偈頌を指す¹²⁰。更に『瓔珞經』と『涅槃經』に説かれた八不に関する文章を挙げ、八不中道の理は各經典の中において見られることを強調する。また、般若を宗とすることは、『大智度論』のことを指すのである。『大智度論』は専ら般若を解釈するので、大乘の別論とし、般若実相の正觀を

諦義者。不一亦不二。不常亦不斷。不來亦不去。不生亦不滅。而二相即聖智無二。無二故是諸佛菩薩智母。佛子。十方無極刹土諸佛。皆亦如是説。吾今爲是大衆略説明月瓔珞經中二諦要義」『大正藏』卷二十四. p. 1018c2-7

¹¹⁸ 南本『大般涅槃經』卷二十七「獅子吼菩薩品」に「十二因緣、不出不滅、不常不斷、非一非二、不來不去、非因非果」とある。『大正藏』卷十二. p. 768b20-21

¹¹⁹ 吉藏『大乘玄論』に「問釋論中指正觀論者。何必是中論耶。答中論觀法品云。正觀論之稱。故知。中論是正觀論也。故相傳云。中論是釋論之骨髓也」とある。『大正藏』卷四十五. p. 30c16-19

¹²⁰ 龍樹『中論』『大正藏』卷三十. p. 1b14-17

もって三論宗の根本とするのである。また、別論に対して、『中論』をもって三論宗の根本とするのである。換言すれば、八不の義、及び八不を説く『中論』を三論宗の根本とし、『中論』はまた大乘の通論とする。更に、般若の義も三論宗の根本であり、般若を解釈する『大智度論』を大乘の通論とするのである。

また、『三論玄疏文義要』第二巻の内容を見てみると、

「問、中論以何爲宗耶。答、以二諦爲宗也。問、既名中論、可以中道爲宗、何云二諦耶。答、二諦即中道也。」¹²¹

（問う、『中論』は何を以て宗と為すや。答う、二諦を以て宗と為すなり。問う、既に『中論』と名づけ、中道を以て宗と為すべき、何ぞ二諦と云うや。答う、二諦即ち中道なり。）

と述べている。つまり、『中論』は二諦をもって根本とし、珍海にとって、二諦は即ち中道であり、『中論』の趣旨である。

更に『三論玄疏文義要』の第二巻の中に、

「問、前言今論以二諦爲宗、二諦即中道也。＜云云＞爾者、中道者何義耶。答、中者、實也、正也、又、謂如非空非有義也。」¹²²

（問う、前に今論は二諦を以て宗と為すと言ひ、二諦は即中道なり。＜云々＞爾とは、中道は何の義や。答う、中とは、実なり、正なり、非空非有の義を謂うが如くなり。）

と述べていて、中道とは、実相と正観と言うことであり、また、空と有の二辺に執着せず非空非有のようなことであると強調するのである。

以上に挙げた三つの文章を総合して見ると、珍海においての八不中道は二諦の理であり、実相であり、正観であると言えるであろう。それでは、八不中道は二諦の理であるとするならば、二諦に関する具体的な様態は何であろうか。

¹²¹ 珍海『三論玄疏文義要』『大正蔵』卷七十. p. 230b16-18

¹²² 珍海『三論玄疏文義要』『大正蔵』卷七十. p. 237a17-19

また、実相と正観はどのようなものであろうか。以下、この二点について検討する。

一 二諦について

珍海は『大乘正観略私記』の中に「法門名数」のところにおいて「十番四重二諦」の名目を挙げ、この義は経論により継承し、尋ねるべきことであると強調する¹²³。これについて、『三論玄疏文義要』の中では、次のように述べている。

「問、山門相承、以二諦爲宗。爾者、其二諦者何等耶。答、俗諦眞諦、是名二諦。此亦名爲世諦第一義諦也。問、凡明二諦、有幾種耶。答、總有二種、一者、於二諦。二者、教二諦也。章上卷釋中論、諸佛依二諦、爲衆生說法之文云、所依是於諦、說法是教諦。」¹²⁴

（問う、山門の相承、二諦を以て宗と爲す。爾らば、其の二諦は何等や。答う、俗諦と眞諦、是れを二諦と名づく。此れ亦た名づけて世諦・第一義諦と爲すなり。問う、凡そ二諦を明かすに、幾種有るや。答う、総じて二種有り、一には、於二諦、二には、教二諦なり。『章』上卷に『中論』を釈して諸仏は、二諦に依りて、衆生の爲に法を説くの文に云く「所依は是れ於諦、說法は是れ教諦なり」と。）

つまり、総じていえば、二諦には於二諦と教二諦という二種類がある。於二

¹²³ 珍海の『大乘正観略私記』の「夫無得之得。則名相不壞。無住之住。猶階級宛然。是以諸法群分精苑各異。義用塵算巨細不同。十番四重之二諦。十對四種之二智。五佛性。般若。十種一乘。大乘六義。五種四重淨土。有量無量四諦。有爲無爲般若。空不空二藏。又三假三中。四假四中。及一中一假。圓中圓假。五住二障。二種生死。八識。二空。三性等。五十二位。五忍六度。三種不退。五重並觀。佛果三身。涅槃四德。是等諸經義門。皆依經論並相承義。一一皆應尋之」と述べている。『大正蔵』卷七十・p. 197c8-17 珍海は『大乘正観略私記』の中に「十番四重二諦」の名目だけを挙げ、これに対する詳細な論述は行っていない。これに対して、『三論玄疏文義要』の中では、二諦に関する様態と、正観に対する解釈は詳しく論述している。『大乘正観略私記』は簡略な形式をもって中道の理を述べ、『三論玄疏文義要』は三論宗の名目を挙げる上、珍海自身の考えを詳しく述べているものであると考える。この二つの著作を互いに参照すれば、珍海における三論宗教理思想の完備性が整えるのである。

¹²⁴ 珍海『三論玄疏文義要』『大正蔵』卷七十・p. 238c1-4

諦とは、諸法性空の理を知らない衆生に対して有は真実の理と見なされ、逆に、諸法性空の理が分かる聖人に対するならば、仮有という理は真実の理とするのである。即ち世間の有に執着する人に於いて世俗諦を説き、聖人に於いて第一義諦を説くのである。これは所依であり、「於世間人」と、「於聖人」の二諦である。能依は即ち教二諦であり、仏が説法した内容を指す。これは吉蔵の『二諦義』に説かれた趣旨と一致するのである¹²⁵。また、続いて珍海は教二諦について以下のように述べている。

「問、就教諦中、有幾種耶。答、今大乘宗、總有四重二諦。一者、有名世諦、空名眞諦。＜此對毘曇之事理二諦也＞二者、空與有并爲世諦、非空非有方爲眞諦。＜此對此土成論人空有二諦也＞三者、二不二并爲世諦。非二非不二方名眞諦。＜此對大乘師依他分別、二爲世諦、無生無相、不二眞實爲眞諦＞四者、二不二、非二非不二皆是世諦。言忘慮絶方是眞諦。＜此亦對大乘師三性不二安立諦、名爲俗諦、三無性非安立諦、名眞諦義而明之＞」

126

（問う、教諦の中に就いて、幾種有りや。答う、今大乘の宗、総じて四種の二諦有り。一には、有を世諦と名づけ、空を眞諦と名づく。＜此れ毘曇の事理の二諦に対するなり＞二には、空と有とを並びに世諦と爲し、非空非有は方に眞諦と爲す。＜此れは此の土の成論の人の空有の二諦に対するなり＞三には、二不二是並びに世諦と爲す。非二非不二は方に眞諦と爲す。＜此れ大乘の師の依他分別に対して、二を世諦と爲し、無生無相、不二眞實を眞諦と爲す＞四には、二不二、非二非不二は皆是れ世諦なり。言忘慮絶は方に是れ眞諦なり。＜此れ亦た大乘の師の三性不二の案立諦なるとは名づけて俗諦と爲し、三無性非案立諦なるとは眞諦と名く義に対してこれを明かす＞）

¹²⁵ 吉蔵『二諦義』の中に「一切諸法性空。而世間顛倒謂有。於世間是實。名爲世諦。諸賢聖眞知顛倒性空。於聖人是實。名第一義諦。次云。諸佛依是二諦。爲衆生說法。此則前釋二諦竟。然後明諸佛依是二諦爲衆生說法。故知。二諦是本。說法是末。二諦是所依。說法是能依。依此二諦。爲衆生說法也」とある。
『大正藏』卷四十五. p. 78b18-24

¹²⁶ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十. pp. 238c24-239a2

文中に説いている四重二諦の教義は吉蔵が師法朗の三重二諦の教義を継承した上、第四重を加えて説いたものである¹²⁷。内容を整理すれば以下のようである。

第一重：有——俗諦

空——真諦

第二重：空有——俗諦

非空非有——真諦

第三重：二不二——俗諦

非二非不二——真諦

第四重：前三重二諦——俗諦

言忘（亡）慮絶——真諦

上記中、四重二諦の前三重は毘曇、成実、大乘師に対する批判である。互いの関連は、否定と二重否定ないし四重否定の関係である。有という教により空の理を悟ることは第一重の真俗二諦であり、二諦の基本形態である。しかし、有と説いて空に入るのは、あくまで入るところの空は実際に存在すると思われる人がいるので、その空に対する執着を取り除くため、空と有は並びに俗諦の教とし、非空非有を真諦の理とする。これは即ち第二重の二諦である。更に言えば、空と有は二であり、非空非有は不二である。空と有の二はまだ空或いは有に執着し、二辺に落ちるので、二と不二は共に俗諦とする。空有の二ではなく、非空非有の不二でもない非二非不二は真諦の理である。これは第三重の二諦である。このような批判は吉蔵の『三論玄義』の中で、内法に対する「折毘曇」、「排成実」、「呵大執」という破邪の主旨である¹²⁸。吉蔵において前三重の二諦は毘曇と成実、及び大乘法に執着する人が説いている教法であるため、俗諦と視される。言忘（亡）慮絶は三論宗の立場に立ち説いている真諦とみなされる。珍海の教二諦に対する理解は、吉蔵の四重二諦を基盤として区分すること

¹²⁷ 吉蔵『法華玄論』に「自攝嶺相承、有三種二諦。一、以有爲世諦、空爲真諦。次以空有皆俗、非空非有爲真。三者、二不二爲俗、非二非不二爲真」とある。『大正蔵』卷三十四. p. 369a24-27

¹²⁸ 吉蔵は『三論玄義』の中で「三論所斥略辨四宗。一摧外道、二折毘曇、三排成實、四呵大執」と述べている。『大正蔵』卷四十五. p. 1a16-17

に止まるだけではなく、更に教についての作用と顯理の方法について、また以下のように言うのである。

「若細論之、四重皆有理教。初重有理教者、以有空言教是教也。所詮因縁、空有是理也。又凡轉爲聖、謂由空有之教、其空中、聖人實知性空、亦是理也（中略）故爾准知、言忘慮絶、亦應轉側不定、何定是理耶。問、若爾、四重二諦并開教門、終無理也。答、彌有之。謂第四重眞諦既是理實、而名爲教。故知、前三眞諦、還以理爲教。當知理内之教理者、是因縁教理無的屬也。若得此意、一宗可得。若迷此一門、即一宗全失之。」¹²⁹

（若し細かくこれを論ぜば、四重に皆理教有り。初重に理教有るとは、空有るを以て言教は是れ教なり。所詮の因縁、空有は是れ理なり。又凡轉じて聖と爲り、空有の教に由ると謂い、其の空中に、聖人は実に性空を知り、亦た是れ理なり（中略）故に爾らば准じて知んぬ、言忘慮絶して、亦たまさに轉側して定まらざるべし、何ぞ是れを理と定めんや。問う、若ししからば、四重二諦は並びに教門を開き、終いに理無きなり。答う、^{あまね}彌くこれ有るなり。謂う（ところの）第四重の眞諦は既に是れ理実、名づけて教と爲す。故に知んぬ、前三の眞諦、還って理を以て教と爲す。当に知るべし、理内の教理とは、是れ因縁教理なりの属無きなり。若し此の意を得れば、一宗を得べし。若し此の一門に迷えば、即ち一宗全くこれを失う。）

つまり、珍海は吉蔵のように、前三重の二諦（毘曇と成実、及び大乘法に執着する人が説いている二諦）を批判すると同時に、理と教は四重二諦の各重に存在していることを主張するのである。仏、菩薩は二諦により衆生の根機に赴いて法を説くことは言教ではあるが、目的は眞実の理を顯わすためである。前三重の二諦において、教がある以上、必ず理も存在するのである。ただ空だけ、或いは有だけを説くのは言教であり、言教により解釈した因縁の法は理である。前三重の二諦が第四重の二諦にとって言うならば、理を教として説いたのである。教と理は四重二諦の各重に存在していると考えられる。

¹²⁹ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十. p. 239a4-b2

また、珍海は四重二諦ごとに教と理を具足することを強調する際、以下のよう
に五つの観点をもって示す。

「問、此義猶未解、請悉之。答、此有數意。一、能詮所詮對以論之。能詮爲
教、所詮爲理。二者、體用相對以論之。先依有無修觀、由此方便入不二理（中
略）三者、眞俗相望、以俗爲教、以眞爲理。如教示。凡夫執有、聖人解空。
所化衆生、聞之捨有入空。所入空法即是理也。次說二爲俗、不二爲眞。聞之
入不二理、還以空爲教。如是展轉、以理轉名教。最後言忘慮絕、眞諦中、對
緣施設、義邊爲教。所入正法、超然之境爲理也。若就此文、第四重始有理也。
四者、於一一門中、皆表正法。利根悟解、初門得入理、不待後後。乃至鈍根、
經四門轉入。如是等義門、四重皆有究竟、正法無有淺深。淺深并通四門故也。
五者、若有若無、乃至離言（中略）今言、無淺深者、淺深既是相待緣成。至
窮滿時、其淺既捨、深復何留乎。但是湛然之悟解也（中略）今以此等意、論
四重并有理教。此理教者、是正因緣道理故、并通正法、故并是教諦。故知、
教諦有四重也。」¹³⁰

（問う、此の義未だ猶解せず、これを悉しくするを請う。答う、此れ數意有
り。一には、能詮所詮の對を以てこれを論ず、能詮を教と爲し、所詮を理と
爲す。二には、體用相對を以てこれを論ず。先に有無に依りて觀を修し、此
の方便に由りて不二の理に入る（中略）三には、眞俗相望、俗を以て教と爲
し、眞を以て理と爲す。教に示すが如く。凡夫は有に執し、聖人は空を解す。
所化の衆生、これを聞いて有を捨て空に入る。入る所の空法は即ち是れ理な
り。次に二を説くことを俗と爲し、不二を眞と爲す。これを聞いて不二の理
に入る。還って空を以て教と爲す。かくのごとく展轉して、理を以て轉ずる
を教と名づく。最後に言忘慮絶して、眞諦の中に、縁に対して施設し、義の
邊を教と爲す。入る所の正法は、超然の境を理と爲すなり。若し此の文に就
いて、第四重において始有の理なり。四には、一一の門の中に於いて、皆正
法を表す。利根ならば解して悟り、初門において理に入ることを得、後後を
待たず。乃至鈍根ならば、四門を経て轉じて入る。かくのごとく等の義門は、

¹³⁰ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十. p. 239b3-29

四重皆究竟有り、正法は浅深有ること無し。浅深並びに四門に通ずるが故なり。五には、若しくは有若しくは無、乃至言を離る（中略）今言く、浅深無きとは、浅深は既に是れ相待にして縁以て成ず。窮満の時に至り、其の浅既に捨てられ、深は何ぞ復た留まるや。但だ是れ湛然の悟解なり（中略）今此れ等の意を以て、四重並びに理教有ることを論ず。此の理教とは、是れ正に因縁道理なるが故に、並びに正法に通じ、故に並びに是れ教諦なり。故に知んぬ、教諦は四重有るなり。）

第一意「能詮所詮」において、珍海は能詮と所詮の立場から、能詮は教、所詮は理、教と理を第一重の二諦の有と空に対応させる。

第二意「体用相對」において、珍海は体用相對をもって正觀を修する手段について論じ、体は即ち無（空）、用は即ち有である。俗諦とする方便教をもって正法である非有非空の不二の理の境界に入らせる。有無（空）である俗諦をもって非有非空の真諦を悟らせる。これは四重二諦の第二重の二諦に対応する。

第三意「真俗相望」は前の第一意、第二意に対する総括、後の第四意、第五意のための前提である。珍海はまず真俗相望をもって、俗を教とし、真を理とする。衆生に有教を捨て空理に入らせるのである。これは即ち教・理共に存在する第一重の二諦である。

また、空有の二を俗とし、非空非有の不二を真とする。非空非有の真諦の境界に入るならば、俗諦としての空有の二教が必要である。このように真諦の理を知るため、俗諦の教が必要である。つまり第二重の二諦においても教・理共に存在するのである。

このように第三重、乃至第四重の二諦に至るまで、教をもって理を明かし、理をもって教の名称を得るのである。そこで前三重の二諦は俗諦であり、第四重の二諦は言忘慮絶である超然の理なので、真諦である、この真諦の理を「始有の理」¹³¹と称するのである。

¹³¹ 「始有理」について吉藏は『大乘玄論』卷一において「他家二諦。住有無故名不了。今明。説有欲顯不有。説無欲顯不無。有無顯不有不無。故名了義。他但以有爲世諦。空爲眞諦。今明。若有若空皆是世諦。非空非有始名眞諦。三者空有爲二。非空有爲不二。二與不二皆是世諦。非二非不二名爲眞諦。四者此三種二諦皆是教門。説此三門。爲令悟不三。無所依得始名爲理。」と述べ、「始有理」の觀點を明らかにし

第四意「皆表正理」は、教と理は各重の二諦の中に存在するので、毘曇、成実、及び大乘法に執着する人達も二諦の観点を持っている。しかしながら、これらの人達は各々迷い執着も持っているため、真実の理を知らない。珍海にとって、第四重の二諦に対して第一重の二諦は浅、第一重の二諦に対して第四重の二諦は深であり、利根の人ならば、初門、即ち第一重の二諦において俗を聞いて無所得の正観を体得して、第四重の二諦に説く真諦に入るのである。毘曇、成実、大執、及び三論宗自身の教法は深淺の階級がないのである。相待縁成の関係であり、各重において究極の法があると説いている。

第五意「若有若無、乃至離言」は、実は第四意と同じことを述べている。理を顕わすには深淺の階級がないことを述べている

以上述べたように珍海は五つの観点をもって、四重の二諦の中では各重に教と理が存在することを明らかにした。これは即ち珍海が『大乘正観略私記』の中に説かれた

「若教理俱存、乃是眞無所得也。」

(若し教理俱に存すれば、乃ち是れ眞の無所得なり。)

「又教理俱明者、即正觀學。」

(又教理俱に明ならば、即ち正観の学なり。)

「體用只是理與教也。」

(体用は只だ是れ理と教なるのみ。)

である¹³²。

珍海において、正観の意義は二諦の教義にあると考えられる。教の作用は顕理、理はまた教に対する呼称である。第一重の二諦において俗諦は即ち教、真

た。珍海の「始有理」の結論は恐らく吉蔵の『大乘玄論』の文により成り立ったであろう。

¹³² 珍海『大乘正観略私記』『大正蔵』卷七十. p. 195b22

同書 p. 195c3

同書 p. 198b10

諦は即ち理であるので、すでに教と理は共に存在する。故に珍海は四重の二諦において深淺がなく、利根の人は初門においても正法に入ることができると述べている。このような関係を理解すれば真実の無所得が理解できると主張する。これだけではなく、四重の二諦はまた至極の教説であると珍海が述べている。即ち『大乘正觀略私記』の中に珍海は以下のように説いている。

「一云、非二非不二乃是至道。餘非正至極、不爲至道。二云、非二非不二是四重二諦中第三重眞諦、第四重世諦也。以離言寂滅。乃是第四重眞諦。即爲理也。前三皆是教門。若爾非至道。若以有無爲教、不二爲理、是利根境。此即不二爲理。若望中根、非二非不二爲理。考此意者、但是教理相對爲至道。非必非二非不二爲至道也。」¹³³

（一に云わく、非二非不二乃ち是れ至道なり。余は正しく至極に非ず、至道と爲さず。二に云わく、非二非不二是是れ四重の二諦の中の第三重の眞諦なり、第四重の世諦なり。言を離るるを以て寂滅なり。乃ち是れ第四重の眞諦なり。即ち理と爲すなり。前の三皆是れ教門なり。若し爾らば至道に非ず。若し有無を以て教と爲さば、不二を理と爲す、是れ利根の境なり。此れ即ち不二を理と爲す。若し中根に望まば、非二非不二を理と爲す。此の意を考うるは、但だ是れ教理相對にして至道と爲す。必ず非二非不二是至道と爲すなり。）

上に述べたように、教二諦において更に四種類に分けられ、四重二諦というのである。この四重の二諦は即ち珍海の『大乘正觀略私記』の「法門名数」に説かれた「十番四重二諦」の中の四重二諦を指すのである。

また、「十番二諦」について珍海は『三論玄疏文義要』¹³⁴と『三論名教抄』¹³⁵の

¹³³ 珍海『大乘正觀略私記』『大正藏』卷七十. p. 198b24-c3

¹³⁴ 珍海『三論玄疏文義要』の中に「章中卷云。涅槃聖行品。明十種二諦義。云云。南方本第十二義集名十番二諦。爾者十番二諦者何等耶。答。十番二諦者。一者教二諦。經云。有善方便。隨順衆生。說有二諦。善男子。若隨言說。則有二種。一者世法。二者出世法。云云。二者於二諦。經云。如出世人之所知者。名第一義諦。世人知者。名爲世諦。云云。前明依二諦說令明所依二諦也。三人二諦。有人世諦。無人眞諦。經云。五陰和合。有衆生。名世諦。即陰離陰。無衆生名第一義諦也。此章所引也。四法二諦。無法世諦。有法眞諦。經云。有名無實者。即是世諦。有名有實是第一義諦。云云。此就世諦更分二。涅槃等

中に共に言及し、十番というのは、即ち、

- 一、教二諦——方便により説いた世間法と出世間法の教説である¹³⁶。
- 二、於二諦——世間人の機根に対して説いた世諦と、聖人の機根に対して説いた第一義諦の教法である¹³⁷。
- 三、人二諦——有に執着する人に対して説いた有世諦と、五陰を離れて無生の理が知る人に対して説いた無真諦である¹³⁸。
- 四、法二諦——涅槃は実にあることに対して、地、床、席、杖などの物は実は名前を付けた仮有である真空妙有の教説である¹³⁹。
- 五、事理二諦——我を執着し、五陰、十二處、十八界から解脱できない衆生は世諦であり、苦集滅道の理を悟った人は第一義諦である¹⁴⁰。

物。是有名有實。如地床席杖等物。是有名無實也。五事理二諦。經説。我衆生。陰界入。名世諦。苦集滅道名第一義諦。取意。六如實知不如實知二諦。經説。有五種。世法名句縛法。及執著爲五也。若衆生於此五種心。無顛倒如實而知。名第一義。云云。取意。准知。不如實知是世諦也。七續不續二諦。經説燒壞等。名世諦。無燒壞等。名第一義。章釋云。燒壞不斷爲世諦。知念念滅實無相續。爲第一義。八生死涅槃二諦。經説。有八苦名世諦。無八苦名第一義。取意。九因縁二諦。亦名親疎二諦。經説云。依因父母和合而生。名爲世諦。十二因縁和合生者。名第一義諦。云云。十菩薩聲聞二諦。章云。此則九種二諦義。是前菩薩對聲聞。判二諦義。爲十種二諦義也」とある。『大正藏』卷七十. pp. 239b29-240a3

¹³⁵ 珍海『三論名教抄』の中に「十番二諦義。章中卷云。涅槃聖行品明十種二諦義。云云。南方本第十二卷。義集云十番二諦。十番二諦者。一教二諦。世法於世法爲二諦。二於二諦。世人所知於世人所知爲二諦。三人二諦。有人世諦無人真諦。四法二諦。有法世諦無法真諦。五事理二諦。陰界入世諦。苦集滅真諦。六如實知不如實知二諦。名句縛等五種世法。若如實知名第一義。不如實知是世諦也。七續不續二諦。燒壞不斷爲世諦。念念滅實無相續爲第一義。疏釋云。無常非無常二諦。謂無常爲世諦也。八生死涅槃二諦。有八苦爲世諦。無八苦爲真諦。九因縁二諦。父母和合生爲世諦。十二因縁生名第一義。十菩薩聲聞二諦。」とある。『大正藏』卷七十. p. 695a3-12

¹³⁶ 南本『大般涅槃經』の中に「善男子。世諦者即第一義諦。世尊。若爾者則無二諦。佛言。善男子。有善方便隨順衆生説有二諦。善男子。若隨言説則有二種。一者世法。二者出世法」とある。『大正藏』卷十二. p. 684c13-17

¹³⁷ 南本『大般涅槃經』の中に「善男子。如出世人之所知者。名第一義諦。世人知者。名爲世諦」とある。『大正藏』卷十二. p. 684c17-18

¹³⁸ 南本『大般涅槃經』の中に「善男子。五陰和合稱言某甲。凡夫衆生隨其所稱。是名世諦。解陰無有某甲名字。離陰亦無某甲名字。出世之人如其性相而能知之。名第一義諦」とある。『大正藏』卷十二. p. 684c18-22

¹³⁹ 南本『大般涅槃經』の中に「復次善男子。或復有法有名有實。或復有法有名無實。善男子。有名無實者即是世諦。有名有實者是第一義諦」とある。『大正藏』卷十二. p. 684c22-25

¹⁴⁰ 南本『大般涅槃經』の中に「善男子。如我衆生。壽命知見。養育丈夫。作者受者。熱時之炎。乾闥婆城。龜毛兎角。旋火之輪。諸陰界入是名世諦。苦集滅道名第一義諦」とある。『大正藏』卷十二. p. 684c25-28

- 六、如実知不如実知二諦——世諦の「世」に対して五種類の範囲を規定し、この五種類の法を如実に知る人は第一義諦であり、知ることができない人は世諦である。五種類の法はつまり、一、名世。二、句世。三、縛世。四、法世。五、執着世である¹⁴¹。
- 七、続不続二諦——生と無生とも呼ばれる。生法を世諦とし、有為法を離れて一切諸法は相続なし、決定がないことは第一義諦である¹⁴²。
- 八、生死涅槃二諦——四苦八苦の相から離れない人は世諦であり、逆とするならば第一義諦である¹⁴³。
- 九、因縁二諦——たとえ一つの主体としても、異なる因縁により相違する状態が現れる。これに例えば、ある人が料理を作る時には料理人といい、教室の中で授業をする時には先生ということと同じである。法に於いては、父母和合により生まれることは世諦であり、十二因縁により生まれることは第一義諦である¹⁴⁴。
- 十、菩薩声聞二諦——声聞は世諦であり、菩薩は第一義諦である。菩薩が声聞の人に対して二諦義を述べているのである¹⁴⁵。

ということである。

¹⁴¹ 南本『大般涅槃經』の中に「善男子。世法有五種。一者名世。二者句世。三者縛世。四者法世。五者執著世。善男子。云何名世。男女瓶衣車乘屋舍。如是等物是名名世。云何句世。四句一偈。如是等偈是名句世。云何縛世。捲合繫結束縛合掌。是名縛世。云何法世。如鳴椎集僧嚴鼓誡兵吹貝知時。是名法世。云何執著世。如望遠人有染衣者。生想執著言是沙門非婆羅門。見有結繩橫佩身上便生念言。是婆羅門非沙門也。是名執著世。善男子。如是名爲五種世法。善男子。若有衆生於如是等五種世法。心無顛倒如實而知。是名第一義諦」とある。『大正藏』卷十二. pp. 684c28-685a11

¹⁴² 南本『大般涅槃經』の中に「復次善男子。若燒若割若死若壞。是名世諦。無燒無割無死無壞。是名第一義諦」とある。『大正藏』卷十二. p. 685a11-13

¹⁴³ 南本『大般涅槃經』の中に「復次善男子。有八苦相名爲世諦。無生無老無病無死。無愛別離。無怨憎會。無求不得。無五盛陰。是名第一義諦」とある。『大正藏』卷十二. p. 685a13-16

¹⁴⁴ 南本『大般涅槃經』の中に「復次善男子。譬如一人多有所能。若其走時則名走者。若收刈時復名刈者。或作飲食名作食者。若治材木則名工匠。鍛金銀時言金銀師。如是一人有多名字。法亦如是。其實是一而有多名。依因父母和合而生。名爲世諦。十二因縁和合生者。名第一義諦」とある。『大正藏』卷十二. p. 685a16-22

¹⁴⁵ 吉蔵『二諦義』の中に「此即九種二諦義。足前菩薩對聲聞判二諦義。爲十種二諦也」とある。『大正藏』卷四十五. p. 104b14-16

十種の二諦は、吉蔵が『二諦義』において『大般涅槃經』の「聖行品」に説かれた前九種の二諦を、更に第十種の菩薩声聞二諦を加えて成り立ったものである。構成内容から見ると、十種の二諦は世諦の範囲、及び第一義諦の形態を論述し、前述した四重の二諦より詳細なる分析である。

この十種の二諦に対して、珍海は『三論名教抄』の中において、更に六種の二諦を挙げたのである¹⁴⁶。内容は即ち、

「涅槃疏第十一卷爲六重二諦。一、人二諦。此當章初三、今合爲一。二、名實二諦。當章第四第五。三、著不著二諦。當章第六。四、無常非無常二諦。當章第七。五、有八苦無八苦二諦。當章第八。六、親疎二諦。當章第九。」¹⁴⁷

(『涅槃疏』第十一卷に六重二諦と爲す。一、人二諦。此れ當に『章』の初三なり、今合して一と爲す。二、名実二諦。當に『章』の第四と第五なり。三、著不著二諦。當に『章』の第六なり。四、無常非無常二諦。當に『章』の第七なり。五、有八苦無八苦二諦。當に『章』の第八なり。六、親疎二諦。當に『章』の第九なり。)

である。この六種二諦の出典は吉蔵の『大般涅槃經疏』であり、その相違が分かりやすいため、内容を以下のように示す。

『二諦義』十種二諦¹⁴⁸

『大般涅槃經疏』六種二諦

¹⁴⁶ 六種の二諦について、珍海の『三論玄疏文義要』の中にも見られるが、内容は五種まで引用している。全部は六種であるため、この義において『三論玄疏文義要』の内容を参照しない。

¹⁴⁷ 珍海『三論名教抄』『大正藏』卷七十. p. 695a13-16

¹⁴⁸ 吉蔵が『二諦義』の中に十種二諦について次のように述べている。「而今有二諦者。有二義。一者隨順衆生故說有二諦。即教諦。二者於衆生有二諦。即於諦也。然於教二諦。他家所無。唯山門相承有此義也。問。此經何意明於教二諦耶。解云。爲答文殊與大衆疑。謂唯一諦。正作無二諦難。爲是義故。佛開於教二諦答之。明善方便隨順衆生說有二諦。何意無二諦耶。次云。世人知者名世諦。出世人知者名第一義諦。何意無二諦。前隨衆生說。即二教諦。世出世人知。即二於諦。爲釋無二諦疑故。明於教二種二諦也。問。經明於教二諦可如此。論何意明於教二諦耶。解云。百論正爲諸外道不識不聞如來二諦。所謂迦毘羅論等。昔所不聞。昔所不識。爲其不識二諦。所以論主。示其二諦也。中論明。二諦者通爲一切。但正爲內學不識大乘二諦。如薩衛等五百論師。不識諸法性空二諦。此則與百論校一節。有小乘二諦大乘二諦。

- 一、教二諦
- 二、於二諦
- 三、人二諦……………一、人二諦
- 四、法二諦……………二、名實二諦
- 五、事理二諦
- 六、如實知不如實知二諦……………三、著不著二諦
- 七、續不續二諦……………四、無常非無常二諦
- 八、生死涅槃二諦……………五、有八苦無八苦二諦
- 九、因緣二諦……………六、親疎二諦

百論緣皆不識二諦。爲彼不識故。提婆示大乘二諦。此即簡異數論。數論亦破外道。百論亦破外道。何異。解云。大異。數論破外道示小乘法。故是小乘論。百論破外道示大乘二諦法。故是大乘論也。若是中論。緣已學佛小乘二諦。不識大乘本性空二諦。爲是故。龍樹菩薩。明大乘本性空二諦也。今此經竝異兩論。何者。文殊與大眾。已解二諦。但疑無二諦故。佛明有二諦也。善男子。五陰和合有衆生名世諦。即陰離陰。無衆生名第一義諦。此下更就異義。約法廣明二諦義。不同前明教二諦。次明於二諦。世人知者名世諦。世出人知者名第一義諦。今第三就我無我明二諦。與前異。前明二諦。通直明世人知名世諦。世出人知名第一義諦。不判有人無人。有法無法。今的就有人無人明二諦也。善男子。或有法有名有實。第四二諦。前就人明二諦。今就法明二諦。前就眞俗明二諦。今就世諦中更開二諦。前就眞俗明二諦者。我是世諦。無我第一義諦。大論云。人等世界故有。第一義諦則無也。今就世諦中自明二諦者。世諦者。世諦法中。自有有名有實。自有有名無實。有名有實爲第一義諦。有名無實爲世諦。如火水等物。有名有實。有實者有實義。爲實有義。應名有名。表義故爲第一義諦。有名無實者。如蛇床虎杖。大論云。草名朱利。此云賊。何其曾作賊。但有假名。無有實義應。名以無實義故爲世諦。此則就於虛實判二諦也。善男子。如我衆生第五二諦義。此就事理明二諦義。束前有名有實有名無實。竝爲世諦。苦集滅道爲第一義諦。何者。陰界入等有有名有實。龜毛等即有名無實。此之二種。竝爲事法故爲世諦。苦集滅道是理法故。爲第一義諦。善男子。世法有五種者。第六就如實知不如實知判二諦。不如實知五種世法。則名世諦。如實知五種世法。無有顛倒爲第一義諦。五種世法者。一名世。二句世。三縛世。四法世。五執著。如經文釋。云云。善男子。若燒壞者。第七就續不續明二諦。若謂燒壞等法相續不斷名世諦。若知燒壞等法念念生滅實無相續。爲第一義諦。此異成論假實義。假名不滅。實法則滅。今明。若言諸法相續不斷爲世諦。若諸法實不續爲第一義諦。如肇師物不遷論云。旋嵐偃嶽而常靜。江河競注而不流。野馬飄鼓而不動。日月歷天而不周。即其義也。善男子。有八苦者。即第八就生死涅槃明二諦。有八苦生死爲世諦。無八苦生死爲第一義諦。然大判。生死爲世諦。涅槃爲第一義諦。今言。無八苦不全是涅槃。何者。涅槃有有所無無所有義。無八苦生死等。是涅槃有所無義。故經云。空者二十五有。不空者大般涅槃。今無八苦生死。即涅槃有所無義也。涅槃有所無。既無生死。涅槃無所有。亦無生死。今無生死。具含涅槃。故言生死爲世諦。涅槃爲第一義諦也。次文云。依因父母而生名世諦。十二因緣生名第一義諦。此則第九就因緣判二諦。亦是親疎判二諦。亦是僂妙判二諦。因緣者。父母和合則緣。十二因緣即是因。因親緣疎也。又父母生僂。十二因緣生妙。衆生但知僂不知妙。故父母生爲世諦。十二因緣生爲第一義諦。此即九種二諦義。足前菩薩對聲聞判二諦義。爲十種二諦也」『大正藏』卷四十五. pp. 103b24-104b16

十、菩薩声聞二諦

文中に述べている『章』は吉蔵の『二諦義（章）』を指すのである。もし珍海が引用している『大般涅槃經疏』は吉蔵の著作であるとするならば、同じ人が同じ『大般涅槃經』に説かれた二諦義について解釈を行ったが、異なる著作において異なる結果を現わすことは興味深い。このことについて、珍海は『三論玄疏文義要』の第三巻において、

「疏意改章釋、對文可知之。」¹⁴⁹

（『疏』の意は『章』の釈を改め、文に対してこれを知るべし。）

と、『大般涅槃經疏』をもって『二諦義』に説かれた内容を改めて解釈したと述べている。吉蔵の『大般涅槃經疏』の著作年代について、平井俊榮氏は「吉蔵著『大般涅槃經疏』逸文の研究（上）」において、「晩年の長安時代に再治した『中觀論疏』にこれが引用され、同じく『涅槃經遊意』の告白から推しても、初期の作品であることは間違いなかろう」と指摘された¹⁵⁰。もし、珍海の『三論玄疏文義要』の内容によれば、『二諦義』の著作年代は『大般涅槃經疏』より前であった可能性がある。

以上述べたように、珍海は二諦をもって三論宗の宗旨とする。彼が二諦義を解釈する時、吉蔵の三論宗思想を受け入れ、於・教という二諦において教二諦を能依とし、更に教二諦において四重二諦の義を明らかにした。そして、前三重の二諦は毘曇と成実、及び大乘法に執着する人が説いている教法であるため、前三重の二諦を俗諦とし、言忘慮絶は三論宗の立場に立って説く教法であるため、真諦とする。なお、珍海が仏菩薩は二諦により衆生の根機に赴いて法を説くことは言教ではあるが、目的は真実の理を顕わすためであるといい、前三重の二諦において、教がある以上、必ず理も存在するという。前三重の二諦が第四重の二諦にとって言うならば、理を教として説き、理と教は四重二諦の各重

¹⁴⁹ 珍海『三論玄疏文義要』『大正蔵』卷七十. p. 240b18

¹⁵⁰ 平井俊榮「吉蔵著『大般涅槃經疏』逸文の研究（上）」『南都仏教』（27）. p. 60

に存在していることを主張することが分かった。

また、珍海は更に十番の二諦を加えて、「十番四重二諦」と呼んでおり、四重二諦でも十種二諦でも最初は教を基本とし、言教によって理を悟ることを述べている。

二 中道について

中道について、珍海が「二諦即中道」とであると定義するのは前に挙げたようである。

中道に対する定義は様々な説があり、平井俊榮氏は『中国般若思想史研究—吉蔵と三論学派—』において、中道は仏性の正因と指摘され¹⁵¹、寥明活氏は『嘉祥吉蔵学説』において、中道は即ち無得の正観であると見なされ¹⁵²、楊惠南氏は『吉蔵』において、中道は三論宗におけるの本体であると指摘された¹⁵³。各異なる立場から、中道に対する定義は相違するが、いずれにしても、三論宗の立場に立ち、吉蔵における中道の義を論述するのである。なお、吉蔵自身は『三論玄義』の中において、中道の中について以下のように述べている。

「問、中有幾種。答、既稱爲中、則非多非一。隨義對緣、得說多一。所言一中者、一道清淨、更無二道。一道者即一中道也。所言二中者、則約二諦辨中、謂世諦中、眞諦中。以世諦不偏故名爲中、眞諦不偏名爲眞諦中。所言三中者、二諦中、及非眞非俗中。所言四中者、謂對偏中、盡偏中、絕待中、成假中也。」¹⁵⁴

（問う、中に幾種有りや。答う、既に称して中と為せば、則ち多に非ず一に非ず。義に随い縁に対し、多と一を説くことを得。言う所の一中とは、一道清淨、更に二道無し。一道は即ち一中道なり。言う所の二中とは、則ち二諦に約して中を辨ず、世諦中、眞諦中と謂うなり。世諦は偏らざるを以ての故に名づけて中と為し、眞諦は偏らざるを名づけて眞諦中と為す。

¹⁵¹ 平井俊榮『中国般若思想史研究—吉蔵と三論学派—』. p. 627. 春秋社. 1976

¹⁵² 寥明活『嘉祥吉蔵学説』. p. 173. 学生書局. 1985

¹⁵³ 楊惠南『吉蔵』. p. 173-174. 東大図書公司. 1989

¹⁵⁴ 吉蔵『三論玄義』『大正蔵』卷四十五. p. 14b15-22

言う所の三中とは、二諦中、及び非真非俗中なり。言う所の四中とは、対偏中、尽偏中、絶待中、成假中と謂うなり。)

吉蔵は中を四種類に分け、究極した一道清浄¹⁵⁵を一中道とした。即ち第一種の中道である。言教に属する真俗二諦を二中とし、二諦は本に二辺に偏らないので、世諦をもって真諦の理を解釈したならば、世諦中といい、真諦をもって世諦の理を解釈したならば、真諦中と言う。即ち第二種の中道である。更に、言教の真俗二諦、及び入理の非真非俗の二諦を三中とし、即ち第三種の中道である。第四種の中道は対偏中、尽偏中、絶对中、成仮中という四つの方面を含み、断常の二見に執着する大乘と小乗との人々に対して対偏中を説教するのである。また、対偏中に基づき、断常の二見を取り消すことを尽偏中というのである。断常の二見はすでになくなるため、二見に対して説かれた中道もなくなり、非中非偏のことを強いて中道とし、絶对中というのである。また、非有非無の中道の理を解釈するために、仮に存在した有と無を説くことは成仮中というのである¹⁵⁶。

上記のように、吉蔵中道の定義を明瞭にした上で、更に繰り返して前述した「二諦即中道」という定義を見てみると、珍海が無執着の清浄道を実に存在する唯一の道とし、真俗二諦は二辺に偏らないので、正道であるとして理解したことが窺える¹⁵⁷。

また、中道と二諦との関係について、珍海は『三論玄疏文義要』第三卷の中に、

¹⁵⁵ 韓廷傑氏の解釈によれば、一道清浄は唯一の中道であり、全ての邪見からの汚れはないということである。『三論玄義校釈』, p. 261. 中華書局. 1991

¹⁵⁶ 吉蔵は『三論玄義』の中に「對偏中者。對大小學人斷常偏病。是故說對偏中也。盡偏中者。大小學人有於斷常偏病則不成中。偏病若盡則名為中。是故經云。衆生起見凡有二種。一斷二常。如是二見不名中道。無常無斷乃名中道。故名盡偏中也。絶待中者。本對偏病是故有中。偏病既除中亦不立。非中非偏。爲出處衆生強名為中。謂絶待中。故此論云。若無有始終。中當云何有。經亦云。遠離二邊不著中道。即其事也。成假中者。有無爲假。非有非無爲中。由非有非無故說有無。如此之中爲成於假。謂成假中也」と述べている。『大正藏』卷四十五. p. 14b22-c5

¹⁵⁷ 珍海は『三論玄疏文義要』第二卷において「問。前言今論以二諦爲宗。二諦即中道也。云云。爾者中道者何義耶。答。中者。實也。正也」と、中道について述べている。『大正藏』卷七十. p. 237a17-19

「問、雖言一道、不言八不、何引爲證耶。答、八不是中道、以中道無二故、名一道也。問、八不者、唯是中道歟。答、正是中道、傍是空有假名也。故大乘玄云、第四門、故知、具含中假、而中爲正宗、二諦爲傍¹⁵⁸文。」¹⁵⁹

（問う、一道と言ひ、八不と言わざると雖も、何を引き證と爲や。答う、八不は是れ中道、中道無にを以ての故に、名づけて一道なり。問う、八不とは、唯だ是れ中道や。答う、正に是れ中道、傍に是れ空有の假名なり。故に『大乘玄』に云わく「第四門、故に知んぬ、具に中假を含み、而も中を正宗と爲し、二諦を傍文と爲す。）」

と述べている。八不は即ち不生不滅、不常不斷、不一不異、不来不出ということである。生滅、常断、一異、来出はいずれも二辺であり、偏病に属するのである。二辺の偏病を説くことによって、不生不滅、不常不斷、不一不異、不来不出の中道の理を顕わすため、この中道の理は即ち究極の一道である。なお、八不の正理は中道であり、傍文は真俗の二諦であると珍海がこのように強調する。このことから、珍海が『大乘正觀略私記』の中に、八不を三論宗の根本としたであろうと考える。

八不は三論宗の根本として、二諦と中道との義を包摂する。珍海は更に二諦と中道との位置づけについて、二諦を教門とし、中道を理法とする。つまり、

「八不具含中假、而中爲正宗、二諦爲傍。云云。既文云、具中假、何以中爲正宗耶。又、中之與之假、并於二諦論之。何不言中爲正、假爲傍、而以二諦對中耶。答、今所明中、遣假爲中、即以二諦爲假。故以二諦中、直名中、以二諦假、獨名二諦也。而言以假爲傍、以中爲正者、論明中故、論名中論。以中爲正宗故、顯標一部故。而言二諦爲宗者、明二諦之中、故耳又

¹⁵⁸ 『大正藏』テキストでは「二諦文」であるが、欄外注記に「二諦爲傍文」とする。また、『大乘玄論』第二卷を調べて見ると、「第四雜問難門」において「又四諦品云。諸法雖無生而有二諦也。故知。具含中假。而中爲正宗。二諦爲傍」と述べている。『大正藏』卷四十五. p. 30c6-8 意味上では「二諦爲傍文」のほうが通じやすいので、今改めた。

¹⁵⁹ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十. p. 251a25-b1

可云、假是教門、中是理法。故約所歸深義、以中爲正也。」¹⁶⁰

（八不は具に中假を含み、而も中を正宗と為し、二諦を傍と為す。云々。既に文に云う、中假を具し、何を以て中を正宗と為すや。又、中と假、並びに二諦に於いてこれを論ず。何ぞ中を正と為し、假を傍と為すことを言わず、而も二諦を以て中に対するや。答う、今明かす所の中、假を遣わして中と為し、即ち二諦を以て假と為す。故に二諦中を以て、直ちに中と名づき、二諦假を以て、独りに二諦と名づくなり。而も假を以て傍と為し、中を以て正と為すと言うは、論は中を明かすの故、論を中論と名づく。中を以て正宗と為すの故、故に一部を顯標す。而も二諦を宗と為すと言うは、二諦の中を明かし、故のみ、假は是れ教門、中は是れ理法と言うべき。故に帰る所の深義に約して、中を以て正と為すなり。）

である。文中に八不は具に中仮の義があると述べており、その中はつまり中道の義を指し、仮は即ち仮に存在している真俗二諦を指す。中道を三論宗の正義とすることは、二諦の義を借りて中道の義を顯わすことである。換言すれば、二諦は中道を知るための手段であるとも言える。その故、二諦を傍、中道を正とするのである。また、『中論』の名称と論義から言えば、論は中論と呼ばれており、その義も中義を明らかにするので、中道を正とするのである。

総合して見れば、中道の義は邪見に執着せず、仮有の二辺に落ちないということである。この義は八不に基づいて成り立ち、三論宗の正義であるとも言えるのである。このことから、珍海は『三論玄疏文義要』の第三巻において、以下のように中道を定義する。

「今案、中名唯是對邊之稱也。然更以二義相成之。謂正義、實義也。論述云、對邊者、直是中義也。對邪正義也。實義者、對虛義也。然對邪爲正、對虛爲實。此之二義、并離邊故、既爲中義也。」¹⁶¹

（今案ずるに、中の名は唯だ是れ辺に対してこれを称するなり。然るに更

¹⁶⁰ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十. p. 251c4-16

¹⁶¹ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十. p. 254b2-6

に二義を以てこれを相成す。正義、実義と謂うなり。論迹に云わく「辺に対するは、直ちに是れ中義なり。邪に対する正義なり。実義とは、虚義に対するなり」と。然るに邪に対することを正と為し、虚に対することを実と為す。此の二義、並びに辺を離れるが故に、既に中義と為すなり。）

珍海においての中義は邪見と虚有に対して顕わしたものである。このような観点は吉蔵の三論宗思想の継承であると考えられる¹⁶²。

八不中道を解釈するもう一つ重要な名目は三種方言である。三種方言は吉蔵が師である法朗の教説を受け、『中観論疏』の中に説かれた八不中道に対する解釈である¹⁶³。珍海は『三論玄疏文義要』の第三巻の中に、法朗によって『中論』の八不偈頌に対する解釈を挙げ、この「方言」とは、言葉を整えるための方軌であると述べている¹⁶⁴。つまり、『中論』の八不偈頌に対する解釈として、三種方言は正しい基準であると言えるのである。

第一種の方言は¹⁶⁵、『中論』に説かれる八不の偈頌をもって、生滅、常断、一

¹⁶² 吉蔵は『大乘玄論』の第五巻において、中義について次のように述べている。「然釋中有三種。一者對偏。二者對邪。三者實義釋中。只就此中字則復有三義。雖復三義。不妨一意。雖復一意。三義不失。所以然者。只由偏故所以邪。邪故所以不正。不正故所以不中。不中故所以不實。不實故。所以是虛。今不偏故所以不邪。不邪故所以正。正故所以中。中故所以實。實故所以不虛。雖復三義。不妨一意。雖復一意。三義不失也。問偏與邪若爲異。無差別論。偏故所以邪。邪故所以偏。有差別論。中論則對偏說中。百論對邪說中。何故爾。偏是偏錯。稟佛教生錯解。所以名偏。是故中論。對偏說中。邪是自樹。外道橫生。獲不稟佛教。是故名邪。所以百論對邪說中。過此二階。所以名實。何故爾。對偏說中。偏去中亦盡。對邪說中。邪破中亦除。不偏不中不邪不正。過此二階。所以名實也。即是實義釋中了」『大正藏』卷四十五. p. 75b16-c3 吉蔵が中を對偏、對邪、実義という三義に分けられ、二辺に偏らないが故に邪がなし、邪がないが故に正とするのである。また、正は不偏であるが故に中道とするのである。この不偏不邪の中は実であると説いている。珍海は正しくこの思想を受け、正と実とを中義としたであろう。

¹⁶³ 吉蔵は『中観論疏』の中に「自攝嶺興皇。隨經傍論破病顯道。釋此八不變文。易體方言甚多。今略撰始終。以二條解釋。一者就初牒八不略釋解之。後重牒八不廣料簡也。就初牒八不述師三種方言」と述べている。『大正藏』卷四十二. p. 10c3-7

¹⁶⁴ 珍海『三論玄疏文義要』「方言者。置言之方軌而已。此謂興皇和尚釋中論八不之辭也」『大正藏』卷七十. p. 245b14-15

¹⁶⁵ 吉蔵は『中観論疏』の中に「第一云。所以牒八不在初者。爲欲洗淨一切有所得心。所以然者。有所得之徒所行所學。無不墮此八計之中。如小乘人謂有解之可生有惑之可滅。生死無常爲斷。佛果凝然是常。眞諦無差別故一。俗諦方有差別不同故異。衆生從無明地流轉故來。反本還原故出。今二十七品橫破八迷。豎窮五句。以求彼生滅不得。故云不生不滅。生滅既去不生不滅。亦生滅。亦不生滅。非生滅。非不生滅五句自崩。是故論末偈云。一切法空。故世間常等見。何處於何時。誰起是諸見。次偈推功歸佛云。瞿曇

異、来出という八計に堕ちる有所得の心を洗うために説いた三種の中道である。

即ち、仮の生は生ではなく、不生でもない。これは世諦中道である。

仮の不生は不生ではなく、非不生でもない。これは真諦中道である。

非生滅、非無生滅は二諦合明中道である。

第二種の方言は¹⁶⁶、上の第一種の方言に三種の中道を明らかにすることに対し、同じ八不の偈頌をもって、更に三種の中道を論述するのである。

即ち、仮の生は不生であり、仮の滅は不滅である。不生不滅は世諦中道である。

世諦である仮の生をもって真諦である仮の不生を明らかにし、世諦である仮の滅をもって真諦である仮の不滅を明らかにする。非不生と非不滅は真諦中道である。

非生滅、非無生滅は二諦合明中道である。

第三種の方言は¹⁶⁷、真諦の不生は世諦の生に対する説くものであるので、相待

大聖主憐愍說是法悉斷一切見。我今稽首禮。故此論一部橫破八迷。豎窮五句洗顛倒之病。令畢竟無遺。即是中實。故云不生不滅乃至不常不斷也。然非生非不生既是中道。而生而不生即是假名。此假生假不生即是二諦。故以無生滅。生滅以爲世諦。以生滅無生滅爲第一義諦。然假生不可言生不可言不生。即是世諦中道。假不生不可言不生不可言非不生。名爲眞諦中道。此是二諦各論中道。然世諦生滅是無生滅生滅。第一義無生滅是生滅無生滅。然無生滅生滅。豈是生滅。生滅無生滅。豈是無生滅。故非生滅非無生滅。名二諦合明中道也」と説いている。『大正藏』卷四十二. pp. 10c7-11a2

¹⁶⁶ 吉蔵は『中觀論疏』の中に「師又一時方言云。所以就八不明三種中道者。凡有三義。一者爲顯如來從得道夜至涅槃夜常說中道。中道雖復無窮略明三種。則該羅一切故就此偈辨於三中。總申佛一切教。二者此論既稱中論。故就八不明於中道。中道雖多不出三種。故就此偈辨於三中。三者爲學佛教人作三中不成故墮在偏病。今對彼中義不成欲成中義故辨三種中也（中略）今明無有可有以空故有。則無生可生亦無滅可滅。無生可生由滅故生。無滅可滅由生故滅。由滅故生是生滅。由生故滅滅是生滅。生是滅生不自生。滅是生滅不自滅。生非自生但世諦故假說生。滅非自滅但世諦故假說滅。假生不生假滅不滅。不生不滅名世諦中道。對世諦生滅明眞諦不生滅。以空有爲世諦世諦假生假滅。有空爲眞諦眞諦不生不滅。此不生不滅非不自生不滅。待世諦假生明眞諦假不生。待世諦假滅明眞諦假不滅。非不生非不滅爲眞諦中道。二諦合明中道者無生滅生滅爲世諦。生滅無生滅爲眞諦。無生滅生滅。豈是生滅。生滅無生滅。豈是無生滅。故非生滅非無生滅名二諦合明中道」と説いている。『大正藏』卷四十二. p. 11a2-b20

¹⁶⁷ 吉蔵は『中觀論疏』の中に「師又一時方言云。世諦即假生假滅。假生不生。假滅不滅。不生不滅爲世諦中道。非不生非不滅爲眞諦中道。二諦合明中道者。非生滅非不生滅。則是合明中道也。問此與上何異耶。答此有二意。一者則世諦生是不生。如色即是空。故不生即是世諦也。眞諦亦不生者此則明相因義。因世諦生故明眞諦不生。云此是師正意也。二者欲示階漸明義者。世諦中不生不滅。即是眞諦之假。非是破性明中。乃明世諦假生雖生不起。世諦假滅雖滅不失。故生滅宛然而未曾生滅。故世諦之中即是眞諦之假。眞諦假不生滅此是生滅無生滅。故不生不滅宛然而未曾無生無滅。故是二諦合明雙泯二諦」と説いている。『大正藏』卷四十二. pp. 11c21-12a6

の立場から、これを相因義とする。世帯である中道は真諦の仮生であり、真諦である仮の不生滅はまた生滅無生滅であることを階漸義とする。この相因義と階漸義により、更に三種の中道を説くのである。

即ち、仮の生は不生であり、仮の滅は不滅である。仮生仮滅、不生不滅は世諦中道である。

非不生、非不滅は真諦の中道である。

非生滅、非不生滅は二諦合明中道である。

上に述べたように、三種方言の中心は三種の中道である。三種の中道は三種の方言の毎種のごとに貫き、三論宗における重要な名目といえるのである。ところが、三種の方言は日本において極めて重視して論究されたが、中国ではそれほど重視しなかったようである。このことについて、伊藤隆壽氏が『三論宗の基本的研究』において「三種の方言は三論教学の基本思想を示すものとして伝承され、説かれたものであり重要な意味を持つが、これを重視して「方言義」として単独に取り上げて論究したのは日本の三論宗においてである」¹⁶⁸と指摘された。

珍海は三種方言を単独に論究しなかったが、『大乘正観略私記』の中に、前二種の方言は破病であり、後の一種の方言は顕道である。三種方言により破邪顕正をすると述べている¹⁶⁹。「破性」、「破仮執」、「顕道」は確実に三種方言の主旨であり、この三つの主旨と八不偈頌と共に、有所得の八計と生滅、不生不滅、亦生滅、亦不生滅、非生滅非不生滅という五句を破折するのである。つまり、『中観論疏』の中に説かれた「横破八迷、豎破五句」¹⁷⁰である。

以上述べたように、珍海における中道は吉蔵の『三論玄義』に説かれた一道清浄の中道、世諦中真諦中の中道、及び非真非俗の中道という三種中道の義を受け入れ、八不の正理は中道であり、傍文は真俗の二諦であると言える。更に言えば、八不は三論宗の根本として、二諦と中道の義を包摂し、二諦を教門とし、中道を理法とするのである。中道の理は仮有の二辺に落ちないため、三論

¹⁶⁸ 伊藤隆壽『三論宗の基本的研究』大蔵出版、2018

¹⁶⁹ 珍海は『大乘正観略私記』の中に「又解八不有三種方言。前二依破病。後一是顕道」と述べている。『大正蔵』卷七十、p. 196c25-26

¹⁷⁰ 吉蔵『中観論疏』『大正蔵』卷四十二、p. 10c13-14

宗の正義であるという。

また、珍海は法朗と吉蔵に説かれた三種方言の義を基準として中道の義を解釈し、前二種の方言は破病であり、後の一種の方言は顕道であるという。三種方言により「破性」、「破仮執」、「顕道」をして、方言義は三論宗の宗義を整える方軌と見された。

三 正観について

珍海が『大乘正観略私記』の「第一大意門」の冒頭において「中道正観の大意は如何」¹⁷¹との質問を設け、この質問をもって「大乘正観」という題名と対応させている。そこで、答えとして珍海はまず『浄名玄論』の文を挙げ、また次のように敷衍している、

「言玄事者、即理事也。諸法相狀、彼此各異故名爲事。理實希妙。言亡慮絶假與玄稱。(中略)又、事別法正者、亦是中道故。由此應知。玄事無二。」

172

(玄・事と言うは、即ち理・事なり。諸法の相狀、彼此各々異なるが故に名づけて事と為す。理は実に希妙なり。言亡慮絶にして仮に玄の称を與う。(中略)又、事は別法にして正なるとは、亦是れ中道なるが故なり。此に由りまさに知るべし。玄・事は無二なることを。)

文中に説いている「玄・事」と「理・事」は、実は「理・教」、「体・用」、「本・末」の概念と同じであり、同じ相対的關係を表す¹⁷³。三論宗の場合には真俗の二諦を衆生のために説いた言教とするのである。この真諦の概念が玄、理、体、本によって表され、俗諦の概念が事、教、用、末によって表される。衆生に対して俗諦を説く目的は、実は真諦を把握させようとするのである。中道不二の

¹⁷¹ 珍海『大乘正観略私記』『大正蔵』卷七十. p. 195a10

¹⁷² 珍海『大乘正観略私記』『大正蔵』卷七十. p. 195a14-19

¹⁷³ 吉蔵は『二諦義』の中に「次説二悟不二、此二諦並得、何者、因二悟不二、二即是理教、不二即是教理、二即中假、不二即假中、二即體用、不二即用體。故此二諦是得也」と述べている。『大正蔵』卷四十五. p. 82c3-6

立場から見れば、真諦と俗諦は相対して成立し、真諦によって俗諦を表し、俗諦によって真諦を表す関係であり、珍海がこのような相対相即の関係を「教と理を俱に明かすは、即ち正觀の学なり」¹⁷⁴と解釈する。つまり、教と理とを同時に空觀の立場で中道不二を觀得すること、それこそが正觀の学である。これは珍海が『大乘正觀略私記』の中で示した中道不二の理に対する最初の解釈である。

また、珍海は『三論玄疏文義要』の第三卷において、

「互就空有二諦、亦攝佛果也。問、有無是教、教唯爲衆生故、二諦章中卷云、佛話唯爲衆生。＜取意＞故知、佛果但是不二中道、第三諦攝。設言空有者、爲物假説理、實出有無二諦也。答、章云、適縁具攝盡不盡。＜云云＞故就隨縁論攝、甚順章意也。」¹⁷⁵

（互いに空有二諦に就いて、亦た仏果を摂すなり。問う、有無は是れ教なり、教は唯だ衆生の為が故、『二諦章』中卷に云く「仏話は唯だ衆生の為なり」と。＜取意＞故に知んぬ、仏果は但だ是れ不二中道、第三諦に摂すなり。設け空有と言うは、物の為に理を仮説し、実に有無の二諦を出るなり。答う、『章』に云く「適縁は具に尽不尽を摂すなり」と。＜云々＞故に縁に随い摂を論ずることに就いて、甚だ『章』の意に順ずるなり。）

と述べ、有無の二諦は教説であり、仏がこの二諦により衆生のために空有仮説の理を説き、仏果は即ち不二中道である。

更に、珍海は仏果において、すでに有空と非有非空の中道の理を具わるので、この中道の理は正理であると述べているのである。原文は即ち、

「今細尋之、若望無礙法門道理、於佛果之上、具足有空及非有非空義。此無所得有及空者、始是正故。只是中道就此無礙法門中、妙有爲世諦、眞空爲眞諦。」¹⁷⁶

¹⁷⁴ 珍海は『大乘正觀略私記』の中に「教理俱明者、即正觀學」と述べている。『大正藏』卷七十. p. 195c3

¹⁷⁵ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十 p. 241c20-25

¹⁷⁶ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十 p. 242c16-20

(今細かくこれを尋ね、若し無礙の法門の道理を望めば、仏果の上に於いて、有空及び非有非空の義を具足す。此の無所得の有及び空とは、始めに是れ正なるが故なり。只だ是れ中道は此の無礙の法門の中に就いて、妙有は世諦と為し、真空は真諦と為すなり。)

である。珍海が中道の理を用いて無礙の法門を解釈し、無碍の法門は即ち不二中道の理であると理解すればよいであろう。

以上の解釈に基づき、珍海が『大乘正観略私記』「第三総結宗帰」の中に述べた一圓の法にも用いる。つまり、

「今略舉要者、在文八不偈、在法一圓中在説、強名在觀、即事在空宛然。宛然者如本也。無礙也。如説有即爲空等也。」¹⁷⁷

(今略して要を挙げれば、文は八不の偈在り、法は一圓中に在り、説在り、強いて名づけて觀在り、即ち事は空に在りて宛然たり。宛然とは本の如くなり。無礙なり。有を説くが如きは即ち空と等しと為すなり。)

である。

珍海は、大乘正観を表す根本の文字、或いは言教は八不の偈頌であると考え、そして、生滅、常断、一異、来出の表し方は相対にして説かれ、生に対して滅を説き、滅に対して生を説くのである。この表し方が因縁相待の仮称、不二、不二二の中道思想の体现である。法の根本という、いわゆる二諦の道理である。故に、珍海が後に「法は一圓中に在り、説在り、強いて名づけて觀在り」と述べている。

一圓中の法は珍海において、真俗を相対させて成立する二諦の義であると考えられる。つまり、因縁仮説の二諦の理は一圓の中道の義であり、究極的な宗旨を指すのである。故に、珍海は『大乘正観略私記』の中に、

¹⁷⁷ 珍海『大乘正観略私記』『大正蔵』卷七十. p. 199b16-18

「凡諸無礙、皆以法性無礙爲本。無得正觀要在於斯。」¹⁷⁸

(凡そ諸の無礙、皆法性無礙なるを以て本と為す。無得の正觀は要ず斯に在り。)

と、法の自性がなく、空であることを法性無碍と称し、無得正觀の本と目している。

珍海の正觀に対する理解はただ中道不二の理に止まるだけではなく、彼はまた

「若教理俱存、乃是眞無所得也。」¹⁷⁹

(若し教・理は俱に存すれば、乃ち是れ眞の無所得なり。)

と述べている。無所得は三論宗の重要な思想と言えるが、珍海は無所得という立場に立って、实际的に解釈している。彼は

「今檢文旨、應有三人。一者名教學者、二者是正觀學者、三者教理兼學。(中略)今安、大乘無所得中、若樂廣者、應學名教。(中略)若樂深者、唯可學習無依無得、若深識記持者、應依第三深廣兩兼。」¹⁸⁰

(今文旨を檢するに、まさに三人有るべし。一には名教の学者、二には是れ正觀の学者、三には教と理の兼学なり。(中略)今安ずるに、大乘の無所得中に、若し広を樂わば、まさに名教を学ぶべし。(中略)若し深を樂わば、唯だ無依無得を學習すべし。若し深く記持を識らば、まさに第三の深広兩兼に依るべし。)

と述べ、この無所得を实践した珍海においての教と理は広と深の二重の意義が存在するのである。広の場合、吉藏に批判された毘曇、成実など他宗派の名教を包摂して、一切の名教を学習すべきである。深の場合、自性がない畢竟空で

¹⁷⁸ 珍海『大乘正觀略私記』『大正藏』卷七十. p. 199b13-14

¹⁷⁹ 珍海『大乘正觀略私記』『大正藏』卷七十. p. 195b22-23

¹⁸⁰ 珍海『大乘正觀略私記』『大正藏』卷七十. p. 195b29-c9

ある無所得を学ぶことを目指すべきだと考えられる。ところが、広と深の両者を共に把握するのは真実の無所得である。つまり、真実の無所得はただ名教の学者を指すことではなく、一途に無依無得を学習することでもない。この両方面（広と深）を同時に理解することこそは、珍海が強調している真実の無所得である。つまり、正観である法性無碍の空理を習得すれば、教と理が共に存し、広と深を共に把握できるのである。

以上述べたように、珍海における正観の正義は教・理を共に明かすところにある。この義は真俗二諦に基づき、玄、理、体、本によって真諦を表し、事、教、用、末によって俗諦を表すのである。教と理とを同時に空観の立場で中道不二を観得することは正観であるという。また、この正観によって観得した中道不二の理はある意味上の仏果とも言える。更に、正観は八不を基礎として成り立ち、二不二、不二二の中道思想の体現とも言える。

また、珍海は無所得の立場に立って、教と理は広と深の二重の意義があると述べ、広と深の両者を共に把握するのは真実の無所得であると強調した。

まとめ

本節では、二諦、中道、正観という三つの方面から珍海における三論宗教理思想について検討を行った。

珍海は二諦の教学において吉蔵の三論宗思想を受け入れ、於・教という二諦を分け、教二諦を能依とし、この教二諦において更に四重二諦の義を明らかにした。即ち、有を俗諦とし、空を真諦とする。これは第一重の二諦である。また、空有を共に俗諦とし、非空非有を真諦とする。これは第二重の二諦である。また、二不二を俗諦とし、非二非不二を真諦とする。これは第三重の二諦である。更に第四重の二諦は前の三重の二諦をすべて俗諦とし、言忘慮絶を真諦とするのである。そして、前三重の二諦は毘曇と成実、及び大乘法に執着する人が説く教法であるので、前三重の二諦を俗諦とし、言忘慮絶は三論宗の立場に立って説く教法であるので、真諦とする。なお、珍海が仏菩薩は二諦により衆生の根機に赴いて法を説くことは言教ではあるが、目的は真実の理を顕わすためであるといい、前三重の二諦において、教がある以上、必ず理も存在すると

いう。前三重の二諦が第四重の二諦にとって、理を教として説き、理と教は四重二諦の各重に存在していることを主張することが分かった。更に珍海は教二諦、於二諦、人二諦、法二諦、事理二諦、如実知不如実知二諦、続不続二諦、生死涅槃二諦、因縁二諦、菩薩声聞二諦という十番の二諦を加えて、「十番四重二諦」と呼ばれており、四重二諦と十種二諦は共に教に基づき、言教によって理を悟ることを述べている。

また、中道の教学において、珍海は吉蔵の「一道清浄」、「世諦中真諦中」、及び「非真非俗」という三種類の中道の義を受け入れ、八不の正理は中道であり、傍文は真俗の二諦であるという。更に八不は三論宗の根本として、二諦と中道の義を包摂し、二諦を教門とし、中道を理法として位置づけしたのである。中道の理は仮有の二辺に落ちないため、三論宗の正義として明らかにした。更に、珍海は法朗と吉蔵に説かれた三種方言の義を継承して、前二種の方言は破病であり、後の一種の方言は顕道であるという。三種方言により「破性」、「破仮執」、「顕道」をして、方言義は三論宗の宗義を整える方軌と見された。

また、正観について珍海は真俗の二諦に基づき、教と理とを同時に空観の立場で中道不二の理を観得することは正観であるという。また、この正観によって観得した中道不二の理はある意味での仏果とも言えると考えられた。更に、正観は八不を基礎として成り立ち、二不二、不二二の中道思想の体现であると明らかにした。なお、珍海は無所得の立場に立って、教と理は広と深の二重の意義があると述べ、広の場合は、吉蔵に批判された毘曇、成実など他宗派の名教を包摂して、一切の名教を学習すべきであるという。深の場合は、自性がない畢竟空である無所得を学ぶことを目指すべきであるということが分かった。広と深の両者を共に把握するのは真実の無所得であると珍海は強調した。

第三節 二智と二諦

周知のように、二智とは権智と実智のことというのが一般的である。珍海は『三論玄疏文義要』の第四卷において、ほとんど第四卷の全卷に占める長文をもって二智について論述し、二智の定義について以下のように述べている。（＜

＞の内の内容は割注である。)

「問、依二諦境、發生二智。云云。爾者、二智者何。答、二智者、權智實智也。＜此二亦名般若方便。又、此二在因名二惠、在果名二智也。權智照俗諦、實智照眞諦矣＞」¹⁸¹

(問う、二諦の境に依り、二智を發生す。云々。爾らば、二智とは何ん。答う、二智とは、權智と實智なり。＜此の二は亦た般若・方便と名づく。又、此の二は因に在れば二惠(慧)と名づき、果に在れば二智と名づくなり。權智は俗諦を照らし、實智は眞諦を照らすなり＞)

つまり、二諦の境により二智を發生し、この二智は即ち權智と實智というのである。しかも、割注の通り、この二智は權智・實智と呼ばれるほか、般若智・方便智とも呼ばれている。また、因位の立場から見ると、權と實は二惠(或いは二慧)と呼ばれ、果位の立場から見ると、權と實は二智と呼ばれている。更に、權智は二諦の中の俗諦を照らし、實智は二諦の中の眞諦を照らすのである。

權智と實智とは珍海が二智に対する基本的定義である。実は、三論宗の場合、二智について様々な呼び方があり、体と用の方面から、實智は空である実相を照らすため、般若智とする。このことに対して、權智は善巧の働きがあるため、方便智とするのである¹⁸²。また、菩薩の位であれば、二智を「智」と称すること

¹⁸¹ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十. p. 255a9-10

¹⁸² 般若智と方便智について、吉藏は『淨名玄論』と『大乘玄論』の中においてほとんど同じことを述べている。内容は次のようである。

『淨名玄論』の第四卷に「問。般若照空名慧。方便涉有應爲智。答。如前釋之。方便非不照有。正取功能。故不云智也。問。何以知般若爲體。方便爲用。答。釋論第百卷云。問曰。上已付囑竟。今何故復囑累。答。上說般若體。今說方便用。故知般若爲體。方便爲用。論又云。般若與方便。本體是一。而隨義有異。譬如金爲種種物。此則明權實一體。約義分二。金喻般若之體。金上之巧譬於方便。方便爲用」とある。『大正藏』卷三十八. p. 881b22-c1

『大乘玄論』の第四卷に「問。波若照空名慧。方便涉有應稱爲智。答。如前釋之。方便非不照有。正以取巧能故不云智也。問。何以知波若爲體方便爲用。答。釋論第百卷云。問。上已付囑竟。今何故復囑累。答。上說波若體竟。今說方便用。故波若爲體。方便爲用。論又云。波若與方便本體是一。而隨義有異。譬如金爲種種物。此明權實一體約義分二。金喻波若。波若爲體。金上之巧。譬於方便。方便爲用」とある。『大正藏』卷四十五. pp. 53c24-54a3

ではなく、実慧と方便慧である二慧と呼ばれるのである。その理由は、菩薩の位はまだ因の位であり、実慧と方便慧をもって空境を観想して、故に二智を生まれるのである。仏になる果位であれば、果位は一切の空境を照らすため、実慧を一切智と呼ばれ、一切の有境を照らすため、方便慧を一切種智と呼ばれるのである¹⁸³。即ち、因・果の二位から二慧と二智の不同を述べるのである。珍海はまたこの因・果の二位の不同を「断惑」と呼ばれ、菩薩の位は不断であり、仏の位は断惑であると述べている¹⁸⁴。また、大品教¹⁸⁵において、真諦の空を照ら

¹⁸³ 二慧(恵)と二智について吉蔵は『浄名玄論』の第四卷において、次のように述べている。「問。論云。因名般若。至佛則反名薩婆若。何得復云六地名般若。至七地般若清淨。變名方便。答。如前釋之。六地之時。般若體強。方便用弱。以體強故。妙於靜觀。故觀空不著。以用弱故。未能即空涉有於有無滯。至於七地。即體用俱等。既能觀空不染。即能涉有無著。故名等定慧地。等定慧地則般若用巧。故云反耳。從八地以上。二慧俱巧。若至佛地。則兩慧同變。實慧則變名薩婆若。謂一切智。方便慧變。名一切種智也。問。若至果變名二智。則因中同名二慧。何故。前云般若稱慧。方便不名慧耶。答。因果立名。各有其義。果門照一切空境。名一切智。照一切有境。名一切種智。但從境立名。故宜並稱智。因門實慧從境。方便約用。故不得並名慧也。問。若爾。何故。菩薩道慧道種慧皆名慧耶。答。因中之慧。自有多門。立名各異。道慧道種慧。亦是從境立名。故宜並稱慧也。問。若爾。但應言道慧道種慧。至果變名一切智一切種智。云何言般若方便變名二智。答。論云。因中名般若。既反名薩婆若。因中方便理巧。變名一切種智。二慧變名二智。故不待言問。論云。波若變爲薩婆若。何處云方便變名一切種智。答。般若名慧。是照境之名。果地一切智。亦從照境爲稱。二名相主。故云因名般若。果名一切智。方便就用爲目。一切種智從境立名。兩義不同。故經論不云方便變爲一切種智。然方便雖不從境立名。而體實照有。故得變爲種智。雖復文理。權應爾。又因中名權實二慧。果名權實兩智。亦得即是其文」と、『大正蔵』卷三十八. pp. 882c5-883a7

また、『大乘玄論』の第四卷においてほとんど同じことを述べている。「問。論云。因名般若。至佛即反名薩婆若。何得又云。六地名波若。至七地波若清淨。反名方便。答。如前釋之。六地之時。波若體強。方便用弱。以體強故妙。於靜觀故。觀空不著。以用弱故。未能即空涉有於有無滯。至於七地。即體用俱等。既能觀空不染。即能涉有無著。故名等定慧地。等定慧地。即波若用巧。故云反。即從八地已上。二慧俱巧。若至佛地。即兩慧同反。實慧即反。名薩婆若。謂一切智。方便慧反。名一切種智也。問。若至果反名二智。即因中同名二慧。何故前云波若稱慧方便不名慧耶。答。因果立名各有其義。果門照一切空境名一切智。照一切有境名一切種智。俱從境立名。故宜並稱智。因門實慧從境方便約用。故不得並名慧也。問。若爾何故菩薩道慧道種慧皆名慧耶。答。因中之慧自有多門。立名各異。道慧道種慧。亦是從境立名。故宜並稱慧也。問。若爾但應言道慧道種慧。至果反名一切智一切種智。云何言波若方便反名二智。答。論云。因中名波若。既反名薩婆若。因中方便理數。反名一切種智。二慧反爲二智。故不待言。問。論云。波若反爲薩婆若。何處云方便反名一切種智。答。波若名慧。是照境之名。果地一切智。亦從照境爲稱二名相主故。云因名波若。果名一切智。方便就用爲目。一切種智。從境立名。兩義不同。故經論不云方便反爲一切種智。然方便雖不從境立名。而體實照有。故反爲種智。雖復無文。理數應爾。又因中名權實二慧。果名權實兩智。亦得即是其文」『大正蔵』卷四十五. p. 55a2-b2

¹⁸⁴ 珍海は『三論玄疏文義要』の第巻四の中に「二智斷惑事。問。菩薩修二恵。斷煩惱耶。答。實不斷惑也。

すことを実智と呼ばれ、俗諦の有を照らすことを権智と呼ばれるのである。

以上から分かるように、珍海における二智の定義は吉蔵の三論宗教理思想に基づき、体・用の二智、因・果二位の二智、大品教の二智に分けられ、二智の呼び方は権智と実智に拘らないのである。しかし、具体的に検討すれば、吉蔵における二智の義には完備した体系があり、珍海が述べている二智の義はその全貌とは言えない。珍海の三論宗教理思想は吉蔵からの影響が多いため、その思想様態を検討する前に、吉蔵における二智の義を先に確認せざるを得ないのである。本節では、まず、吉蔵における二智の義の様態を確認し、また、珍海はどのような形で吉蔵の二智の義を継承したのかを検討する。

一 吉蔵の二智義について

吉蔵が『法華玄論』第四巻の中に、教判の立場から「般若教二智」、「淨名教二智」、「法華教二智」、「涅槃教二智」という四種二智を取り挙げて以下のように述べている。

「次論四種二智。問、有人言照空爲實、鑒有爲權。此波若教二智也。内靜鑒爲實、外動用爲權。淨名教二智也。照一爲實、照三爲權。謂法華二智也。照常住爲實、鑒無常爲權。謂涅槃二智也。」¹⁸⁶

(次に四種二智を論ず。問う、有る人言わく「空を照らすことを実と為し、有を鑒することを権と為す。此れ般若教の二智なり。内に淨鑒することを実と為し、外に動用することを権と為す。淨名教の二智なり。一を照らすことを実と為し、三を照らすことを権と為す。法華の二智と謂うなり。常住を照らすことを実と為し、無常を鑒することを権と為す。涅槃の二智と謂うなり」と。)

云云。問。小乘聖者。猶能斷惑。況菩薩大人何不斷惑耶。答。菩薩悟煩惱本自不生。今亦不滅。故無斷惑義也。若論因緣假名義。亦有解惑。而有斷義也。二智義云。此經云。佛爲増上慢人。說斷煩惱。實不斷也」と述べている。『大正藏』卷七十. p. 257a17-26

¹⁸⁵ 五時二智の一つである。五時二智とは、三藏教二智、大品教二智、淨名教二智、法華教二智、涅槃教二智というのである。

¹⁸⁶ 吉蔵『法華玄論』『大正藏』卷三十四. p. 394c2-6

上に挙げた『法華玄論』の文章から見れば、四種二智の概念は吉蔵が最初に述べられたことではなく、彼の前から論じられてきたことが分かった。しかし、この概念がいつから提起されたかということについては、まだ肯定できなく、吉蔵の『法華玄論』の内容から見れば、恐らく僧肇の時代においては既に論じられたと考えるのである¹⁸⁷。吉蔵が四種二智を取り上げる意図は、このような諸經典の義理に対する判釈を主張することではなく、逆に四種二智の判釈は三論宗思想の主旨が背離したため、批判的に引用されたのである。

般若教の二智に対して、吉蔵は『法華玄論』において以下のように述べている。

「評曰、不然、照空爲實、鑒有爲權、蓋是契中道之妙觀、離斷常之要術、法身之父母、菩薩之本行。從波若已上、涅槃已還、乃至華嚴諸方等教、皆通用之。不得偏屬大品。」¹⁸⁸

(評して曰く、然らずんば、空を照らすことを実と為し、有を鑒することを権と為すは、蓋して是れ中道の妙觀に契し、断常を離れる要術、法身の父母、菩薩の本行なり。波若已上従り、涅槃已還、乃至華嚴諸方等の教まで、皆これを通用す。偏に大品に属するを得ず。)

つまり、権実という二智は中道の理に契合して、照空の場合は実といい、鑒有の場合は権というのである。実智と権智は空と有に執着しない教法として、断常の二辺を離れた菩薩の本行であると強調している。したがって、このような教法はただ般若教のみに属するのではなく、華嚴教、般若教、淨名教、法華教、涅槃教などの諸大乘教の中において通用している。換言すれば、「有る人」が説いている照空のことを実智といい、鑒有のことを権智というのである。般

¹⁸⁷ 吉蔵の『法華玄論』第四巻の内容から見ると、般若教の二智と淨名教の二智については僧肇の時代から既に論じられていたことが分かった。内容は次のようである。「問。古有此釋不。答。什師注問疾品云。觀空不證涉有無著皆名方便。似此義也。有人言雙照空有皆名爲實。涉有化人動用之義名爲方便。此肇公釋也」『大正藏』卷三十四. p. 395a25-28

¹⁸⁸ 吉蔵『法華玄論』『大正藏』卷三十四. p. 394c7-10

若教の二智は、実は諸大乘教に貫いているのである。

また、淨名教の二智に対して、吉蔵は『法華玄論』において以下のように述べている。

「次動靜分二智者、一切方等教、辨菩薩行、皆以內靜鑒爲實、外動用爲權。貫通衆經、亦非屬淨名也。問、何以知靜動分二智通諸經耶。答、一切菩薩皆有自行化他、今內靜鑒爲實是自行、外動用爲權是化他義。故知、通一切教也。」¹⁸⁹

(次に動靜もって二智を分するは、一切方等教、菩薩行を辨じ、皆内に靜鑒をもつて実と爲し、外に動用をもつて權と爲す。衆經に貫通す、亦た淨名に屬せざるなり。問う、何ぞ靜動をもつて二智に分して諸經に通ずることを知るや。答う、一切菩薩は皆自行化他有り、今内に靜鑒もつて実と爲すは是れ自行なり、外に動用もつて權と爲すは是れ化他の義なり。故に知んぬ、一切の教に通ずるなり。)

この内容から分かるように、靜鑒と動用は自行と化他の立場から論じることができ、仏・菩薩は内に自行を行うと同時に、外に化他の方便法を行うのである。実智を証得することをもつて自行をとし、權智である方便法を施すことを化他とする。これは一切の大乘教に通ずるので、淨名教だけに属するとは言えないのである。

また、法華教の二智に対して、吉蔵は『法華玄論』の中に以下のように述べている。

「次云、照三爲權、鑒一爲實。此偏約法華。是亦不然。波若後分已明與法華齊。若爾、則大品亦有此義。不應偏係法華也。」¹⁹⁰

(次に云わく、「三を照らすことを權と爲し、一を鑒することを実と爲す」と。是れは亦た然らず。波若の後分は已に法華と齊しいと明かす。若し爾ら

¹⁸⁹ 吉蔵『法華玄論』『大正蔵』卷三十四. p. 394c10-15

¹⁹⁰ 吉蔵『法華玄論』『大正蔵』卷三十四. p. 394c26-29

ば、則ち大品も亦た此の義有り。応に偏に法華に係らざるべきなり。)

つまり、三乗の法に契合することを権智とし、一乗の法を証得することを実智とする。これは『法華經』に説かれた三乗と一乗との教法と同じであるが、大品經の後半に説かれた經旨にも一致すると吉蔵が強調している。このような観点は、空・有という教法に基づいたと考えるのである。なぜなら、吉蔵は『法華玄論』において、『法華經』の中にも四種二智の義があると述べていて、その中の空有という二智は正に大品經の空有の義に契合しているのである。原文の内容は以下のようである。

「次釋法華四種二智義。有人言、法華但有二種二智。一者、照三乗爲權、照一乗爲實。二者、照近爲權、照壽量佛、復倍上數爲實。今明此經要具四種二智。一者、初段中有三種二智、後開近顯遠中、復有一種二智。故成四種。初段明三種二智者、初三一二智。二乘人欲入菩薩法、要先須識三乘是權、一乗爲實。以破彼迷權實無明、此二智是反三之始、歸一之初故先須辨之。二者、空有二智既改三信一、則須學菩薩空有二慧。觀空不證、離二乘地。涉有無著、出凡夫境。故生在佛家、種姓尊貴。又空有二慧是法身父母、欲求大覺者、豈不學之。三者、即此空有二慧是菩薩自行耳、復應化度衆生。故以內靜爲實、外動用爲權。故有第三動靜二慧也。(中略)次就此經後段、明一種二智者、此經後段辨本迹、常無常二智。識本は無生滅、無始終爲實智。識始終生滅等用謂權智故、初段具三種二智、第二段常無常二智。故此經具四種二智也。」¹⁹¹

(次に法華の四種二智の義を釈す。有る人言わく「法華は但だ二種二智有るのみ。一には、三乗を照らして権と為し、一乗を照らして実と為す。二には、近を照らして権と為し、壽量仏を照らして復た上に倍する(劫)數を实と為す」と。今此の經(『法華經』)は四種二智を要具するを明かす。一には、初段の中に三種二智有り、後に近を開いて遠を顯する中に、復一種二智有る。故に四種成す。初段に三種二智を明かすとは、初の三一の二

¹⁹¹ 吉蔵『法華玄論』『大正藏』卷三十四. pp. 395c13-396a18

智なり。二乗人は菩薩法に入らんと欲さば、要に先に須らく三乗は是れ権、一乗は実と為すことを識すべき。彼の権実無明に迷うことを破するを以て、此の二智は是れ反三の始、帰一の初なり、故に先に須らくこれを辨ずべし。二には、空有の二智は既に三を改して一を信じ、則ち須らく菩薩の空有の二慧を学すべし。空を觀して不證なるを、二乗の地を離る。有を涉して無著を、凡夫の境を出づ。故に仏家に在りて生じ、種姓は尊貴なり。又空有の二慧は是れ法身の父母なり、大覺を求めんと欲する者、豈にこれを学ばずんや。三には、即ち此の空有の二慧は是れただ菩薩の自行のみ、復た応に衆生を化度すべし。故に内に静を以て実と為し、外に動用を権と為す。故に第三の動静の二慧有るなり。(中略)次に此の經の後段に就いて、一種二智を明かすは、此の經の後段は本・迹、常・無常の二智を辨ずるなり。識は本に是れ無生滅、無始終を実智と為す。始終と生滅等の用は権智と謂うことを識るが故に、初段に三種二智、第二段に常・無常の二智を具す。故に此の經は四種二智を具すなり。)

三一二智、空有二智、動静二智、常無常二智という四種類の二智は『法華經』の中において説かれた二智であり、その中の空有二智は吉蔵が強調した大品の後半と一致した二智である。

また、涅槃教の二智に対して、吉蔵は『法華玄論』の中に以下のように述べている。

「問、何故、次前三種二智、後辨常無常二智耶。答、前三種二智謂菩薩解行、即是因義。始于十信、終至等覺。後常無常二智即是果位、稱妙覺地。故因果二門、要具四種二智也。」¹⁹²

(問う、何故、次の前に三種二智、後に常無常の二智を辨ずるや。答う、前の三種二智は菩薩の解行と謂い、即ち是れ因義なり。初めに十信から、終わりに等覺に至る。後の常無常の二智は即ち是れ果位、妙覺地と稱するなり。故に因果の二門、要ず四種二智を具するなり。)

¹⁹² 吉蔵『法華玄論』『大正藏』卷三十四. p. 396a20-24

つまり、涅槃教における二智は因と果の不同から考えなければならない。大品教、淨名教、法華教という前述した三つの教法は全部因の位であり、常無常という二智は妙覺の果位二智である。これもまた前述した菩薩位の実慧、方便慧、及び果位の一切智、一切種智を指すのである。

更に、『法華玄論』に説かれた四種二智のほか、吉藏はまた『淨名玄論』と『大乘玄論』の中に三藏教の二智を加え、五種二智を論じているのである¹⁹³。原文の内容は以下のようなものである。

「凡有五時二智。一、照事中之法爲權、鑒四諦之理爲實。謂三藏教二智也。二、照真空爲實、鑒俗有爲權。大品教二智也。三、知病識藥爲實、應病授藥爲權。淨名教二智也。四、照一佛¹⁹⁴乘爲實、鑒三乘爲權。法華教二智也。五、照常住爲實、鑒生死無常爲權。涅槃教二智也。」¹⁹⁵

（凡そ五時に二智有り。一には、事中の法を照らすことを權と爲し、四諦の理を鑒することを實と爲す。三藏教の二智と謂うなり。二には、真空を照らすことを實と爲し、俗有を鑒することを權と爲す。大品教の二智なり。三には、病を知り藥を識ることを實と爲し、病に應じて藥を授すことを權と爲す。淨名教の二智なり。四には、一仏乗を照らすことを實と爲し、三乗を鑒することを權と爲す。法華教の二智なり。五には、常住を照らすことを實と爲し、生死無常を鑒することを權と爲す。涅槃教の二智なり。）

¹⁹³ 二智の義について、宇井伯寿氏により国訳一切經、和漢撰述部、諸宗部一、『大乘玄論』解題において、『淨名玄論』と『大乘玄論』の中に説かれた二智義の内容は全く同じであると指摘された。また、珍海は『三論玄疏文義要』第四卷において「此義專依淨名經而作。故玄引淨名文云。故此經云。智度菩薩母。方便以爲父。云云。此文與淨名玄宗旨卷大同也」と述べている。『大正藏』卷七十. p. 255a16-18 珍海はまた、『大乘玄問答』第八卷において「今一卷與淨名玄宗旨卷文言多同。又一乘義與法花玄同。故知取其要用編此玄章歟習之」と述べ、『大乘玄論』の二智義は『淨名玄論』の文章を引いて作成したと解釈する。『大正藏』卷七十. p. 609c6-8

¹⁹⁴ 『大正藏』のテキストには「無」であるが、欄外注記に「佛」という字に疑い、意味上から「一佛乘」の方が正しいので、今改めた。

¹⁹⁵ 『淨名玄論』『大正藏』卷三十八. p. 884c7-13 また、『大乘玄論』の第四卷の中に同じことを述べている。『大正藏』卷四十五. p. 56c13-19

この文章から見れば、世俗の法を体得することを権智とし、四諦の法を体得することを実智とするのである。吉蔵は四種類の二智の上に、更に小乗である三蔵教の二智を加え¹⁹⁶、五種類の二智になることが分かった。

五種二智はあくまで五時教判という判釈から二智の義を論じ、三論宗の教理思想に適合しないのである。そのために、吉蔵は『法華玄論』の第四巻において以下のように述べている。

「問、如是四説何者爲實。答、佛經有種種之説、隨人隨義用之、不得定執。如須眞天子、波若經下卷明二慧有三十許、異可尋之也。又、今略示諸異、經自有、但就空分二慧、如觀空爲實慧、知空亦復空故不證空、名方便慧。自有、但就有中分二慧、如淨名經以身不疾爲實、身疾爲方便。又云觀身苦、空、無我爲實、處生死化物爲方便也。自有、空有分二慧如前釋。自有、福慧分二慧、以慧爲實、以福爲權。自有、就自他分二慧、自行爲實、化他爲權。自有、大乘爲實、小乗爲權。皆可隨文用之、各有旨也。」¹⁹⁷

（問う、是の如くの四説は何者は実と爲すや。答う、仏經に種々の説有り、隨人隨義にこれを用い、定執して得ず。『須眞天子經』、『波若經』下卷に二慧は三十許有るを明かすの如き、異はこれを尋ねるべきなり。又、今略して諸異を示すに、經に自ずから有り、但だ空に就いて二慧に分けるのみ、空を觀するを実慧と爲し、空を知り亦復空なるが故に空を不證なり、方便慧と名づくの如く。自ずから有り、但だ有の中に就いて二慧に分けるのみ、『淨名經』は身の不疾を以て実と爲し、身疾を方便と爲すの如く。又身の苦、空、無我を觀することを実と爲し、生死化物に處ることを方便と爲すの如くなり。自ずから有り、空有（に就いて）二慧に分けるは前釈の如く。自ずから有り、福慧（に就いて）二慧に分くるに、慧を以て実と爲し、福を以て權と爲す。自ずから有り、自他に就いて二慧に分くるに、自行を実と爲し、化他を權と爲す。自ずから有り、大乘を実と爲し、小乗を權と爲す。皆文に隨いこれを用うべし、各旨有るなり。）

¹⁹⁶ 吉蔵は『維摩經義疏』第一卷の中に「初嘆小乗人徳。即三蔵二智」と述べ、小乗人の徳を賛嘆することは即ち三蔵二智であると述べている。『大正蔵』卷三十八. p. 917a14-15

¹⁹⁷ 吉蔵『法華玄論』『大正蔵』卷三十四. p. 395c1-12

つまり、二智という教義は、人と各經典の趣旨に随い種々の呼び方があり、ある一つの教法に属するのではない。更に、吉蔵は『淨名玄論』の第五卷の中に五時二智についてもっと詳しく述べている。

「問、若一教之中、具含諸智、即但是一經、何有諸部。答、諸大乘經通爲顯道、道既無二、教豈異哉。故亦得名爲一部。所以諸大乘經通稱方廣、但顯道多門、故有衆經之異。又、雖一經之內具明五種、但一義有傍正、故諸部不同。三藏教則但明事理權實、未辨餘門。故大品以空有爲正、餘義爲傍。法華三一爲端、餘皆汎辨。涅槃以常無常爲旨、餘悉並明。」¹⁹⁸

(問う、若し一教の中に、具さに諸智を含み、即ち但だ是れ一經のみ、何ぞ諸部有るや。答う、諸大乘經を通じて顯道と爲し、道は既に二無し、豈に教は異るや。故に亦た名づけて一部と爲すことを得。所以は諸大乘經を通じて方廣と稱し、但だ顯道の門は多かり、故に衆經の異有るのみ。又、一經の内、具さに五種を明かすと雖も、但だ一義に傍正有り、故に諸部不同のみ。三藏教は則ち但だ事理の權實を明かすのみ、未だ余門を辨ぜず。故に大品は空有を以て正と爲し、余義は傍と爲す。法華は三一を端と爲し、余は皆汎く辨ず。涅槃は常無常を以て旨と爲し、余は悉く並びに明かすなり。)

つまり、諸大乘經は顯道無異という立場から、それぞれの經典において説かれた二智は傍と正の二義があり、例えば、三藏教の場合は、事理という權實の基本的概念を表すのを正義とし、大品教の空有二智、淨名教の動靜二智、法華教の三一二智、涅槃教の常無常二智を傍義とする。また、大品教の場合は、空有の義を正義とし、三藏教の事理二智、淨名教の動靜二智、法華教の三一二智、涅槃經の常無常二智を傍義とする。また、法華教の場合は、三乗と一乗との關係を論じるため、三一二智を正義とし、三藏教の事理二智、大品教の空有二智、淨名教の動靜二智、涅槃教の常無常二智を傍義とする。また、涅槃教の場合は、

¹⁹⁸ 吉蔵『淨名玄論』『大正藏』卷三十八. p. 885a21-28 また『大乘玄論』第四卷の中に五時二智について同じことを述べている。『大正藏』卷四十五. p. 57a25-b2

常住という実智と生死無常という権智を正義とし、余義を傍義として論じるのである¹⁹⁹。このようにして、一つの經典の中にすでに五種類の二智が備えるため、五種類の教法をもって二智を分けるのは諸部の不同を顕わすのみである。吉蔵にとっての五種二智はある一時の教説を代表するものではなく、五種二智の義を通して諸經平等の意味を表すのである。

二 珍海における二智義の継承

五種二智は各教法において傍正の二義があるけれども、顕道の方面においては異なるところがない。この点について、珍海は『三論玄疏文義要』の中に、吉蔵の『大乘玄論』の内容を引いて、前に挙げた『淨名玄論』と全く同じことを述べている。即ち、

「玄二智云、同異門問、凡有五時二智。一、照事中之法爲權、鑒四諦之理爲實。謂三藏教二智也。二、照眞空爲實、鑒俗有爲權。此大品教二智也。三、知病識藥爲權、應病授藥爲實²⁰⁰。淨名經二智也。四、照一乘爲實、鑒三乘爲權。法華二智也。五、照常住爲實、鑒無常爲權。涅槃二智也。答、五時説、四宗之論²⁰¹、乖文傷義、古已詳之、今當略説。云云。又云、諸大乘經、通爲顯道、道既無二、教豈異哉。但入有多門、故諸部差別。雖一經之內具含五種、而明義傍正不同。三藏一教、唯明事理權實、未辨餘門二智。大品以空有爲正、餘義爲傍。法華三一爲端、餘皆汎辨。涅槃以常無常爲正、餘悉兼明。云云」²⁰²

¹⁹⁹ 原文においては淨名教の動靜二智の内容が見られないが、吉蔵が『淨名經』の中には五種二智の義があることを強調するため、『淨名玄論』においてこのような内容を述べ、淨名教の傍正の義を表わしたのである。

²⁰⁰ 權と実という二字は前後を転倒して誤写したと考え、「知病識藥爲實、應病授藥爲權」に疑う。

²⁰¹ 四宗について、吉蔵の『中觀論疏』第一巻において次のように述べている。「如舊地論師等辨四宗義。謂毘曇云是因縁宗。成實爲假名宗。波若教等爲不眞宗。涅槃教等名爲眞宗」と。『大正藏』卷四十二。p. 7b4-6
また、『大乘玄論』第五巻において次のように説明している「四宗者。毘曇是因縁宗。成實謂假名宗。三論名不眞宗。十地論爲眞宗」と。『大正藏』卷四十五。p. 63c17-18

²⁰² 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十。p. 256b1-15

である。

詳しく検討すれば、五時という教法は慧観の所説であり、これについて吉蔵は『三論玄義』の中に以下のような内容を述べている。

「言五時者、昔、涅槃初度江左。宋道場寺沙門慧観仍製經序、略判佛教凡有二科。一者、頓教、即華嚴之流。但爲菩薩、具足顯理。二者、始從鹿苑、終竟鵠林、自淺至深、謂之漸教。於漸教內開爲五時。一者、三乘別教。爲聲聞人說於四諦、爲辟支佛演說十二因、爲大乘人明於六度。行因各別、得果不同。謂三乘別教。二者、般若通化三機、謂三乘通教。三者、淨名、思益讚揚菩薩、抑挫聲聞。謂抑揚教。四者、法華會彼三乘、同歸一極。謂同歸教。五者、涅槃、名常住教。」²⁰³

(五時と言うは、昔、涅槃(經)は初めて江左に度る。宋の道場寺の沙門の慧観は仍って經序を製し、略に仏教を判ずるに凡そ二科有り。一には、頓教、即ち華嚴の流れなり。但だ菩薩の為に具足して理を顯すのみ。二には、始め鹿苑従り、終り鵠林に竟るまで、自ずから浅より深に至り、これを漸教と謂うなり。漸教の内に於いて開いて五時と為す。一には、三乘別教なり。声聞人の為に四諦を説き、辟支仏の為に十二因縁を演説し、大乘人の為に六度を明かす。行因各別なれば、得果不同なり。三乘別教と謂うなり。二には、般若は通じて三機を化し、三乗の通教と謂うなり。三には、淨名と思益とは菩薩を讚揚し、声聞を抑挫す。抑揚教と謂うなり。四には、法華は彼の三乗を会して、一極に同歸す。同歸教と謂うなり。五には、涅槃は常住教と名づくなり。)

つまり、華嚴教は頓教であることに対して、五時という教判は漸教の上に基づき、浅い教法から深い教法に至るまでの「自淺至深」の教説である。珍海は吉蔵と同じように、五時教法の中では各々違う二智の義があると雖も、頓道の方面においては同じであるし、五時四宗のような判釈は諸經典の文に背き、元の教義を損なうのであると主張している。

²⁰³ 吉蔵『三論玄義』『大正蔵』卷四十五. p. 5b3-14

また、権智と実智を解釈する時、吉蔵は『淨名玄論』と『大乘玄論』において通・別という二つの方面から論じている。通説であれば、権智と実智はあくまで般若に対する解釈であり、二智は共に実相の境を觀照し、般若の不二が二ということを表わしているのである。また、権智と実智は共に善巧の働きがあり、並べて方便と呼ばれているのである。

「通而言之、二智皆如實而照、並名爲實。皆有善巧、悉稱方便。」²⁰⁴

（通じてこれを言い、二智は皆如実にして照らし、並びに名づけて実と為す。皆善巧有り、悉く方便と稱す。）

別説の場合は、吉蔵が般若と方便に分け、まず、八義をもって般若の名称は実であると述べ、般若を実とする。また、権実を十対に分け、漚和を方便とするのである。

般若の八義は以下のようなものである。

「就別言之。則般若名實、漚和稱方便者、略有八義。

一者、般若照實相境、從所照爲名。故稱實。

二者、般若從實相生、從能生受名。故稱爲實。

三者、如實而照、故當體名實。

四者、對凡夫顛倒不實之慧故嘆²⁰⁵波若爲實。

五者、對二乘未實謂實故明波若爲實。

六者、對方便之用、以波若爲體。故名爲實。

七者、對虛故明實、未是好實。非虛非實、乃名妙實。

八者、虛義爲二、非虛實爲不二。二與不二皆名不實、非二不二乃名爲實。」

206

²⁰⁴ 吉蔵『淨名玄論』『大正蔵』卷三十八. p. 878b2-3 また、『大乘玄論』の中に同じ内容を説いている。『大正蔵』卷四十五. p. 50c8-10

²⁰⁵ 『大正蔵』テキストの原文は「難」であるが、欄外注記に「嘆」に疑い、更に『大乘玄論』を参照すると、「難」は「嘆」とする。意味上では「嘆般若爲實」のほうが通じやすいので、今改めた。

²⁰⁶ 吉蔵『淨名玄論』『大正蔵』卷三十八. p. 878b3-14 また、『大乘玄論』の中に同じ内容を述べている。『大

(別に就いてこれを言う。則ち般若を実と名づき、漚和を方便と称するとは、略に八義有る。

一には、般若は実相の境を照し、所照従り名と為す。故に実と称す。

二には、般若は実相従り生じ、能生従り名を受く。故に称して実と為す。

三には、如実に照し、故に当に体を実と為す。

四には、凡夫の顛倒不実の慧に対するが故に波若を嘆じて実と為す。

五には、二乗の未実を実と謂うことに対するが故に波若を実と為す。

六には、方便の用に対し、波若を以て体と為す。故に名づけて実と為す。

七には、虚に対するが故に実を明かし、未だ是れ好実ならず。非虚非実、乃ち妙実と名づく。

八には、虚義は二と為し、非虚実は不二と為す。二と不二は皆不実と名づき、非二不二は乃ち名づけて実と為す。)

これは般若の有翻と無翻についての解釈である。般若は智慧、遠離、明度、清浄などのように、それぞれ異なる働きによって翻訳するのである²⁰⁷。したがって、どのように般若を理解するか的重要点は翻訳した言葉ではなく、内在の意義にあると言えるのである。般若を実と称するのは、般若は実相の境を觀照する観点から論じるのである²⁰⁸。つまり、実相により般若を生じ、更に般若は逆に実相を觀照することができるのである。

また、有翻の立場から見れば、吉蔵は慧を般若の正翻とするのである。

正蔵』卷四十五. p. 50c10-20

²⁰⁷ 吉蔵は『淨名玄論』第四卷の中に「應云般若波羅蜜。漚和波羅蜜。故此經云。智度菩薩母。方便以爲父。智即波若。度謂波羅蜜也。但翻波若不同。或云智慧。如叡法師云。秦言智慧。或翻爲遠離。出放光經。即釋道安用。或翻明度。出六度集經。或翻清淨。此出大品。叡法師用之。但般若具含智慧明淨遠離等義。譯經之人。唯取其一。以用翻之。般若能斷衆惑。遠離生死名相之法。故云遠離。明了無暗。故稱爲明。體絕穢染。名爲清淨。達照解知。名爲智慧。雖有諸義。多用智慧。智慧單複。又各不同。或單名爲智。如釋論及此經。稱爲智度。或但名爲慧。如釋論云。波若秦言慧。或是具翻智慧。經論多爾。今詳會此意。義各有由。通而言之。即智爲慧。指慧爲智。廣略不同。體無異也」と述べている。『大正蔵』卷三十八. p. 876c2-16

²⁰⁸ 吉蔵は『淨名玄論』第四卷の中に「問。般若云何能契會實相。答。由實相生般若。故般若能契會實相也」と述べている。『大正蔵』卷三十八

「慧爲正翻、餘皆義立。所以知然、從多論也。此經云慧與方便。釋論云般若道、方便道。涅槃云般若者、一切衆生、闍那爲智、則配諸佛菩薩。故智非波若。又、第六名慧、第十爲智。皆有彼此二名、故知以慧爲正。又論云、波若不屬佛、亦不屬二乘、但屬菩薩。菩薩則道慧、道種慧。佛具一切智、一切種智。又云、波若名諸法實相慧。如是等諸文非一、故以慧爲正翻矣。」²⁰⁹

(慧を正翻と爲し、余は皆義を立つ。所以は知るに然なり、多くの論に従るなり。此の經(『淨名經』)に慧と方便と云う。釈論に般若道、方便道と云う。涅槃に般若と云うは、一切衆生、闍那を智と爲し、則ち諸仏菩薩を配す。故に智は波若に非ず。又、第六を慧と名づき、第十を智と爲す。皆彼れ此れの二名有り、故に知んぬ、慧を以て正と爲す。又論に云わく「波若は仏に属さず、亦た二乘に属さず、但だ菩薩のみに属す」と。菩薩は則ち道慧、道種慧なり。仏は一切智、一切種智を具す。又云わく「波若は諸法実相の慧と名づく」と。如くの是く等の諸文は一に非ず、故に慧を正翻と爲すなり。)

しかし、珍海のほうを見てみると、彼は『三論玄疏文義要』第四卷の中に、以下のように述べている。

「問、於般若名言、無正翻名。可云耶。答、正翻智惠也。」²¹⁰

(問う、般若の名言に於いて、正翻の名無し。言うべきや。答う、正翻は智恵なり。)

つまり、珍海は智恵を正翻とするのである。ところが、吉蔵は慧、智、智慧という三つの方面から般若の名称を解釈しながら、慧を正翻とするのである²¹¹。

²⁰⁹ 吉蔵『淨名玄論』『大正藏』卷三十八. p. 877a16-24

²¹⁰ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十. p. 255b8-9

²¹¹ 吉蔵は『淨名玄論』第四卷の中に慧、智、智慧について次のように述べている。「翻爲慧者。凡有四義。一欲分十度不同。二開空有義異。三明因果差別。四就凡聖爲異(中略)次翻爲智。凡有三義。一者慧名既劣。智則爲勝。今欲稱嘆波若。故名爲智。二者欲顯其名語便。云智度。若言慧度。言不便也。三者欲明智即是慧。名異體同。故隨舉其一。次合稱智慧。亦具三義。一明波若具鑒有無。故含智慧。慧則照空。智便鑒有。二顯波若通果及因。因中般若爲慧。果地波若爲智。故三德中有般若德。三者欲明六度義含於十。經中但明六度。不明十者。以般若之名既含智慧。第十智度。蘊在其中。問。既具三名。以何翻爲正。

珍海は智慧を慧に等しく、智慧（恵）を正翻とすることを述べている。

また、珍海は前に挙げた『三論玄疏文義要』の文章の後ろに更に以下のような内容を述べている。

「夫般若具有智恵、遠離、明度、清淨之五義。不可正以智恵翻之耶。答、玄云、今謂不然。釋論乃明不可稱義、非不可翻也。」²¹²

（夫れ般若は具に智恵、遠離、明度、清淨の五義有り。正として智恵を以てこれを翻すべからざるや。答う、玄に云わく「今然らずと謂う。釈論に乃ち義を称すべからず、翻すべからざるに非ざるを明かすなり。）

この文章の内容から、珍海は般若の名称を解釈する際、吉蔵のような慧、智、智慧という三つの方面から有翻の意義を論述するではなく、智恵（慧）、遠離、明度、清淨という五義に対して、智恵（慧）をもって正翻とすることができ、両者の慧に対する理解は小異があることが分かった²¹³。

また、十対の二智は以下のものである。

「方便者、是善巧之名。此義多門、今略論十對。

一者、直照空有、名爲般若。行空不證、涉有無著、故名方便。

二者、照空爲實、涉有爲方便。

三者、以內靜鑒爲實、外變動爲權。

四者、般若爲實、五度爲方便。

答。慧爲正翻。餘皆義立」『大正藏』卷三十八. pp. 876c17-877a16

²¹² 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十. p. 255b12-15

²¹³ 珍海は『大乘玄問答』第八卷において「問。有人意云。般若多義不可正翻爲慧。云云。大師許之耶。答。今謂。不然。云云。問。釋論云。般若定實相。甚深極重。智慧輕薄。故不能稱於般若。云云。故不可以智及慧翻之。如何答。玄云。釋論乃明不可稱義。非不可翻。云云。玄云。問。稱與翻何異。答。稱則天竺已明。翻則來於震旦變彼爲此。前後不同義門各異。又論云。般若定實相故不可稱。不言多含故不可稱。故此釋爲謬矣。文又云。何名甚深極重。答。夫論可稱則不名極重。良由極重故不可稱。論主欲釋經不可稱義。故云重也。○非如重物之重。乃是甚深。故云重耳。○般若體絕緣觀。智慧名主於觀。云云。又云。般若體絕智慧。何故立智慧名耶。答。不知何以同之。強名智慧。雖立智慧之名。實不稱般若之體」と説き、般若有翻について、智と慧は共に使えなく、智慧を翻訳するのは強いて名を立つことを述べているのである。『大正藏』卷七十. p. 609c9-23

五者、照空爲實。知空亦空、即能不證空、故名爲權。

六者、知身苦空無常故名爲實。而不取滅、名爲方便。

七者、直知身病、非故非新故爲實。而不厭離、稱爲方便。

八者、淨名託迹毘耶、不疾之身爲實。現病之迹爲權。

九者、以上照空有二爲方便。照非空有不二爲實。非空非有、即一實諦。照一實諦故名爲實。雖非空有、而空有宛然。不動不二、善巧能二、故名方便。

十者、空有爲二、非空有爲不二。照二與不二皆名方便。照非二非不二、淨名杜言、釋迦掩室乃名爲實。」²¹⁴

（方便とは、是れ善巧の名。此の義の門は多き、今略に十対を論ず。

一には、直ちに空有を照らし、名づけて般若と爲す。空を行じ証せず、有に渉るも著する無きが故に方便と名づくなり。

二には、空を照すを実と爲し、有に渉るを方便と爲す。

三には、内に静鑒するを以て実と爲し、外に変動するを權と爲す。

四には、波若を实と爲し、五度を方便と爲す。

五には、空を照すを実と爲す。空は亦た空なりと知るを即ち能く空を証せず、故に名づけて權と爲す。

六には、身の苦、空、無常を知るが故に名づけて実と爲す。而して滅を取らざるを名づけて方便と爲す。

七には、直ちに身の病を知り、故に非ず新に非ざるが故に名づけて実と爲す。而して厭離せざるを称して方便と爲す。

八には、淨名迹を毘耶に託し、不疾の身を実と爲す。病を現ずる迹を權と爲す。

九には、以上空有の二を照すを方便と爲す。非空有の不二を照すを実と爲す。非空非有、即ち一実諦なり。一実諦を照らすが故に名づけて実と爲す。非空有と雖も、而も空有宛然たり。不動不二、善巧能く二なり、故に方便と名づく。

十には、空有を二と爲し、非空有を不二と爲す。二と不二を照すを皆方便と

²¹⁴ 吉藏『淨名玄論』『大正藏』卷三十八. pp. 878b15-879a3 また、『大乘玄論』の中に同じ内容を述べている。『大正藏』卷七十. pp. 50c21-51b11

名づく。非二非不二を照し、淨名言を杜り、釈迦室を掩うを乃ち名づけて実と為す。)

十対二智は般若の体と用の体現とも言えるのである。『淨名玄論』の第五巻では、般若を漚和の体とし、漚和を般若の用とすることを述べている。体は実相に働き、用は諸法を照らすと説くのである²¹⁵。十対二智は正しく前述した漚和を方便と称することに対する解釈であり、漚和を方便と翻訳することは即ち善巧の応用である。吉蔵はこのような体と用との関係を金物の本体と金の上に彫刻した絵図に譬えるのである²¹⁶。

以上述べた五時二智、及び般若に対する有翻と無翻に関する解釈は三論宗教理思想の重要な部分である。珍海は自身の著作において五時二智の義を引用するほか、十対二智の引用はそのまま吉蔵の解釈を踏襲して、二智の教義を明らかにする²¹⁷。

²¹⁵ 吉蔵は『淨名玄論』第五巻において「問。般若照諸法實相。漚和照實相諸法。則般若不照諸法。漚和不照實相。將非限局聖心失無礙妙用。答。般若爲漚和之體。漚和是般若之用。體鑒實相。用照諸法。故開此二門。智無不圓。照無不盡」と述べている。『大正蔵』卷三十八. p. 883b22-26 また、『大乘玄論』第四巻の中では同じ内容を述べている。『大正蔵』卷四十五. p. 55c9-13

²¹⁶ 吉蔵は『淨名玄論』第四巻において、般若に関する体と用との関係について「今説方便用。故知般若爲體。方便爲用。論又云。般若與方便。本體是一。而隨義有異。譬如金爲種種物。此則明權實一體。約義分二。金喻般若之體。金上之巧譬於方便。方便爲用」と述べている。『大正蔵』卷三十八. p. 881b26-c1 また、『大乘玄論』第四巻の中では同じような内容を述べている。『大正蔵』卷四十五. pp. 53c28-54a3

²¹⁷ 珍海は『三論玄疏文義要』第四巻の中に、十対二智について、吉蔵の解釈を引用して次のように述べている。「十對門。問。般若方便二道。云何分別乎。答。略有十對。云云。二智云。一者。直照空有。名爲般若。行空不證。涉有無著。故名方便。此之照巧。更無二體。雖巧而照。故名爲實。雖照而巧。故名方便。云云。問。爾者空有二境。俱得稱眞耶。答。玄云。能照之智。皆名實智。所照之境。同稱實境。云云。問。既有眞俗。云何皆實境耶。答。玄答云。是如實智境。故名實境。從智受名。又實是眞俗。非妄稱之。當體名實。云云。二智義云。二者。照空爲實。涉有爲方便。如釋論云。般若將入畢竟空。方便將出畢竟空。○雖復照空。即能涉有。此用既巧。名爲方便。云云。問。若爾雖復照有。即能鑒空。此用亦巧。應是方便乎。答。玄答云。此照雖巧。但實智爲體。故隱其巧名。與其實體稱也。云云。二智義云。三者。以內靜鑒爲實。外反動爲權。問。此義與前何異。答。此明若照若巧。靜鑒之義。若名爲實。以外反動。故名爲權。云云。又云。四者。波若爲實。五度爲方便。所以然者。波若爲空解。空解故名實。五度爲有行。有行故名權。云云。問。此與前何異耶。答。玄云。前照空照有。皆是智慧。故以二解分權實。今約解行。以開二門。空解爲實。有行爲權。與上異也。云云。又云。五者。照空爲實。知空亦空。即能不證空。故名爲權。初觀心未妙故。但能照空。既轉精巧。即知空亦空。既知空亦空。而不壞假名。即能涉有。始終論之。猶是一惠。約巧未巧。故分權實。云云。問。此與第二門何異耶。答。但知空而涉有。

三 二智と二諦について

二智と二諦との関係に関する先行研究の結果として、平井俊榮氏は『中国般若思想史研究—吉蔵と三論学派—』の中に、「二智が二諦と並んで吉蔵教学において極めて重要な主題であったことを意味するものである」と指摘された。しかも、平井氏が本書中において吉蔵の『中観論疏』²¹⁸の内容を引いて「八不中道が理であり真俗二諦が教である。そしてこの教について更に体用を分つと、教の体が二諦であり、教の用が二智であるという」と解釈された。

二諦の教説によって二智を発生するのは、仏の言教の立場から説かれた体と用の関係である。前述した珍海における二諦、中道、二智の様態からして厳密に言えば、二諦と中道は共に八不に基づいて建立し、二智は二諦の境により発生するのである。つまり、二諦という教説によって悟ったのは中道不二の理であり、更にこの理によって生じたのは二智である。二諦、中道、二智という三つの教義はいずれも欠くことができないのである。

また、教の体と用から見れば、吉蔵は理、智、教という三つに分けられ、理と智は共に教の根本とするのである。即ち、

「若次第論之、不出三法。一理、二智、三教。理能發智。則理爲智本。智能說教。則智爲教本。今以理智對教、故理智皆是其本。」²¹⁹

（若し次第に是れを論ぜば、三法を出ず。一には理、二には智、三には教なり。理は能く智を發す。則ち理を智の本と為す。智は能く教を説く。則ち智を教の本と為す。今理と智を以て教に対し、故に理と智は皆是れ其の

此知空亦空。而能涉有。故爲異也。又六者。知苦無常。故名爲實。而不取滅。名爲方便。云云。問。此與前何異耶。答。前門空有相對以明。此中實知過患。而不欲滅。安身所疾。故爲異也。又云。七者。直知身病非故非新故名爲實。而不厭離稱爲方便。此但就有一門。分權實。云云。又云。八者。淨名託跡毘耶。不疾之身爲實。現病之迹爲權。此據虛實之義。以明權實也。云云。又云。九者。以上照空有二爲方便。照非空有不二爲實。非空非有。即是實諦。照一實諦。故名爲實。文。又云。十者。空有爲二。非空有爲不二。照二與不二。皆名方便。照非二非不二名實。淨名杜言。釋迦掩室。乃名爲實。權實多門。略開此之十對。即一途次第。並有經論。可隨文用之。云云」『大正藏』卷七十. pp. 255b25-256a19

²¹⁸ 吉蔵は『中観論疏』の中に「初明教體。即是二諦。次明教用。即是二智」と述べている。『大正藏』卷四十二. p. 9b19-20

²¹⁹ 吉蔵『淨名玄論』『大正藏』卷三十八. p. 872b12-15

本なり。)

である。つまり、不二の理によって智を発生することができ、この不二の理は即ち智の根本とする。更に発生した智によって真俗の二教を説くことができ、この智を即ち教の根本とするのである。理と智は共に教に対して説かれたものであるが、極言すると理こそ最も根本であると言える。珍海はこのような教義を受け、中道不二が理であり、権実二智が智であり、真俗二諦が教であるという。

まとめ

第四節では吉蔵における五種二智、及び珍海における二智義の継承について検討した。

吉蔵における五種二智の様態は以下のようである。

三蔵教の二智において、初めに小乗人の徳を賛嘆するため、世俗の法を体得することを権智とし、四諦の法を体得することを実智とする。

般若教の二智において、照空のことを実智といい、鑒有のことを権智という説を批判して、般若教の二智は、実は諸大乘教に貫いていると述べた。

淨名教の二智において、静鑒と動用を自行と化他の立場から論じることができ、仏菩薩は内に自分の功德を修行し、外に化他の方便法を行うという。実智を証得することをもって自行をとし、権智である方便法を施すことを化他とする。そして、このような教法は一切の大乘教に通じ、淨名教だけに属するとは言えないと明らかにした。

法華教の二智において、三一二智、空有二智、動静二智、常無常二智という四種類の二智はいずれも『法華經』の中に説かれた二智であるし、法華教だけに属するではないという。

涅槃教の二智において、吉蔵が因果の不同から、大品教、淨名教、法華教を因位の教説とし、常無常という二智は妙覺の果位とすることが分かった。

五種二智はいずれも教判の立場から、五時説に対する批判である。吉蔵が五種二智を解釈する目的は、諸大乘經は顯道無異であり諸經平等の意味を表すた

めである。

また、珍海の二智義はほとんどそのまま吉蔵の解釈を踏襲して、二智の教義を明らかにする。珍海が吉蔵の五種二智の教学を受け入れ、五時という教判は漸教の上に基づく浅い教法から深い教法に至るまでの「自浅至深」の教説であるという。五時教法の中では各々違う二智の義があると雖も、顕道の方面においては同じであり、五時四宗のような判釈は諸經典の文に背き、元の教義を損なうのであると主張したことが分かった。

但し、珍海が般若を解釈する時、智慧を般若の正翻とすることに対して、吉蔵が慧を般若の正翻とする。般若の正翻について両者において小異があることが分かった。

更に、二諦の教説によって二智を発生するのは、仏の言教の立場から説かれた体と用の関係であることを明らかにした。つまり、二諦という教説によって悟ったのは中道不二の理であり、更にこの理によって生じたのは二智である。以上、二諦、中道、二智という三者の関係を明らかにした。

小結

本章では、珍海の著作『大乘正観略私記』を紹介した上、珍海における中道思想について検討を行った。珍海の中道思想は吉蔵から継承し、四重二諦、十種二諦、三種方言という三つの教説を重視して、二諦中道が仏果を包摂し、更に二諦中道の理を用いて無礙の法門を解釈したのである。具体的内容は以下の通り示す。

第一節において、珍海の『大乘正観略私記』に関する書誌情報を紹介した上、この私記の内容概観を簡略に示した。

書誌情報については、『大正蔵』テキストに依用された『大乘正観略私記』の写本は二つある。一つは、快盛により天文十二年（1543）十月十三日に南都東大寺の観音院において写され、現在高野山正智院に所蔵されている原写本である。もう一つは、元文三年（1738）に写され、現在薬師寺に所蔵されている対照本である。

内容構成については、大意門、諸門分別、総結帰宗という三つに分けられ、中道正観の趣旨を論述することが分かった。即ち、

第一の大意門は、無所得をもって中道の正理とするのである。

第二の諸門分別は、全部十門に分けられ、内容は立教門、師宗承習、宣通大概、立宗本教、理内理外、法門名数、遣蕩究竟、道門宗、仏道遠近、大乘無礙門というのである。

第三の総結帰宗は、無所得である中道の正理を最後の宗帰として総結したのである。

第二節において、珍海が二諦は即ち中道であり、『中論』の趣旨であるということが分かった。珍海が八不の理は即ち中道であり、正観は八不中道の根本であることを明らかにした。

また、十番四重二諦について珍海が吉蔵の『二諦義』と『大般涅槃經疏』の内容を引用して、有を俗諦とし、空を真諦とする。これは第一重の二諦である。また、空有を共に俗諦とし、非空非有を真諦とする。これは第二重の二諦である。また、二不二を俗諦とし、非二非不二を真諦とする。これは第三重の二諦である。更に第四重の二諦は前の三重の二諦をすべて俗諦とし、言忘慮絶を真諦とする。なお、教二諦、於二諦、人二諦、法二諦、事理二諦、如実知不如実知二諦、続不続二諦、生死涅槃二諦、因縁二諦、菩薩声聞二諦という十項を十番の二諦とする。四重二諦と十種二諦は共に教に基づき、説法の重要点は二諦にあることが分かった。

更に、中道の教学において、珍海は吉蔵の「一道清浄中道」、「世諦中真諦中道」、及び「非真非俗中道」という三種類の中道の義を受け入れ、八不の正理は中道であり、傍文は真俗の二諦であるという。更に八不は三論宗の根本として、二諦と中道の義を包摂し、二諦を教門とし、中道を理法として位置づけた。

また、珍海は法朗と吉蔵に説かれた三種方言の義を継承して、前二種の方言は破病であり、後の一種の方言は顕道であるという。しかも、三種方言は宗義を説く言葉を整える方軌と見され、毎種の方言において、世帯中道、真諦中道、二諦合明中道という三種の中道があることを明らかにした。

第三節において、珍海の『大乘正観略私記』の文章に対する分析を通して、

教と理とを同時に空觀の立場で中道不二の理を觀得することを正觀の学であるということが分かった。また、この正觀によって觀得した中道不二の理はある意味上の仏果とも言えると考えられた。更に、正觀は八不を基礎として成り立ち、二不二、不二二の中道思想の体现であると明らかにした。なお、珍海は無所得の立場に立って、教と理は広と深の二重の意義があると述べ、広の場合は、吉藏に批判された毘曇、成実など他宗派の名教を包摂して、一切の名教を学習すべきであるという。深の場合は、自性がない畢竟空である無所得を学ぶことを目指すべきであるということが分かった。広と深の両者を共に把握するのは真実の無所得であると珍海が強調し、因縁仮説の二諦の理は一圓の中道義であり、究極的な宗旨であることがわかった。

第四節において、吉藏における五種二智、及び珍海における二智義の継承について検討を行った。

吉藏における五種二智の様態は以下のようである。

三藏教の二智において、初めに小乗人の徳を賛嘆するため、世俗の法を体得することを権智とし、四諦の法を体得することを実智とする。

般若教の二智において、照空のことを実智といい、鑒有のことを権智という説を批判して、般若教の二智は、実は諸大乘教に貫いていると述べた。

淨名教の二智において、静鑒と動用を自行と化他の立場から論じることができ、仏菩薩は内に自分の功德を修行し、外に化他の方便法を行うという。実智を証得することをもって自行をとし、権智である方便法を施すことを化他とする。そして、このような教法は一切の大乘教に通じ、淨名教だけに属するとは言えないと明らかにした。

法華教の二智において、三一二智、空有二智、動静二智、常無常二智という四種類の二智はいずれも『法華經』の中に説かれた二智であるし、法華教だけに属するではないという。

涅槃教の二智において、吉藏が因果の不同から、大品教、淨名教、法華教を因位の教説とし、常無常という二智は妙覺の果位とすることが分かった。

五種二智はいずれも教判の立場から、五時説に対する批判である。吉藏が五種二智を解釈する目的は諸大乘經は顯道無異であり諸經平等の意味を表すため

である。

また、珍海の二智義はほとんどそのまま吉蔵の解釈を踏襲して、二智の教義を明らかにする。珍海が吉蔵の五種二智の教学を受け入れ、五時という教判は漸教の上に基づく浅い教法から深い教法に至るまでの「自浅至深」の教説であるという。五時教法の中では各々違う二智の義があると雖も、顕道の方面においては同じであり、五時四宗のような判釈は諸經典の文に背き、元の教義を損なうのであると主張したことが分かった。

但し、珍海が般若を解釈する時、智慧を般若の正翻とすることに対して、吉蔵が慧を般若の正翻とする。般若の正翻について両者において小異があることが分かった。

更に、二諦の教説によって二智を発生するのは、仏の言教の立場から説かれた体と用の関係であることを明らかにした。つまり、二諦という教説によって悟ったのは中道不二の理であり、更にこの理によって生じたのは二智である。二諦、中道、二智という三者の関係を明らかにした。

第五章 珍海の教判と三論宗教理思想の特徴

周知のように、三輪説は吉蔵が『法華經』の趣旨を明らかにする目的から、『法華遊意』において確立した教判説である。仏が初めて成仏した時、高位の菩薩のために『華嚴經』を説き、これを根本法輪という。しかし、機根が鈍い人はこの教えを理解できないため、仏は一仏乗を三乗に分けて法を説いた。これを枝末法輪という。四十余年の三乗の教化によって衆生には大乘の機根が熟したことを見据えて、仏は『法華經』を説く。これを摂末歸本法輪という²²⁰。

吉蔵は根本法輪と摂末歸本法輪に対応する經典をそれぞれ『華嚴經』と『法華經』とする。しかし問題なのは、枝末法輪の内容に関する理解である。

先行研究によれば、菅野博史氏は『中国法華思想の研究』「[第二篇・第二章・第三節] 吉蔵における四調柔」の中で、「四調柔は『華嚴經』から『法華經』までの經教を四種に整理したものであり、」「三種法輪説において、小乗ばかりではなく、大乘をも枝末法輪と規定される」と指摘された²²¹。四調柔とは、二乗の機根を調柔するために設けた人天教、二乗教、自教、他教の四教をいう。つまり、根本法輪と摂末歸本法輪にそれぞれ対応する『華嚴經』と『法華經』以外の諸大乘經を伝統教説と共に枝末法輪に置き、人天教と二乗教は大乘に入る方便とし、自教と他教は『法華經』に入る方便と位置づける。すなわち、枝末法輪の内容について、この四調柔による四教を設けて、一乗に入らせるための方便として枝末法輪の内容を明確にしたのである。

吉蔵の場合は、仏の一代の教説を大乘と小乗の二つの教相に分け、諸經典を大乘の人のために説く菩薩藏と、小乗の人のために説く声聞藏に二分類する²²²。ただし、いずれの經典も価値を備えており、衆生を一仏乗に入らせることを目

²²⁰ 吉蔵の『法華遊意』は仏一代の説法を以下のように三種の法輪に分けている。「欲説三種法輪故説此經。言三種者、一者根本法輪。二者枝末之教。三者攝末歸本。根本法輪者、謂佛初成道、花嚴之會、純爲菩薩開一因一果法門、謂根本之教也。但薄福鈍根之流不堪於聞一因一果故、於一佛乘分別説三、謂枝末之教也。四十餘年説三乘之教陶練其心。至今法花始得會彼三乘歸於一道、即攝末歸本教也」『大正藏』卷三十四. p. 634c17-23

²²¹ 『中国法華思想の研究』春秋社. 1994. pp. 387-388

²²² 吉蔵『維摩經義疏』「法供養品」第十三に「大明佛法、凡有二藏。爲小乘人説、名聲聞藏。爲大乘人説、名菩薩藏。」とある。『大正藏』卷三十八. p. 989b27-29

的とする。この観点から、枝末法輪に位置づけられた『大品般若経』は、小乗を捨てずに大乘を教化するという經典として、大乘と小乗の人を共に一乗に入らせる經典と見なされた。

しかし、珍海は三輪説における教判に関して、三轉法輪を「傍論」と判釈し、吉蔵とは微妙に異なる見解を持つと考えられる。本章では、珍海が三輪説を「傍論」と見なした理由は何であろうか。また、三輪説を彼はいかに位置づけたのであろうか。この点を次第に考察したい。

第一節 三轉法輪について

珍海が初めて三轉法輪説に対して異議を唱えたのは『大乘正觀略私記』の中の次のような短い一文中においてである。即ち、

「一意云、三轉²²³法輪收義不盡、非正所用。此義未決、今且置之。依文推義、三轉法輪盡一代。若爾、二藏三轉並是所用。」²²⁴

（一意に云わく「三轉法輪は義を収め尽さず、正しく用いる所に非ず」と。此の義は未だ決せず、今且くこれを置く。文に依りて義を推さば、三轉法輪は一代を尽す。若ししからば、二藏と三轉並びに是れ用いる所なり。）

と述べている。三轉法輪は、いわゆる根本法輪、枝末法輪、攝末歸本法輪である。ここで注目されるのは、上に挙げた「一意云」の文である。これは引文であり、ほかの誰かが主張した見解と考えられるが、珍海が結果としてこの見解を受け入れ、それが珍海自身による三論宗の教判理解に影響を与えた可能性が高い。なぜなら、珍海による別の著作『三論玄疏文義要』²²⁵によれば、『本生心

²²³ 珍海の『大乘正觀略私記』の原文には「三輪」とあり、意味上から通じにくいので、「三轉」と改める。

²²⁴ 珍海『大乘正觀略私記』『大正藏』卷七十. p. 195c23-25

²²⁵ 珍海『三論玄疏文義要』第一卷に以下のように述べている。「師説云、三轉法輪、且依法華信解品立之。然明義不盡。晚得心地觀經士安疏、彼師評嘉祥三轉法輪云、此法華中一類、本末非佛一代、收義不盡。云云 今尋云、士安法師似相調彈嘉祥、何以爲規模哉。然師説意趣、顯三轉法輪非立教正意矣。故可云三輪元非欲收義窮盡」『大正藏』卷七十. p. 202a20-27

地観経』に注疏した士安²²⁶が吉蔵の三轉教判を「仏一代に非ず、義を収め尽くさず」として批判的に見ていたことを伝えている。士安については、詳しい記録がないため、『本生心地観経』に注疏した人とはしか知られないが、当該の文章からは、士安が吉蔵の三轉法輪説は『法華経』の信解品に基づいて成り立ったものなので、その義が『法華経』に限り、仏一代のすべての教説を包摂しえないため、通説とは言えないと見ていたことが分かる。上に挙げた『大乘正観略私記』の一文において珍海は、「一意云」として、この士安の解釈を紹介していると考えられる。

一方、上に挙げた引文に「若し爾らば、二蔵と三轉並びに是れ用いる所なり」と言っているのは珍海と推測され、「文に依りて義を推す」と言うのは、吉蔵の『三論玄義』の文に基づくと考えられる²²⁷。

吉蔵の『三論玄義』によると、『中論』を初分、中分、後分のように科段してそれぞれ大乘、小乗、大乘を明かす。珍海は科段の構成をもって三轉法輪を解釈すれば、初分は根本法輪、中分は枝末法輪、後分は摂末歸本法輪であると配当する²²⁸。『中論』は大乘の通論であり、このような科段をもって三轉法輪を解釈するならば、三轉法輪の義は『法華経』だけではなく、大乘の通説であると言える。故に、珍海は『三論玄疏文義要』の中で

「誰言三輪唯局一部。但言是傍論、非正意耳。」²²⁹

(誰か三輪は唯だ一部に局と言うや。但だ是れ傍論と言うのみ、正意に非ざるのみ。)

²²⁶ 士安に関する記載は、高麗沙門義天により編まれた「新編諸宗經藏總録卷第一」海東有本見行録上の中に、「本生心地観経疏八卷士安述」という記録があるほかは見当たらない。『大正』巻五十五. p. 117b28-29

²²⁷ 吉蔵の『三論玄義』に「論有二種、一者通論、二者別論。若通破大小二迷、通申大小兩教、名爲通論、即中論是也。故前二十五品破大迷申大教、後兩品破小迷申小教。二者別論、別破大小迷、別申大小教、名爲別論。如攝大乘論地持論等、謂大乘通論。十地論智度論等、大乘別論。(中略)問中論既通釋大小、應名大小通論、不得名爲大乘論也。答雖釋大小、但爲顯大、故是大乘論。所以然者、以初分明大乘、中分明小乘、後分還明大乘故。以是義故名大乘論耳」とある。『大正藏』巻四十五. p. 10b3-21.

また、珍海の『三論玄疏文義要』中にもその引用が見える。『大正藏』巻七十. p. 221c5-7

²²⁸ 珍海『大乘正観略私記』に「又釋中論三段、配釋三轉法輪。故知、三轉亦是通説、非局一部耶」と述べている。『大正藏』巻七十. p. 196a10-12

²²⁹ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』巻七十. p. 202b13-14

と述べており、三転法輪は『法華經』の一部に限らず、根本と枝末も含まれる。しかし、先の引文で「若し爾らば、二藏と三転並びに是れ用いる所なり」と珍海が述べたのは、「若し爾らば」という条件句の帰結を示すもので、珍海自身がそれを依用するという意味ではなかろう。その證據として、珍海は『三論玄疏文義要』において、吉藏の『大乘玄論』第五卷の教迹義を挙げて、教相の立場から吉藏の教判には三輪の義はないとし、三転法輪という教判は正意ではなく、正しい教判は二藏にあると述べる。則ち、

「製大乘玄論、立教迹一章、專明二藏、無三轉法輪義。故知、判教正在二藏。」

230

(『大乘玄論』を製し、教迹一章を立つ、専ら二藏を明かし、三転法輪の義無し。故に知んぬ、判教は正しく二藏に在りと。)

である。珍海の立場からみれば、三論宗の教判の正義は二藏にあり、傍義は三転法輪にある。吉藏の三輪説については士安のように全く反対ではないけれども、吉藏とは異なる説を持っているということである。

二藏説に正しい教判があり、三輪説はそうでないとする珍海が、教判に関して微妙に吉藏と相違する背景を考える時、『大品般若經』に対する珍海の理解は見逃せない。彼は『大乘正觀略私記』の立宗本教の段において、三論宗の所依經典を論じる中で、

「一者、論初標八不。八不雖散出諸經、而正舉二經。謂瓔珞經佛母品。涅槃經師（獅）子吼品文也。故知、正申涅槃瓔珞二經部也。

二者、以般若爲宗。故八不義云、故相傳云、中論是釋論骨髓也。四論云、玄義文亦同之。智論既解般若一部。故知、此論正解般若。

三者、一切大乘以爲論宗、此論既是大乘通論。以花首經三是之偈、顯一部大

²³⁰ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十. p. 202a15-16

乗。又釋涅槃悉有佛性。十二門論初明六義大乘、通冠諸部。」²³¹

（一には、論の初めに八不を標す。八不は諸經に散出すると雖も、而も正しく二經を挙ぐ。謂く『瓔珞經』の「仏母品」と『涅槃經』の「獅子吼品」の文なり。故に知んぬ、正しく『涅槃』、『瓔珞』二經を申ぶる部なり。（中略）二には、『般若』を以て宗と為す。故に八不義に云わく「故に相伝して云わく、『中論』は是れ釋論の骨髓なり」と。『四論』に云わく「玄義の文も亦之と同じ」と。『智論』は既に般若一部を解す。故に知んぬ、此の論は正しく般若を解す。（中略）三には、一切の大乘、以て論宗と為す、此の論は既に是れ大乘の通論なり。『花首經』の三是の偈を以て、一部の大乗を顕す。又涅槃の悉有仏性を釈す。『十二門論』の初めに六義大乘を明かして、諸部を通冠す。）

と述べる。

一の八不は諸大乘經に散見されるが、ここでは特に『大般涅槃經』「獅子吼品」及び『菩薩瓔珞經』「仏母品」を指すと解説される。

二の般若は『大品般若經』を指し、『釈論』は即ち『大智度論』であり、三論宗の所依經典の一つである。珍海は『中論』が『釈論』の骨髓であるとし、『釈論』はつまり『大品般若經』に対する解釈であるため、『大品般若經』も三論の根本にして宗帰であるとする。

三の「此論」は『中論』を指し、『中論』は『大品般若經』のみならず、『仏説華手經』²³²『大般涅槃經』をも含む大乘の通論であるとした。これは吉蔵が『三論玄義』などで述べていることの踏襲である。

²³¹ 珍海『大乘正觀略私記』『大正藏』卷七十. p. 197a29-b14

²³² 『花首經』とは『仏説華手經』のことで、三是之偈については『仏説華手經』卷三に「是心及衆縁。皆空無自性。若人如是知。終不退菩提。若法性自空。是法即無生。一切無生法。是名眞智種」とある。『大正藏』卷十六. p. 142b7-10

珍海はこれに対して、『三論玄疏文義要』の中で「今案、是心及衆縁。皆空無自性者、衆因縁生法。我說即是空也。若法自性空。是法即無生等者、亦是中道義也。衆因縁性法者、是世諦。我說即是空者、眞諦。此眞俗二諦、并是假名。若人如是知。終不退菩提者、是假名有故、空有并名假也。亦爲是假名也。即無生故、亦即是中道也。無生者中道也。故八不初云、不生且舉一句耳」と解釈している。『大正藏』卷七十. p. 248b2-9

珍海のこのような考え方は、吉蔵が『法華玄論』卷三²³³の中で、『大品般若經』と『法華經』の深淺優劣を会通するところにもよると推測される。吉蔵のこの解釈は五時四宗に対する批判として、『法華經』と『大品般若經』の優劣を相対化、即ち『大品般若經』が衆經の実相を示す点で最大の經であるのに対して、『法華經』は二乗の作仏を説くので、義において優れるとし、両經に優劣の差はないとする観点に依拠している²³⁴。吉蔵の意図は、菩薩藏と声聞藏という二藏説をもとに、『大品般若經』と『法華經』の両經を含むすべての大乘經典は顯道において異なる所がない。「顯道無異」という立場から、当時よく広く知られていた五時四宗の教判論を批判し、二藏義・三輪説を基礎とする自らの教判を提示するところにあった。

これに対して珍海は、すでに見たように、『中論』は広く諸大乘經を解釈した上で、『大品般若經』をもって『大智度論』を含む広義の三論宗の根本にして終極の經典と位置づけた。

さらに、前述した珍海の般若教説における位置づけについては、『大乘正觀略私記』の中で以下のように敷衍している

「問。於三義中以何爲正。」²³⁵

(問う、三義の中に於いて何を以て正と爲すや。)

答えとしては以下のようなものである。

「答、初義即是第三之支條。但以二義論其宗趣。或但般若或通諸部。」²³⁶

(答う、初義即ち是れ第三の支条なり。但だ二義を以て其の宗趣を論ずるのみ。或いは但だ般若のみ、或いは諸部に通ず。)

²³³ 吉蔵は『法華經』と『般若經』の両經の深淺優劣の価値については、「第一文云波若於十種經中最大者、然檢衆經之極以實相爲宗、統群聖之心用妙惠爲主。(中略)第二文明法華是祕密法明二乗作佛、波若非祕密法不明二乗作佛。故波若淺而法華深者。(中略)三者二經無異」と述べている。『大正藏』卷三十四. pp. 384c19-386a23

²³⁴ 平井俊栄『中国般若思想史研究』を参照。pp. 484-487

²³⁵ 珍海『大乘正觀略私記』『大正藏』卷七十. p. 197b16

²³⁶ 珍海『大乘正觀略私記』『大正藏』卷七十. p. 197b16-18

つまり、前述した第一者と第三者は同じ八不を説いている『中論』を指し、第二者は、般若の教説は大乘の始めと考え、三論宗の宗帰とするように考えたであろう²³⁷。

一方、吉蔵においては、般若の教説は顕に菩薩を教化し、秘密に二乗を教化する作用がある²³⁸こととすることに対して、珍海は独自の観点をもって『三論玄疏文義要』の中で

「若依此文、般若等是亦本亦末教也。既爾、不可以本末而分教門、有相濫故。今詳之、初後同是根本、不可強分爲二教、其理實不殊故。然爲明法華故、且對華嚴分之。非汎爾通説矣。又以本末分教、與大小分教其義雖相似、然大小無濫、本末有濫。故知、三輪非判教通説也。」²³⁹

（若し此の文に依らば、『般若』等是れ亦本亦末の教なり。既にしからば、本末を以て教門を分けるべからず、相濫有るが故なり。今これを詳するに、初・後は同じく是れ根本なり、強いて分かちて二教と為すべからず、其の理と実殊らざるが故なり。然るに法華を明かさんが為の故に、且く華嚴に対してこれを分かち。汎爾の通説に非ざるなり。又本末を以て教を分かち、大小より教を分かちに其の義相似ると雖も、然も大小に濫無し、本末に濫有り。故に知んぬ、三輪は判教の通説に非ざるなりと。）

²³⁷ 珍海の『大乘正觀略私記』に「故中論並十二門發初、引般若經釋論宗歸。中論疏釋引般若文、既有六義。一者波若大乘始故。二者諸大乘中最深大故。三者般若正顯實相、洗有所得、開發正觀滅諸障故。四者江南大令師爲得道經故。五山中大師云、論正解般若之心故。六者趣引一文不應難也。＜略抄＞初後各一證通諸經、中間四證正是般若。雖是二義共應用之。以般若爲正、以一切成之。又一切部雖是所用、而般若義大。由此應知、二義一途」とある。珍海はこの六の義をもって『大品般若經』は一番深く、また大乘の始めの教であると判釈する。『大正藏』卷七十. p. 197b18-28

²³⁸ 『淨名玄論』卷七に顕密に菩薩と声聞を教えることについては、以下のように言う。「次就菩薩聲聞、開二種四句。一顯教菩薩、非密化二乘。即華嚴教是也。初成道時、大機已熟、故顯教之會無二乘衆。又大機未成、故不密化二乘。顯教二乘、不密化菩薩、即三乘教。小機已成、故顯教之。菩薩大器不須小化。三顯教菩薩、密化二乘。即般若淨名等經。菩薩大機已成、故顯教之。二乘小執當移大機遠動、是故密化。命說付財即其事也。四顯教菩薩、顯教二乘。即法華教。菩薩聞是法、疑網皆已除、謂顯教菩薩。千二百羅漢、悉已當作佛、即顯教二乘也」『大正藏』卷三十八. p. 900b1-11

²³⁹ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十. p. 209b14-20

というのである。亦本亦末は、『大品般若経』の巧用において菩薩のために説く以外、声聞の人にも説くということである。吉蔵は『大品般若経』を枝末法輪に属せしめたけれども、珍海は教相の上で、大・小だけに分ける立場に立ち、根本法輪を大乘、枝末法輪を小乗と判釈して、『大品般若経』を大乘のみと判釈する意見を示している。

まとめ

以上、珍海は教相において吉蔵と同じ立場に立ち、仏一代の教説を大乘と小乗の二つに分けられ、正しい教判は二蔵にあるとし、根本法輪、枝末法輪、攝末歸本法輪という三法輪の説を傍論とすることが分かった。

また、珍海は般若経の教説は大乘における始めであることや、諸大乘の中においては最も深い經典であるなどということから、広義の三論宗の立場に立ち、『大品般若経』を終極の經典であるとし、三論宗の正義と位置づけた。しかも、『大品般若経』を判釈する時、珍海は教相の点から大乘と小乗の二面を考えて、『大品般若経』を大乘のみに属しめる意向が見られ、諸大乘経を枝末法輪に帰結させることは濫用であることを明らかにした。

第二節 教迹と論迹に関する解釈

珍海における教迹と論迹に対する理解は吉蔵の『大乘玄論』と『淨名玄論』に説いている言教に対する理解、及び經典・論書に対する解釈に基づいて成り立ったと考える。

一 教迹について

珍海の初期の著作『大乘正観略私記』の中では「教迹義」と「論迹義」を単独に例挙して論述する文章が見えないが、「如教迹義」、「見論迹義」のような内容と割注があり、彼は「第二諸門分別」の「第一立教門」において、以下のよう内容を述べている。

「問、今宗立教如何。答、立二教、謂聲聞藏菩薩藏也。具有十門二教。如教迹義。又依法華經、立三轉法輪。如中論疏明。一意云、三轉²⁴⁰法輪收義不盡。非正所用。此義未決、今且置之。依文推義、三轉法輪盡一代。若爾、二藏三轉並是所用。又依五相略經、攝大乘論、明三時教、與法相宗本同釋異。若依智光、亦立三時。與嘉祥宗亦不相違。此等廣釋如文義要。」²⁴¹

（問う、今の宗の教を立つるは如何。答う、二教を立つ。謂く、聲聞藏と菩薩藏なり。具さに十門と二教有り。教迹義の如し。又『法華經』に依り、三轉法輪を立つ。『中論疏』に明かすが如し。一意に云わく、三轉法輪は義を收め尽さず。正しく用いる所に非ず。此の義は未だ決せず、今且くこれを置く。文に依りて義を推さば、三轉法輪は一代を尽す。若ししからば、二藏と三轉は並びに是れ用いる所なり。又『五相略經』と『攝大乘論』に依り、三時教を明かし、法相宗と本は同じく、釈は異なる。若し智光に依らば、亦三時を立つ。嘉祥宗と亦相違せず。此れ等の広釈は『文義要』の如し。）

即ち珍海が教迹に述べたように、声聞藏と菩薩藏の二藏教を判釈して、吉藏と同じ立場に立ち、立教の根本を表した。教判の正義は二藏にあり、傍義は三轉法輪にあると明らかにした。これは珍海によって『大乘正觀略私記』においての解釈である。更に教迹の本について、珍海は『三論名教抄』の第十四卷の中に、

「教迹義。教者、諸佛、菩薩所説言音、名字、句等。墨書、經卷、及形像佛等。凡表眞理示人、並是教迹。」²⁴²

（教迹義。教とは、諸の仏、菩薩の言う所の言音、名字、句等なり。墨書、經卷、及び形像の仏等なり。凡そ眞理を表して人に示すは、並びに是れ教迹なり。）

²⁴⁰ 大正藏經テキストには「三輪法輪」とするが、通常の場合「三轉法輪」のほうが通じやすいので、今改めた。

²⁴¹ 珍海『大乘正觀略私記』『大正藏』卷七十. p. 195c21-29

²⁴² 珍海『三論名教抄』『大正藏』卷七十. p. 817a24-26

と述べている。つまり、教は言葉によって表したものだけではなく、真理を表せる書物、経巻、仏像のような形があるものも教である。珍海のこのような観点は吉蔵の『大乘玄論』第五卷の「教迹義」の「二感應門」によって説かれたと考える。吉蔵は『大乘玄論』の中に、

「佛滅度後、有形像及經書。此名表應、非爲正應。所以然者、以丈六及言教、觀機而現、既其應機。應謂之正應、衆生見聞之後、故造像表其所見、書寫傳其所聞。既有由衆生、非正由佛。故爲表應、非正應也。」²⁴³

(仏滅度の後、形像及び經書有り。此れを表應と名づけ、正應と爲すに非ず。然る所以は、丈六及び言教を以て、機を觀じて現ず、既に其れ應機なり。應はこれ正應と謂い、衆生は見聞の後、故に像を造り其の所見を表し、書寫して其の所聞を伝う。既に有ること衆生に由る、正に仏に由るに非ず。故に表應と爲し、正應非ざるなり。)

と述べており、機に従って法を説くことを正應とし、言教を受けた衆生は、また仏像を造ったり經書を写したりすることを表應とするのである。

既に前章述べたように、仏が衆生の機根に赴いて説かれた法は真俗二諦の教法である。したがって、正應の應は「應衆生」ということといい、衆生は真俗二諦の教法を聞いて仏像を造ったり經書を写したりすることによって、更に正法を表す。それでは、正應と表應との関係は、二諦の教説によって仏像や經書などのような実物を造るという。前章に述べた二諦と二智との関係は、真俗二諦の教説によって二智を發生するという。両方とも二諦教によって説法すると雖も、所生した表應と二智とは少し相違する。

珍海は『三論名教抄』の第十四卷において教体を論述する時、まず吉蔵の『淨名玄論』第六卷の内容を挙げて、

「非但取説義爲教、經中明六塵皆是教。問、若爾、境教何異。答、此因縁有

²⁴³ 吉蔵『大乘玄論』『大正藏』卷四十五. p. 66b24-28

無、可兩望論之。發智即境、能開不有不無、不二理、即是教也。此據佛不說自有境教也。」²⁴⁴

(但だ説く義のみを取りて教と為すに非ず、經の中六塵は皆是れ教なりと明かす。問う、若ししからば、境と教は何ぞ異なるや。答う、此れ因縁有無なり、両ながら望んで之れを論ずべし。智を発するは即ち境、能く不有不無、不二の理を開く、即ち是れ教なり。此れは仏説かざるに自ずから境教有るに據るなり。)

と述べている。また自釈して、

「教有二種、一者、説教、二者、境教。此約教諦言之。是言説之教諦、表理之教諦也。今此教迹中、亦具明之。故有淨土門意、明淨土塵、皆令衆生悟解於理。故在別□²⁴⁵表應亦爾。以形像表眞佛、經喻表言説及義理。故爲教也。」

²⁴⁶

(教に二種有り、一には、説教、二には、境教なり。此れ教諦に約してこれを言う。是れ言説の教諦、表理の教諦なり。今此の教迹の中、亦た俱にこれを明かす。故に淨土門の義有り、淨土の塵を明かし、皆衆生をして理を悟解せしむ。故に別通、表応に在るも亦た爾なり。形像を以て眞仏を表し、經喻以て言説及び義理を表す。故に教と為すなり。)

という。

吉藏においては、言説した二諦の教と六塵に属する表応の教は共に教に包摂され、両方とも教という。但し、二諦と二智は因縁有無に基づいて成り立った

²⁴⁴ 珍海『三論名教抄』『大正藏』卷七十. p. 817b14-18

²⁴⁵ 『大正藏』テキストの中、珍海の『三論名教抄』に「故在別□表應亦爾」と、一文字の脱字がある。吉藏の『大乘玄論』「教迹義」を対照して調べると、その内容は「一釋教不同門」、「二感應門」、「三淨土門」に分けられ、表応の意は第二の感應門において述べており、通別淨土については第三の淨土門において述べている。珍海における教迹義の解釈は吉藏の『大乘玄論』「教迹義」を貫くと考えられ、脱字のところは淨土門において論じられた通別淨土のことを指すべき、元には「故在別通表應亦爾」と推測される。

²⁴⁶ 珍海『三論名教抄』『大正藏』卷七十. p. 817b18-24

のである。二諦の教説によって発生した智は権実である境智であり、悟った理は不二の理である。即ち二不二の関係である。

珍海においては、言説の教は表応であり、境教は顕理であるという。吉蔵と同じ立場に立って言教と境教は共に教迹とする。

また、吉蔵に説かれた因縁有無の境教は八不義と空義に基づいて成り立っているのである。八不は即ち不生であり²⁴⁷、空は即ち諸法無自性ということである²⁴⁸。不生の義及び無自性の空義は、つまり中道であり一道である。そして上に挙げた「發智即境、能開不有不無、不二理、即是教也」という吉蔵の文章の意味は、真俗の二諦によって二智を起こし、この起こした二智は不二の理を照らすことができるのである。その故に、最初の真俗の二諦は直ちに不真不俗の不二の境に転じ、即ち境教であるという²⁴⁹。

しかし、以上述べたように、教、理、智、境という教説を八不義と空義に基づいて説くとするならば、三論宗の教義はあくまで偏空の境地に落ちやすいと思われる。そのために珍海は『三論玄疏文義要』の第二巻において、

²⁴⁷ 羅什訳『中論』の中に「生亦不滅。不常亦不斷。不一亦不異。不來亦不出。能說是因縁。善滅諸戲論。我稽首禮佛。諸說中第一。問曰。何故造此論。答曰。有人言萬物從大自在天生。有言從韋紐天生。有言從和合生。有言從時生。有言從世性生。有言從變生。有言從自然生。有言從微塵生。有如是等謬故。墮於無因邪因斷常等邪見。種種說我我所。不知正法。佛欲斷如是等諸邪見。令知佛法故。先於聲聞法中說十二因縁。又爲已習行有大心。堪受深法者。以大乘法說因縁相。所謂一切法不生不滅不一不異等。畢竟空無所有」と説いている。『大正蔵』卷三十. p. 1b14-27

²⁴⁸ 羅什訳『中論』の中に「衆因縁生法。我說即是無。亦爲是假名。亦是中道義。未曾有一法。不從因縁生。是故一切法。無不是空者。衆因縁生法。我說即是空。何以故。衆縁具足和合而物生。是物屬衆因縁。故無自性。無自性故空。空亦復空。但爲引導衆生故。以假名說。離有無二邊故名爲中道。是法無性故不得言有。亦無空故不得言無。若法有性相。則不待衆縁而有。若不待衆縁則無法。是故無有不空法」と説いている。『大正蔵』卷三十. p. 33b11-21

²⁴⁹ 吉蔵は『大乘玄論』の第五巻において「若菩薩稟二諦教發生二智。教轉名境。境是能生。智是所生。箇即是就境智明能所也（中略）稟二諦教發生二智。教轉名境。中境發生觀智。是故初表中境。次表觀智。中觀既興論名得起。中境發生觀智。用此觀智。能研詳往復。是故名論。故言中觀論」と述べている。『大正蔵』卷四十五. p. 73b7-c22

また、『二諦義』中巻において「以二智照空有。空有則名境。說空有義表一道。即名教。境即能所。教即所能。教能表道故。教是所能。境是所照故。境是能所。所照名境。能表爲教。故教諦屬境攝也。問。若爾。從來那得云。縁稟二諦教。生智之時。教轉名境耶。解云。此不相關。前是能化。後是所化。此凡經兩過轉。前境轉爲教。後教轉爲境。何者。如來二智照名爲境。次說表一道。則轉名教。所化縁稟此教。識教悟理生智。教轉名境。此則教諦。或名境或名教也」と述べている。『大正蔵』卷四十五. p. 97b4-13

「問、今宗意、唯空性實、不空假因縁法歟。答、亦得空之也。問、因縁世諦、是諸佛菩薩後得智所觀之境、不可爲無。同於妄情所立性實法、如何亦空之。若強言空、即二智不得成。由此道理、法相大乘云依他俗諦。＜因縁世諦＞但是假有、不可爲無。若言爲無、便成邪見。撥無因果。云云。爾者說因縁即空、如何脱邪見之過耶。答、論四諦品引經云。＜華首經也＞衆因縁生法、我說即是空。云云。既言即空、何²⁵⁰滯定有邪耶。彼言假有、雖捨實有執、偏說有隔空、還執定有、覆性空也。奇哉。自言假有、而迷實空。宜依此理迷改本計。問、經言因縁即空者、世諦不離眞諦故言即空。空是眞諦、非世諦。自空眞諦離相、二空所顯、且說爲空。良以、眞俗互相依故、得言世俗即其眞諦、故言即空、亦不相違（中略）答、空義有二門。一、破性空。謂但破執性生滅法。二者、眞空。即佛菩薩實智所照之法性也。」²⁵¹

（問う、今宗の意、唯だ性実を空するのみ、假因縁の法を不空するや。答う、亦た空を得るなり。問う、因縁の世諦、是れ諸仏菩薩は後に智を得て觀する所の境なり、無と爲すべからず。妄情より所立した性実の法に於いて同じ、如何が亦た空なるや。若し強いて空と言わば、即ち二智を成ずることを得ず。此の道理に由り、法相大乘に依他の俗諦と云う。＜因縁世帯＞但だ是れ假有、無と爲すべからず。若し無と爲すと言わば、便ち邪見を成ず。因果を撥無す。云々。爾れば、因縁は即ち空と説き、如何が邪見の過を脱するや。答う、論の四諦品に經を引いて云わく「＜『華首經』なり＞衆因縁生法、我即ち是れ空なりと説く」と。云々。既に即空と言ひ、何ぞ定んで邪有ることに滯るや。彼れ假有と言ひ、実有の執を捨すと雖も、偏り有を説き空を隔し、還って定有に執して、性空を覆うなり。奇なるかな。自ずから假有を言ひ、而して実空に迷う。宜く此の理に迷うにより本計を改む。問う、經に因縁即空と言うは、世諦は眞諦を離れざるの故に即空と言う。空は是れ眞諦なり、世諦に非ず。自ずから眞諦を空じて相を離れ、二空の顯する所、且く説いて空と爲す。良に以るに、眞俗は互相に依るが故、世俗は即ち其の眞諦と言うことを得、

²⁵⁰ 『大正藏』テキストは「可」であるが、欄外注記に「可」＝「何」とする。意味上では「何」のほうが通じやすいので、今改めた。

²⁵¹ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十. p. 233a2-23

故に即空と言ひ、亦た相違せず（中略）答う、空義は二門有り。一には、性空を破す。但だ性の生滅の法に執するのみを破すと謂う。二には、真空なり。即ち仏菩薩の実智により照する所の法性なり。）

と説く。

つまり、三論宗の場合は空性を実とし、因縁生滅の性に執着することは性空であり、まだ空というものが存在しているので、破除すべきであるという。なお真空であるとするならば、これは真俗二諦の仮名によって起こした智なので、因縁の仮名を壊せずに不二の理を照らすことができ、真空というのである。性空と真空は主として唯識の三性三無性に対する論駁であり、三論宗の教述においても重要な命題である²⁵²。

二 論述について

本項において、珍海における論述に対する理解を検討したい。

まず、珍海は『大乘正観略私記』の中、論述について以下のように述べている。

「興皇講論文、開序以顯師宗。〈見論述義〉如言學問之體、要須依師承習。又云、欲示關河相傳、師宗有在等、其間得失思而可辨。師資相傳具見餘文。」

253

（興皇は論文を講じ、序を開き以て師宗を顕す。〈論述義を見よ〉学問の体

²⁵² 三性三無性に対する論駁について、珍海は『三論玄疏文義要』の第二巻において「問。他宗學者。問云。嘉祥宗義。因縁生義邊。名世諦。若言即空者。即如性有法。畢竟都無。歟凡夫二乘等所取名性有法也。答。不爾。不壞假名。而說實相故也。問。若爾與我宗不異。我宗本以因縁生義邊。立爲依他性。空性實邊。名遍計空故。有義遂有。無義遂無。非以有義爲無。非無義爲有。故無増減。汝亦云因縁生法都無。實事其所無者。即是凡夫所取性有之法。終不壞假名。豈異我宗如幻假有。依他起性。不可空義耶。答。此已前顯性空眞空二種異。以性空故。但無性實生滅斷常等。以眞空故。即因縁法亦空。此眞空。時不以都無性空。而破諸法。故云。不壞假名。而以眞空。見縁生空。汝不知眞空。故二宗義。長短全別。亦汝宗高祖護法菩薩。解釋提婆論宗。以遣相空。空依他名空論者。爲不正義。又空唯留所執。不空依他假有者。名不空論者。而自以中道眞空妙理。離二過失。故知。以眞空亦依他也」と述べ、嘉祥吉蔵の空義をもって唯識の三性三無性説に対治する。『大正蔵』卷七十。p. 233c10-28

²⁵³ 珍海『大乘正観略私記』『大正蔵』卷七十。p. 196b2-5

を言うが如き、要ず須らく師の承習に依るべし。又云わく、関河の相伝を示さんと欲さば、師宗は在る有る等、其の間の得失は思いて辨ずべし。師資の相伝は具に余文を見よ。)

珍海がこのように述べる意図は自宗において師資の承習があることを顕わすと考えられる。この文章はまさに吉蔵が『大乘玄論』の第五卷に、師法朗において『中論』を講読する際の形が一つに拘らないことを表明するため、十条を挙げて解釈した第六条の内容である²⁵⁴。更に吉蔵は、師が論を講読する形式が多いことを簡略して三義をまとめて概括した²⁵⁵。ところが、このようにしても論述においての解釈はまだ足りないと考えなのか、吉蔵はまた五つの項目を挙げて以下のように述べている。

「今時傳述、寧可一概。今就論初、大爲五章。一者、明破申大意。二者、明四論宗旨義有同異。三者、明經論能所諦智傍正。四者、釋中觀論名。五者、明論緣起。」²⁵⁶

(今時の伝述は、寧ぞ一概にすべきや。今論の初めについて大きく五章と爲す。一には、破申の大意を明かすなり。二には、四論の宗旨の義は同異有ることを明かすなり。三には、經論の能所、諦智、傍正を明かすなり。四には、『中觀論』の名を釈すなり。五には、論の緣起を明かすなり。)

²⁵⁴ 十条の内容について、吉蔵は『大乘玄論』卷五において以下のように述べている。「大師讀此論、遍數不同、形勢非一、今略出十條。一者、有時明四論宗旨、釋中觀名題、解經 論相資、諦智、傍正、破申、近遠、然後乃入論文(中略)二者、在論初直爾散說大意、仍進論文(中略)三者、先盛解二諦竟即釋論文(中略)四者、前明二智、後入論文(中略)五者、彈碩古今、破斥異部(中略)六者、前讀關河舊序、如影叢所作。所以然者、爲即世人云。數論前興、三論後出。欲示關河相傳、師宗有在、非今始構也(中略)七者、或直唱無行佛藏等經、然後入論(中略)八者、對訶梨所造旃延之作。欲明大小軀分、得無得異也(中略)九者、或面折異學、仍即入論(中略)十者、或直爾披文更無別說」と。『大正藏』卷四十五、p. 68a9-29

²⁵⁵ 吉蔵『大乘玄論』に「法師所以講論有多形勢者、略有三義。一者、明法師善識根緣、調停物性、稟悟既甚、多種演暢、亦復不窮。二者、欲異他人。他人立義、定作一說。聽者唯作一解、了無轉悟。今明、諸法無一定相、豈唯一種。三者、龍樹提婆、妙思深遠、權巧萬端」とある。『大正藏』卷四十五、p. 68b2-7

²⁵⁶ 吉蔵『大乘玄論』『大正藏』卷四十五. p. 68b8-11

このような五つの項目は即ち『大乘玄論』卷五「論述」の内容構成である。逆に珍海のほうを見てみると、彼は『大乘正觀略私記』の中に、六義をもって論述について述べている。文量は少し長いが、前後の関係を表わすため、内容を以下のように示す。

「今、方指事引文、以顯形勢非一。一者、仰推聖意、不敢自決。如法花疏釋三不退云、經論不同、難可詳會。又勝鬘寶窟中、釋變易位分云、位義難知、憶生罪過。〈云云〉此等皆是仰推聖意、而不敢自取耳。問、深密解脫經云、增上善根、善集論智者、聞我法音、能如實知。若不種一切增上善根者、信於我法、恭敬我法、而作是言、我信佛所說修多羅甚深相。依定相應難見難覺。而我不知、默然而信、菩提甚深、法相甚深、唯佛所知。非我境界、是人不能如實修行。〈略抄〉若准此文、推佛所知、云非我境者、是不能如實修行。今何以之爲大師德耶。阿難問宿業、世尊入靜室、彌勒疑端相、妙德作謙讓。況復對藏唱地法難彰、龍樹點羅漢作佛。上聖既爾、誰言不足。其知不說、何必愚乎。或顯佛智高遠。或示法門甚深。或布謙讓德。或呵上慢失。又彼所引經文結云、彼諸衆生、依因彼故、功德智慧增長滿足。〈云云〉即顯信佛悟自謙之德。當知、此經說、初心菩薩以信力故入佛境界、雖不能如實修地上所行、而由信力、遂得入初地。如法華云、以信得入也。以此思之、不可爲難矣。〈已上仰推之釋一竟〉二者、前後同異。大師自青裳之歲白首之齡。鑽仰累年。陶練彌深、功顯稍廣。累思轉明。六十二迴之抗論異聞。日多三百餘遍之覆講、悟入漸遠。或淘汰本解、復加修飾。或覆叙先習。小改義勢、有開異門解一義。有以多義成一文。遂使前後所製文義、或同或異。然則學者、隨宜並用。或復有時、舉興皇所解、而與自釋異。或於出什師義宗、而更致取捨。如此同異、皆可依其義門會之。又復、大師自會異釋。學者當得其義勢矣。如釋八生、一生菩提。前故異論、後方隨旨。又解八不、前依山門、後辨新通。又法花統略叙六意、顯前後所解、或同或異。至解法花論、列三出疏、表各有所據。如此同異、學者可不悉耶。〈已上二牒已竟〉三者、破申具足。疏第一述興皇大師語云、適化無方、陶誘非一。考聖心、以息患爲主、統教意、以開道爲宗。〈云云〉初二句顯教門衆多、考聖心以下以二轍解之。謂破病顯道。今案、二門各

攝諸教。謂皆爲破病、全是顯道。然在言、増減或異。又如法花論破十種病、明十無上等、即其義也。又、解八不有三種方言、前二依破病、後一是顯道。青日用破病釋論文、羅睺用顯道解八不、破申如是。〈三牒竟〉四者、隨縁轉側。重牒八不云、自有二諦爲教、不二爲理。若以二爲世諦、不二爲第一義。世諦是教、第一義爲理。皆是轉側適縁。無所妨也〈文 疏記云、轉測者猶如轉勢也〉適縁者謂隨根縁、如大師自釋、亦應得有隨義轉側。〈四牒竟〉五者、義門通別。疏第一云、邪見有二種。一、別邪見、謂撥無因果。二、通邪見、以其所見不正故名邪見。二諦章上卷云、言通別者、所依於諦則通。迷教於諦則別。〈云云委釋如文〉佛性義云、衆生草木皆有佛性。並得成佛。此是通門。若論別門、衆生作佛、草木不成。〈取意〉諸如是等通別義門、或隨寛狹、或依傍正。又復、顯密龜細等義、皆屬此 門。〈五牒竟〉六者、部異理同。法花統略始云、余少弘四論、末專習一乘。〈云云〉先後時別、經論部異。子本相成、其旨遂一。先以經解論、以本成子。後以論釋經、以資顯師也。〈六牒竟。上前後同異門、約義異、今約所傳部別也〉宣通大概、宜須悉之。」²⁵⁷

（今、方に事を指して文を引き、以て形勢を顯すこと一に非ず。一には、仰いで聖意を推し、敢えて自ら決せず。『法花疏』に三不退を釈して云うが如し。「經論は不同、詳しく会すべきこと難し」と。又『勝鬘宝窟』の中に、變易の位を分けて釈して云わく「位の義は知り難し、憶は罪過を生ず」と〈云云〉此れ等は皆是れ仰いで聖意を推し、敢えて自ら取らざるのみ。問う、『深密解脱經』に云わく、増上の善根もて、善を集して智を論ずるとは、我が法音を聞き、能く如実に知る。若し一切の増上の善根を種えざれば、我が法を信じ、我が法を恭敬し、而も是の言を作せ、〈我仏の所説の修多羅の甚だ深き相を信ず。定相に依り、まさに見難く覺り難かるべし〉。而も我知らず、默然として信じ、菩提は甚だ深し、法相も甚だ深し、唯仏のみ知る所なり。我が境界に非ず、是の人は如実に修行すること能わず」と。〈略抄〉若し此の文に准ぜば、仏の知る所を推して、我が境に非ずと云うは、是れ如実に修行すること能わず。今何ぞこれを以て大師の徳と為すや。答う、阿難は宿業を問い、世尊は静室に入り、弥勒は端相を疑い、妙徳は謙讓を作す。

²⁵⁷ 珍海『大乘正觀略私記』『大正藏』卷七十. pp. 196b9-197a12

況や復た金剛藏は地の法難を唱うることを彰かに、龍樹は羅漢の作佛を黙するにおいてをや。上聖は既に爾り。誰か不足と説うや。其れ知りて説かず、何ぞ必ず愚かならんや。或は仏の智は高遠なることを顕す。或は法門は甚だ深きを示す。或は謙讓の徳を布き、或は上慢の失を呵す。又彼の引く所の經文、結して云わく「彼の諸の衆生、彼に依因するが故に、功德と智慧、増長して満足す」と〈云云〉即ち仏悟を信じ、自謙の徳を顕す。当に知るべし。此の經に説く「初心の菩薩は信力を以ての故に仏の境界に入り、地上の所行を如実に修すること能わずと雖も、而も信力に由りて、遂に初地に入ることを得」と。『法華』に「信を以て入ることを得」と云うが如きなり。此れを以てこれを思えば、難と為すべからざるなり。〈已上仰推の釈、一竟る〉

二には、前後同異なり。大師は青裳の歳より白首の齡に之るまで。鑽仰し年を累ぬ。陶練は彌いよ深く、功顕稍広し。思いを累ねて転じて明かなり。六十二、これを廻らして異に抗論す。日に多く三百余遍の覆講、悟入漸く遠し。或は本の解を淘汰して、復た修飾を加う。或は先習を覆叙して。小しく義勢を改め、異門を開いて一義を解すこと有り。多くの義を以て一文を成すこと有り。遂に前後をして製す所の文義を、或は同じく或は異ならしむ。然れば則ち学者は、宜しきに随い並用すべし。或は復た、有る時、興皇の解する所を挙げて、而も自らの釈とは異なれり。或は什師の義宗を出だし、而も更に取捨を致す。此の如き同異は、皆其の義門に依りてこれを会すべし。又復、大師自ら異釈を会す。学者は当に其の義勢を得べきなり。八生、一生の菩提を釈すが如き、前は故に異を論じ、後は方に旨に随う。又八不を解すに、前は山門に依り、後は新通を辨ず。又『法花統略』に六意を叙べ、前後に解する所を顕すに、或は同じ或は異なる。『法花論』を解するに至り、三出の疏を列して、各による所有るを表す。此の如き同異、学者悉さざるべきや。〈已上二牒は已に竟る〉

三には、破申具足なり。『(中觀論) 疏』第一に興皇大師の語を述べて云わく、「適化無方にして、陶誘は一に非ず。聖心を考え、息患を以て主と為し、教意を統べ、開道を以て宗と為す」と。〈云云〉初めの二句は教門は衆多なるを顕す、「聖心を考え」以下は二轍を以てこれを解す。病を破し、道を顕わ

すを謂う。今案ずるに、二門は各諸教を攝す。謂く皆病を破すは、全て是れ道を顕わせしめんが為なり。然るに言説在り、増減、或は異なる。又『法花論』に十種の病を破し、十無上等を明かすが如き、既に其の義なり。又、八不を解すに三種の方言有り、前の二は破病に依り、後の一は是れ顕道なり。青目は破病を用いて論文を釈し、羅睺は顕道を用いて八不を解す。破申はかくの如し。〈三牒竟る〉

四には、縁に随い転側す。重ねて八不を牒して云わく、「自ら二諦を教と為し、不二を理と為すこと有り。若し二を以て世諦と為し、不二を第一義と為さば、世諦是れ教、第一義を理と為す。皆是れ転側適縁なり。妨ぐ所無きなり」と。〈文。疏に記して云わく、「転測とは猶お転勢の如きなり」と〉適縁は根縁に随うを謂う、大師の自釈の如し、亦応に随義転側有るを得べし。〈四牒竟る〉

五には、義門の通別なり。『疏』第一に云わく「邪見に二種有り。一に、別邪見、無因の果を撥するを謂う。二に、通邪見、其の所見は不正なるを以ての故に邪見と名づく」と。『二諦章』上卷に云わく、「通別と言うは、所依の於諦は則ち通なり。迷教の於諦は則ち別なり」と。〈云云。委釈は文の如し。〉

「仏性義」に云わく「衆生草木皆仏性有り。並に仏に成ることを得」と。此れ通門なり。若し別門を論ぜば、衆生は作仏し、草木は成らず」取意、諸の是くの如き等の通別の義門、或は寛狭に随い、或は傍正に依る。又復、顕密麤細等の義、皆此の門に属す。〈五牒竟る〉

六には、部は異なり理は同じ。『法花統略』の始めに云わく「余少くして四論を弘め、末に専ら一乗を習う」と。云云。先後の時別なり、経論の部は異なる。子と本は相成し、其の旨は遂一なり。先に経を以て論を解し、本を以て子と成す。後に論を以て経を釈し、資を以て師を顕すなり。〈六牒竟る。上の前後同異門は、義に約して異なり、今所伝の部の別に約するなり。〉大概を宣通し、宜しくこれを悉くすることを須うべし。)

である。両者の諸義を比べてみると、珍海が説いている第一、第二、第四、第五は吉蔵のそれと小異がある。

第一義の「仰推聖意不敢自決」において、珍海は聖意を推測する立場から、数多くの経論を引用し²⁵⁸、彼自身の見解を捉えにくい。ところが、「以信力故入佛境界」というような文句から見れば、珍海にとって信力は極めて重要であり、成仏に欠けてはならない要素であると考えることが分かる。

第二義の「前後同異」について²⁵⁹、広義の立場に、「前」は興皇寺法朗乃至鳩摩羅什に至るまで、經典、論書などに対する解釈を指し、「後」は即ち吉蔵の三論宗教義のことを指すと考えられる。そして、「同」というのは、経論を講読する法朗であれ、吉蔵であれ、正理を顕わす目的が同じであると説く。「異」は即ち経論を宣揚する人がそれぞれ違うことを指すのであろう。このような見解は吉蔵の諸經典顯道無異という經典觀と同じであろう。

第四義の「隨緣轉測」と第五義の「義門通別」について²⁶⁰、実は両義とも縁に

²⁵⁸ 珍海『大乘正觀略私記』に「如法花疏釋三不退云、經論不同、難可詳會。又勝鬘寶窟中、釋變易位分云、位義難知、憶生罪過。云云。此等皆是仰推聖意、而不敢自取耳。問、深密解脫經云、增長善根、集論智、聞我法音、能如實知。若不種一切增上善根者、信於我法、恭敬我法、而作是言、我信佛所說修多羅甚深相。依定相應、難見難覺、而我不知、默然而信。菩提甚深、法相甚深、唯佛所知、非我境界。是人不能如實修行。略抄。若准此文、推佛所知云、非我境者、是不能如實修行。今何以之爲大師德耶。答、阿難問宿業、世尊入靜寶、彌勒疑端相、妙德作謙讓。況復對藏唱地法難影、龍樹點羅漢作佛。上聖既爾、誰言不足。其知不說、何必愚乎。或顯佛智高迹、或示法門甚深、或布謙讓德、或呵上慢失。又彼所引經文結云、彼諸衆生、依因彼故、功德智慧、增長滿足。云云。即顯信佛悟自謙之德。當知、此經說、初心菩薩、以信力故入佛境界。雖不能如實修地上所行、而由信力、遂得入初地。如法華云、以信得入也。以此思之、不可爲難矣」とある。『大正藏』卷七十. p. 196b10-c3

²⁵⁹ 珍海『大乘正觀略私記』に「二者、前後同異。大自青裳之歲、之自首之齡。鑽仰累年、陶練彌深、功顯稍廣、累思轉明。六十二迴之抗論異聞、日多三百餘遍之覆講、悟入漸遠。或陶汰本解、復加修飾。或覆叙先習、小改義勢。有開異門解一義、有以多義成一文。遂使前後所製文義、或同或異。然則學者、隨宜並用。或復有時舉興皇所解、而與自釋異。或於出什師義宗、而更致取捨。如此同異、皆可依其義門會之。又復大師自會異釋、學者當得其義勢矣。如釋八生一生菩薩、前故異論、後方隨旨。又解八不、前依山門、後辨新通。又法花統略、叙六意、顯前後所解、或同或異。至解法花論、列三出疏、表各有所據。如此同異學者可不悉耶」とある。『大正藏』卷七十. p. 196c3-c18

²⁶⁰ 珍海『大乘正觀略私記』に「四者、隨緣轉測。重牒八不云、自有二諦爲教、不二爲理。若以二爲世諦、不二爲第一義。世諦是教、第一義爲理。皆是轉側適緣、無所妨也。文。疏記云、轉測者、猶如轉勢也。適緣者、謂隨根緣。如大師自釋、亦應得有隨義轉側。四牒竟。五者、義門通別。疏第一云、邪見有二種。一、別邪見、謂撥無因果。二、通邪見。以其所見不正故名邪見。二諦章上卷云、言通別者、所依於諦則通、迷教於諦則別。云云。委釋如文。佛性義云、衆生草木、皆有佛性、並得成佛。此是通門、若論別門、衆生作佛、草木不成。取意。諸如是等通別義門、或隨寬狹、或依傍正。又復顯密龜細等義、皆屬此門」とある。『大正藏』卷七十. pp. 196c28-197a12

赴き説いている真俗二教の活用である。真俗二諦の立場から正理の顯わし方の不同を強調している。二諦義は吉蔵の三論宗思想に貫かれていると言っても過言ではないであろう。珍海はその二諦義の意味を十分に組み取り、論述においても二諦の教義をもって論ずるのである。

まとめ

以上、珍海における教迹と論述について検討した。

教迹について、珍海は吉蔵と同じく書物、經卷、仏像など形がある実物をもって表応といい、衆生の機根に赴いて法を説くことを正応という。更に、珍海は教迹において言教と境教に分け、言教は於教の二諦であり境教は因縁有無の教説である。言教は表応であり境教は顯理であるとしていることが分かった。また、諸法無自性と八不不生という立場から、顯理の境教は即ち中道ということが分かった。真俗の二諦によって二智を起こし、また起こした二智は不二の理を照らして、直ちに最初の真俗の二諦は不二（不真不俗）の境に転じ、即ち境教であると解釈した。

論述について、珍海は吉蔵の『大乘玄論』「論述義」の内容を挙げ、まず、吉蔵に説かれた五つの論述内容を示した。その内容は以下のようなものである。

- ① 「明破申大意」
- ② 「明四論宗旨義有同異」
- ③ 「明經論能所諦智傍正」
- ④ 「釋中觀論名」
- ⑤ 「明論縁起」

これに対して珍海は更に自分自身の考えを述べ、六つの論述内容を明らかにした。その内容は以下のようなものである。

- ① 「經論不同、難可詳會」
- ② 「前後同異」
- ③ 「破申具足」
- ④ 「隨縁轉測」
- ⑤ 「義門通別」

⑥ 「部異理同」

珍海により総結した論述の内容から見れば、彼は吉蔵の三論宗教説をそのまま継承したわけではなく、吉蔵の思想を受容した上、自分の考えを入れて独自性があるものになったことが分かった。

第三節 珍海における三論宗教理思想の特徴

一 珍海の速疾成仏思想について

前述したように、珍海は三論宗の教義を解釈する時、吉蔵の『大乘玄論』の八義科を極めて重視しており、それを用いるところが多いということが分かった。実は、珍海は『三論玄疏文義要』において、吉蔵の『大乘玄論』だけではなく、ほかの『三論玄義』、『二諦義』、『中観論疏』、『百論疏』、『浄名玄論』、『維摩経義疏』、『勝鬘宝窟』、『金剛般若経疏』、『金光明経疏』、『法華経義疏』、『法華経玄論』、『法華経遊意』、『法華経統略』など、吉蔵の著作をほとんど引用して、三論宗の重要な宗義を述べている。当時の多宗兼学の時代背景のため、珍海の三論宗思想は中国から将来した吉蔵の三論宗思想に拘らず、学習した多宗の理論と豊かな修学経歴は珍海に大きく影響を与えて、珍海自身の独自性がある三論宗思想になった。

本節では、珍海の三論宗教理思想について、彼の著作『三論玄疏文義要』に基づき、また『大乘正観略私記』を参照しつつ、珍海の速疾成仏の思想を検討してみたい。

珍海は『三論玄疏文義要』において速疾成仏について吉蔵の『維摩経義疏』を引いて、

「大乘中、唯以一念、則確（豁）然大悟、具一切智也。」²⁶¹

（大乘の中、唯だ一念を以て、則ち豁然大悟、一切智を具するなり。）

と述べている。つまり、大乘においては一念をもって悟ることができ、一切智

²⁶¹ 吉蔵『維摩経義疏』『大正蔵』卷三十八, p. 951c15-16

を具足するという。

また、この文章の後に『大智度論』の内容を引いて以下のように補述している。

- ① 「譬如遠行、或有乘羊而去、或有乘馬而去、或有神通去者、乘羊者久久乃到、乘馬者差速、乘神通者發意即到。神通相爾不應生疑。菩薩亦如是、發阿耨多羅三藐三菩提時、即入菩薩位。有菩薩初發意、初雖心好、後雜諸惡、時時生念。我求佛道、以諸功德、回向阿耨菩提、是人久久無量阿僧祇劫、或至、不至。先世福德因緣薄、而復鈍根心不堅固、如乘羊者。有人前世少有福德、利根發心、漸漸行六波羅蜜。若三、若十、若百阿僧祇劫、得阿耨菩提。如乘馬者必有所到。第三乘神通者如上說。」²⁶²

（譬えば遠く行くに、或いは羊に乗って去る（もの）有り、或いは馬に乗って去る（もの）有り、或いは神通にて去る者有らん、羊に乗る者は久久して乃ち到り、馬に乗る者は差って速に、神通に乗る者は發意の頃に便ち到るが如し。神通の相は爾にして応に疑を生ずるべからず。菩薩も亦た是の如く、阿耨多羅三藐三菩提を發する時、即ち菩薩の位に入る。有る菩薩初めて意を發すに、初は心好しと雖も、後に諸惡を雜へ、時時に念を生ず「我は仏道を求め、諸功德を以て、阿耨菩提に回（廻）向す」と。是の人は久久して無量の阿僧祇劫に、或いは至り、（或いは）至らず。先世の福德の因緣薄く、而も復た鈍根の心堅固ならず、羊に乗る者の如し。有る人、前世に少く福德有り、利根の發心に、漸漸六波羅蜜を行ず。若しくは三、若しくは十、若しくは百阿僧祇劫に、阿耨菩提を得。馬に乗る者は必ず到る所有るが如し。第三に神通に乗る者は上に説くが如し。）

- ② 「有三種菩薩、利根心堅、未發心前、久來集諸無量福德智慧。是人遇佛、聞是大乘法、發阿耨多羅三藐三菩提心、即時行六波羅蜜、入菩薩位、得

²⁶² 龍樹『大智度論』『大正藏』卷二十五. p. 342c3-16

阿鞞跋致地。所以者何、先集無量福德、利根心堅、從佛聞法故。」²⁶³

（三種の菩薩有り、利根（の者）は心堅く、未だ発心せざる前に、久しく諸の無量の福德智慧を来集す。是の人は仏に遇い、是の大乘法を聞き、阿耨多羅三藐三菩提心を発し、即ち時に六波羅蜜を行じ、菩薩位に入り、阿鞞跋致地を得。所以は何となれば、先に無量の福德を集め、利根にして心堅く、仏に従い法を聞けるが故なり。）

この『大智度論』の二文では、成仏とは長い間の修行を通して無量の福德と智慧を集め、前の善根があることを前提として、大乘の仏法を聞き、菩提心を発し、六波羅蜜を行い、菩薩の位に入って不退であると示している。これは前述した吉蔵の『維摩經義疏』に説かれる「唯以一念、則豁然大悟」と明らかに相違が見られる。この点について、珍海のほかの著作『大乘正觀略私記』において、次のように述べている。

「若得無生觀者、初心一念即成佛道。智論亦云：神通乘者、一聞般若便成佛道。問：説神通乘云、曾於無量劫積集善根故一聞即得道＜取意＞。既無量劫積集善根、云何速耶。答：有所得修經無量劫、若無所得一念便成佛、故云神通乘。若不爾者何異馬乘。問：大師不引之、何汝恣引證耶。答：大師釋前已出畢。又欲更知者釋仁王經一念信此經、超百劫千劫十地等功德。文云超百千劫有相十地。故知、無得一念超無量劫有相十地、即神通乘也。又疏第三引大品云：菩提易得耳、以一切法無生即得菩提＜文第二十四卷文也＞。問：壞三大僧祇而一念成佛歟。答：不壞三大而一念成。法花玄第九明三世無礙義云：乃至一劫攝一切劫、一切劫攝一劫。以有因縁無礙故得如此也。若有定性何猶能爾＜文＞。若望此義、以僧祇爲一念故、成佛速也。若望一念無生者、直是一念即名佛也。而約階級不壞者、亦經五十二位。約不壞時、亦經三祇。長短無礙、即無所畏。此宗亦有超悟菩薩、如法華疏。此義廣論如文義要。」²⁶⁴

（若し無生觀を得れば、初心の一念に即ち仏道を成ず。『智論』に亦た云わ

²⁶³ 龍樹『大智度論』『大正藏』卷二十五. p. 342b28-c3

²⁶⁴ 珍海『大乘正觀略私記』『大正藏』卷七十. p. 198c15-199a12

く「神通乗とは、一たび般若を聞かば、便ち仏道を成ず」²⁶⁵と。問う、神通乗を説いて云わく、曾て無量の劫に於いて善根を積集するが故に、一たび聞かば即ち得道す〈取意〉²⁶⁶。既に無量の劫に善根を積集すれば、云何がして速なるや。答う、有所得は修して無量の劫を経る、若し無所得ならば一念にして便ち成仏す、故に神通乗と云う。若し爾らざれば、何ぞ馬乗と異なるや。問う、大師²⁶⁷はこれを引かず、何ぞ汝は恣に引證するや。答う、大師の釈は前已に出だし畢んぬ。又更に知らんと欲さば、『仁王經』を釈すに「一念に此の經を信じ、百劫、千劫、十地等の功德を超ゆ」²⁶⁸と。文に云わく、百千の劫と有相の十地を超ゆと。故に知んぬ、無得の一念は無量の劫と有相の十地を超ゆることを。即ち神通乗なり。又『疏』の第三に『大品』を引いて云わく「菩提は得易すきのみ、一切の法は無生なるを以て即ち菩提を得」²⁶⁹と〈文、第二十四卷の文なり〉。問う、三大僧祇を壞して、一念にして成仏するや。答う、三大を壞さず而して一念に成ず。『法華玄』第九に三世無礙の義を明かして云わく「乃至一劫は一切劫を攝し、一切劫は一劫を攝し。因縁無礙有るを以ての故に、此の如きを得るなり。若し定性有れば、何ぞ猶お能く爾るや」²⁷⁰と〈文〉。若し此の義に望まば、僧祇を以て一念と為すが故に、成仏速やかなり。若し一念無生に望まば、直ちに是れ一念を即ち仏と名づくるなり。而して階級を壞さざるに約さば、亦た、五十二位を経る。壞さざる

²⁶⁵ 『大智度論』に「世尊若人往來六道生死中。或時得聞般若波羅蜜。受持讀誦正憶念。必知是人不久得阿耨多羅三藐三菩提」とある。『大正藏』卷二十五. p. 526a28-b2

²⁶⁶ 『大智度論』卷六十八に以下の様な記述がある。「復次は菩薩於無量劫爲佛道故種善根」『大正藏』卷二十五. p. 631a28-a29

²⁶⁷ 大師は吉蔵のことを指す。

²⁶⁸ 羅什訳『仏説仁王般若波羅蜜經』に「我今説般若波羅蜜。無二無別。汝等大衆。應當受持讀誦解説是經。功德有無量不可説。不可説諸佛。一一佛教化無量不可説衆生。一一衆生皆得成佛。是佛復教化無量不可説衆生。皆得成佛。是上三佛説般若波羅蜜經八萬億偈。於一偈中復分爲千分。於一分中説一分句義不可窮盡。況復於此經中起一念信。是諸衆生超百劫千劫十地等功德。何況受持讀誦解説者功德。即十方諸佛等無有異。當知是人即是如來得佛不久」とある。『大正藏』卷八. p. 829c3-c13

²⁶⁹ 吉蔵『中觀論疏』に「如大品云菩提易得耳。以一切法無生即得菩提也」とある。『大正藏』卷四十二. p. 38c28-c29『大乘正觀略私記』にある引用文後の割り注に「文第二十四卷文也」とあるが、『摩訶般若波羅蜜經』第二十四卷の検討結果、引用文に合う記述は見当たらない。

²⁷⁰ 吉蔵『法華玄論』卷九に三世に自在無礙の義について「乃至一劫攝一切劫。一切劫攝一劫。以有因縁無礙故得如此也。若有定性何猶能爾」と述べている。『大正藏』卷三十四. p. 441a16-a18

に約す時、亦、三祇を経る。長短無礙、即ち無所畏なり。此の宗亦超悟の菩薩有り、『法華疏』の如し。此の義を広く論ずるは、『文義要』の如し。）」

『大乘正觀略私記』の内容から見ると、「一念」は、『仏説仁王般若波羅蜜經』を信じることにより、百劫、千劫、十地の功德を超えて、等覺、妙覺に辿り着けるとする。生滅という現象的な有様を離れて、初發心の一念において成仏し、無所得の一念により成仏ができ、故に神通乗と名づけるのである。この無所得の一念は無量の祇劫を超えるので、珍海がこの一念の信の力により成仏することを神通乗と理解するのである。「一念」＝「神通乗」の概念は上に挙げた『大智度論』の①と②の引用文の趣旨と比較すると矛盾が存在している。

なお、吉蔵は『法華義疏』において、剎那成仏について以下のように述べている。

「於剎那頃發菩提心得成佛者、伽耶山頂經明有四種發心。一、初發心、謂入初地。二、行發心、二地至七地。三、不退發心、謂八九地。四、一生補處發心、謂第十地。龍女、發心成佛是第四義也。」²⁷¹

（剎那の頃に於いて菩提心を發し成仏を得るとは、『伽耶山頂經』に四種發心有ることを明かす。一には、初發心、初地に入ると謂うなり。二には、行發心、二地から七地に至る。三には、不退發心、八九地と謂うなり。四には、一生補處發心、第十地と謂うなり。龍女の發心成仏とは、是れ第四義なり。）

つまり、吉蔵の場合、發心は四種類がある。初發心の菩薩は初地に入り、退転がある。一生補處菩薩の發心は十地に入り不退である。これに対して、珍海は無生の一念において菩提心を發し、速やかに成仏できると強調している。

では、珍海はこの相違についてどのように融合したのか。『三論玄疏文義要』を調べた結果、珍海は第十卷において以下の通り説いている。

²⁷¹ 吉蔵『法華義疏』『大正藏』卷三十四. p. 592b15-19

「夫速疾者、是頓悟義。而宗家意、一切菩薩並是漸悟。四論玄判嘉祥云、必是漸入、無有頓悟。＜云云＞而言經力速疾成佛者、凡言速疾、乃有多意。一者、方便示現、速疾成佛。＜如疏云、速方便、龍女刹那成佛。四句如文＞二者、正觀一念成佛。如中論疏云、階級之無階、唯一念無生。＜具如文＞三者、對二乘道於佛道、迂迴稽留。一乘菩薩、無有留難、直至道場、故名速疾。四者、九地已還、聞見佛性。十地眼見、眼見以上、乃名發心。發心即成佛。如大智論神通、神通乘仁王般若經、金剛頂皆名爲伏等、據此文也。今此經有速疾力者、正對二乘迂迴稽留。一念決定、方名疾得。」²⁷²

（夫れ速疾とは、是れ頓悟の義なり。而して宗家の意は、一切菩薩並びに是れ漸悟なり。『四論玄』は嘉祥を判じて云く、「必ず是れ漸悟、頓悟有ること無し」と。＜云々＞而して經の力より速疾成仏と言うとは、凡そ速疾と言うは、乃ち多意有り。一には、方便より示現す、速疾成仏なり。＜『疏』の云がの如き、速方便、龍女刹那において成仏するなり。四句は文の如く＞二には、正觀において一念より成仏するなり。『中論疏』の云うが如き「階級の無階級、唯だ一念無生なり」と。＜具に文の如き＞三には、二乘道に対する仏道に於いて、迂迴稽留なり。一乗の菩薩、留難有ること無し、直ちに道場に至る、故に速疾と名づく。四には、九地已還は、仏性を聞見す。十地は眼見、眼見以上、乃ち發心と名づく。發心は即ち成仏なり。『大智論』の神通の如し。神通乘、『仁王般若經』、『金剛頂經』皆名づけて伏等と為す。此の文に據るなり。今此の經、速疾力有るとは、正しく二乗の迂迴稽留に対す、一念に決定するを、方に疾得と名づく。）

と。珍海は明らかに速疾とは、頓悟の義であると示している。文章の中に説いている宗家は吉蔵のことを指し、また均正の『四論玄義』を挙げ、嘉祥吉蔵においては必ずただ漸入の義のみであり、頓悟の義はないと、頓悟と漸悟の矛盾を先立ちにする。これに対し、珍海は速疾とはまた四種類があると次のように解説がなされている。

²⁷² 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十. p. 372b25-c8

一、方便により速疾成仏し、龍女の発心成仏はこれに属するのである。

二、正観、生滅という現象的な有様を離れた無生観²⁷³において一念により成仏する。

三、二乗に対して仏道を現す。

四、十地以上の発心は直ちに成仏し、神通乗のようである。

ここに注意すべきなのは、前述した吉蔵の『法華義疏』に説かれた龍女の発心成仏のことである。珍海にとって、龍女の発心成仏は『法華義疏』に説かれた第十地に属する一生補處の菩薩の発心ではなく、方便により速やかに成仏するということである。したがって、十地以上の発心成仏は神通乗であると珍海はこのように理解している。つまり、速疾とは、一念により決定し、この一念は無生観の一念でもあり、十地以上の発心でもある。

珍海は刹那発心において、吉蔵の四種発心、一、初發心。二、行發心。三、不退發心。四、一生補處發心に対して、更に四種類の発心を用いて速疾成仏を解釈した。これは吉蔵と珍海自身の成仏思想上の融合と言えるであろう。

二 逆罪滅除について

逆罪滅除ということは浄影寺慧遠（523年—592年）の『大乘義章』、『無量寿経義疏』、『観無量寿経義疏』、及び吉蔵の『中観論疏』、『法華義疏』、『法華玄論』などの著作の中に言及され、後世の中国仏教ないし日本仏教にも大きく影響を及ぼしている。

本節では、逆罪に関する懺悔滅罪について、珍海はどのように吉蔵の思想と慧遠の思想を捉えて融合したのかを考察してみたい。

珍海は『三論玄疏文義要』の第五巻の中に「不失法事」の名目において、懺悔滅罪について、以下のように問答を提起している。

「問、依方等懺悔、滅五逆等決定業耶。答、若依淨影、但可令輕、未可全

²⁷³ 珍海は『三論玄疏文義要』第一巻の中に「無生正観。唯菩薩所得」と述べていて、ここに説いている「正観一念成佛。如中論疏云、階級之無階、唯一念無生」は恐らく菩薩位においての速疾成仏を指すであろう。

盡。今嘉祥義宗、一往應云定業不能全滅、但得輕受。若究竟尋之、亦得都盡。然亦研二師義、其意則通。」²⁷⁴

（問う、方等の懺悔により、五逆等決定業を滅するや。答う、若し淨影によれば、但だ輕からしむべきのみ、未だ全て尽さざるべし。今嘉祥義宗、一往應に定業は能く全滅せずも、但だ輕受を得るのみと云うべし。若し究竟してこれを尋ぬれば、亦た都て尽すことを得。然るに亦た二師の義を研し、其の意則ち通ず。）

珍海のいうところの意味は、大乘經の力により定業である五逆等の罪は滅除できるかできるまいかに対して、淨影寺慧遠の觀點と吉藏の觀點を挙げて次のように述べている。即ち、慧遠の觀點によれば、五逆等の罪は全部滅除できないが、重罪が輕減されることができる。吉藏によれば、立場は同じで輕減できるが、究竟して研鑽すると五逆等の罪は全部滅除できるというのである。しかも、珍海が両師（慧遠と吉藏）の意は実は同じであると、決定業をめぐって慧遠と吉藏との思想を援用し、輕減と滅除という可能性について論じている。

慧遠の觀點について、彼自身の著作『無量壽經義疏』と『觀無量壽經義疏』の中で「約人」と「約行」に分けて、以下のように論述している。

『無量壽經義疏』

「問曰、於彼觀經之中、說五逆等、皆得往生。今此經中、言不得生。此言何論。釋有兩義、一、約人分別。人有二種、一者、久發大乘心人、遇緣造逆。如闍王等、此雖造逆、必有重悔、發心求出、能滅重罪、爲是得生。觀經據此。二者、先來不發大心、現造逆罪、多無重悔、不能決定發菩提心、爲是不生。此經據此。二、約行分別。行有定散、有人雖復造作逆罪、能修十六正觀善根、深觀佛德、除滅重罪、則得往生。觀經據此。若人造逆、不能修習觀佛三昧、雖作餘善、不能滅罪、故不往生。」²⁷⁵

（問うて曰く、彼の『觀經』の中に於いて、五逆等は、皆往生を得ると説

²⁷⁴ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十. p. 283c7-11

²⁷⁵ 慧遠『無量壽經義疏』『大正藏』卷三十七. p. 107b4-15

く。今此の經の中、得生せずと言う。この言は何の論なるや。釈して兩義有り、一、人に約して分別す。人は二種有り、一とは、久しく大乘心を発する人、縁に遇い造逆す。閻王等の如き、此れ造逆と雖も、必ず重悔有り、発心して出ることを求め、能く重罪を滅し、是れ得生と為す。『觀經』は此れより。二とは、先來大心を発さず、現に逆罪を造り、多く重悔無し、能く決定して菩提心を発さず、是れ不生と為す。此の經此れより。二、行に約して分別す。行は定・散有り、有る人復逆罪を造作と雖も、能く十六正觀の善根を修し、深く仏徳を觀し、重罪を除滅し、則ち往生を得。『觀經』此れより。若し人造逆し、觀仏三昧を修習すること能わずして、餘善を作すと雖も、滅罪不能、故に往生さず。)

『觀無量壽經義疏』

「問、大經說五逆不得往生。此經宣說逆罪得生。其義云何。釋有兩義、一、約人分別。造逆罪人、有上有下。善趣已前、常沒造逆、說以爲下。善趣位中、遇縁造逆、說之爲上。如世王等、上人造逆、必有重悔。令罪消薄、容便得生。此經就之、故說五逆亦得往生。下人造逆、多無重悔、不可得生。大經就此、故說不生。二、約行分別。造逆之人、行有定散。觀佛三昧、名之爲定。修餘善根、說以爲散。散善力微、不能滅除五逆重罪、不得往生。大經就此、故說不生。定善力強、能消逆罪、容得往。此經明觀、所以說生。分別如是。」²⁷⁶

(問う、『大經』に五逆は往生得ずと説く。此の經に逆罪は生を得と宣説す。其の義云何んや。釈して兩義有り、一には、人に約して分別す。造逆罪人、上有り下有る。善趣已前、常沒の造逆なり、説いて以て下と為す。善趣位の中、縁に遇い造逆し、これを説いて上と為す。世王等の如き、上人の造逆、必ず重悔有り。罪を消薄せしめ、容して便ち生を得。此の經はこれに就く。故に五逆も亦た往生を得と説く。下人の造逆、多く重悔無し、得生すべからず。『大經』此れに就く。故に不生と説く。二には、行に約して分別す。造逆の人、行は定・散有り。觀仏三昧、これを名づけて定と為す。

²⁷⁶ 慧遠『觀無量壽經義疏』『大正藏』卷三十七, p. 184b26-c9

餘の善根を修し、以て散と為すと説く。散善の力は微、能く五逆の重罪を滅除せず、往生を得ず。『大經』は此れに就く。故に不生と説く。定善の力は強し、能く逆罪を消し、容して往を得。此の經は觀を明かし、所以に生を説く。分別は是の如し。)

上の二文から見れば、約人の場合、五逆罪等の重罪を犯した人は大乘心を發して重悔すれば救済できる。また、善趣位である上人は必ず重悔があるので、五逆罪を犯しても往生できると説いている。

約行の場合、定善を修して十六正觀²⁷⁷と仏三昧を觀想すべきであると述べていて、定善の力が強いので、五逆罪を犯した人でさえ救済できると説いている。約人と約行の往生について慧遠はいずれも『觀無量壽經』を用いてその趣旨を説いている。

更に、不往生においても約人と約行に分けられている。

まず、約人の場合、慧遠は『無量壽經』を用いて、元來大乘心を發することがなく、現在逆罪を犯しても重悔せず、菩提心を發心しない人は往生できないと説いている。また、約行の場合、散善を修し、仏三昧を觀想しない人は逆罪を犯したとするならば、往生できないと説いている。

なお、慧遠はまた『大般涅槃經』を用いて²⁷⁸、約人と約行について次のように示している。約人の場合、常没位である下人は逆罪を犯したとするならば、ほとんど重悔しないので、往生できないと説いている。また、約行の場合、定善を行わずに散善を行い、散善の力が弱いので、逆罪を犯した人が救済できないと説いている。

²⁷⁷ 慧遠『觀無量壽經義疏』に「定善生中觀別十六。一是日觀。二是水觀。三是地觀。四是樹觀。五是池觀。六是總想觀一切樓樹池等。七華座觀。八佛菩薩像觀。九佛身觀。十觀世音觀。十一大勢至觀。十二自往生觀。十三雜明佛菩薩。十四上品生觀。十五中品生觀。十六下品生觀」とある。『大正藏』卷三十七. p. 178c4-9

²⁷⁸ 南本『大般涅槃經』に「不思善故如惡法住。惡法住者則有六種。一者惡。二者無善。三者汚法。四者增有。五者惱熱。六受惡果。是名爲沒。何故名沒。無善心故。常行惡故。不修對治故。是名爲沒。所言惡者。聖人呵責故。心生怖畏故。善人遠離故。不益衆生故。是名爲惡。言無善者。能生無量惡果報故。常爲無明所纏繞故。樂與惡人爲等侶故。無有修善諸方便故。其心顛倒常錯謬故。是名無善。言汚法者。常汚身口故。汚淨衆生故。增不善業故。遠離善法故。是名汚法。言增有者。如上三人所行之法。能增地獄畜生餓鬼。不能修習解脫之法」とある。『大正藏』卷十二. p. 822a9-22

慧遠が五逆罪を犯した人における往生と不往生の義を論述する時、『無量寿経』と『観無量寿経』、及び『大般涅槃経』の説に立脚するが、『無量寿経』と『観無量寿経』は逆罪滅除について、往生と不往生の前後の相違が明らかに見られる。これについて、成瀬隆順氏の論文「禅那院珍海の逆誹除取釈について」²⁷⁹があり、成瀬氏は浄土教の立場から、前に挙げた慧遠の両疏についての矛盾を「慧遠が『大乘義章』で定義する善趣と常没の位、更には九品中の下品人を善趣、則ち十信位と捉える慧遠の九品説の一端も伺い知ることができる」と会通した上、珍海は常没の造逆人が往生する可能性を、慧遠の説示をもとに導く、逆誹除取の解釈について珍海自身の独自性があると指摘された。

一方、慧遠の思想に対して、珍海が挙げた吉蔵の観点について再び述べると以下のようである。即ち、

「今嘉祥義宗、一往應云定業不能全滅、但得輕受。若究竟尋之、亦得都盡。然亦研二師義、其意則通。」

である。つまり、吉蔵の場合は五逆等の罪は全部滅除できるというのである。これについて吉蔵は『法華義疏』の中に、

「懺悔竟、得柔順忍。所以大小乘經不同者、以小乘經力劣故、重罪微薄、猶墮輕地獄。大乘經力勝、重罪都滅、所以不墮。」²⁸⁰

(懺悔竟りて、柔順忍を得。大小乗經の異なる所以とは、小乗經の力は劣るが故と以て、重罪は微薄なるも、猶輕地獄に墮る。大乘經の力は勝、重罪都て滅し、所以に墮さず。)

と述べている。つまり、吉蔵は懺悔を通して柔順忍を得ることができると主張するのである。重罪を犯した人は小乗經の力により懺悔するならば、その重罪が微薄になり、輕地獄に墮ちる。これに対して、大乘經の力により懺悔するな

²⁷⁹ 『印度学仏教学研究』67(1). pp. 82-87

²⁸⁰ 吉蔵『法華義疏』『大正藏』卷三十四. p. 466a15-17

らば、その重罪は全部滅除でき、地獄に堕ちないという吉蔵が主張している。吉蔵のこのような主張は、慧遠の善趣位である上人、定善を修する人が救済でき、下人と散善を修する人が救済できないという見方と相違があることは見難くない。

五逆罪を滅除することについて、従来、多くの学者によって議論をなされ、その非論理性が批判されている。例えば、松本史朗氏は『禅思想の批判的研究』²⁸¹において「業障は本性空なりという実相を觀ずれば、業障は消滅すると説く吉蔵は、単に楽天的とか浅薄とか評されるべきではなく、仏教そのものである縁起説を否定したと言えるのである」と、重罪滅除について厳しく批判している。

しかし、珍海は逆罪往生の問題について、慧遠と吉蔵の両師の所説を受容し、『三論玄疏文義要』の中に「淨影釈異」、「淨影釈云」、「若依淨影」などのような慧遠の思想によるところ、及び直接吉蔵の著作を引用して論釈するところが多い。なお、両師の異なる観点について、珍海は更に自身の考えを示しており、自分自身の立場を表わすところも見られる。例えば、八識義を論述する時、珍海は以下のように述べている。

「淨影解釋、善契經旨。金陵贊仰、學者猶迷。遂以何義爲末學之龜鏡乎。答、此是上古難義、大堂未決。學者皆云、淨影嘉祥、雖俱爲無相大乘之祖匠、然其稟學不同、流派本異、二師相違、不必會通。何復於中、強存取捨乎。＜云云＞今難云、若存兩釋、應設會通。若不須通、要可取捨。竝存異釋、反覆文義。學者惠解、何由可開。一家義宗、何復無存乎。答、竝存多義、亦是家家（宗家）習、必執是非。豈弘宣宗耶。難云、若爾、何故大師舉舊（人說）已。云今謂不爾耶。答、爲顯今意、云爾而已。」²⁸²

（淨影の解釈は、善く經旨に契す。金陵は贊仰するも、学者は猶迷う。遂に、何の義を以て末学の龜鏡と為すや。答う、此れは是れ上古の難義、大堂未決なり。学者は皆云う、淨影と嘉祥、俱に無相大乘の祖匠と為すと雖も、然るに其の學を稟けるは不同なり、流派の本は異なれり、二師の相違、

²⁸¹ 松本史朗『禅思想の批判的研究』大蔵出版、1994

²⁸² 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十、p. 274a11-22

必ずしも会通せず。何ぞ復た中に於いて、強いて取捨を存するや。＜云々＞今難じて云く、若し両釈存せば、應に会通を設くるべし。若し通ずべかざれば、要ず取捨すべし。竝に異釈存して、文義を反覆すれば、学者は惠解して、何に由り開くべき、一家の義宗、何ぞ復た存すること無からんや。答う、竝に多義存し、亦た是れ宗家の習、必ず是非を執す。豈に宗を弘宣するや。難じて云く、若し爾らば、何故大師旧人の説を挙げる已み。今爾らざると云うや。答う、今意を顕す為、爾云う而已。）

珍海の文章からみると、両師（慧遠と吉蔵）の所説は会通すべきであるが、多種の義が並びに存在しても可能である。なぜなら、慧遠の解釈は大乘經の趣旨に極めて契合するので、吉蔵大師もよく賛仰しているのである。しかも、吉蔵は自宗（三論宗）の宗義においても多種の教義を用いており、是非に執着する必要はないという。両師の異釈は、学者として研鑽して惠解すべきであると珍海はこのように強調している。このことから、両師の相違がある教義において珍海の取捨と受容の態度が窺えるのである。

それでは、以上の取捨と受容の態度に基づき、珍海は如何なる三論宗の立場から懺悔滅罪のことを述べているのであるかを、次から検討を試みしてみたい。

まず、珍海は『三論玄疏文義要』の中に引用した吉蔵の『中觀論疏』の内容から見てみると、

「觀業品疏云、諸大乘經、皆明懺悔轉業障義。如涅槃獅子吼云、一切諸業無有定性、唯有愚智。愚人則以輕爲重、無而成有。智者能轉重爲輕、轉有爲無。今明、若執業決定、則是愚人。如今品觀之、名爲智者。普賢觀云、一切業障海、皆從妄想生、若欲懺悔者、端坐念實相。衆生無始以來、起六道業、深而且大、故喻之如海。非實相觀、無由滅之。今此品觀業、即是實相、故能滅業障、故說此品。」²⁸³

（觀業品疏に云く、「諸大乘經、皆懺悔して業障を転ずる義を明かす。涅槃獅子吼に云うが如き、一切諸業定性有ること無し、唯だ愚智有るのみ。愚

²⁸³ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十. p. 283c11-20

人則ち輕を以て重と為し、無にして有と成す。智者能く重を轉じて輕と為し、有を轉じて無と為す。今明かすに、若し業の決定に執さば、則ち是れ愚人なり。今品にこれを觀ずるがの如きを名づけて智者と為す」²⁸⁴と。普賢觀に云く、「一切業障の海、皆妄想より生じ、若し懺悔せんと欲さば、端坐し実相を念ぜよ」²⁸⁵と。衆生無始より以來、六道業を起こすこと、深にして大なり、故にこれを喩うること海の如し。実相觀に非ざれば、これを滅する由は無し。今此の品は業を觀ず、即ち是れ実相なり、故に能く業障を滅し、故に此の品を説くなり。)

である。この文章から分かるに、吉藏によれば、智者は重罪の業障を懺悔したならば輕罪に転じることができ、実相を觀想するならば重罪の業障を滅除することができる」と主張している。換言すれば、懺悔と実相を念じることは重要であると理解すればよいであろう。これに関して珍海の觀點は以下のものである。

「今云、方等懺悔滅定業者、約懺悔成者論、亦非一切人皆滅定業。又稱名輕

²⁸⁴ 南本『大般涅槃經』「獅子吼菩薩品」の中に「善男子。或有重業可得作輕。或有輕業可得作重。非一切人唯有愚智。是故當知非一切業悉定得果。雖不定得亦非不得。善男子。一切衆生凡有二種。一者智人。二者愚人。有智之人以智慧力。能令地獄極重之業現世輕受。愚癡之人現世輕業地獄重受。師子吼言。世尊。若如是者則不應求清淨梵行及解脫果。佛言。善男子。若一切業定得果者。則不應求梵行解脫。以不定故則修梵行及解脫果。善男子。若能遠離一切惡業則得善果。若遠善業則得惡果。若一切業定得果者。則不應求修習聖道。若不修道則無解脫。一切聖人所以修道。爲壞定業得輕報故。不定之業無果報故。若一切業定得果者。則不應求修習聖道。若人遠離修習聖道得解脫者。無有是處。不得解脫得涅槃者。亦無是處。善男子。若一切業定得果者。一世所作純善之業。應當永已常受安樂。一世所作極重惡業。亦應永已受大苦惱。業果若爾則無修道解脫涅槃。人作人受。婆羅門作婆羅門受。若如是者則不應有下姓下有。人應常人。婆羅門應常婆羅門。小時作業應小時受。不應中年及老時受。老時作惡生地獄中。地獄初身不應便受。應待老時然後乃受。若老時不殺不應壯年得壽。若無壯壽云何至老。業無失故。業若無失。云何而有修道涅槃。善男子。業有二種。定以不定。定業有二。一者報定。二者時定。或有報定而時不定緣合則受。或三時受。所謂現受生受後受。善男子。若定心作善惡等業。作已深生信心歡喜。若發誓願供養三寶。是名定業。善男子。智者善根深固難動。是故能令重業爲輕。愚癡之人不善深厚。能令輕業而作重報。以是義故。一切諸業不名決定。菩薩摩訶薩無地獄業。爲衆生故發大誓願生地獄中」と述べていて、『中觀論疏』においては取意の引用である。『大正藏』卷十二. pp. 795c8-196a16

²⁸⁵ 曇無蜜多訳『佛說觀普賢菩薩行法經』の中に「一切業障海、皆從妄想生、若欲懺悔者、端坐念實相」と述べている。『大正藏』卷九. p. 393b10-11

故、定業或有不滅者、正觀深、名諸業障滅。」²⁸⁶

（今云く、方等と懺悔より定業を滅するとは、懺悔の成者に約して論じ、亦た一切の人皆定業を滅するに非ず。又称名は軽いが故に、定業は或いは滅せず者有り、正觀は深し、諸業障は滅すと名づくなり。）

つまり、珍海によれば、たとえ懺悔としても、成と不成の区別があり、全ての人が定業を滅除するわけではないのである。また、菩薩・仏の名を称えるより正觀懺悔のほうが重要であるので、諸業障が滅除することができるのである。それでは、珍海にとって、どのような人は懺悔としたら定業が滅除できるのか。どのような人は懺悔としても不成なのか。また、なぜなら正觀懺悔は重要であり、業障が滅除できるのか。このような一連の疑問について、珍海が『三論玄疏文義要』の中に『十住毘婆沙論』の文章を引いて解釈している。即ち、

「是故、汝先難、若懺悔罪業、則滅盡、無有果報者、是語不然。復次、若言罪不可滅者、毘尼中、佛說懺悔除罪、則不可信、是事不然。是故業障罪、應懺悔。（中略）問、十住毘婆沙文、廣明轉重輕受義、今何云都滅耶。答、言都滅者、約究竟。謂若不至極懺悔除者、多分輕受、不能都滅。」²⁸⁷

（「是の故に、汝先に難じて、若し罪業を懺悔せば、則ち滅尽し、果報有ること無しとは、是の語然らざるなり。復た次に、若し罪は滅すべからずと言うは、毘尼の中に、仏は懺悔して罪を除くと説きたもう、則ち信ずべからざるなり、是の事然らず。是の故に業障の罪、應に懺悔すべし」²⁸⁸と。（中略）問う、『十住毘婆沙論』の文、広く轉重輕受の義を明かす、今何ぞ都て滅と云うや。答う、都て滅と言うは、究竟に約す。若し至極懺悔ざる除くと謂うとは、多分輕受し、能く都て滅ざるなり。）

である。この文章の中では、興味深い内容は

²⁸⁶ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十. p. 284a4-7

²⁸⁷ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十. pp. 285c20-286a3

²⁸⁸ 龍樹『十住毘婆沙論』『大正藏』卷二十六. p. 49b5-9

「汝先難、若懺悔罪業、則滅盡、無有果報者、是語不然。」

であると筆者は考える。つまり、珍海は懺悔を通して業障が全て滅除できるとするならば、悪業を行えば悪果報を得、善業を行えば善果報を得ることはなくなるのではないかという問題に対して、そうではないと答えているのである。換言すれば、懺悔により罪が全て滅除できるが、果報がないとは言えないという。珍海が『十住毘婆沙論』の文章を引用する意図は、恐らく懺悔滅罪というのは因縁果報である縁起説に背かないと強調したいのであろう。

また、正観滅罪について、珍海は『三論玄疏文義要』の中に『大般涅槃經』「獅子吼菩薩品」の文章を引いて以下のように解釈している。

「涅槃第二十九云、＜獅子吼品十一之五＞有修集道故、決定重業可使輕受。不定之業、非生報受。＜乃至＞智慧爲輕、愚者令重。＜云云＞又云、云何衆生令現輕報、地獄重受、地獄重報現世輕受。佛言、一切衆生凡有二種。一者、有智、二者、愚癡。若能修習身戒心惠、是名智者。＜云云＞又云、能觀諸法、同如虛空。不見智慧、不見智者。不見愚癡、不見愚者。是名智者。」²⁸⁹

（『涅槃』第二十九に云く、＜獅子吼品十一之五＞「修集道有るが故に、決定重業をして輕受せしむべし。不定の業、報受を生ずるに非ず」²⁹⁰と。＜乃至＞「智慧は輕と爲し、愚者をして重とせしむ」²⁹¹と。＜云々＞又云く「云何が衆生をして現に輕報、地獄に重受、地獄に重報、現世に輕受せしむるや。仏言く、一切衆生に凡そ二種有り、一には、智有あり、二には、愚痴なり。若し能く身戒心惠を修習すれば、是れ智者と名づく」²⁹²と。＜云々＞又云く、「能く諸法を觀じ、同ずること虚空の如し。智慧を見ず、智者を見

²⁸⁹ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十. p. 286a15-23

²⁹⁰ 南本『大般涅槃經』の中では「有修習道。修習道故。決定重業可使輕受。不定之業非生報受」と述べている。『大正藏』卷十二. p. 797b26-28

²⁹¹ 南本『大般涅槃經』の中では「智者爲輕。愚者令重」と述べている。『大正藏』卷十二. p. 797c4

²⁹² 南本『大般涅槃經』の中では「云何衆生令現輕報。地獄重受。地獄重報。現世輕受。佛言。一切衆生凡有二種。一者有智。二者愚癡。若能修習身戒心惠。是名智者」と述べている。『大正藏』卷十二. p. 798a6-9

ざるなり。愚痴を見ず、愚者を見ざるなり。是れを智者と名づく」²⁹³と。)

『大般涅槃經』においては、実相の道理を悟れば智者になり、智者の位に達するならば重報を受けない、愚痴の人と身戒心恵を修習しない人であれば重報を受けると述べている。珍海はこのような内容を引き、諸法虚空である空觀をもって重罪を滅除すると言えるであろう²⁹⁴。

更に、珍海は『三論玄疏文義要』において現在に伝わらない吉藏の『大般涅槃經疏』第十三巻の内容を引いて、懺悔滅罪について二種類の人があると説いている。即ち、

「涅槃義疏第十三云、然懺悔有二種。一者、顯示因果罪福、決定不失。名爲懺悔。二者、破除因果等見。名懺悔。(中略) 若人決定知善因得善果、惡因得惡果。失念造罪、便生怖畏、爲此人故、次破決定之見。明罪性無所有、隨心而滅。」²⁹⁵

(『涅槃義疏』第十三に云く、「然るに懺悔に二種有り、一には、因果罪福を顯示、決定して不失なり。名づけて懺悔と爲す。二には、因果等の見を破除す。懺悔と名づくなり。(中略) 若し人は善因より善果を得、惡因より惡果を得ること決定して知らば、念を失し罪を造り、便ち怖畏を生じ、此の人の爲の故に、次に決定の見を破す。罪は性有る所無きを明かすに、心に随い滅するなり」と。)

この引用文から判断すると、吉藏は、確実に罪を含めて一切のものは自性が

²⁹³ 南本『大般涅槃經』の中では「能觀諸法同如虚空。不見智慧不見智者。不見愚癡不見愚者。不見修習及修習者。是名智者」と述べている。『大正藏』卷十二. p. 799b26-28

²⁹⁴ 奥野光賢氏は「吉藏における「決定業轉」をめぐる」の論文において、吉藏の『中觀論疏』の文を取り挙げ、吉藏の思想の根底には、やはり彼の空觀理解があったことは言うまでもないことであろうと指摘された。氏に引用された文は即ち、「問何故爾。答夫乖理故爲罪。罪即虚妄。若與實相相應即便符理。理是眞實。以實治虚故滅衆罪。論主無緣大悲愍末世重罪衆生示眞實方等大懺速滅三障法門。故説此品」である。『大正藏』卷四十二. p. 74a12-16. 珍海の思想はほとんど吉藏から継承し、空觀の理をもって重罪を滅除することも恐らく吉藏から影響は極めて高いと筆者が考えている。

²⁹⁵ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十. p. 285b14-20

なく、心に従えば滅罪できると説いている。

ところが、珍海は更に吉蔵の『大般涅槃經疏』第十巻の内容を引いて、以下のように補述する。

「又涅槃疏十云、昔教所明四重五逆謗法之罪、猶如折石斷多羅樹、畢竟不可懺悔。此人即不得近無上道。今明開懺悔四重等三種罪、即令此三種罪人、及以二乘得近無上道也。」²⁹⁶

(又『涅槃疏』十に云く、「昔教に明かす所の四重五逆謗法の罪、猶石を折り多羅樹を断るの如き、畢竟して懺悔すべからざるなり。此の人即ち無上道に近づくことを得ず。今四重等の三種の罪を懺悔することを開くを明かすに、即ち此の三種の罪人、及び二乗を以てして無上道に近づくを得せしむるなり」と。)

というところの意味は、四重、五逆、謗法などの罪はあくまで懺悔できないので、犯した人は無上道に達しないのである。現在、懺悔より四重、五逆、謗法という三種類の罪が滅除できると論ずる目的は、重罪を犯した人をまず二乗に入らせ、更に二乗人の段階をもって無上道に到達させるのであると述べている。

もし、珍海が引用した『大般涅槃經疏』は本当に吉蔵の著作であれば、上の引用文から、吉蔵は懺悔滅罪の観点において、完全に縁起説に背くとは言えないであろう。

総合して見ると、珍海における重罪滅除の思想は、あくまで吉蔵の三論宗思想によるところが多い。これは珍海の『三論玄疏文義要』巻五の内容からも確認できる。即ち、

「然經曰重罪微薄者、此對重罪說微薄。言既除重罪、理應言微也。又且傍顯因果罪福決定不失。故言微薄、不言都滅。理實都滅、故不墮地獄。」²⁹⁷

²⁹⁶ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』巻七十. p. 285b27-c2

²⁹⁷ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』巻七十. p. 285a22-26

(然るに經に重罪微薄と曰うは、此れ重罪に対して微薄を説く。既に重罪を除くと言うは、理應に微と言うべきなり。又た、且く傍に因果罪福は決定して失わざるなり。故に微薄と言ひ、都て滅と言わず。理は実に都て滅し、故に地獄に堕ちざるなり。)

である。重罪と軽罪は相対である関係であり、重罪を顕すために軽罪を説いているのみである。このような相対である表し方は三論宗の特徴であり、不二の理の体现である。また、珍海は傍らに因果罪福を失わないということを強調して、重罪滅除についての解釈は因縁説から離れることはないと主張しているのである。

三 逸文である吉蔵の『大般涅槃經疏』に関する引用

『涅槃經』及び『涅槃經』に関する注疏が日本に将来してから、三論宗の僧侶達に重視して援用されたのである。前節末に挙げた珍海に引用された吉蔵の『大般涅槃經疏』はその一例である。

平井俊榮氏の研究により²⁹⁸、珍海が引用した『大般涅槃經疏』は吉蔵の著作であり、現在まで伝わらない南本『涅槃經』に対する注疏である。当時、安澄(763年-814年)の『中觀論疏記』、玄叡(?-840年)の『大乘三論大義抄』、珍海(1091/1092年-1152年)の『三論名教抄』と『三論玄疏文義要』、澄禪(1227年-1307年)の『三論玄義檢幽集』などの著作の中において、吉蔵の『大般涅槃經疏』の引用文が数多く見られており、八世紀から十四世紀までの長い間に、吉蔵の涅槃經思想は日本三論宗に大きく影響を与えたと言えるのである。

珍海の場合は、『三論玄疏文義要』を例として挙げると、吉蔵の『大般涅槃經疏』の引用文は各巻ごとに見られる。なお、『大般涅槃經疏』だけではなく、珍海の三論宗思想はほとんど吉蔵の著作により論述し、『三論玄疏文義要』の第一巻を例として見れば、吉蔵著作の引用は極めて多く、半分以上に達するのである。具体的には、『法華玄論』は39箇所、『大乘玄論』は31箇所、『淨名玄論』

²⁹⁸ 平井俊榮「吉蔵著『大般涅槃經疏』逸文の研究」(上)『南都仏教』(27). pp. 55-100. 1971. (下)『南都仏教』(29). pp. 37-93. 1972

は22箇所、『法華遊意』10箇所、『法華義疏』は6箇所、『金剛般若疏』は5箇所、『中觀論疏』は3箇所、『勝鬘寶窟』は3箇所、『三論玄義』は3箇所、『法華統略』は3箇所、『二諦義』は2箇所、『大般涅槃經疏』は2箇所である。引用の傾向から見れば、珍海の三論宗思想はほとんど吉蔵から継承することは間違いないと考える。

それでは、珍海はどのような形で涅槃の教学を述べたのだろうか、次にそれを検討する。

周知の通り、吉蔵の涅槃經思想は実相空の立場に立ち、般若空觀の思想と融合して「生死即涅槃」という觀点を主張する。これは吉蔵の『涅槃經遊意』の内容を見れば分かる。即ち、

「或云涅槃是有、或意是無。或言二諦所攝、或意出二諦之外。或意出生死無常、或意涅槃常住。因此謬造種種異計。便成繫縛、致有生死。前諸佛菩薩爲引此妄情、假說涅槃。爲出處方便、空假立名。名無得物、物無應名。名物既爾、萬法安立、所以生死涅槃本無二相。但爲化此虛妄、如度虛空。實無衆生得滅度者、如此了悟、名得涅槃。實無涅槃可得、但約此迷悟、說凡說聖、假名生死、強稱涅槃。令改凡成聖、捨生死得涅槃。既悟此本來不二、亦復不一。若於凡聖生死、涅槃作一異解者、則障正道。」²⁹⁹

（或いは涅槃は是れ有と云い、或いは意は是れ無なり。或いは二諦の所攝と言ひ、或いは意は二諦の外を出るなり。或いは意は生死無常を出、或いは意は涅槃常住なり。此の因種々の異計を謬りに造る。便ち繫縛に成り、生死有るに致る。前に諸仏菩薩は此の妄情を引く為、仮に涅槃を説く。出處の方便の為、空にして仮に名を立つ。名づけて物を得ること無き、物無くに應に名づけるなり。物を名づくは既に爾かなり、万法を安立し、所以は生死涅槃は本に二相無し。但だ此の虚妄を化す為、虚空を度すの如くなり。実に滅度を得る衆生無くは、此の了悟の如き、涅槃を得ると名づく。実に涅槃を得すべき無き、但だ此の迷悟に約して、凡を説き聖を説くは、仮に生死と名づき、強いて涅槃と称す。凡をして聖と成さしめ、生死を捨

²⁹⁹ 吉蔵『涅槃經遊意』『大正藏』卷三十八、p. 230b15-26

て涅槃を得。既に此の本来不二、亦復不一を悟る。若し凡聖生死に於いて、涅槃一異と作すに解すとは、則ち正道を障するなり。)

である。

言う所の意味は、涅槃は有にもあり無にもある。或いは二諦に包摂され、或いは二諦と関係ないという。或いは生死無常の意味を説き、或いは涅槃有無の意味を説くという様々な解釈がある。その故に、正しく理解できない人であれば、種々の執着が生まれ、逆に束縛になるのである。述べた涅槃に関する種々の解釈は、或いは有無の二辺に落ち、或いは中道二諦の理に迷い、或いは涅槃の真空妙有の理が理解できない人を指す。これらの迷う人のために、仏菩薩は方便によって仮に涅槃の名称を付けられ、涅槃の義を理解させるのである。

つまり、吉蔵においての涅槃は中道二諦の仮説に基づくのである。前述したように、中道は二辺に落ちないといい、二諦は真俗相對の仮説、つまり仮に真俗を説くというのである。したがって、珍海のほうを見てみると、彼は『三論玄疏文義要』の第九卷において、吉蔵の『大乘玄論』を引いて以下のように述べている。

「涅槃義云、涅槃有二家、一云有翻、二云無翻。無翻有四家義、有翻六家。一云無爲、二云無累、三云解説、四云寂滅、五但云滅、六云滅度。今同有翻第六家、但彼一向有翻。今明相待涅槃有翻、絶待涅槃不可翻也。」³⁰⁰

(涅槃義に云わく、涅槃は二家有り、一に有翻と云い、二に無翻と云う。無翻は四家義有り、有翻は六家なり。一に無為と云い、二に無累と云い、三に解脱と云い、四に寂滅と云い、五に但だ滅と云い、六に滅度と云うなり。今有翻の第六家と同じ、但だ彼は一向有翻なり。今相待涅槃は有翻、絶待涅槃は翻すべからざることを明かすなり。)

つまり、珍海は吉蔵と同じ、涅槃の義を二に分けて解釈し、相待涅槃を有翻とし、絶待涅槃を無翻とするのである。それでは、相待涅槃と絶待涅槃の意味

³⁰⁰ 珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十. p. 358c12-17

は何であろうか。珍海は続いて以下のように述べる。

「問、云何名相待涅槃、名絶待涅槃耶。答、待累説滅、名爲相待、正法離言、強名涅槃、是其絶待（中略）絶待亦非一向無翻、但對他家一向有翻故、舉無翻謂絶待涅槃。本無名相、既無名言。當何翻名。若立涅槃名已、可得翻之名滅度耳。」³⁰¹

（問う、如何が相待涅槃と名づき、絶待涅槃と名づくや。答う、累に待ち滅を説き、名づけて相待と爲し、正法は言を離れ、強いて涅槃と名づき、是其絶待なり（中略）絶待は亦た一向無翻に非ず、但だ他家の一向有翻に対するが故、無翻を挙げ絶待涅槃と謂う。本に名相無し、既に名言無く。当に何ぞ名を翻するや。若し涅槃の名を立て已われば、これを翻じて滅度と名づくを得べきのみ。）

つまり、迷う人に正法を理解させるために説いた涅槃を相待涅槃とする。しかし、正法はあくまで言葉で表せないのも、涅槃と翻訳しても、それは強いて名づけたのである。また、無翻と言っても、それは有翻に対していうことであり、方便をもって滅度と翻訳する³⁰²ことができる。

このような観点は前述した四重二諦の解釈と類似すると考え、両方とも有無真俗の二諦に基づき、衆生に相對する仮有の理を入らせる。最後に言忘慮絶の真諦義をもって正法とするのである。実は吉蔵と珍海は正しくこのような観点から中道をもって涅槃の本とするのである³⁰³。

珍海における涅槃經思想はほとんど吉蔵から踏襲し、珍海自身の著作中において吉蔵の『大般涅槃經疏』の引用は多くほどになった。平井氏が整理した『大般涅槃經疏』の逸文は極めて重要な研究資料であり、参考資料としても相当の価値がある。次から筆者により整理した『大般涅槃經疏』の逸文であり、平井

³⁰¹ 珍海『三論玄疏文義要』『大正蔵』卷七十. p. 358c18-28

³⁰² 珍海は『三論玄疏文義要』の第九卷において「方便淨涅槃。是萬德上無累。稱爲滅度」と述べ、方便淨涅槃をもって滅度と呼ばれる。『大正蔵』卷七十. p. 359a9-10

³⁰³ 珍海は『三論玄疏文義要』の中に吉蔵の『大乘玄論』を引いて「然至論其體。但以正法中道爲二涅槃體」と述べており、中道を涅槃の本とする。『大正蔵』卷七十. p. 359a6-7

氏の逸文整理の補充として以下のように附す。

『三論玄疏文義要』 卷十

「涅槃疏六云、又示女身成佛者、如提婆達多品。文殊師利、往海中、化婆竭羅龍王女、始年七歲、即得成佛」

(T70. p. 366c1-3)

↓

『大般涅槃經』 卷四「四相品第七之一」

「我又示現於閻浮提女身成佛。衆人見之。皆言甚奇女人能成阿耨多羅三藐三菩提」(T12. p. 629c1-3)

『三論玄疏文義要』 卷七

「次文云、一者明何故止、釋初依爲人疑。初依既具煩惱性、是凡夫故不可依止。○故今釋初依往行、深遠發心來久也。二者以經推、非是釋後三依。仁王經及瓔珞本業經、並明十地菩薩供養微塵數世界諸佛。○今何得止、言九恒、故知九恒止、是初依往行也」(T70. p. 324c10-16)

↓

『大般涅槃經』 卷六「四依品第八」

「佛復告迦葉。善男子。是大涅槃微妙經中。有四種人。能護正法建立正法憶念正法。能多利益憐愍世間。爲世間依安樂人天。何等爲四。有人出世具煩惱性。是名第一」(T12. p. 637a20-24)

「善男子。若有衆生於一恒河沙諸如來所。發菩提心。然後乃能於惡世中。不謗是法愛樂是典。不能爲人分別廣說。善男子。若有衆生於二恒河沙諸如來所。發菩提心。然後乃能於惡世中不謗是法。正解信樂受持讀誦。亦復不能爲人廣說。若有衆生於三恒河沙諸如來所。發菩提心。然後乃能於惡世中不謗是法。受持讀誦書寫經卷。雖爲他說未解深義。若有衆生於四恒河沙諸如來所。發菩提心。然後乃能於惡世中不謗是法。受持讀誦書寫經卷。爲他廣說十六分中一分之義。雖復演說亦不具足。若有衆生於五恒河沙諸如來所。發菩提心。然後乃能於惡世中不謗是法。受持讀誦書寫經卷。廣爲人說十六分中八分之義。若

有衆生於六恒河沙諸如來所。發菩提心。然後乃能於惡世中不謗是法。受持讀誦書寫經卷。爲他廣說。十六分中十二分義。若有衆生於七恒河沙諸如來所。發菩提心。然後乃能於惡世中不謗是法。受持讀誦書寫經卷。爲他廣說十六分中十四分義。若有衆生於八恒河沙諸如來所。發菩提心。然後乃能於惡世中不謗是法。受持讀誦書寫經卷。亦勸他人令得書寫。自能聽受復勸他人令得聽受讀誦通利擁護堅持。憐愍世間諸衆生故。供養是經亦勸他人令其供養。恭敬尊重讀誦禮拜亦復如是」(T12. p. 693a20-b18)

『三論玄疏文義要』卷六

「涅槃疏九云、○此經云十地菩薩。十住猶十地。若如華嚴經明十住。十行乃至十地等。此住地異」(T70. p. 301a2-4)

↓

『大般涅槃經』卷八「如來性品第十二」

「善男子。如是菩薩位階十地。尚不明瞭知見佛性。何況聲聞緣覺之人能得見耶。復次善男子。譬如仰觀虛空鵝鴈。爲是虛空。爲是鵝鴈。諦觀不已髣髴見之。十住菩薩於如來性知見少分亦復如是」(T12. p. 652c12-17)

『三論玄疏文義要』卷一

「疏十一云、從佛出十二部經者、宋代道場寺惠觀法師、作五時教義、未開善光宅、乃至建初等竝用此。言五時教者、○<即大乘玄所述。成論師五時也。見面也>彼師所以作此釋者、正影此文。<云云>次文云、若是莊嚴後時亦作五時。而開合小異、束維摩思益、竝在大品第二時教。就初教中、更開人天乘、與前家不同、互有開合也。彼釋今文云、十二部經(+即是小乘三藏教也。修多羅)即是大乘、雜藏方等是。大品後二如前也。若是脫(=晚)莊嚴、即是招提師。只作四時教、義不開初人天乘教。彼師分此文云、十二部經、至方等此三即是教、波若即是行、涅槃即是果也。後有北地師解云、十二部經即是別教義、修多羅是通教義、此二同是教、而教中有通教別教也。方等即是理、前明其教、次即辨其理。波若即是行、涅槃即是果也。等是帖文、此即有意。前明教、既有教即有理、理即明行、行故即得果也。問、今云何。<已下答也>

山中師云、馳諸解貨、略之。今空不復足載也」(T70. p. 210a1-21)

↓

『大般涅槃經』卷十三「聖行品之下」

「從佛出生十二部經。從十二部經出修多羅。從修多羅出方等經。從方等經出般若波羅蜜。從般若波羅蜜出大涅槃」(T12. p. 691a3-6)

『三論玄疏文義要』卷一

「涅槃疏第十二云、舊譯修多羅不同。一云、通相修多羅、即如今文、從初說歡喜奉行。二者、復云別相修多羅、即是被誦長行也」(T70. p. 210b12-14)

↓

『大般涅槃經』卷十四「梵行品第二十之一」

「善男子。是菩薩摩訶薩知十二部經。謂修多羅·祇夜·授記·伽陀·優陀那·尼陀那·阿波陀那·伊帝目多伽·闍陀伽·毘佛略·阿浮陀達摩·優波提舍。善男子。何等名為修多羅經。從如是我聞乃至歡喜奉行。如是一切名修多羅」(T12. p. 693b19-24)

『三論玄疏文義要』卷九

「同十五云、分舍利為八分者、實為三分。天得一分、人得一分、龍得一分。就人中八國共分故、為八分。而今不言三分、止言八分者、此是據本為語。本是人間、八國分為八、後時天與飛來求覓分故、就此八分中、各減取與之、故得為三分。今據本時為言、故言八分」(T70. p. 362b4-10)

↓

『大般涅槃經』卷二十「高貴德王菩薩品之二」

「善男子。如來今於拘尸那城娑羅雙樹間。示現倚臥師子之床欲入涅槃。令諸未得阿羅漢果眾弟子等及諸力士生大憂苦。亦令天人阿修羅乾闥婆迦樓羅緊那羅摩睺羅迦等大設供養。欲使諸人以千端疊纏裹其身七寶為棺盛滿香油積諸香木以火焚之。唯除二端不可得燒。一者觀身。二最在外。為諸眾生分散舍利以為八分」(T12. p. 737c12-20)

『三論玄疏文義要』卷六

「疏十六云、今明凡夫亦知衆生有佛性、況十地菩薩而言不知。今言自知者、身必得成佛。知行因之始、知成道之時、故言自知。不知衆生者、不知衆生行因之始、行道之時、故云不知。非是不知衆生有佛性也」(T70. p. 300a26-b1)

↓

『大般涅槃經』卷二十五「師子吼菩薩品第二十三之一」

「爾時世尊告師子吼菩薩摩訶薩言。善男子。汝若欲問今可隨意。師子吼菩薩摩訶薩白佛言。世尊。云何爲佛性。以何義故名爲佛性。何故復名常樂我淨。若一切衆生有佛性者。何故不見一切衆生所有佛性。十住菩薩住何等法不了了見。佛住何等法而了了見。十住菩薩以何等眼不了了見。佛以何眼而了了見」(T12. p. 767b7-14)

『三論玄疏文義要』卷六

「疏十六云、種子只是因、如萬物各有種子、如粟麥等。今亦如此、佛性是中道種子。○此從因果入非因果、正性因果、則爲正性之種子故、云佛性爲中道種子。＜云云＞又觀智是菩提之種子。又境界是涅槃種子。又云、今此中文意、正以觀智爲菩提中道種子也」(T70. p. 301a9-15)

↓

『大般涅槃經』卷二十五「師子吼菩薩品第二十三之一」

「以何義故名佛性者。善男子。佛性者。即是一切諸佛阿耨多羅三藐三菩提中道種子」(T12. p. 768a7-9)

「無常無斷乃名中道。無常無斷即是觀照十二緣智。如是觀智是名佛性。二乘之人雖觀因緣。猶亦不得名爲佛性。佛性雖常以諸衆生無明覆故不能得見。又未能渡十二緣河。猶如兔馬。何以故。不見佛性故。善男子。是觀十二因緣智慧。即是阿耨多羅三藐三菩提種子。以是義故。十二因緣名爲佛性」(T12. p. 768b4-12)

『三論玄疏文義要』卷五

「涅槃疏十七云、○解脫有二種。○至三果具有兩縛。羅漢無子縛、有果縛。佛菩薩都無二縛。羅漢有一無一。＜云云＞羅漢此身斷三界煩惱盡、不須與爲因、

故但有果縛」(T70. p. 287a2-5)

↓

『大般涅槃經』卷二十七「師子吼菩薩品第二十三之三」

「師子吼言。世尊。若有名色是繫縛者。諸阿羅漢未離名色亦應繫縛。善男子。解脫二種。一者子斷。二者果斷。言子斷者名斷煩惱。阿羅漢等已斷煩惱衆結爛壞。是故子結不能繫縛。未斷果故名果繫縛。諸阿羅漢不見佛性。以不見故不得阿耨多羅三藐三菩提。以是義故可言果繫。不得說言名色繫縛」(T12. p. 781a25-b3)

『三論玄疏文義要』卷六

「涅槃疏十七云、既以衆生爲佛性、即是中道爲佛性。○故論云、雖復勤精進、若先無佛性、終自不成佛」(T70. p. 298a16-18)

↓

『大般涅槃經』卷三十「師子吼菩薩品第二十三之六」

「善男子。如陰入界雖復無常而名是常。衆生佛性亦復如是。善男子。如彼盲人各各說象雖不得實非不說象。說佛性者亦復如是。非即六法不離六法。善男子。是故我說衆生佛性非色不離色乃至非我不離我。善男子。有諸外道。雖說有我而實無我。衆生我者即是五陰離陰之外更無別我。善男子。譬如莖葉鬚臺合爲蓮花離是之外更無別花。衆生我者亦復如是。善男子。譬如牆壁草木和合名之爲舍離是之外更無別舍。如佉陀羅樹波羅奢樹尼拘陀樹鬱曇鉢樹和合爲林離是之外更無別林。譬如車兵象馬步兵和合爲軍離是之外更無別軍。譬如五色雜縑和合名之爲綺離是之外更無別綺。如四姓和合名爲大衆離是之外更無別衆。衆生我者亦復如是。離五陰外更無別我。善男子。如來常住則名爲我。如來法身無邊無礙不生不滅得八自在。是名爲我。衆生真實無如是我及以我所。但以必定當得畢竟第一義空。故名佛性」(T12. p. 802b28-c19)

『三論玄疏文義要』卷四

「涅槃疏十八云、跋婆比丘、即是阿薩。具別名、是五比丘中第四人」(T70. p. 266b1-3)

↓

『大般涅槃經』卷三十一「迦葉菩薩品第二十四之一」

「善男子。我又一時爲跋波比丘說。若比丘觀色。若過去若未來若現在若近若遠若麤若細。如是等色非我我所。若有比丘。如是觀已能斷色愛。跋波又言。云何名色。我言四大名色。四陰名名。我諸弟子聞是說已不解我意。唱言如來決定說言色是四大」(T12. p. 814b29-c6)

『三論玄疏文義要』卷六

「疏十八云、前既有十住少見佛性、能知自身成佛、不知衆生。今何得言一切衆生悉有佛性、迦葉亦作此說。若爾迦葉菩薩、則應具知衆生有佛性。今此語異十住菩薩能知一切衆生悉有佛性、煩惱覆故不見。但不能知衆生悉得成佛近久故、前文云不知也」(T70p. 300b13-19)

↓

『大般涅槃經』卷三十一「迦葉菩薩品第二十四之一」

「善男子。若諸衆生現在世中有佛性者。則不得名一闡提也。如世間中衆生我性。佛性是常三世不攝。三世若攝名爲無常。佛性未來以當見故。故言衆生悉有佛性。以是義故。十住菩薩具足莊嚴乃得少見。迦葉菩薩言。世尊。佛性者常猶如虛空。何故如來說言未來。如來若言一闡提輩無善法者。一闡提輩於其同學同師父母親族妻子。豈當不生愛念心耶。如其生者非是善乎。佛言。善哉善哉。善男子。快發斯問。佛性者猶如虛空。非過去非未來非現在。一切衆生有三種身。所謂過去未來現在。衆生未來具足莊嚴清淨之身得見佛性。是故我言佛性未來。善男子。我爲衆生或時說因爲果。或時說果爲因。是故經中。說命爲食見色爲觸。未來身淨故說佛性。世尊。如佛所說義如是者。何故說言一切衆生悉有佛性。善男子。衆生佛性雖現在無不可言無。如虛空性雖無現在不得言無。一切衆生雖復無常。而是佛性常住無變。是故我於此經中說。衆生佛性非內非外猶如虛空非內非外。如其虛空有內外者。虛空不名爲一爲常。亦不得言一切處有。虛空雖復非內非外。而諸衆生悉皆有之。衆生佛性亦復如是」(T12. pp. 808c27-809a23)

『三論玄疏文義要』 卷十

「涅槃疏第二十云、若是月德太子經云、(+佛) 今年二月十五日、陷雙樹間。至來年二月十五日、方入涅槃。若此經、初日二月十五日晨朝唱告、中夜入涅槃。今文復云、犢子梵志、過十五日後、佛猶故在、何得如此。今明、此年二月十五日、至來年二月十五日、方涅槃。何故爾。如來能令一日作十日。作十日死(宛力)、然而不告百〇乃至一年亦爾。如大通智勝佛、十劫坐道場、當時衆謂如食頃」(T70. p. 366a5-13)

↓

『大般涅槃經』 内容未見

『三論玄疏文義要』 卷六

「又涅槃疏言、檢諸部、不見此諍者、小乘諸部、皆云四果聲聞不作佛、不興諍論。大乘諸論、但明聲聞作佛、亦不明有不成佛、故無諍論。但以小乘對大乘者、佛於法華分明會通、亦非諍論之類故、云諸部不見此諍也。又佛性論雖有立破」(T70. p. 303c3-8)

↓

『大般涅槃經』 内容未見

まとめ

以上述べたように、本節には珍海の速疾成仏思想と逆罪滅除思想、及び逸文である『大般涅槃經疏』の引用について検討を行った。検討した結果を以下のように示す。

一、珍海が速疾成仏思想において、生滅という現象的な有様を離れ、初発心の無所得一念により成仏ができ、これは神通乗であると明らかにした。このような観点は吉蔵の『法華義疏』に説かれた刹那成仏と類似であるが、神通乗の名を付けて説くのが相違する。これについて珍海の解釈は、龍女の発心成仏は『法華義疏』に説かれた第十地に属する一生補處の菩薩の発心ではなく、方便により十地以上の発心成仏である。速疾とは、一念により決定でき、この一念は無生観の一念でもあり、十地以上の発心でもあると明らかにした。

二、逆罪滅除において珍海は吉蔵に説かれる懺悔より重罪を軽罪に転じ、実相を觀想することにより重罪が滅除できるという思想を受容した上、懺悔より罪が全て滅除できるが、果報はないとは言えない、正觀による懺悔するは深刻であり、惡業が全て滅除できると主張することが分かった。更に、珍海は吉蔵の『大般涅槃經疏』の内容を引いて、吉蔵の立場は重罪を犯した人にまず二乗に入らせ、更に二乗人の段階をもって無上道に到達させるということを強調した。

三、逸文である吉蔵の『大般涅槃經疏』に関する引用において、珍海著作の引用傾向を確認した。珍海の三論宗思想はほとんど吉蔵から継承したので、自身の著作中においても吉蔵の著作を多く引用するほどになった。更に珍海の涅槃經思想も吉蔵を踏襲し、二諦に基づき中道を涅槃の本とすることが分かった。

また、補充資料として、『三論玄疏文義要』にある『大般涅槃經疏』の引用文を整理して挙げた。

小結

本章では、珍海の教判思想と三論宗教理思想の特徴について検討を行った。検討した結果は以下のように示す。

一、珍海の教判について

第一節には、教相において珍海は吉蔵と同じ立場に立ち、仏の一代の教説を大乘と小乗の二つに分けられるが、根本法輪、枝末法輪、攝末歸本法輪という三輪説は衆生を一乗に入らせるための經教に対する判釈に過ぎないので、傍論と判釈したことが分かった。

また、珍海は広義の三論宗の立場から、『大品般若經』は『大智度論』を含む終極の經典であると位置づけた。さらに、般若經の教説は大乘における始めであることや、諸大乘の中においては最も深い經典であるなどということから、『大品般若經』を三論宗の正義と位置づけする。

また、『大品般若經』を判釈する時、珍海は教相の点から大乘と小乗の二面を考えて、『大品般若經』を大乘のみに属しめる意向が見られ、諸大乘經を枝末法

輪に帰結させることは濫用であると指摘して、三輪説は傍論であると定義したのである。

第二節には、珍海における教迹と論迹について検討を行った。

教迹について、珍海は吉蔵と同じ立場に立ち、書物、経巻、仏像など形がある実物をもって表応といい、衆生の機根に赴いて法を説くことを正応という。更に、珍海は教迹において言教と境教に分け、言教とは、有に対して有を説き、無に対して無を説く於諦の二教のことを指す。境教とは、有に対して無を説き、無に対して有を説く二不二の因縁有無の教である。言教は表応であり境教は顕理であるということが分かった。

また、諸法無自性と八不不生という立場から、顕理の境教は即ち中道ということが分かった。真俗の二諦によって二智を起こし、また起こした二智は不二の理を照らし、直ちに最初の真俗の二諦は不二（不真不俗）の境に転じ、即ち境教であると解釈した。このような教、理、智、境という三論宗の基本教学を偏空説と区分するために、珍海は唯識の三性三無性説を引用して、三論宗の空は因縁仮名を壊せず不二の理を照らし、真空ということが分かった。

論迹について、珍海は吉蔵の『大乘玄論』「論迹義」の内容を挙げ、まず、吉蔵に説かれた五つの論迹内容を示した。その内容は以下のようなものである。

- ① 「明破申大意」
- ② 「明四論宗旨義有同異」
- ③ 「明經論能所諦智傍正」
- ④ 「釋中觀論名」
- ⑤ 「明論緣起」

これに対して珍海は更に自分自身の考えを述べ、六つの論迹内容を明らかにした。その内容は以下のようなものである。

第一の内容は聖意を推測する立場から、『法華義疏』『勝鬘宝窟』『深密解脱經』など数多くの経論を引用して三論宗思想の承習を現したのである。

第二の「前後同異」の内容は、前、後、同、異という四つの方面から論迹の不同である様態を明らかにした。「前」は興皇寺法朗乃至鳩摩羅什に至るまで、經典、論書などに対する解釈を指し、「後」は即ち吉蔵の三論宗教義のことを指

すと考えられる。そして、「同」というのは、經論を講読する法朗であれ、吉藏であれ、正理を顕わす目的が同じであると説く。「異」は即ち經論を宣揚する人がそれぞれ違うことを指すであると考え。このような見解は吉藏の諸經典顯道無異という經典觀と同じである。

第三の「破申具足」は、二諦の教説をもって全ての邪見を破し、仏の正道を顕わすのである。つまり、吉藏に説かれた破邪顯正のことである。

第四の「隨縁轉測」と第五の「義門通別」は、真俗二諦の立場から正理の顕わし方の不同を強調している。珍海は論述においても二諦の教義をもって論ずるのである。

二、珍海における三論宗教理思想の特徴について

第三節には、珍海に関する速疾成仏について検討を行った。珍海が速疾成仏思想において、生滅という現象的な有様を離れ、初發心の無所得一念により成仏ができ、これは神通乗であると明らかにした。このような観点は吉藏の『法華義疏』に説かれた刹那成仏と類似であるが、神通乗の名を付けて説くのが相違する。これについて珍海の解釈は、龍女の發心成仏は『法華義疏』に説かれた第十地に属する一生補處の菩薩の發心ではなく、方便により十地以上の發心成仏である。速疾とは、一念により決定でき、この一念は無生觀の一念でもあり、十地以上の發心でもあると明らかにした。

また、重罪滅除に関する思想において、珍海は吉藏に説かれる懺悔より重罪を輕罪に転じ、実相を觀想することにより重罪が滅除できるという思想を受容した上、懺悔より罪が全て滅除できるが、果報はないとは言えない、正觀による懺悔するは深刻であり、惡業が全て滅除できると主張することが分かった。更に、珍海は吉藏の『大般涅槃經疏』の内容を引いて、吉藏の立場は重罪を犯した人にまず二乗に入らせ、更に二乗人の段階をもって無上道に到達させるということを強調した。

また、逸文である吉藏の『大般涅槃經疏』に関する引用において、珍海著作の引用傾向を確認した。珍海の三論宗思想はほとんど吉藏から継承したので、自身の著作中においても吉藏の著作を多く引用するほどになった。更に珍海の涅槃經思想も吉藏を踏襲し、二諦に基づき中道を涅槃の本とすることが分かつ

た。

また、補充資料として、『三論玄疏文義要』にある『大般涅槃經疏』の引用文を整理して挙げた。

結論

本論文において、筆者は日本平安末の珍海の三論宗教学思想の解明というテーマで検討を行い、以下のような過程を経て結論を得た。

まず第一章で小野玄妙氏、平子鐸嶺氏及び坂上雅翁氏などの先行研究を踏まえて、珍海の生涯と珍海の著作について考察を行い、学僧とする珍海の修学過程及び現存する珍海の著作の様態を明らかにした。また、第二章において珍海における三論宗著作の特徴について検討を行い、各著作における共通点を明らかにした。更に珍海の思想について、筆者は第三章から第五章まで三章に分けて検討を試み、珍海における一乗義に対する理解、及び一乗と涅槃仏性に対する理解、また八不、中道、二諦、二智についての関係、なお珍海における三論宗教理思想の特徴などをめぐって検討を行った。その結果、(一) から (五) までの検討結果を得た。

一、珍海の生涯と著作について

珍海の生涯と諸著作についての検討した結果を以下の四点にまとめた。

(一) 珍海の生年は二つの可能性があるかと推測でき、一つは享年六十二歳である仁平二年から逆算して、生年は寛治五年(1091年)である。もう一つは『八識義章研習抄』と『維摩講師研学堅義次第』の記載により、生年は寛治六年(1092年)である。

(二) 珍海は父藤原基光の影響を受け、画僧としても活躍した。

(三) 珍海は御斉会の講師を勤めた時、密教僧としても活躍したことが分かった。

(四) 珍海は平安末期の学僧として、当時の時代背景の下で三論、因明、法相、華嚴、密教、浄土等多宗の教義を兼修したことが分かった。しかも、珍海の諸著作の中において三論宗関係の著作は多く、それらの著作は後世の三論宗研究の学者にとって役割を果たしている。

二、珍海における三論宗著作の特徴

珍海の三論宗著作に対する検討を行った結果、彼は『大乘玄論』の八義科を

重視しており、『一乗義私記』と『大乘玄問答』のような『大乘玄論』に対する解釈文を著したほか、『三論玄疏文義要』『三論名教抄』の中にも『大乘玄論』の趣旨に用いるところが多くことが分かった。

また珍海には三論宗の重要な名目に対して解釈した『三論名教抄』十五巻と、『大乘玄論』に対して著した『大乘玄問答』十二巻と、『大乘玄論』巻三の「一乗義」に対して解釈した『一乗義私記』一卷があり、これらの著作はいずれも吉蔵の『大乘玄論』と深い関係があることが分かった。

三、『一乗義私記』について

『一乗義私記』は珍海によって吉蔵の『大乘玄論』「一乗義」に対する解釈である。内容の構成から「釈名」、「出体」、「同異」という三つの部分に分かれている。珍海の『一乗義私記』に対する検討を通して、主として三つの検討結果を得た。要点をまとめると以下のようである。

(一)「破三」と「帰一」に対する検討を行った結果、珍海は吉蔵の著作と慧遠の著作を依用し、両師の思想を融合した上、自身の見解を加えて九種類の三乗と一乗との関係を解釈することが分かった。

(二)一乗と涅槃仏性に対する検討を行った結果、珍海は五種仏性説と乗体を融合した趣旨は吉蔵の仏性思想とほとんど同じであることを明らかにした。

(三)『大乘玄論』「一乗義」と『一乗義私記』に関する比較を通して、両著作の相違するところを明らかにした上、珍海の当時の『大乘玄論』は、現在の大正蔵経テキストと異なるテキストがあったと確認できた。

四、珍海における中道思想について

珍海における中道思想においては、まず珍海の著作『大乘正観略私記』を紹介した上、珍海における中道思想について検討を行った。珍海の中道思想は吉蔵から継承し、四重二諦、十種二諦、三種方言という三つの教説を重視して、二諦中道が仏果を包摂し、更に二諦中道の理を用いて無礙の法門を解釈したのである。

五、珍海の教判と三論宗教理思想の特徴について

本項において珍海の教判と、珍海の三論宗教理思想の特徴という二方面に分けて要点をまとめるならば、以下の通りである。

(一) 珍海の教判について

1. 教相において珍海は吉蔵と同じ立場に立ち、仏の一代の教説を大乘と小乗の二つに分けられるが、根本法輪、枝末法輪、攝末歸本法輪という三輪説は衆生を一乗に入らせるための経教に対する判釈に過ぎないので、傍論と判釈したことが分かった。

また、珍海は広義の三論宗の立場から、『大品般若経』は『大智度論』を含む終極の經典であると位置づけた。さらに、般若経の教説は大乘における始めであることや、諸大乘の中においては最も深い經典であるなどということから、『大品般若経』を三論宗の正義と位置づけする。

また、『大品般若経』を判釈する時、珍海は教相の点から大乘と小乗の二面を考へて、『大品般若経』を大乘のみに属しめる意向が見られ、諸大乘経を枝末法輪に帰結させることは濫用であると指摘して、三輪説は傍論であると定義したのである。

2. 珍海における教迹と論迹に対する検討を行った結果を以下の通り示す。

教迹について、珍海は吉蔵と同じ立場に立ち、書物、経巻、仏像など形がある実物をもって表応といい、衆生の機根に赴いて法を説くことを正応という。更に、珍海は教迹において言教と境教に分け、言教とは、有に対して有を説き、無に対して無を説く於諦の二教のことを指す。境教とは、有に対して無を説き、無に対して有を説く二不二の因縁有無の教である。言教は表応であり境教は顕理であるということが分かった。

また、諸法無自性と八不不生という立場から、顕理の境教は即ち中道ということが分かった。真俗の二諦によって二智を起し、また起こした二智は不二の理を照らし、直ちに最初の真俗の二諦は不二（不真不俗）の境に転じ、即ち境教であると解釈した。このような教、理、智、境という三論宗の基本教学を偏空説と区分するために、珍海は唯識の三性三無性説を引用して、三論宗の空は因縁仮名を壊せず不二の理を照らし、真空ということが分かった。

論述について、珍海は吉蔵の『大乘玄論』「論述義」の内容を挙げ、まず、吉蔵に説かれた「明破申大意」、「明四論宗旨義有同異」、「明經論能所諦智傍正」、「釋中觀論名」、「明論緣起」という五つの論述内容を示した。これらの論述内容に対して、珍海は更に自分自身の考えを加えて以下の通り明らかにした。

第一、論述の内容は聖意を推測する立場から、『法華義疏』、『勝鬘宝窟』、『深密解脱經』など数多くの經論を引用して三論宗思想の承習を現したのである。

第二、前、後、同、異という四つの方面から論述の不同である様態を明らかにした。「前」は興皇寺法朗乃至鳩摩羅什に至るまで、經典、論書などに対する解釈を指し、「後」は即ち吉蔵の三論宗教義のことを指すと考えられる。そして、「同」というのは、經論を講読する法朗であれ、吉蔵であれ、正理を顕わす目的が同じであると説く。「異」は即ち經論を宣揚する人がそれぞれ違うことを指すであると考ええる。このような見解は吉蔵の諸經典顯道無異という經典觀と同じである。

第三、二諦の教説をもって全ての邪見を破し、仏の正道を顕わすのである。つまり、吉蔵に説かれた破邪顯正のことである。

第四、真俗二諦の立場から正理の顕わし方の不同を強調している。珍海は論述においても二諦の教義をもって論ずるのである。

(二) 珍海における三論宗教理思想の特徴について

1. 珍海が速疾成仏思想において、生滅という現象的な有様を離れ、初発心の無所得一念により成仏ができ、これは神通乗であると明らかにした。このような観点は吉蔵の『法華義疏』に説かれた刹那成仏と類似であるが、神通乗の名を付けて説くのが相違する。これについて珍海の解釈は、龍女の発心成仏は『法華義疏』に説かれた第十地に属する一生補處の菩薩の発心ではなく、方便により十地以上の発心成仏である。速疾とは、一念により決定でき、この一念は無生觀の一念でもあり、十地以上の発心でもあると明らかにした。

2. 重罪滅除に関する思想において、珍海は吉蔵に説かれる懺悔より重罪を輕罪に転じ、実相を觀想することにより重罪が滅除できるという思想を受容した上、懺悔より罪が全て滅除できるが、果報はないとは言えない、正觀による懺

悔するは深刻であり、悪業が全て滅除できると主張することが分かった。更に、珍海は吉蔵の『大般涅槃經疏』の内容を引いて、吉蔵の本意は重罪を犯した人にまず二乗に入らせ、更に二乗人の段階をもって無上道に到達させるということを強調した。

3. 逸文である吉蔵の『大般涅槃經疏』に関する引用において、珍海著作の引用傾向を確認した。珍海の三論宗思想はほとんど吉蔵から継承したので、自身の著作中においても吉蔵の著作を多く引用するほどになった。更に珍海の涅槃經思想も吉蔵を踏襲し、二諦に基づいて中道を涅槃の本とすることが分かった。また、補充資料として、『三論玄疏文義要』に引用された『大般涅槃經疏』の逸文を整理して挙げた。

以上が、本論において検討の結果得た結論である。

参考文献

テキスト類

- 南本『大般涅槃經』『大正藏』卷十二
菩提流支訳『深密解脫經』『大正藏』卷十六
鳩摩羅什訳『仏説華手經』『大正藏』卷十六
竺仏念訳『菩薩瓔珞本業經』『大正藏』卷二十四
龍樹『大智度論』『大正藏』卷二十五
龍樹『十二門論』『大正藏』卷三十
龍樹『中論』『大正藏』卷三十
吉蔵『法華玄論』『大正藏』卷三十四
吉蔵『法華義疏』『大正藏』卷三十四
吉蔵『法華遊意』『大正藏』卷三十四
吉蔵『浄名玄論』『大正藏』卷三十八
慧遠『維摩義記』『大正藏』卷三十八
吉蔵『百論疏』『大正藏』卷四十二
吉蔵『中觀論疏』『大正藏』卷四十二
吉蔵『二諦義』『大正藏』卷四十五
元康『肇論疏』『大正藏』卷四十五
吉蔵『大乘玄論』『大正藏』卷四十五
吉蔵『三論玄義』『大正藏』卷四十五
安澄『中論疏記』『大正藏』卷六十五
珍海『大乘正觀略私記』『大正藏』卷七十
珍海『三論玄疏文義要』『大正藏』卷七十
珍海『一乗義私記』『大正藏』卷七十
珍海『大乘玄問答』『大正藏』卷七十
珍海『三論名教抄』『大正藏』卷七十
珍海『八識義章研習抄』『大正藏』卷七十
吉蔵『大乘玄論』『国訳一切經』漢和撰述 諸宗部一

参考著書

- 湯 用彤『漢魏兩晉南北朝仏教史』台湾商務印書館股分有限公司. 1938
- 黑板勝美『国史大系—尊卑分脈—』吉川弘文館. 1966
- 宇井伯寿『宇井伯寿著作選集』大東出版社. 1968
- 平井俊榮『中国般若思想史研究—吉蔵と三論学派—』春秋社. 1976
- 『三論教学の研究』春秋社. 1990
- 三枝充恵『三論玄義』大蔵出版株式会社. 1971
- 島地大等『日本佛教教学史』中山書房. 1976
- 小野玄妙『小野玄妙佛教芸術著作集』開明書院. 1977
- 前田慧雲『三論宗綱要』丙午出版社. 大正九年
- 『三論宗綱要』弥勒出版社. 1983
- 鎌田茂雄『八宗綱要』講談社. 1985
- 韓 廷傑『三論玄義校釋』中華書局出版. 1987
- 張 曼涛主編『三論宗之發展及其思想』大乘文化出版社. 1987
- 『般若思想研究』大乘文化出版社. 1988
- 『三論典籍研究』大乘文化出版社. 1988
- 大谷旭雄『往生要集研究』永田文昌堂. 1987
- 稻垣栄三『醍醐寺の密教と社会』山喜房佛書林. 1991
- 醍醐寺文化財研究所『醍醐寺新要録』法藏館. 平成 3 年
- 坂上雅翁『浄土仏教の思想』七. 講談社. 1993
- 姚 衛群『仏教般若思想發展源流』北京大学出版社. 1996
- 小野玄妙『小野玄妙仏教芸術著作集』第十卷. 開明書院. 1997
- 梯信 暁『日本浄土教の形成と展開』法藏館. 2004
- 山本信吉『高野山正智院聖教目録』吉川弘文館. 2006
- 涂 艷秋『鳩摩羅什般若思想在中国』里仁書局. 2006
- 李 勇『三論宗佛学思想研究』宗教文化出版社. 2007
- 董 群『中国三論宗通史』鳳凰出版社 . 2008
- 伊東昌彦『吉蔵の浄土教思想の研究—無得正観と浄土教』春秋社. 2011
- 高野淳一『中国中観思想論—吉蔵における「空」—』大蔵出版. 2011

- 方 東美『中国大乘佛学』（全二冊）中華書局. 2012
- 菅野博史『南北朝・隋代の中国仏教思想研究』大蔵出版. 2012
- 京都国立博物館『国宝浄名玄論』勉誠出版. 2014
- 松森秀幸『唐代天台法華思想の研究』法蔵館. 2016
- 隆相 董群主編『三論宗研究』第一輯. 宗教文化出版社. 2017
- 伊藤隆壽『中国仏教の批判的研究』大蔵出版. 1992
- 『三論宗の基礎的研究』大蔵出版. 2018
- 『巢氏諸病源候総論』隋 巢元方
- 『維摩講師研学堅義次第』吉川弘文館. 1971
- 『史料大観』哲学書院. 1898

参考論文

- 高神覚昇「三論教学における二諦思想」
『智山学報』第 10 号. 1936. pp. 26-46
- 長澤實導「佛教における教と理—仏教思想史の一視点—」
『智山学報』第 1 号. 1954. pp. 86-97
- 佐藤達玄「嘉祥の二諦思想について」
『印度学仏教学研究』第 8 号（2）1960. pp. 637-640
- 明山安雄「永観・珍海の浄土教研究序説」
『仏教大学研究紀要』第 46 号. 1964. pp. 177-192
- 平井俊栄「嘉祥大師吉蔵の基礎的研究—著述の前後関係をめぐって—」
『印度学仏教学研究』第 14 卷（2）1966. pp. 685-693
- 「吉蔵著『大般涅槃経』逸文の研究（上）」
『南都仏教』第 27 号. 1971. pp. 55-100
- 「吉蔵著『大般涅槃経』逸文の研究（下）」
『南都仏教』第 29 号. 1972. pp. 37-93
- 「南都三論宗史の研究序説」
『駒澤大学佛教学部研究紀要』第 44 号. 1986. pp. 29-45
- 田中正徳「中論二諦について—二諦即中道—」

- 『印度学仏教学研究』第21巻. 1973. pp. 162-163
- 坂上雅翁「珍海の浄土観」
- 『印度学仏教学研究』第2巻. 1978. pp. 705-706
- 伊藤隆寿「三論宗学系史に関する伝統説の成立—特に中国三論学派について—」
- 『駒澤大学佛教学部研究紀要』第36号. 1978. pp. 192-217
- 藤井教公「『涅槃経』における一、二の問題—浄影寺慧遠と吉蔵における仏性の理解—」
- 『印度学仏教学研究』第28巻(2). 1980. pp. 662-663
- 「中国南北朝仏教における一乗思想—『涅槃経』を中心として—」
- 『印度学仏教学研究』第59巻(2). 2011. pp. 577-584
- 奥野光賢「三論宗における声聞成仏について—珍海の見たる吉蔵の声聞成仏観—」
- 『印度学佛教学研究』第2巻. 1990. pp. 686-690
- 「吉蔵における「決定業転」をめぐって」
- 『駒澤短期大学佛教論集』第3号. 1997. pp. 23-36
- 「禅那院珍海の研究」
- 『駒澤短期大学佛教論集』第12号. 2006. pp. 133-154
- 「『大乘玄論』に関する諸問題—「一乗義」を中心として—」
- 『駒沢大学佛教学部研究紀要』第70号. 2012. pp. 120-138
- 末光愛正「吉蔵の成仏不成仏観」(一～十)
- 『駒澤大学佛教学部研究紀要』第45号. 1987. pp. 275-291
- 『駒澤大学仏教学部論集』第18号. 1987. pp. 354-373
- 『駒澤大学佛教学部研究紀要』第46号. 1988. pp. 231-250
- 『駒澤大学仏教学部論集』第19号. 1988. pp. 315-331
- 『駒澤大学仏教学部論集』第20号. 1989. pp. 238-251
- 『駒澤大学佛教学部研究紀要』第48号. 1990. pp. 91-105
- 『駒澤大学仏教学部論集』第21号. 1990. pp. 341-356
- 『駒澤大学佛教学部研究紀要』第49号. 1991. pp. 107-122
- 『駒澤大学仏教学部論集』第22号. 1991. pp. 300-313

- 『駒澤大学佛教学部研究紀要』第 50 号. 1992. pp. 223-236
- 元山公寿「吉藏の二諦説について」
- 『智山学報』第 38 卷. 1989. pp. 45-60
- 菅野博史「『大乘四論玄義記』の基礎的研究」
- 『印度学仏教学研究』第 57 卷（1）2008. pp. 504-512
- 「吉藏の涅槃經觀—『涅槃經遊意』を中心として—」
- 『印度学仏教学研究』第 65 卷（1）2016. pp. 441-449
- 服部純啓「『決定往生集』における極樂浄土觀—依報決定に説く道綽解釈に注目して—」
- 『印度学仏教学研究』第 68 卷（1）2019. pp. 65-68
- 成瀬隆順「決定業としての念仏—珍海撰『決定往生集』における解釈—」
- 『印度学仏教学研究』第 68 卷（2）2020. pp. 567-572

参考辞書

- 『織田仏教大辞典』大蔵出版. 1970
- 『佛教語大辞典』東京書籍. 昭和 50 年
- 『大蔵經全解説大辞典』雄山閣出版. 平成 10 年

珍海の三論教理思想の研究・資料編

『大乘正観略私記』 訳注

凡 例

本資料編に用いるテキストは、『大正新修大蔵経』卷七十所収の『大乘正観略私記』である。珍海の三論宗教理思想を理解するための資料として、訳注を作成したものである。本テキストの和訳注はまだ刊行されておらず、本訳注が最初の試みである。

- 一 本資料編は、『大乘正観略私記』の分段に随い、各段落に分けて掲載する。
- 二 まず大正蔵経テキストを挙げ、その後書き下し文を示した。
- 三 注は書き下し文に注番号を付し、各段の後に置いた。
- 四 字体はテキスト部分と、書き下し、及び注の引用の部分は正字を用いた。それ以外は略字を用いた。
- 五 文字の異同に関しては、対校本によって意味上から改めた場合があり、注でその旨を示しておいた。
- 六 テキスト中の割り注部分は〈〉で示した。

テキスト

沙門珍海記之

夫以、至道冲邃、迷者彌多。專憑師宗、粗示方隅。明識君子、以自悉之。將啓宗旨、略有三門。一、正觀大意。二、諸門分別。三、總結宗歸。

第一、大意門

問、中道正觀大意如何。答、大意難彰、且寄人示之。淨名玄第六云、有二種人、一者、學無所得觀意。乃虛玄方言不足。二者、但分別法相。失顯道正宗。今、欲令文義兩明、玄事俱得故、開此階級也。〈文 文義要大意門引之〉言玄事者、即理事也。諸法相狀、彼此各異。故名爲事。理實希妙言亡慮絕假與玄稱。然事理二、二而不二。現事去來、即無生故、如肇公云、道遠乎哉、觸事眞也。又、事別法正者、亦是中道故、由此應知。玄事無二。問、若爾、何故玄事俱得耶。答、此是因緣理事爲二。不如 毘曇、理事恒別。問、所言因緣玄事如何。答、雖有數意、略有三番。一、眞俗分別。世諦之中諸法別異、名爲事相。眞如平等、無有分別、稱爲理也。二、通別異。若眞若俗、但是道理貫皆名爲理。若於世中、所有人物本末緣起、隨事各異乃名爲事。如本事等。三、隱顯異、如因果等。作用道理、各各不同。深細難知。利智方見、稱之爲理。若眼所見、去來等事、乃名爲事。如因緣品明理無生、去來品明事無生等。此中玄事、正在初門。然眞俗者、若有若空、皆是用門。判爲教門。即名事也。由教所入非空有理、乃名玄耳。今、欲人教理俱明。修因得果故、玄事兩明也。問、玄事雖兼正意在何。答、雖兼理事、意在於玄。設教、本欲令入理故。故中論〈第二〉疏重牒八不云、問、有二種人、一者、悟大乘無所得意、而不解數論名教。二者、精識一切名教、不學大乘無所得意。此二人中、何者爲勝。答、耳目之徒、言識一切名教者勝。今、以理論之。雖二人並失、而前者爲勝。何以知然。佛雖說一切名教、意在無所得、一相一味。謂離相解脫相。問、弘經通論、須科文釋義次第生起。詳定違順①、會諸同異。云何一向作無所得觀耶。答、考尋聖人興世、諸所施爲爲顯中道。令因中發觀、滅諸煩惱。若存著語言、傷佛意也。又百年之壽朝露非奢。宜以存道爲急。而乃急其所緩、緩其所急。豈非一期之自誤耶。〈文〉言二人俱兼失者、各依一途、互失教理故是失也。而前勝者、且取存理爲勝。考此文意、理應俱兼、方乃爲得。若教理俱存、乃是眞無所得也。數論名教者、毘曇爲數、成論名論。

其阿毘曇正在小乘、然實通大小。故疏第三云、一者、毘曇通大小、如阿含通大小。又攝大乘論云、分別大乘義、是大乘毘曇。羅什云、吾造大乘阿毘曇、有勝迦旃延子。〈云云〉又現行法相、大乘對法等論、正是大乘阿毘曇也。今檢文旨、應有三人。一者、名教學者。二者、是正觀學者。三者、教理兼學。然 此三人、前二爲失、第三爲得。於前二中、正觀猶勝。又教理俱明者、卽正觀學。故唯爲二。若於無所得中自論三者、三人還是一無所得學者也。今安、大乘無所得中、若樂廣者、應學名教。於自宗中、科文釋義、詳定違順、決斷分別法相名教。又依淨影等義宗、應學名教。若樂深者、唯可學習無依無得。若深識記持者、應依第三深廣兩兼。若淺學無所得者、語言龜荒、皆似戲論。甚 爲無益。但可科文釋義。若智利推度者、但取片言、而意志未契。并是增上慢。或恐墮邪執。唯可尋文、漸漸思量、若得要文要義、方可明首尾而會大乘宗旨。

『大乘正觀略私記』『大正藏』卷七十. p. 195a4-c14

注

- ① 大正藏經テキストは「違頁」とあるが、欄外注記に「頁＝順」とある。珍海自身が後の文中にも「違順」とし、意味上に「違順」の方が通じやすいので、今改めた。

書き下し

沙門珍海これを記す

夫れおもんみるに、至道は冲邃①にして、迷う者いよいよ多し。専ら師宗に憑りて粗ぼ方隅②を示す。明識なる君子は、以て自らこれを悉くせよ。將に宗旨を啓くに、略して三門有るべし。一に、正觀の大意なり。二に、諸門を分別す。三に、宗歸を總結す。

第一、大意の門

問う、中道正觀の大意は如何。答う、大意は彰め難し。且く人に寄りてこれを示さん。『淨名玄』第六に云わく「二種の人有り、一には、無所得觀の意を學び。乃ち虛玄③にして方に言不足す。二には、但だ法相を分別す。顯道の正宗を失す。今、文義をして兩つながら明かにせしめ、玄・事俱に得んと欲するが故に、

此の階級④を開くなり」⑤と。〈文『文義要』の大意門これを引く〉。玄・事と言うは、即ち理・事⑥なり。諸法の相狀、彼此各異なり。故に名づけて事と爲す。理は實に希妙なり。言亡慮絶にして假に玄の稱を與う。然るに事・理の二は、二にして而かも不二。事を現じて去來す、即ち無生なるが故に、肇公の言うが如く「道は遠きかな、事に触して眞なり」⑦と。又、事は別法にして正なるとは、亦是れ中道なるが故に、此に由りてまさを知るべし。玄・事は無二なることを。問う、若し爾らば、何の故に玄・事俱に得んや。答う、此れは是れ因縁の理と事を二と爲す。毘曇の如くならず、理と事は恒に別なり。問う、言う所の因縁の玄事は如何。答う、數意有ると雖も、略して三番有り。一には、眞・俗の分別なり。世諦中にある諸法を別異、名づけて事・相と爲す。眞如平等、分別有ること無きを、稱して理と爲すなり。二には、通別は異なる、若しく眞若しく俗、但だ是れ道理が貫くを皆名づけて理と爲す。若し世中に於いて、所有の人・物、本と末が縁起し、事に隨い各異を乃ち名づけて事と爲す。本事⑧等の如くなり。三には、隱顯は異なる、因果等の如し。作用道理、各々不同なり。深細⑨にして知り難し。利智もて方に見る、これを稱して理と爲す。若し眼の所見、去來等の事のごときを、乃ち名づけて事と爲す。因縁品⑩に理は無生なりと明し、去來品⑪に事は無生なりと明かす等の如し。此の中の玄・事は、正しく初門に在り。然るに眞・俗は、若しく有若しく空、皆是れ用門なり。判じて教門と爲す。即ち名づけて事と爲すなり。教に由りて入る所は空に非ず理有り、乃ち玄と名づくるのみ。今、人をして教・理俱に明からしめんと欲す。因を修して、果を得るが故に、玄・事兩ながら明かなり。問う、玄・事は兼ねると雖も正意は何に在りや。答う、理・事は兼ねると雖も、意は玄に在り。教を設くるも、本、理に入らしめんと欲するが故なり。故に『中論（疏）』〈第二〉に八不を重ねて牒して云わく「問う、二種の人有り、一には、大乘の無所得の意を悟り、數論の名教を解せず。二には、一切の名教を精識し、大乘の無所得の意を學ばず。此の二人中、何者か勝れたるや。答う、耳目の徒⑫、一切の名教を識る者は勝れたりと言う。今、理を以てこれを論ず。二人は並びに失と雖も、而も前者が勝ると爲す。何を以て然ると知るや。佛は一切の名教を説くと雖も、意は無所得、一相一味に在り。謂わく離相・解脫相なり。問う、經を

弘め論を通ずるに、科文を須うれば、釋義が次第に生起す。違順を詳定し、諸の同異を會す。云何にして一向に無所得の觀を作すや。答う、聖人世に興こるを考尋し、諸所に施しをして爲に中道を顯わすと爲す。中に因によりて觀することを發し、諸の煩惱を滅せしむ。若し語言に存著すれば、佛の意を傷するなり。又百年の壽も朝露にして奢りに非ず。宜しく道に存するを以て急と爲すべし。而して乃ち其の緩とする所を急とし、其の急とする所を緩とす。豈に一期⑬の自誤に非ずや」⑭と〈文〉。二人は俱に兼ねて失と言うとは、各一途に依り、互いに教理を失うが故に是れ失なり。而して前が勝るとは、且く理が存するを取って勝ると爲す。此の文意を考うるに、理はまさに俱に兼ねべし、方に乃ち得と爲す。若し教・理は俱に存すれば、乃ち是れ眞の無所得なり。數論の名教とは、毘曇を數と爲す、成論を論と名づく。其れ阿毘曇は正に小乘に在り、然るに實には大小に通ず。故に『(中論) 疏』第三に云わく「一に、毘曇は大小に通ず、阿含は大小に通ずるが如しと。又『攝大乘論』に云わく、大乘の義を分別するに、是れ大乘の毘曇なり。羅什の云わく、吾れ大乘阿毘曇を造りり、迦旃延子に勝るる有り」⑮と。〈云云〉。又現に行う法相、大乘の對法等の論は、正に是れ大乘の阿毘曇なり。今文旨を検するに、まさに三人有るべし。一に、名教の學者、二に、是れ正觀の學者なり、三に、教と理の兼學なり。然るに此の三人は、前の二(人)を失と爲す、第三(の人)を得と爲す。前の二(人)の中に於いて、正觀は猶お勝れたり。又教と理を俱に明かすは、即ち正觀の學なり。故に唯二と爲す。若し無所得中に於いて自ら三を論ずれば、三人は還た是れ一の無所得の學者なり。今安ずるに、大乘の無所得中に、若し廣を樂わば、まさに名教を學ぶべし。自宗中に於いて、科文もて義を釋し、違順を詳定し、法相と名教を決斷分別するなり。又淨影等の義に依るの宗は、まさに名教を學ぶべし。若し深を樂わば、唯だ無依無得を學習すべし。若し深く記持を識らば、まさに第三の深廣兩兼に依るべし。若し淺く無所得を學ばば、語言は龜荒なり、皆戲論に似る。甚だ無益と爲す。但だ科文もて義を釋すべし。若し智利もて推度せば、但だ片言を取り、而も意志は未だ契わず。並びに是れ増上慢なり。或は恐らく邪執に墮つ。唯だ文を尋ね、漸漸に思量すべし、若し要文の要義を得ば、方に首尾を明かして大乘の宗旨を會すべし。

注

- ① 老子『道德經』第四十五に「大盈若冲、其用不窮」（大盈は冲しきが若し、其の用は窮まらず。）とあり、「冲」は精深して玄妙であり、奥深く虚しくの意味である。「邃」は幽邃、淵邃の意味。深遠で奥深い意である。
- ② 片隅のこと。珍海の謙遜的表現。馬鳴・龍樹から羅什・吉蔵を経て自身に至るまでの師資相承によって伝えられたものに依拠してほんの一隅を示そうの意である。
- ③ 奥深く、理解しにくい、虚幻玄妙な存在のことを指す。
- ④ 吉蔵『浄名玄論』巻六に真俗のことを述べるために十二門に分けて説く段階のこと。この「階級」は十二門のことを指す。すなわち、「一性假門。二有無門。三有本無本門。四顕不顕門。五理教門。六説不説門。七浅深門。八理内理外門。九無定性門。十相待門。十一泯得失門。十二体用門」をいう。『大正蔵』巻三十八. p. 891c14-18
- ⑤ 『浄名玄論』巻六末に「有二種人。一者學無所得觀意乃虚玄方言不足。二者但分別法相失顯道正宗。今欲令文義兩明玄事。但得故關屯階級也」とある。『大正蔵』巻三十八. p. 897b26-b29 ただし、珍海は引用文の中の「但得」を「俱得」としている。また、珍海が著した『三論玄疏文義要』の中にも「今欲令文義兩明。玄事俱得。故開此階級也」とする。『大正蔵』巻七十. p. 200a17-18 「俱」は「そろって」、「ともに」の意味。「但」は「ただ」の意味である。珍海が「俱」としている理由は二つの可能性が考えられる。一つは珍海が見たその時代の原文には「俱」とあった場合。二つ目は珍海が原文そのまま引用したのではなく、自身の理解による改変の場合である。筆者は後者のほうを取る。
- ⑥ 理は道理、事は事相、事柄の意味である。
- ⑦ 『肇論』に「然則道遠乎哉。觸事而眞。聖遠乎哉。體之則神」とある。『大正蔵』巻四十五. p. 153a4-5
- ⑧ 支謙訳『佛開解梵智阿毘經』に「阿毘乃問佛言。本事何等道。除鬚髮披袈裟。持鉢何應。佛言。吾求道已來。歷世久遠。不可稱紀。常奉諸佛。行菩薩道。所事師友。無復央數。除鬚髮者。爲終身戒。捐棄貪愛。無復飾好。

使人不欲己。己亦不欲人。袈裟法服。古聖旌表。解釋垢結。無復世念。鉢爲應器。宜道人用。節身約省。非義不受也。斯皆無爲清淨之像。今我作佛。爲天下師。自恣汝意。欲問勿難」とある。『大正藏』卷一. p. 260a4-a12 仏、また仏弟子、菩薩等の過去生の行業事曆のことである。

- ⑨ 道理が奥深く精密であること。
- ⑩ 『中論』「観因縁品第一」に「諸法不自生。亦不從他生。不共不無因。是故知無生」とある。『大藏經』卷三十. p. 2b6-7
- ⑪ 『中論』「観去来品第二」に「因去知去者。不能用是去。先無有去法。故無去者去」とある。『大藏經』卷三十. p. 5b13-14
- ⑫ 『中観論疏』卷二、「因縁品第一」に「問有二種人。一者悟大乘無所得意。不解數論名教。二者精識一切名教。不學大乘無所得意。此二人中何者爲勝。答耳目之徒言識一切名教者勝。今以理論之雖二人並失而前者爲勝。何以知然。佛雖説一切名教。意在無所得一相一味。謂離相解脫相。問弘經通論須科文釋義次第生起。詳定違負會諸同異。云何一向作無所得觀耶。答考尋聖人興世諸所施爲爲顯中道。令因中發觀滅諸煩惱。若存著語言傷佛意也。又百年之壽朝露非奢。宜以存道爲急。而乃急其所緩。緩其所急。豈非一形之自誤耶」とあり、『大正藏』卷四十二. p. 32a6-17 珍海の『三論玄疏文義要』の「大意」に以下のような解説がある。「耳目之徒者 淺識之輩。以耳目爲量。不能意思之歟。又耳目所觸之人。謂常人也」とある。ここには耳で聞く、目で見る平凡な人を指す。『大正藏』卷七十. p. 200a11
- ⑬ 吉蔵『中観論疏』卷二の「因縁品第一」に「又百年之壽朝露非奢。宜以存道爲急。而乃急其所緩。緩其所急。豈非一形之自誤耶」とある。『大正藏』卷四十二. p. 32a15-17 しかし、珍海の『大乘正観略私記』の引用は「又百年之壽朝露非奢。宜以存道爲急。而乃急其所緩。緩其所急。豈非一期之自誤耶」とする。また、珍海の『三論玄疏文義要』に「又百年之壽。朝露非大者。宜以存道爲急。而乃急其所緩。緩其所急。豈非一形之自誤耶」とあり、『大正藏』卷七十. p. 200a7-9 『中観論疏』と同じ「一形」とする。両疏は同じ珍海の著書なので、同じ経疏の引用は違うはずはないと考えられ、ここには写経者の誤写と推測する。

- ⑭ 吉藏『中觀論疏』卷二の「因縁品第一」に「問有二種人。一者悟大乘無所得意。不解數論名教。二者精識一切名教。不學大乘無所得意。此二人中何者爲勝。答耳目之徒言識一切名教者勝。今以理論之雖二人並失而前者爲勝。何以知然。佛雖說一切名教。意在無所得一相一味。謂離相解脫相。問弘經通論須科文釋義次第生起。詳定違負會諸同異。云何一向作無所得觀耶。答考尋聖人興世諸所施爲爲顯中道。令因中發觀滅諸煩惱。若存著語言傷佛意也。又百年之壽朝露非奢。宜以存道爲急。而乃急其所緩。緩其所急。豈非一形之自誤耶」とある。『大正藏』卷四十二. p. 32a6-17
- ⑮ 吉藏の『中觀論疏』卷三の「因縁品第一」に「一者毘曇通大小。如阿含通大小故。迦葉云方等阿含。又攝大乘論云。分別大乘義是大乘毘曇。羅什云。吾若造大乘阿毘曇有勝迦旃延子」とある。『大正藏』卷四十二. p. 44b12-15

テキスト

第二、諸門分別

欲明宗旨、略有十門。一、明立教。二者、顯師宗。三、明宣通大概。四、立宗本教。五、理內理外。六、法門名教。七、遣蕩究竟。八、道門宗極。九、佛道遠近。十、大乘無礙門。

第一、立教門

問、今宗立教如何。答、立二教。謂、聲聞藏菩薩藏也。具有十門二教。如教迹義。又依法華經、立三轉法輪。如中論疏明。一意云、三轉^①法輪收義不盡。非正所用。此義未決、今且置之。依文推義、三轉法輪盡一代。若爾、二藏三轉並是所用。又依五相略經攝大乘論、明三時教。與法相宗本同、釋異。若依智光亦立三時。與嘉祥宗亦不相違。此等廣釋如文義要。

〈文義要第一云、佛初成道時、爲提謂等、說人天教。又爲緣覺、說十二因緣。又金光明等、以佛德爲宗。何不立人天教並緣覺藏佛藏耶。答、佛說諸教、但爲立出世法故。結集經者唯爲二藏、不別立世間乘。又約稟教人故、唯立二藏。緣覺及佛非稟教也。又云、今以二藏爲正、三轉是傍論。非攝教之宗。大乘玄論。專明二藏。無三輪義。知判教正在二藏。彼三輪且依法花信解品立之。答、法華已前、諸方等、小品諸部般若不說一乘故非根本。非小乘故亦非支末。故不盡也。云云。又釋中論三段、配釋三轉法輪。故知。三轉亦是通說、非局一部耶。答、誰言三論唯局一部。但言傍論非正意耳。又云、法華遊意一往則花嚴爲根本。自花嚴後、法花前爲支末。法花屬攝末歸本。若准此文、般若等是支末也。又云、法相有空中三時。今宗意許之否。般若卽偏空說。又以三乘爲究竟。並非宗意。若不許之、深密大乘滿字何背其旨乎。答、但取經說、不許別人解耳。又引法花玄三、述攝大乘及五相略經說。云云〉

所以立二藏者、今欲廢四五之妄談、顯一極之玄宗。攝教最長。立宗至極而已。

『大乘正觀略私記』『大正藏』卷七十. pp. 195c15-196a21

注

- ① 大正藏經テキストには「三輪」とあり、意味上から通じにくいので、「三轉」と改めた。

書き下し

第二、諸門を分別す

宗旨を明かさんと欲さば、略して十門有り。一に、教を立つ。二に、師宗を顯す。三に、大概宣通することを明かす。四に、宗の本教を立つ。五に、理内（の理）と理外（の理）を明かす。六に、法門の名教なり。七に、遣蕩究竟①す。八に、道門の宗極。九に、佛道の遠近なり。十に、大乘の無礙門なり。

第一教門を立つ

問う、今の宗の教を立つるは如何。答う、二教を立つ。謂く、聲聞藏と菩薩藏なり。具さに十門と二教有り②。教迹義の如し。又『法華經』に依り、三轉法輪を立つ。『中論疏』に明かすが如し。一意に云わく、三轉法輪は義を收め盡さず。正しく用いる所に非ず。此の義は未だ決せず、今且くこれを置く。文に依りて義を推さば、三轉法輪は一代を盡す。若し爾らば、二藏と三轉は並びに是れ用いる所なり。又『五相略經』③と『攝大乘論』に依り、三時教を明かす。法相宗と本は同じく、釋は異なる。若し智光④に依らば亦三時を立つ。嘉祥宗⑤と亦相違せず。此れ等の廣釋は『文義要』の如し。

『文義要』第一に云わく「佛は初め成道の時、提謂等の爲に、人・天の教を説く。又緣覺の爲に、十二因縁を説く。又『金光明』等は、佛德を以て宗と爲す。何ぞ人・天の教並びに緣覺藏と佛藏とを立てずや。答う、佛は諸教を説く、但だ出世の法を立つる爲の故なり。結集の經は唯だ二藏の爲にして、世間乘を別に立てず。又稟教の人に約すが故に、唯だ二藏を立つ。緣覺及び佛は稟教に非ざるなり」⑥と。又云わく、「今二藏を以て正と爲し、三轉は是れ傍論なり。攝教の宗に非ず。『大乘玄論』は専ら二藏を明かす。三輪の義無し。判教は正さに二藏に在るを知る。彼の三輪は且く『法花』の「信解品」に依りてこれを立つ」⑦と。「答う、法華已前に、諸の方等、小品諸部の般若は一乘を説かざるが故に根本に非ず。小乘に非ざるが故に亦支末に非ず。故に盡ざるなりと云云」⑧と。「又中論の三段を釋して、三轉法輪に配釋す。故に知んぬ。三轉は亦是れ通説にして、一部に局るにあらざるや。答う、誰か三論は唯だ一部に局ると言うや。但だ傍論は正意に非ずと云うのみ。」⑨と。又云わく、『法華遊意』は一往則ち花嚴を根本と爲す。花嚴より後、法花の前を支末と爲す。法花

は攝末歸本に屬す。若し此の文に准ぜば、般若等は是れ支末なり。」⑩と。又云わく、「法相は有・空・中の三時なり。今の宗意はこれを許すやいなや。般若即ち偏空の説なり。又三乗を以て究竟と爲す。並びに宗意に非ず。若しこれを許さざれば、深密の大乘滿字は何ぞ其の旨に背かんや。答う、但だ經の説を取り、別の人が解することを許さざるのみ。」⑪と。又『法花玄』の三を引き、『攝大乘』及び『五相略經』の説を云々と述ぶ⑫)

所以に二藏を立つとは、今四五の妄談⑬をし、一極の玄宗を顯さんと欲す。教を攝すること最も長なり。立宗の至極なるのみ。

注

- ① 「遣」は「やる」の意味、「蕩」は「洗う」の意味。「遣蕩」は「洗い流す」の意。
珍海は『三論玄疏文義要』の中で「遣蕩」について説いている。「問。爾者遣蕩於一切。云中道歟。答。既云正何必是遣蕩耶 問。大師釋涅槃經内外合故之文云。一切遣蕩如何耶 答。非無此意。然周檢釋文。非必遣蕩。今文且約遣蕩一門。欲究其義。故作此釋也。意恐學者滯内外有。故且云爾耳」『大正藏』卷七十. p. 237a19-25
- ② 吉藏の『大乘玄論』卷五「教迹義」の中に、十門と二教について、以下の様な記述がある。「問曰。若唱成地二家之失。今云何判佛教耶。答曰。菩薩藏聲聞藏。大乘小乘。有餘無餘。作無作。了不了。有邊無邊。頓漸。半滿。常無常。有量無量門往收。不以具足十門方收。但以一一門攝無量法藏。攝門非一。故有十門」『大正藏』卷四十五. p. 64b9-14
- ③ 『五相略經』について堀内俊郎氏の論文『『四卷楞伽』と『楞伽經』—「求那跋陀羅訳」の特徴—』によれば、すでに散佚した『第一五相略經』という經典であり、吉藏が『法華玄論』に引用する『五相略經』は『解深密經』の異訳のことと指摘されている。(堀内俊郎「『四卷楞伽』と『楞伽經』—「求那跋陀羅訳」の特徴—」『印度学佛教学研究』第 63 卷第 2 号. p. 934
- ④ 法藏述『華嚴經探玄記』の記載による。智光は古代インドの僧であり、戒賢と共に那爛陀寺に住して、各三時教を立ち、宣揚した。戒賢は有、空、

中の三時教を立ち、智光は心境俱有、境空心有、心境俱空の三時教を立つ。後に地婆訶羅（漢訳は日照三藏）により中国に伝わったのである。『華嚴經探玄記』に「又法藏於文明元年中。幸遇中天竺三藏法師地婆訶羅。唐言日照。於京西太原寺翻譯經論。余親于時乃問。西域諸德於一代聖教頗有分判權實以不。三藏説云。近代天竺那爛陀寺同時有二大德論師。一名戒賢。二稱智光。（中略）謂戒賢即遠承彌勒無著。近踵護法難陀。依深密等經瑜伽等論立三種教。謂佛初鹿園説小乘法。雖説生空然猶未説法空眞理。故非了義。即四阿含等經。第二時中雖依遍計所執自性説諸法空。然猶未説依他圓成唯識道理。故亦非了義。即諸部般若等教。第三時中方就大乘正理具説三性三無性等唯識二諦。方爲了義。（中略）第二智光論師遠承文殊龍樹。近稟提婆清辯。依般若等經中觀等論亦立三教。謂佛初鹿園爲諸小根説小乘法。明心境俱有。第二時中爲彼中根説法相大乘。明境空心有唯識道理。以根猶劣未能令入平等眞空故作是説。於第三時爲上根説無相大乘。辯心境俱空平等一味。爲眞了義。（中略）此三教次第如智光論師般若燈論釋中。具引蘇若那摩訶衍經説。此云大乘妙智經。此昔所未聞也」とある。『大正藏』卷三十五. pp. 111c8-112a22

- ⑤ 嘉祥宗は三論宗を指す。開皇中（581～600）において、吉藏が戦乱を避けるため、越州（今の浙江省境内）にある秦望山の嘉祥寺に住み、後に嘉祥大師と尊称される。嘉祥宗は吉藏が大成した三論宗のことである。
- ⑥ 『三論玄疏文義要』巻一に、以下の様な記述がある。「問。二藏者何等耶。答。一聲聞藏。二菩薩藏也。問。佛初成道時。爲瞽龍提謂等。説人天教門。便於二藏所不攝耶。又佛説十二因縁。爲縁覺法。如何不立縁覺藏耶。又金光明。大涅槃等。以佛果德。爲其宗旨。何不立爲佛藏耶。答。佛説諸教。但爲建立出世法。故結集經者。唯爲二藏。然佛隨機説人天法。結集經時。便附二藏。不別立爲世間乘教。又約稟教人。故唯立聲聞菩薩藏也。縁覺及佛。非稟教故也」『大正藏』巻七十. p. 202b16-24
- ⑦ 『三論玄疏文義要』巻一に、以下の様な記述がある。「問。今宗家於一代之教述立幾種乎 答。唐和古今相傳多云。嘉祥立教在三轉法輪云云。今所承者。以二藏教爲正意。然三轉法輪。是一支之傍論。非攝教之大宗。所以然

者。製大乘玄論。立教迹一章。專明二藏。無三轉法輪義。故知。判教正在二藏。彼三法輪。且依法華信解品意爲釋。法華別於華嚴猶菩薩藏。開分兩教。此約前後。且論其異。然尋一乘根本。是一義宗無二。理趣遂同。所以三輪非正意也。師說云。三轉法輪。且依法華信解品立之。然明義不盡。晚得心地觀經士安疏。彼師評嘉祥三轉法輪云。此法華中一類。本末非佛一代。收義不盡云云」『大正藏』卷七十. p. 202a11-24

- ⑧ 『三論玄疏文義要』卷一に、以下の様な記述がある。「又尋云。三輪收義如何不盡乎。若言收部不盡者。其不收者何乎。答。法華已前。諸方等經。及大品等。諸部般若。不說一乘故。非根本。非小乘故。亦非枝末。故不盡也」『大正藏』卷七十. p. 202a29-b3
- ⑨ 『三論玄疏文義要』卷一に、以下の様な記述がある。「又難云。釋中觀論。三段以配釋三轉法輪。故知三輪亦是通說。非局一部意耶。答。誰言三輪唯局一部。但言是傍論。非正意耳」『大正藏』卷七十. p. 202b8-14
- ⑩ 『三論玄疏文義要』卷一に、以下の様な記述がある。「法華遊意云。一往則華嚴爲根本法輪。自華嚴之後。法華之前。爲枝末法輪。此經屬攝末歸本。法華結末。一化該羅。頓漸則具足三輪」『大正藏』卷七十. p. 209a13-16
- ⑪ 『三論玄疏文義要』卷一に、以下の様な記述がある。「問。法相大乘心。依解深密經。立有空中三時教。爾今宗意。爲許之爲當何。答。設爾何過。問。二俱有失若許之般若即偏空說。又以三乘爲究竟。并非宗家意。若不許之深密是大乘滿字之說。何背其旨耶。但取經說。不許別人解耳」『大正藏』卷七十. p. 213a6-11
- ⑫ 『三論玄疏文義要』卷一に、以下の様な記述がある。「法華玄三云。又攝大乘論。明乘有三。初二乘。次大乘。三一乘。一乘最勝。何不言三時耶。又五相略經。明教有三種。第一鹿野爲聲聞說四諦。第二爲大根說諸法離自性不生不滅。此亦有上有餘。不了義說。起諍論處。第三爲求一切乘者說諸法離自性不生不滅。無上無餘。非諍論處。此經一卷。與攝大乘論相應。何故不依經說三時耶。文」『大正藏』卷七十. p. 213a12-20
- ⑬ 四五の妄談については『法華玄論』第三に「問。北地諸地論師明四宗五宗等說。是事云何答。此皆影四五時教故作是說耳。五時既不成四宗自廢。又

菩提留支此云道希。其親翻地論但明半滿。留支是地論之宗。即知半滿有本。而依四宗無根。而輒信深不測其所以也」とある。『大正藏』卷三十四. p. 384c3-9 珍海は『三論玄疏文義要』の中で、四宗五教のように記している。「華玄三云。又無量義經。亦明三時。初四諦教次十二因緣。次說方等十二部經。摩訶波若。華嚴海空。宣說菩薩歷劫修行。此即有三時。今復說無量義經復是四時。復說法華則爲五時。涅槃爲六時。初說人天乘爲七。何不立七時。不應偏立四宗。定執五教也」とある。『大正藏』卷七十. p. 214c16-21

テキスト

第二、師宗承習

始自馬鳴龍樹、終至關河山門、相傳不謬、師宗有在。延興和尚明惠内由、妙辯外流。周包南北、廣達古今。六宗七宗之說陶冶 無餘。四時五時之談賓主人盡。檢搜衆異、次擇其花。承受一師、以盡其妙。圭 肇先賢、問轍而不委。覺衝之明匠、並講而不如。雖復均正與法師俱長山門、然大敷渲專制作唯和尚而已。我朝道慈・智藏兩德受洪業於海西、傳遺風於東域。願曉・智光名賢多稟其幽致。盛流彼芳訓。無相大乘之起、良其有所由矣。夫零根解佛性理長。亦闕承習。〈見佛性義〉興皇講論文、開序以顯師宗。〈見論迹義〉如言學問之體、要須依師承習。又云、欲示關河相傳、師宗有在等。其間得失思而可辨。師資相傳具見餘文。

『大乘正觀略私記』『大正藏』卷七十. p. 196a22-b5

書き下し

第二、師宗の承習

始め馬鳴・龍樹より、終わり關河山門①に至るまで、相傳謬らず。師宗はあきらかなるこ②と在る有り。延興和尚③は内由を明惠し、妙に外流を辯ず。周り南北を包み、廣く古今に達す。六宗七宗の說を陶冶して餘すこと無し、四時五時の談は賓主人盡く。衆異を檢搜し、次に其の花を擇す。一師に承受し、以て其の妙を盡す。(道)生・(僧)肇④らの先賢、轍を問いて委わしからず。(惠)覺・(惠)衝⑤らの明匠、並びに講じて如かず。復た均正と法師ともに山門に長ずと雖も、然るに大に敷渲して、専ら制作するは唯だ和尚⑥のみ。我が朝の道慈⑦・智藏⑧の兩德は洪業を海西に受け、遺風を東域に傳う。願曉・智光らの名賢は其の幽致を稟くること多し。盛んに彼の芳訓を流す。無相の大乘の起ること、まことに其の所由有るなり。夫れ零根は佛性の理を解すること長ず。亦た承習を闕く。〈佛性義を見よ⑨〉興皇⑩は論文を講じ、序を開き以て師宗を顯す。〈論迹義を見よ⑪〉學問の體を言うが如き、要ず須らく師の承習に依るべし。又云わく、關河の相傳⑫を示さんと欲さば、師宗は在る有る等と。其の間の得失は思いて辨ずべし。師資の相傳は具さに餘文を見よ。

注

- ① 「關河」という一語は、関中の意味として昔に使われ、関中の由来について、『史記』卷六九に「秦四塞之國，被山帶渭，東有關河，西有漢中，南有巴蜀，北有代馬，此天府也」とある。また『范睢蔡澤列伝』に「四塞以為固，北有甘泉、谷口，南帶涇、渭，右隴、蜀，左關、阪」とある。この文章では、関河の地名を借りて鳩摩羅什及び道生、僧叡、道融、僧肇などの弟子を指す。
- ② 大正藏經テキストには「在」字の右側にカタカナで「アキラカナルコト」と後の附加と思われる八字の書き込みがあり、漢文の読み方に相応しくないが、意味が通じるので、ここでは「あきらかなること」の読み方を取る。
- ③ 『中論疏記』に「如此次第得業弟子。興皇寺法朗師。法朗師得業。弟子。延興寺吉藏師」『大正藏』卷六十. p. 22a15-16 とあり、吉藏は晩年の時に延興寺に住むことがあったので、ここの「延興和尚」は吉藏のことと考えられる。
- ④ 『鳩摩羅什法師大義』に「其甘雨所洽者。融倫影肇淵生成叡八子也」とあって、僧肇、道生らの八人を挙げている。『大正藏』卷四十五. p. 122b26-27 また、『涅槃玄義發源機要』卷二に「什公門下有十哲八俊四聖。肇皆預焉。生肇融叡爲四聖。更加影嚴憑觀爲八俊。兼常標名十哲」とあり、『大正藏』卷三十八. p. 23b6-8 ここの「生肇」は道生と僧肇のことと考えられる。
- ⑤ 『大日本仏教全書』に「最後成就惠衡覺吉藏三人、論之十七師、衡覺藏此三法師、陳正時未領人講説、陳滅後復諸講説大乘師、並入長安」とある。『大日本仏教全書』史伝部一. p. 160 これから見れば、ここの「覺衡之明匠」の「覺」と「衡」は恵覺と恵衡のことを指すと考えられる。
- ⑥ 前述した「延興和尚」と同じ、吉藏のことを指す。
- ⑦ 日本三論宗の第三伝であり、本の姓は額田である。法隆寺智蔵の下で三論を学び、文武天皇大宝元年（一説大宝二年）に入唐し、元康の下で三論を学ぶことがあった。
- ⑧ 日本三論宗の第二伝であり、年少の時に元興寺に入り、慧灌の下で空宗を学び、後に入唐して、吉蔵の下で三論を学ぶことがあった。智蔵の弟子に

大安寺の道慈、元興寺の智光がいった。

- ⑨ 吉蔵『大乘玄論』卷三に「問眞諦爲佛性。何經所出。承習是誰。無有師資亦無證句。故不可用也。當果爲正因佛性。此是古舊諸師多用此義。此是始有義。若是始有。即是作法。作法無常。非佛性也。得佛理爲佛性者。此是零根僧正所用。此義最長。然闕無師資相傳。學問之體。要須依師承習」とある。『大正蔵』卷四十五. p. 36c8-14
- ⑩ 法朗のことを指す。法朗(507～581)は南北朝時代の僧であり、僧詮の下で三論宗を学び、長期に興皇寺に住むので、興皇法朗とも呼ばれる。
- ⑪ 吉蔵『大乘玄論』卷五に「大師讀此論。遍數不同形勢非一。(中略)法師所以講論有多形勢者。略有三義。一者明法師善識根緣調停物性稟悟既甚多種。演暢亦復不窮。二者欲異他人。他人立義定作一說。聽者唯作一解了無轉悟。今明。諸法無一定相。豈唯一種。三者龍樹提婆妙思深遠權巧萬端。今時傳述寧可一概」とある。『大正蔵』卷四十五. p. 68a9-13

思想上の「関河相傳」は羅什の門下の人々を指す。鳩摩羅什の下に十哲、八俊、四聖があり、これらの弟子達は、関河三論と総称され、南方流と北方流の二つの系流に分かれて伝法した。南方流を代表する人の中には道融、僧導、道生がある。北方流を代表する人の中には僧叡、僧肇、曇影がある。後の人はこれを「関河旧義」と呼ぶ。

テキスト

第三、宣通大概

嘉祥大師敷演經論、製作玄疏、辭吐珠玉、理窮淵泉。隨緣轉側、義勢多端。破邪顯正、唯益爲定。今、方指事引文、以顯形勢非一。一者、仰推聖意、不敢自決。如法花疏釋三不退云、經論不同、難可詳會。又勝鬘寶窟中、釋變易位分云、位義難知、憶生罪過。〈云云〉此等皆是仰推聖意、而不敢自取耳。問、深密解脫經云、增上①善根、善②集論智者、聞我法音、能如實知。若不種一切增上善根者、信於我法、恭敬我法、而作是言、我信佛所說修多羅甚深相。依定相應難見難覺。而我不知、默然而信、菩提甚深、法相甚深、唯佛所知。非我境界、是人不能如實修行。〈略抄〉若准此文、推佛所知、云非我境者、是不能如實修行。今何以之爲大師德耶。阿難問宿業、世尊入靜室③、彌勒疑端相、妙德作謙讓。況復對藏唱地法難彰④、龍樹點羅漢作佛。上聖既爾、誰言不足。其知不說、何必愚乎。或顯佛智高遠⑤。或示法門甚深。或布謙讓德。或呵上慢失。又彼所引經文結云、彼諸衆生、依因彼故、功德智慧增長滿足。〈云云〉即顯信佛悟自謙之德。當知、此經說、初心菩薩以信力故入佛境界、雖不能如實修地上所行、而由信力、遂得入初地。如法華云、以信得入也。以此思之、不可爲難矣。〈已上仰推之釋一竟〉

二者、前後同異。大師自青裳之歲白⑥首之齡。鑽仰累年。陶練彌深、功顯稍廣。累思轉明。六十二迴之抗論異聞。日多三百餘遍之覆講、悟入漸遠。或淘汰本解、復加修飾。或覆叙先習。小改義勢、有開異門解一義。有以多義成一文。遂使前後所製文義、或同或異。然則學者、隨宜並用。或復有時、舉興皇所解、而與自釋異。或於出什師義宗、而更致取捨。如此同異、皆可依其義門會之。又復、大師自會異釋。學者當得其義勢矣。如釋八生、一生菩提。前故異論、後方隨旨。又解八不、前依山門、後辨新通。又法花統略叙六意、顯前後所解、或同或異。至解法花論、列三出疏、表各有所據。如此同異、學者可不悉耶。〈已上二牒已竟〉

三者、破申具足。疏第一述興皇大師語云、適化無方、陶誘非一。考聖心、以息患爲主、統教意、以開道爲宗。〈云云〉初二句顯教門衆多、考聖心以下以二轍解之。謂破病顯道。今案、二門各攝諸教。謂皆爲破病、全是顯道。然在言、增減或異。又如法花論破十種病、明十無上等、即其義也。又、解八不有三種方言、

前二依破病、後一是顯道。青目用破病釋論文、羅睺用顯道解八不、破申如是。〈三牒竟〉

四者、隨緣轉測。重牒八不云、自有二諦爲教、不二爲理。若以二爲世諦、不二爲第一義。世諦是教、第一義爲理。皆是轉側適緣。無所妨也。〈文疏記云、轉測者猶如轉勢也〉適緣者謂隨根緣、如大師自釋、亦應得有隨義轉側。〈四牒竟〉

五者、義門通別。疏第一云、邪見有二種。一、別邪見、謂撥無因果。二、通邪見、以其所見不正故名邪見。二諦章上卷云、言通別者、所依於諦則通。迷教於諦則別。〈云云委釋如文〉佛性義云、衆生草木皆有佛性。並得成佛。此是通門。若論別門、衆生作佛、草木不成。〈取意〉諸如是等通別義門、或隨寬狹、或依傍正。又復、顯密麤細等義、皆屬此門。〈五牒竟〉

六者、部異理同。法花統略始云、余少弘四論、末專習一乘。〈云云〉先後時別、經論部異。子本相成、其旨遂一。先以經解論、以本成子。後以論釋經、以資顯師也。〈六牒竟。上前後同異門、約義異、今約所傳部別也〉

宣通大概、宜須悉之。

『大乘正觀略私記』『大正藏』卷七十. pp. 196b6-197a16

注

- ① 大正藏經テキストには「増長善根」とあるが、欄外対校記に「長」は「上」とあり、『深密解脫經』にも「若有衆生種諸一切増上善根。」とあるので、「上」に改めた。
- ② 大正藏經テキストには「集論智者」とあるが、欄外対校記に「集」の上に「善」の字が脱落しているとあり、また『深密解脫經』にも「善集一切善根智慧」とあるので、ここに「善集」に改めた。
- ③ 大正藏經テキストに「淨寶」とあるが、欄外対校記に「寶」＝「室」とある。また『大智度論』第十三に「於是中間梵天王來欲見佛。佛入靜室寂然三昧。諸比丘衆亦各閉房三昧。皆不可覺。」とある。意味上では「靜室」の方が理解しやすいので、ここでは「靜室」に改めた。
- ④ 大正藏經テキストは「影」とあるが、欄外対校記に「彰」とある。意味上から「^{あきらか}彰」の方が通じやすいので、今改めた。

- ⑤ 大正藏經テキストは「高迹」であるが、欄外対校記には「高遠」とする。意味は通じるが、「高遠」の方はより相応しいので、今改めた。
- ⑥ 大正藏經テキストには「自首」とあるが、欄外対校記に「自」を「白」とする。「白首」は髪が白くなり、年長の意味。意味上から通じやすいので、今改めた。

書き下し

第三、大概を宣通す

嘉祥大師は經論を敷演し、玄疏を製作するに、辭は珠玉のごとくを吐き、理は淵泉を窮む。縁に隨い轉側し、義の勢い端多し。破邪顯正し、唯益をのみ定と爲す。今、方に事を指して文を引き、以て形勢を顯すこと一に非ず。一には、仰いで聖意を推し、敢えて自ら決せず。『法花疏』に三不退を釋して云うが如し。

「經論は不同、詳しく會すべきこと難し」①と。又『勝鬘寶窟』の中に、變易の位を分けて釋して云わく「位の義は知り難し、憶は罪過を生ず」②と〈云云〉此れ等は皆是れ仰いで聖意を推し、敢えて自ら取らざるのみ。問う、『深密解脫經』に云わく、「増上の善根もて、善を集して智を論ずるとは、我が法音を聞き、能く如實に知る。若し一切の増上の善根を種えざれば、我が法を信じ、我が法を恭敬し、而も是の言を作せ、〈我佛の所説の修多羅の甚だ深き相を信ず。定相に依り、まさに見難く覺り難かるべし〉。而も我知らず、默然として信じ、菩提は甚だ深し、法相も甚だ深し、唯佛のみ知る所なり。我が境界に非ず、是の人は如實に修行すること能わず」③と。〈略抄〉若し此の文に准ぜば、佛の知る所を推して、我が境に非ずと云うは、是れ如實に修行すること能わず。今何ぞこれを以て大師の徳と爲すや。答う、阿難は宿業を問ひ、世尊は靜室に入り、彌勒は端相を疑ひ、妙徳は謙讓を作す。況や復た金剛藏④は地の法難を唱うること彰かに、龍樹は羅漢の作佛を默するにおいてをや。上聖は既に爾り。誰か不足と説うや。其れ知りて説かず、何ぞ必ず愚かなんや。或は佛の智は高遠なることを顯す。或は法門は甚だ深きを示す。或は謙讓の徳を布き、或は上慢の失を呵す。又彼の引く所の經文、結して云わく「彼の諸の衆生、彼に依因するが故に、功德と智慧、増長して満足す」⑤と〈云云〉即ち佛悟を信じ、自謙の徳

を顯す。當に知るべし。此の經に説く「初心の菩薩は信力を以ての故に佛の境界に入り、地上の所行を如實に修すること能わずと雖も、而も信力に由りて、遂に初地に入ることを得」⑥と。『法華』に「信を以て入ることを得」⑦と云うが如きなり。此れを以てこれを思えば、難と爲すべからざるなり。〈已上仰推の釋、一竟る〉

二には、前後同異なり。大師⑧は青裳の歳より白首の齡に^{いた}之るまで。鑽仰し年を累ぬ。陶練は彌いよ深く、功顯稍廣し。思いを累ねて轉た明かなり。六十二、これを迴らして異に抗論す。日に多く三百餘遍の覆講、悟入漸く遠し。或は本の解を淘汰して、復た修飾を加う。或は先習を覆叙して。小しく義勢を改め、異門を開いて一義を解すこと有り。多くの義を以て一文を成すこと有り。遂に前後をして製す所の文義を、或は同じく或は異ならしむ。然れば則ち學者は、宜しきに隨い並用すべし。或は復た、有る時、興皇の解する所を擧げて、而も自らの釋とは異なれり。或は什師の義宗を出だし、而も更に取捨を致す。此の如き同異は、皆其の義門に依りてこれを會すべし。又復、大師自ら異釋を會す。學者は當に其の義勢を得べきなり。八生、一生の菩提⑨を釋すが如き、前は故に異を論じ、後は方に旨に隨う。又八不を解すに、前は山門に依り、後は新通を辨ず。又『法花統略』に六意を叙べ、前後に解する所を顯すに、或は同じ或は異なる。『法花論』を解するに至り、三出の疏を列して⑩、各に據る所有るを表す。此の如き同異、學者悉さざるべきや。〈已上二牒は已に竟る〉

三には、破申具足なり。『(中觀論) 疏』第一に興皇大師の語を述べて云わく、「適化無方にして、陶誘は一に非ず。聖心を考え、息患を以て主と爲し、教意を統べ、開道を以て宗と爲す」⑪と。〈云云〉初めの二句は教門は衆多なるを顯す、「聖心を考え」以下は二轍を以てこれを解す。病を破し、道を顯わすを謂う。今案ずるに、二門は各諸教を攝す。謂く皆病を破すは、全て是れ道を顯わせしめんが爲なり。然るに言説在り、増減、或は異なる。又『法花論』に十種の病を破し、十無上等を明かすが如き、既に其の義なり。又、八不を解すに三種の方言⑫有り、前の二は破病に依り、後の一は是れ顯道なり。青目は破病を用いて論文を釋し、羅睺は顯道を用いて八不を解す。破申はかくの如し。〈三牒竟る〉

四には、緣に隨い轉側す。重ねて八不を牒して云わく、「自ら二諦を教と爲し、

不二を理と爲すこと有り。若し二を以て世諦と爲し、不二を第一義と爲さば、世諦是れ教、第一義を理と爲す。皆是れ轉側適縁なり。妨ぐ所無きなり」と。〈文。疏に記して云わく、「轉測とは猶お轉勢の如きなり」と〉適縁は根縁に隨うを謂う、大師の自釋の如し、亦應に隨義轉側有るを得べし。〈四牒竟る〉

五には、義門の通別なり。『疏』第一に云わく「邪見に二種有り。一に、別邪見、無因の果を撥するを謂う。二に、通邪見、其の所見は不正なるを以ての故に邪見と名づく」^⑬と。『二諦章』上卷に云わく、「通別と言うは、所依の於諦は則ち通なり。迷教の於諦は則ち別なり」^⑭と。〈云云。委釋は文の如し。〉「佛性義」に云わく「衆生草木皆佛性有り。並に佛に成ることを得」と。此れ通門なり。若し別門を論ぜば、衆生は作佛し、草木は成らず」^⑮取意、諸の是くの如き等の通別の義門、或は寛狹に隨い、或は傍正に依る。又復、顯密龜細等の義、皆此の門に屬す。〈五牒竟る〉

六には、部は異なり理は同じ。『法花統略』の始めに云わく「餘少くして四論を弘め、末に専ら一乘を習う」と。云云。先後の時別なり、經論の部は異なる。子と本は相成し、其の旨は遂一なり。先に經を以て論を解し、本を以て子と成す。後に論を以て經を釋し、資を以て師を顯すなり。〈六牒竟る。上の前後同異門は、義に約して異なり、今所傳の部の別に約するなり。〉

大概を宣通し、宜しくこれを悉くすることを須うべし。

注

- ① 吉藏の『法華義疏』卷一、「序品第一」に「次明是不退轉位人也。然經文直言於無上菩提不退轉。但舊明有三種不退。一位不退。二行不退。三念不退」とあつて、三不退を説く。『大正藏』卷三十四. p. 461b22-25 また、同疏卷に「問二乘斷結受生是菩薩何位。答依法華論釋分別功德品。地前菩薩界內受生。登地已上界外受生。依智度論七地菩薩肉身中得無生忍。捨肉身即受三界外法性生身。依眞諦三藏釋攝大乘論意自十行第六心去則三界外受生。經論不同難可詳定也」とある。『大正藏』卷三十四. p. 543c6-11 珍海は『三論玄疏文義要』の中で吉藏の『法華義疏』の文を引いて、「もし十信の第六心或は十住の第七心に到達すれば、三不退の位に達する」（「問。付位行念

三不退。且菩薩何位得位不退耶。答。十信第六心。或十住第七心。云云」『大正藏』卷七十. p. 311c2-3 と「三不退」について説いている。また同疏卷に「本業瓔珞經云。十住第六住。猶退作五逆。況復二乘。而十信第六信名爲不退心。則知六信以上便是不退。地持論云。種性菩薩或進或退。則與本業大意略同。然多是外凡。第六心免位退也。所以知然者。十信中。前五則是五根不立。第六稱不退心。五根既立故。復得不退。則知。六信以上無有退也。又經言。十信菩薩十千劫行道。攝大乘論明阿僧祇劫修行。而舍利弗六十劫行道。六心中退者。此則是仰學六信。猶未證六信也。而瓔珞經言六住退者。龍樹釋此語云。欲怖地前菩薩令速入初地故云退耳。其實不退」とある。『大正藏』卷七十. p. 311c17-19

- ② 珍海は吉藏の『勝鬘寶窟』巻中の文を引いて、変易生死の位が知り難いと説いている。「有人言。不立四種生死。但立分段變易二種生死。六地爲分段。七地已去爲變易也。今謂位義難知。憶生罪過。不可定判也。若依法華論數處分明」と。『大正藏』卷三十七. p. 49b17-19
- ③ この『深密解脫經』の引用部分は略抄されている。原文は以下のようである「若有衆生種諸一切増上善根。清淨罪業。成就諸根多信諸法。善集一切善根智慧。彼諸衆生聞我法音能如實知。彼諸衆生信我法信我義。智慧觀察能如實覺。依彼證法隨順行力。速得究竟阿耨多羅三藐三菩提。我依彼諸一切衆生。能於我身生恭敬心。作如是言。此是正覺知一切法。是故名爲應正遍知。成就第一義。若有衆生不種一切増上善根。不能清淨一切罪業。不能淳熟一切善根。不多信法無増上心。不集功德智慧之藏直心體性。不能觀察是法非法。是法可取是法可捨。依自心見執著而行。彼諸衆生雖聞我法。亦復不知依何意説。而彼衆生信於我法恭敬我法而作是言。我信諸佛如來所説修多羅。甚深甚深相依空相應。難見難覺不可覺形相。不可覺微細極微點慧人智慧境界。如來說諸修多羅義。我不能知。默然而信而作是言。諸佛如來菩提甚深。諸法體相亦復甚深。唯佛所知非我境界。諸佛如來隨諸衆生種種信心説種種法。以諸如來無量智慧所知如海。而我知見如牛跡水。是故衆生於彼修多羅。若能至心受持書寫。寫已住持讀示供養爲他人説。誦常誦隨喜施他。而彼衆生不能於中如實修行。以未知我甚深之意。以不覺故。成就第

一義。彼諸衆生依因彼故。功德智慧增長滿足。亦復令彼未淳熟心令得淳熟。成就第一義」である。『大正蔵』卷十六. p. 672a9-b6

- ④ 金剛藏 ①（その本質において堅固に不変なる智を）蔵すること、金剛のごときこと。いたるところに金剛宝を発見しうる平等性智を本来蔵すること。②『処胎経』にいう八蔵の一つ。仏の説いた等覺の菩薩が修行し、さとりをいう。③金剛蔵菩薩の略、密教における菩薩の名である。（中村元『佛教語第辞典』より）珍海が『大乘正觀略私記』においてこの「金剛蔵」の言葉を使う意途は明らかでない。
- ⑤ 『勝鬘寶窟』卷二に「彼諸衆生依因彼故。功德智慧增長滿足。亦復令彼未淳熟心令得淳熟。成就第一義」とある。『大正蔵』卷十六. p. 672b4-6
- ⑥ 修行の果位について、珍海は吉蔵の『法華義疏』を引いて以下のように述べる。「聲聞迴小入大。始得入菩薩十信之位。故前文云汝舍利弗以信力故得入此經即其證也」『大正蔵』卷三十四. p. 543b4-6
- ⑦ 珍海は『妙法蓮華経』第二の文を引いて、信力のことを強調する。「一切聲聞 及辟支佛 於此經中力所不及 汝舍利弗 尚於此經以信得入 況餘聲聞 其餘聲聞信佛語故 隨順此經 非己智分」とある。『大正蔵』卷九. p. 15b16-19
- ⑧ 「大師」は吉蔵のことを指す。
- ⑨ 八生一生菩提 テキスト原文に「八生一生菩薩」とあるが、欄外対校記に「薩」は「提」とある。また『法華玄論』第十に「八生一生得菩提者此説初地。爲菩提者此八生得入初地。乃至一生得入初地。初地離分段故云菩提。非佛菩提也」とあるので、今改めた。『大正蔵』卷三十四. p. 444a18-21
- ⑩ ここでは吉蔵の『法華玄論』、『法華統略』、『法華義疏』三つの論疏を指すと考えられる。
- ⑪ 『中觀論疏』「因縁品第一」に以下の様な内容がある「師云夫適化無方陶誘非一。考聖心以息病爲主。縁教意以開道爲宗」と。『大正蔵』卷四十二. p. 7c9-10
- ⑫ 海は八不中道について、吉蔵の『大乘玄論』の文を挙げて、三種の方言によって破病と顯道を説いた。原文は即ち「明中道第六。初就八不明中道。後就二諦明中道。初中師有三種方言。第一方言云。所以牒八不在初者。欲

洗淨一切有所得心。有得之徒。無不墮此八計中。(中略)第二方言云。所以明三種中道者。爲顯如來從得道夜至涅槃夜常說中道。又學佛教人。作三中不成故墮在偏病。今對彼中義不成故辨三中。(中略)第三方言云。世諦即假生假滅。假生不生。假滅不滅。不生不滅。爲世諦中道。非不生非不滅爲眞諦中道。二諦合明中道者。非生滅非不生滅」とある。『大正藏』卷四十五. pp. 19c13-pp20b8

- ⑬ 『疏』は吉蔵の『中觀論疏』のことである。『中觀論疏』卷第一末に「邪見者邪見有二種。一別邪見。謂撥無因果非此中所明。二通邪見。以其所見不正故名爲邪」とある。『大正藏』卷四十二. p. 15c12-14
- ⑭ 吉蔵の『二諦義』に「言通別者。所依於諦則通。迷教於諦則別」と述べている。『大正藏』卷四十五. p. 79b11
- ⑮ 取意の部分は吉蔵の『大乘玄論』卷第三、「佛性義」の中の以下の内容と対応する。「若欲明有佛性者。不但衆生有佛性。草木亦有佛性。此是對理外無佛性。以辨理内有佛性也。問衆生無佛性草木有佛性。昔來未曾聞。爲有經文爲當自作。若衆生無佛性。衆生不成佛。若草木有佛性。草木乃成佛。此是大事。不可輕言令人驚怪也。(中略)衆生尚無佛性。何況草木。以此證知。不但草木無佛性。衆生亦無佛性也」『大正藏』卷四十五. p. 40b19-c3

テキスト

第四、立宗本教

問、今宗以何爲本教。答、智度・中・百・十二門也。問、若爾、應言四論宗。何云三論耶。答、中論玄答此問、略有八義。第一云、一 一論各具三義。一破邪。二顯正。三言教。以同具此三義故、合名三論。第五云、此三部同是大乘通論。故名三論。〈云云〉餘可依文知之。良以具有四故、叡師序云、尋斯四者、眞如日月入懷、無不朗然鑒徹矣。〈云云〉又均正師造四論玄、然但言三論、又有所以。如依第五義、法師欲遍釋諸部故、廢別取通。甚有由矣。問、三論以何經爲本耶。答、此有三門。一者、論初標八不。八不雖散出諸經、而正舉二經。謂瓔珞經佛母品、涅槃經師子吼品文也。故知、正申涅槃瓔珞二經部也。二者、以般若爲宗。故八不義云、故相傳云、中論是釋論骨髓也。四論云、玄義文亦同之。智論既解般若一部。故知、此論正解般若。然名通論者、不解一部文。但以般若實相正觀以爲論宗。然般若最大故義含諸部。論中亦引花首之文、兼釋涅槃之義。故名通論。然正以般若爲論宗歸。日本古德、謂三論宗爲般若宗^①。三者、一切大乘以爲論宗。此論既是大乘通論。以花首經三是之偈、顯一部大乘。又釋涅槃悉有佛性。十二門論初明六義大乘、通冠諸部。故知、三論非唯般若。四諦品疏大師自云、此偈即釋涅槃經文。故不應言但申般若。〈文〉問、於三義中、以何爲正。答、初義即是第三之支條。但以二義論其宗趣。或但般若、或通諸部。此並有證。故中論並十二門發初、引般若經、釋論宗歸。中論疏釋引般若文。既有六義、一者、波若大乘 始故。二者、諸大乘中最深大故。三者、般若正顯實相、洗有所得、開發正觀、滅諸障故。四者、江南大令師爲得道經故。五、山中大 師云、論正解般若之心故。六者、輒^②引一文、不應難也。〈略抄〉初、後各一證通諸經、中間四證正是般若。雖是二義共應用之、以般若爲正。以一切成之。又、一切部雖是所用、而般若義大。由此應知、二義一途。

『大乘正觀略私記』『大正藏』卷七十. p. 197a17-b28

注

- ① 大正藏經テキストは「宗見」とあるが、欄外対校記に正智院写本は「見」字がない。意味上からないのほうに通じやすいので、今「見」字を取る。

② 大正藏經テキストは「趣引一文」とあるが、欄外対校記に「趣」＝「輒」とする。意味上から理解しやすいので、今改めた。

書き下し

第四、宗の本教を立つ

問う、今の宗は何を以て本教と爲すや。答う、『智度（論）』『中（論）』『百（論）』『十二門（論）』なり。問う、若し爾らば、應に四論宗①と言うべし。何ぞ三論と言うや。答う、『中論玄』に此の問に答う、「略して八義有り。第一に云わく、一一の論に、各三義を具す。一に邪を破す。二に正を顯す。三に教を言う。同じく此の三義を具すを以ての故に、合して三論と名づく」②と。第五に云わく、「此の三部は同じく是れ大乘の通論なり。故に三論と名づく」③と。〈云云〉餘は文に依りてこれを知るべし。良に以んみれば具さに四有るが故に、叡師は（中論の）「序」に云わく「斯の四を尋ぬるは、眞に日月が懷に入るが如く、朗然鑒徹ならざること無きなり」④と。〈云云〉又均正師は『四論玄』⑤を造り、然して但だ三論と言うのみ、又所以有り。第五義に依るが如し、法師⑥は諸部を遍ねく釋さんと欲するが故に。別を廢し、通を取る。甚だ由有るなり。問う、三論は何の經を以て本と爲すや。答う、此れに三門有り。一には、論の初めに八不を標す。八不は諸經に散出すると雖も、而も正しく二經を擧ぐ。謂く『瓔珞經』の「佛母品」⑦、『涅槃經』の「獅子吼品」⑧の文なり。故に知んぬ、正しく『涅槃（經）』、『瓔珞（經）』二經を申ぶる部なり。二には、『般若』を以て宗と爲す。故に「八不義」に云わく「故に相傳して云わく、『中論』は是れ釋論の骨髓なり」⑨と。『四論』に云わく「玄義の文も亦これと同じ」と。『智論』は既に般若一部を解す。故に知んぬ、此の論は正しく般若を解すと。然るに通論と名づくるは、一部の文を解せず。但だ般若實相の正觀を以て、以て論宗と爲す。然るに般若は最大なるが故に義は諸部を含む。論中に亦『花首』の文を引き、兼ねて涅槃の義を釋す⑩。故に通論と名づく。然るに正しく般若を以て論宗の歸と爲す。日本の古徳は、三論宗と謂い、般若宗と爲す。三には、一切の大乘を以て論宗と爲す。此の論は既に是れ大乘の通論なり。『花首經』の三是の偈⑪を以て、一部の大乘を顯す。又涅槃の悉有佛性を釋す。『十二門論』の初め

に六義大乘を明かして⑫、諸部を通冠す。故に知んぬ、三論は唯般若に非ず。四諦品の疏（『中觀論疏』の四諦品）に大師自ら云わく「此の偈即ち涅槃の經文を釋す。故に應に但だ般若を申ぶるのみと言うべからず」⑬と。〈文〉問う、三義の中に於いて、何を以て正と爲すや。答う、初義即ち是れ第三の支條なり。但だ二義を以て其の宗趣を論ずるのみ。或は但だ般若のみ、或は諸部に通ず。此れ並に證有り。故に『中論』並び『十二門（論）』は初を發し、『般若經』を引き、宗歸を釋論す。『中論疏』は『般若』の文を引いて釋す。既に六義有り、「一に、般若は大乘の始めなるが故なり。二に、諸大乘の中に最も深大なるが故なり。三に、般若は正しく實相を顯し、有所得を洗い、正觀を開發し、諸障を滅するが故なり。四に、江南大令師⑭は得道の經と爲すが故なり。五に、山中大師⑮の云わく「論は正しく般若の心を解すが故。六に、輒ち一文を引き、應に難となさずなり」⑯と。〈略抄〉初、後各に一の證をして諸經を通じ、中間の四つの證は正に是れ般若なり。是の二義は共にこれを用うべきと雖も、般若を以て正と爲す。一切を以てこれを成ず。又、一切の部は是の所用なりと雖も、而も般若の義は大なり。此れに由りて應に知るべし、二義は一途なりと。

注

- ① 三論宗の「三論」は『中論』『十二門論』『百論』三つの論書を指すが、これに『大智度論』を加えて、四論宗ともいう。吉藏『三論玄義』に「次明別釋三論。問既有四論。何故常稱三論耶。答略有八義。一者一一論各具三義。一破邪。二顯正。三言教。以同具此三義故。合名三論。二者三論具合方備三義。中論明所顯之理。百論破於邪執。十二門名爲言教。以三義相成故名爲三論。三者中論爲廣論。百論爲次論。十二門爲略論。三部具上中下三品故名三論。四者一切經論凡有三種。一但偈論。即是中論。二但長行論。所謂百論。三亦長行亦偈論。即十二門論。以三部互相開避而共相成。五者此之三部同是大乘通論。故名三論。六者此三部同顯不二實相。故名三論。七者同是四依菩薩所造。八者同是像末所作。但欲綱維大法也」とある。『大正藏』卷四十五. p. 12c5-18 「四論宗」と呼称するのは、以上のような八つの理由があると説いている。

- ② 注一の『三論玄義』の引文を参照。
- ③ 吉蔵『三論玄義』の中に四論宗を称するに八つの理由を挙げる。ここでは第五番目の「五者此之三部同是大乘通論」をさす。『大正蔵』卷四十五. p. 12c15-16 注一を参照。
- ④ 僧叡撰『中論』序に「尋斯四者。眞若日月入懷無不朗然鑒徹矣」とある。『大正蔵』卷三十. p. 1b3-4
- ⑤ 唐の均正が『大乘四論玄義記』十巻を撰したが、現在巻一、巻三、巻四を欠く。『卍續蔵經』卷七十四に収録されている。
- ⑥ 法師は吉蔵を指す。
- ⑦ 竺仏念訳『菩薩瓔珞本業經』「仏母品第五」の中に八不について、以下の様に説かれている。「佛子。二諦義者。不一亦不二。不常亦不斷。不來亦不去。不生亦不滅。而二相即聖智無二。無二故是諸佛菩薩智母。佛子。十方無極刹土諸佛。皆亦如是説。吾今爲是大衆略説明月瓔珞經中二諦要義」『大正蔵』卷二十四. p. 1018c2-7
- ⑧ 南本『大般涅槃經』卷二十七「獅子吼菩薩品」に「十二因縁、不出不滅、不常不斷、非一非二、不來不去、非因非果」とある。『大正蔵』卷十二. p. 768b20-21
- ⑨ 吉蔵『大乘玄論』に「問釋論中指正觀論者。何必是中論耶。答中論觀法品云。正觀論之稱。故知。中論是正觀論也。故相傳云。中論是釋論之骨髓也」とある。『大正蔵』卷四十五. p. 30c16-19
- ⑩ 『大智度論』「釈涅槃如化品第八十七」に「佛言。無誑相涅槃是法非變化。世尊。如佛自説諸法平等。非聲聞作非辟支佛作非諸菩薩摩訶薩作非諸佛作。有佛無佛諸法性常空性空即是涅槃。云何言涅槃一法非如化。佛告須菩提。如是如是。諸法平等非聲聞所作。乃至性空即是涅槃。若新發意菩薩聞是一切法皆畢竟性空乃至涅槃亦皆如化」とある。（『大正蔵』卷二十五. pp. 728c27-729a5 珍海が述べている「兼釋涅槃之義」はこれを指すであろう。
- ⑪ 羅什訳『仏説華手經』卷三に以下の様な内容がある。「是心及衆縁 皆空無自性。若人如是知 終不退菩提。若法性自空 是法即無生。一切無生法 是名

眞智種」『大正蔵』卷十六. p. 142b7-10 これに対して、『三論玄疏文義要』の中の珍海の解釈は「今案。是心及衆縁。皆空無自性者。衆因縁生法。我說即是空也。若法自性空。是法即無生等者。亦是中道義也。衆因縁性法者。是世諦。我說即是空者。眞諦。此眞俗二諦。并是假名。若人如是知。終不退菩提者。是假名有故。空有并名假也。亦爲是假名也。即無生故。亦即是中道也。無生者中道也。故八不初云。不生且舉一句耳。此文委如論疏」である。『大正蔵』卷七十. p. 248b2-9

- ⑫ 龍樹『十二門論』「觀因縁門第一」に六義大乘について以下の様に述べている。「摩訶衍者。於二乘爲上故。名大乘。諸佛最大是乘能至。故名爲大。諸佛大人乘是乘故。故名爲大。又能滅除衆生大苦。與大利益事故名爲大。又觀世音。得大勢。文殊師利。彌勒菩薩等。是諸大士之所乘故。故名爲大。又以此乘。能盡一切諸法邊底。故名爲大。又如般若經中。佛自說摩訶衍義無量無邊。以是因縁故名爲大。大分深義所謂空也。若能通達是義。即通達大乘」『大正蔵』卷三十. p. 159c14-23
- ⑬ 『中觀論疏』卷十「四諦品」に「云何言不明佛性。答大乘中明唯有佛性無有餘性。故得成佛。小乘不明唯有佛性。則破大乘佛性義。既無大乘佛性。云何成佛。又小乘人有佛性。佛性是無常破大乘佛性常義。故不得成佛。此偈即釋涅槃經文。故不應言但申波若」とある『大正蔵』卷四十二. p. 153c7-12 「此偈」は『中論』「觀四諦品第二十四」の中で説いている「雖復勤精進 修行菩提道。若先非佛性 不應得成佛」の四句の偈を指す。『中觀論』卷三十. p. 34a24-25
- ⑭ 安澄『中論疏記』の中に「言昔江南大令般若師等者。述義云。即任僧正大令法師是也」とあるが、大令師については未見。『大正蔵』卷六十五. p. 46b18-19
- ⑮ 吉蔵『二諦義』卷下に「山中法師之師。本遼東人」とある『大正蔵』卷四十五. p. 108b3 山中師の師は遼東人であるならば、師は遼東人出身の道朗のことを指し、山中師は僧詮のことを指すと考えられる。しかし、安澄『中論疏記』の中に「亦可興皇寺法朗師名山中師」とある『大正蔵』卷六十五. p. 46b27 「法朗師名山中師」は、法朗は僧詮に師事したことから、師

と共に山中師と称すると考える。珍海は『略私記』の中で吉蔵の『中觀論疏』の文を引いて、山中師のことをに言及する。吉蔵の師は法朗であることから見れば、ここの「山中師」は法朗のことを指すであろう。

- ⑩ 吉蔵『中觀論疏』卷第一の末に「問此論遍申衆經。何故偏引般若。答有六義。一者智度論云。三藏中未說菩薩行。般若中正明菩薩行。即波若是大乘之初。正對小乘故偏引其初也。二者般若明於二道。一般若道。二方便道。蓋是三世諸佛法身父母。故智度論云。於一切大乘經中最爲深大。故偏引之。三者又般若正顯實相破洗顛倒有所得。開發正觀滅諸重罪。入道爲要。故偏引之。四者昔江南大令般若師云。般若名爲得道經。以其得道正由實相故也。五者山中大師云。智度論雖廣釋般若。而中論正解般若之中心。故偏引般若。所以然者中論正明實相中道。令識於中道發生正觀。大品亦正明實相。因實相發生般若。以明義正同故偏引之。六者又蓋是趣引一文不應難也」とある。
- 『大正藏』卷四十二. p. 17a27-b13

テキスト

第五、理内理外

浄名玄第六云、興皇大師云、今自有二①轍義。一者、理外義。二、理内義。理内一切法是因縁義。理外一切法非假名義。是故爲異。〈云云〉此二即是有所得、無所得義。佛性義中、以有所得皆屬外道。若無所得、乃名内道。即是論中外、與論主二家之義也。

『大乘正觀略私記』『大正藏』卷七十. p. 197b29-c6

注

- ① 大正藏經テキストは「三轍義」とあるが、『浄名玄論』に「興皇大師云。今自有二轍義。一者理外義。二理内義」とある。『大正藏』卷三十八. p. 896c10-c11
ここでは後の誤写であろうと考え、今改めた。

書き下し

『浄名玄』第六に云わく「興皇大師云わく、今自ら二轍の義有り。一に、理外の義なり。二に理内の義なり。理内は一切法は是れ因縁の義なり。理外は一切法は假名の義に非ず。是の故に異と爲す」①と。〈云云〉此の二は即ち是れ有所得、無所得の義なり。佛性義の中に、有所得を以て皆外道に屬すなり。若し無所得ならば、乃ち内道と名づく。即ち是れ中外を論じ、論主と二家の義なり。

注

- ① 吉蔵の『浄名玄論』に理内、理外について、以下の様な記述がある。「興皇大師云。今自有二轍義。一者理外義。二理内義。若心行理外。故云理外。心行理内。復云理内。理内具眞俗等一切法。理外亦具眞俗等一切法（中略）理内一切法。皆是因縁義。理外一切法。非假名義。是故爲異」『大正藏』卷三十八. p. 896c10-c16 また、『大乘玄論』卷三に「若言一切諸法有生滅者。皆是理外。悉屬外道。若一切諸法無生滅者。皆是理内則屬内道」とある。『大正藏』卷四十五. p. 40b5-b7 『略私記』の中の引用文と小異があるが、取意の引用であろう。

テキスト

第六、法門名數

夫無得之得、則名相不壞。無住之住、猶階級宛然。是以諸法群分、精苑各異。義用塵算、巨細不同。十番四重之二諦、十對四種之二智、五佛性、般若、十種一乘、大乘六義、五種四重淨土、有量無量四諦、有爲無爲般若、空不空二藏。又、三假三中、四假四中、及一中一假、圓中圓假、五住二障、二種生死、八識、二空、三性等、五十二位、五忍六度、三種不退、五重並觀、佛果三身、涅槃四德。是等諸經義門、皆依經論、並相承義。一一皆應尋之

『大乘正觀略私記』『大正藏』卷七十. p. 197c7-17

書き下し

第六、法門の名數

夫れ無得の得、則ち名相は壞さず。無住の住、猶お階級宛然たり。是こを以て諸法は群分して、精苑（粗）は各異なる。義用、塵算し、巨細は不同なり。十番四重の二諦①、十對四種の二智②、五佛性③、般若、十種の一乘④、大乘の六義⑤、五種四重の淨土⑥、有量無量の四諦⑦、有爲無爲の般若⑧、空不空の二藏⑨。又、三假三中⑩、四假四中⑪、及び一中一假⑫、圓中圓假⑬、五住⑭、二障⑮、二種の生死⑯、八識⑰、二空⑱、三性⑲等、五十二位⑳、五忍㉑、六度㉒、三種の不退㉓、五重の並㉔觀、佛果の三身㉕、涅槃の四德㉖。是れ等の諸經の義門、皆經論並に相承の義に依る。一一皆應にこれを尋ぬべし。

注

- ① 珍海は『文義要』の中で十番について各々次の通り解釈している。「十番二諦者何等耶。答。十番二諦者一者教二諦。二者於二諦。三人二諦。四法二諦。五事理二諦。六如實知不如實知二諦。七續不續二諦。八生死涅槃二諦。九因緣二諦。十菩薩聲聞二諦」である。『大正藏』卷七十. pp. 239c2-240a3 取意 「四重」は即ち吉藏『大乘玄論』の中で説いている「四重之二諦」である。即ち「以有爲世諦。空爲眞諦。今明。若有若空皆是世諦。非空非有始名眞諦。三者空有爲二。非空有爲不二。二與不二皆是世諦。（中略）非二

非不二名爲眞諦。非二非不二三無性非安立諦皆是我俗諦。言忘慮絶方是眞諦」である。『大正蔵』卷四十五. p. 15c5-23 この四重の二諦では、第一重は毘曇の事理に対して空・有の二諦を明らかにする。第二重は成実論師に対して「若有若空」の二諦は俗諦であり、「非空非有」は眞諦であることを明らかにする。第三重は大乘師に対して、他により二を分別するのは俗諦であり、無分別の非二非不二是眞諦である。第四重は、大乘師の三性を俗諦と爲し、三無性非安立諦を眞諦と爲すに対して吉蔵は眞実不二を安立諦と爲し、三無性非安立諦を俗諦と爲し、言忘慮絶は眞諦と爲すと説いている。また、四重之二諦について、珍海は『文義要』の中に以下の様に述べている。「今以此等意。論四重并有理教。此理教者。是正因縁道理故。并通正法故。并是教諦。故知教諦。有四重也」『大正蔵』卷七十. p. 239b27-29

- ② 「十對」は珍海の『文義要』の中に説いている般若方便の十對門である。即ち「二智云。一者直照空有。名爲般若。行空不證。涉有無著。故名方便。此之照巧更無二體。雖巧而照。故名爲實。雖照而巧。故名方便。(中略) 二智義云。二者照空爲實。涉有爲方便。如釋論云般若將入畢竟空。方便將出畢竟空。雖復照空。即能涉有。此用既巧名爲方便。(中略) 二智義云。三者以內靜鑒爲實。外反動爲權。問。此義與前何異。答。此明若照若巧。靜鑒之義。若名爲實。以外反動故。名爲權。又云。四者波若爲實。五度爲方便。所以然者。波若爲空解。空解故名實。五度爲有行。有行故名權。(中略) 又云。五者照空爲實。知空亦空。即能不證空。故名爲權。初觀心未妙故。但能照空。既轉精巧。即知空亦空。既知空亦空。而不壞假名。即能涉有。始終論之。猶是一惠。約巧未巧。故分權實。(中略) 又六者知苦無常。故名爲實。而不厭離稱爲方便。此但就有一門。分權實。又云。八者淨名託迹毘耶。不疾之身爲實。現病之迹爲權。此據虛實之義。以明權實也。又云。九者以上照空有二。爲方便。照非空有不二爲實。非空非有。即是實諦。照一實諦。故名爲實。又云。十者空有爲二。非空有爲不二。照二與不二。皆名方便。照非二非不二名實。淨名杜言。釋迦掩室。乃名爲實。權實多門。略開此之十對。即一途次第。竝有經論。可隨文用之。」である。『大正蔵』卷七

十. pp. 255b28-256a19 「四種二智」について吉蔵『大乘玄論』の中で、以下の様な記述がある。「今明此經要具四種二智。一者初段中有三種二智。後開近顯遠中復有一種二智。故成四種。初段明三種二智者。初三一二智。二乘人欲入菩薩法。要先須識三乘是權一乘爲實。以破彼迷權實無明。此二智是反三之始。歸一之初。故先須辨之。二者空有二智既改三信一。則須學菩薩空有二慧。觀空不證離二乘地。涉有無著出凡夫境。故生在佛家種姓尊貴。又空有二慧是法身父母。欲求大覺者豈不學之。三者即此空有二慧是菩薩自行耳。復應化度衆生。故以內靜爲實外動用爲權。故有第三動靜二慧也。(中略) 此經後段辨本迹常無常二智。識本は無生滅無始終爲實智。識始終生滅等用謂權智。故初段具三種二智第二段常無常二智。故此經具四種二智也」『大正藏』卷三十四. pp. 395c15-396a18

- ③ 珍海が説いている三論宗における五種の仏性は、即ち①境界佛性。②觀智佛性。③菩提果性。④涅槃果果性。⑤非因非果正因佛性である。『大正藏』卷七十. p. 290c13-14
- ④ 十種の一乗は即ち吉蔵の『大乘玄論』卷三に説いている「會三歸一」の十義である。「三一開會凡有十門。一者開三顯一。二者會三歸一。三者廢三立一。四者破三明一。五者覆三明一。六者三前明一。七者三中明一。八者三後辨一。九者絕三明一。十者無三辨一也」『大正藏』卷四十五. p. 43a28-b3 また同書に一乗について以下の様な記述がある。「開三顯一者。開昔三乘是方便。示今一乘是眞實。故云開三顯一也。會三歸一者。會彼三行歸一佛乘。故云汝等所行是菩薩道也。廢三立一者。廢昔三教立今一乘教。故云於諸菩薩中正直捨方便但説無上道也。破三明一者。破其執三異之情。以明一乘之道也。覆三明一者。如來趣三一兩縁。當有三一之教。昔則以三覆一。今則以一覆三。三前明一者。未趣鹿苑説三之前。寂滅道場已明一實之教。謂三前明一也。三中明一者。從趣鹿苑説於三乘。佛乘第一縁覺第二聲聞第三。謂三中明一也。三後辨一者。三乘之後法華教門。以會彼三乘同歸一道。謂三後一也。絕待一者。如無言世界。外則無言無示。內則無慮無識。故不論一三而已。即此爲佛事故。則復是一故。云絕待一也。無三辨一者。如香積佛土。彼土無有二乘名字。謂無三辨一也但有清淨大菩薩衆。謂有一也。前

之五種。就義論一。後之五種。約時處。諸文不同教門差別。故開五也」『大正藏』卷四十五. p. 43b3-22

- ⑤ 龍樹『十二門論』の中に大乘の六義について以下の様な記述がある。「摩訶衍者。於二乘爲上故。名大乘。諸佛最大是乘能至。故名爲大。諸佛大人乘是乘故。故名爲大。又能滅除衆生大苦。與大利益事故名爲大。又觀世音。得大勢。文殊師利。彌勒菩薩等。是諸大士之所乘故。故名爲大。又以此乘。能盡一切諸法邊底。故名爲大」『大正藏』卷三十. p. 159c14-20
- ⑥ 五種淨土について珍海は『文義要』の中で以下の様な記述がある。「今依嘉祥之師宗。凡就佛土。立五種別。一是淨土。二不淨土。三不淨淨土。四淨不淨土。五雜土」『大正藏』卷七十. p. 345c6-8 また、吉藏『大乘玄論』卷五「教迹義三」の中に淨土について以下の様な記述がある。「淨土者。蓋是諸佛菩薩之所栖域。衆生之所歸總談佛土凡有五種。一淨二不淨三不淨淨四淨不淨五者雜土。所言淨者。菩薩以善法化衆生。衆生具受善法。同構善緣。得純淨土言不淨者。若衆生造惡緣感穢土也。淨不淨者。初是淨土。此衆生緣盡。後惡衆生來。則土變成不淨也。不淨淨者。不淨緣盡。後淨衆生來。則土變成淨。如彌勒與之釋迦也。言雜土者。衆生具起善惡二業。故感淨穢雜土。此五皆是衆生自業所起。應名衆生土。但佛有王化之功。故名佛土。然報土既五。應土亦然。報據衆生業感。應就如來所現。故合有十土。就淨土中更開四位。一凡聖同居土。如彌勒出時凡聖共在淨土內住。亦如西方九品往生爲凡。復有三乘賢聖也。二大小同住土。謂羅漢辟支及大力菩薩。捨三界分段身。生界外淨土中也。三獨菩薩所住土。謂菩薩道過二乘。居土亦異。如香積世界。無二乘名。亦如七寶世界。純諸菩薩也。四諸佛獨居土」『大正藏』卷四十五. p. 67a2-20 この文中に説いている「就淨土中更開四位」の四位が即ち四重の淨土を指す。
- ⑦ 四諦は苦、集、滅、道である。吉藏『中觀論疏』に有量無量の四諦について以下の様な記述がある。「但四諦有二種。一有量。二無量。三界苦果名苦諦。感三界苦業煩惱名集諦。無爲涅槃名滅諦。治此煩惱名道諦。此有量也。(中略)次無量四諦者二生死爲苦。五住爲集。滅二死五住爲滅。治此五住惑眞解爲道諦也。而量無量復名作無作者。有量之後猶有所作。如分段苦後更

有變易苦可觀。名爲有作。變易苦後無復餘苦可觀。故名無作」『大正藏』卷四十二. pp. 148c12-149a19

- ⑧ 珍海『文義要』の中に「問。就觀照般若。有爲無爲別。爾者。何名有爲般若。何名無爲般若耶 答。因位般若。是有爲般若。果位般若。は無爲般若也」とある。『大正藏』卷七十. p. 261a25-27 「因位」は修行の位。「果位」は修行により得た結果としての位である。
- ⑨ 空不空の二蔵は『勝鬘經』に出るが、珍海が説いている空不空の理は、八不に説いている中道の義である。『文義要』の中に珍海は『大乘広百論釈論』の文を引いて空不空の理を述べる。「廣百論第十云。應捨執著空有兩邊。領悟大乘不二中道」『大正藏』卷七十. p. 234b6-7
- ⑩ 吉蔵『大乘玄論』により、「三假」は因成假、相續假、相待假である。『大正藏』卷四十五. p. 18b11-13 三中について吉蔵『三論玄義』の中に、「所言三中者、二諦中及非眞非俗中」と述べている。『大正藏』卷四十二. p. 14b20-21
- ⑪ 吉蔵『二諦義』により、「四假」は因縁假、對縁假、就縁假、隨縁假である。『大正藏』卷四十五. p. 106a9-10 また、吉蔵『三論玄義』により、「四中」は對偏中、盡偏中、絶待中、成假中である。『大正藏』卷四十二. p. 14b21-22 四假四中はまた圓假圓中と称す、吉蔵『大乘玄論』の中で体假、用假、体中、用中について以下の様に解釈する。「問何物是體假用假。何爲體中用中耶。答假有假無是用假。非有非無是體假。有無是用中。非有非無是體中。復言。有無非有非無皆是用中用假。非二非不二。方是體假體中。合有四假四中。方是圓假圓中耳」『大正藏』卷四十五. p. 19c7-12
- ⑫ 吉蔵『中觀論疏』に「結束之雖有四種中假合但成一中一假。非眞俗爲體。故名爲中。眞俗爲用。故稱爲假」とある。『大正藏』卷四十二. p. 27a14-16
- ⑬ 吉蔵『中觀論疏』に「問俱中俱假復得合爲一假。合成一中以不。答具足眞俗非眞俗義乃圓正。始成一圓中。眞俗非眞俗不自始是一圓假也」とある。『大正藏』卷四十二. p. 27a27-29
- ⑭ 珍海は『文義要』の中に吉蔵『勝鬘宝窟』を引いて五住を解釈するに、以下の様な記述がある。「問。五住者何等耶。答寶窟中末云。今言四住地。唯

有二種。一見。二愛。合三界見總爲一處。故云見一處住地。以對離愛爲三處故。以見爲一處。(中略)五住種子能生爲地。上心所生爲起。二異類分別。四住地中見一處爲地。三住地從見一處住地起名起。故雜心云。見諦所斷。是一切染汚法因。又無明住地。無始能生是地。恒沙煩惱從無明生爲起。次約麤細。分別地起。無明是地。四住煩惱爲起第五相應不相應門者。一就作緣念法辨相應不相應。不作緣念法不相應。即五住種子是也」『大正藏』卷七十. p. 287b6-c9

- ⑮ 二障は煩惱障と智障を指す。珍海『文義要』の中で二障について以下の様な記述がある。「問。二障者何等耶。答。一煩惱障。二智障也。問。如何云煩惱障云智障耶。答花玄八云。又攝大乘及地持論。明障有二種。一惑障。二智障脱三界煩惱。但離惑障未離智障。若出二百。便離二障也」『大正藏』卷七十. p. 286c25-c29

- ⑯ 二種の生死は即ち變易生死と分段生死である。『勝鬘師子吼一乘大方便方廣經』の中に二種の生死について以下の様な記述がある。「有二種死。何等爲二。謂分段死。不思議變易死。分段死者。謂虛偽衆生。不思議變易死者。謂阿羅漢辟支佛大力菩薩意生身乃至究竟無上菩提。二種死中。以分段死故。說阿羅漢辟支佛智我生已盡。得有餘果證故。說梵行已立」『大正藏』卷十二. p. 219c20-25

- ⑰ 八識は眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識、末那識、阿頼耶識である。また、単なる第八の阿頼耶識を指す場合もある。珍海『文義要』の中に第八識について以下の様な記述がある。「問。爾第八識眞妄中何。答。有二種阿梨耶識矣。中論疏第七云。行品又舊地論以七識爲虛妄。八識爲眞實。攝大乘師以八識爲虛妄。九識爲眞實。又云。八識有二義。一妄。二眞。有解。性義是眞有。果報識是妄用。起信論。生滅無生滅。合作梨耶體。楞伽經。亦有二文。一云梨耶。是如來藏。二云如來藏。非阿梨耶」『大正藏』卷七十. p. 272c7-15

- ⑱ 二空は即ち人空と法空である。これについて吉藏『十二門論疏』の中に以下の様な記述がある。「是故衆緣皆空下第五總結齊法。就文別明「三空。即爲三別。一明有空。二辨人空。三明無爲空。問何故但明此三空。答此三空

攝一切有爲無爲空。即是法空。次是人空。故生法二空攝一切空也」『大正藏』卷四十二. p. 186a10-14

- ①⑨ 珍海の説いている三性は依他性、分別性、眞實性のことを指す。『文義要』卷五に三性について以下の様な記述がある。「三性謂依他性。分別性。眞實性。分別性者。即是六塵以爲識取分別名分別性。依他性者。心識依六塵及梨耶本識起。爲依他性。眞實性者。即是涅槃。故名爲三性」『大正藏』卷七十. pp. 281c26-282a1
- ②⑩ 吉藏『法華玄論』卷四に五十二位をもって成仏の階級を解釈する。即ち「前十信次十住。十住即是十解。以解故起十行。行解成就任運趣菩薩道。可名迴向。迴向既順無生流則登平眞悟。故名十地。以三種二智配此位者。初二智爲信即是十信。次二智爲解即是十住。第三二智即是十行。解行既成則能向菩薩道。是故有十迴向。迴向既順無生流故登十地」である。『大正藏』卷三十四. p. 396a3-10
- ②⑪ 『仁王經』の中に説いている菩薩の位である。「五忍是菩薩法。伏忍上中下。信忍上中下。順忍上中下。無生忍上中下。寂滅忍上中下。名爲諸佛菩薩修般若波羅蜜」『大正藏』卷八. p. 826b23-25
- ②⑫ 度は生死海を渡し、涅槃の彼岸に達することを表す。その義は①布施。②持戒。③忍辱。④精進。⑤禪定。⑥智慧である。
- ②⑬ 珍海『三論玄疏文義要』に三不退を解釈して次の様に挙げている。「一位不退。二行不退。三念不退」『大正藏』卷七十. p. 5311c4-5 これに対して、吉藏『法華義疏』の中に三不退を詳しく解釈する。「但舊明有三種不退。一位不退。二行不退。三念不退。釋三不退不同凡有四説。一云十住前六心假解未立退菩提心爲二乘。七心以上假解已立名爲菩薩。獨成性地此免位退。二者行退。初地至六地此中諸人習行有時不進名爲行退。七地則無此行退也。第七一地或起愛習猶有功用名爲念退。八地已上入無功用道永無三退故名不退轉也。二云外凡六心名爲位退。七心已上稱位不退。餘二不異前釋也。三云習種性名位不退。道種性解行純熟謂行不退。初地已上得無生忍不復生心動念名念不退也。四有人言有四種不退。十信十住是信不退。十行是位不退。十迴向是行不退。十地是念不退。今謂經論不同難可詳會」『大正藏』卷三十

四. p. 461b23-c8

- ②④ 五重については未見。吉蔵『大乘玄論』の中に菩薩の位について以下の様な記述がある。「問何位菩薩能眞俗並觀。應物顯形如水中月濟度人耶。答靈味師云。初地得無生即能眞俗並觀」『大正蔵』卷四十五. p66c10-12 珍海は『大乘玄論』の文を引いて並觀について次の様に解釈する。「師云。初地得無生。即能眞俗並觀。什肇師云。七地並觀。成論師云。八地並觀。今謂。從初發心。則學無生習於並觀。故涅槃云。發心畢竟。二不別。有四重階級。一者對地前凡位。但明順忍。未有無生。亦未能眞俗並。初地稱聖。始得無生正觀方便。仁王攝論並有此文。二者初地已上。六地已還。無生尚淺。與順忍之名。於七稱等定惠地。始是無生。名爲並觀。智度論云。前三地惠多定少。後三地定多惠少。故定惠不等。至於七地。定惠均平。云等定惠地。此說。般若靜鑒爲定。方便動照爲惠。三者七地雖得無生。已能並觀。但猶有功用。八地於功用心。永不復生。四者八地。雖無功用。猶未究竟。究竟無生。在於佛位」『大正蔵』卷七十. p. 263b23-c8
- ②⑤ 三身は法身、報身、應身である。吉蔵『金剛般若疏』に仏の三身について以下の様な記述がある。「明佛有三種。一者法身佛。即正法爲身。二者報身佛。即是脩因已滿果起酬因名爲報佛。三者化身佛」(『大正蔵』卷三十三. p. 107b19-b21
- ②⑥ 『大般涅槃經』に説いている四つの徳を指す。即ち常德、樂徳、我徳、淨徳である。

テキスト

第七、遣蕩究竟

涅槃疏第十八云、衆生佛性、非内六入、非外六入、内外合故、故名中道。山中師自云、兩去不成中、兩來不成假也。今釋此文者明、上非内非外、此是雙非内外。下云内外合者、此復明亦非是非内、亦非是非外。一切遣蕩、故云非内非外、内外合故、故名中道。〈文〉此有二意。一者、爲破病故、言内破非内言外破非外。若入此門、凡有所說無不破病。二者、爲顯正道離言、如引華嚴言正法性遠離一切言語道也。故言内外者、謂非非内、非非外也。由此古人言、大師立義、不知所去者、裁見此一門而已。應知、青辨 論宗且依此門。

『大乘正觀略私記』『大正藏』卷七十. pp. 197c18-189a2

書き下し

第七、遣蕩究竟

『涅槃疏』第十八に云わく「衆生の佛性は、内の六入に非ず、外の六入に非ず、内外合するが故に、故に中道と名づく」①と。山中師自ら云わく「兩ながら去れば、中に成らず、兩ながら来たりて假に成らざるなり」②と。今、此の文を釋さば明さん、「上の非内非外、此れは是れ雙に内外に非ず。下に内外を合すると云うは、此れ復た、亦非は是れ非内、亦非は是れ非外を明かす。一切を遣蕩す、故に非内非外、内外を合するが故、故に中道と名づくと云う」③と。〈文〉此れ二に意有り、一に、病を破さんが爲の故に、言内に非内を破ると言外に非外を破る。若し此の門に入れば、凡そあらゆる所説は破病をならざること無し。二に、正道離言を顯す爲、『華嚴』に正法の性は一切の言語の道を遠離することを用を引くが如し④。故に内外に言うとは、非内に非ず、非外に非ずと謂うなり。此れに由りて古人が言わく。「大師は義を立て、所去を知らずとは、載せて此の一門を見るのみ」と。應さに知るべし、青辨の論宗且らく此の門に依ると。

注

① 平井俊榮氏の研究により、珍海が自分の諸々の著作中で頻繁に引用した『涅槃

槃經疏』は、今迭失した吉蔵の南本涅槃經の注疏である。疏全二十卷があり、吉蔵の初期の作品と考えられている。（『中国般若思想史研究—吉蔵と三論学派—』より）

- ② 珍海の『三論玄疏文義要』の中に「非有」は一の去であり、「非無」は一の去である。合して両ながら去であるという。また、両ながら来るのは、即ち有、無であるという。原文は以下の通りである。「此文難解。中假師。以非有非無。爲中道。即不解此文故。山中師。自云。兩去不成中。兩來不成假也。今釋此文者。明上非内非外。此是雙非内外。下云内外合者。此復明亦非非内。亦非是非外。一切遣蕩。故山中者。攝山師也。兩去者。非有是一去也。非無是一去也。合此兩非。故云兩去矣。兩來即有與無也。今釋者。疏主自義也。内外合者。亦是遣非内非外也。此文似難也」（『大正蔵』卷七十. p. 237a26-b8
- ③ 注二の『三論玄疏文義要』の引文を参照。
- ④ 『大方広仏華嚴經』卷三十四に「正法性遠離 一切語言道」の二句の偈がある。『大正蔵』卷九. p. 615a3

テキスト

第八、道門宗極

夫以、至道無言而無不言、般若無知而無不知、不動真際建立諸法。諸法即真際、故云、生死之實際、及以涅槃際、如是二際者、無毫釐差別。又引華首經云、衆因緣生法、我說即是無、亦爲是假名、亦是中道義。〈云云〉八不一一即三世。一往釋云、因緣生法、無有自性、皆屬因緣故、既無自性、即是空也。因緣生法、爲衆生假說、故即是假也。自性無故離有邊。假緣有故離空邊。離二邊故名爲中道。此依青目論意一往釋也。而大師具解云、有無及不二、此三皆假。此有二意。一者、三種皆言說故、言說皆假故無。二諦義云、一切言說皆是假故。〈文〉二、眞俗不自。眞俗是非眞俗之眞俗故、眞俗是假。非眞俗不自。非眞俗由眞俗故非眞俗。故非眞俗亦是假。論疏重牒八不則有此釋。此是相待因緣。若四緣生唯是有爲。若十二緣唯是內法。其義是狹。相待義寬。故就之以釋。二諦義云、假有假無是用假。非有非無是體假。有無是用中、非有非無是體中。復言、有無非有非無 皆是用中用假。非二非不二方是體假。體中合有四假四中、方是圓假圓中耳。〈文〉所言四者、一有。二無。三非有無。四非二非不二。此四皆假、皆中也。又、空無性實、有於假名。在義始正故名圓中。此圓中即是宗極。問、若爾、何故釋涅槃經內外合故、故名中道文。云一切遣蕩乎。答、大師自引山中釋云。兩去不成中。〈云云〉故知、非定兩非名爲中道。然顯別義唯用遣蕩故、涅槃疏第十六云、然此文辨中道以正爲中道。若是見空、見不空、此是正名爲中道。若餘以兩非爲中道。今明、此猶是偏。兩非對兩是。今取兩斷者、則是邊是非中道。今此中明、中者空有具故是中。問、前文云體用者其義定耶。答、疏云、爲欲釋論文中假故、一往立於體用。〈云云〉體用只是理與教也。問、眞如、法身、佛性、涅槃、常樂我淨等、亦是假名因緣法耶。答、此亦是假因緣法也。問、法性自爾、是聖教說。云何假耶。答、非四緣所生故云自爾。此亦對因緣生法說爲非緣生。亦爲自爾。此即猶是相待因緣。又復、常等皆緣成假。謂以樂我淨說之爲常。離樂我淨、即無常自性、如常既然。樂我淨等、皆亦如是。勝鬘寶窟即有此義。淨影大師勝鬘經疏釋此義云、是因緣常、非定性常。〈云云〉淨影云、不空宗故解第四宗。眞諦云、相寂體有。〈云云〉雖立不空、亦許是假。亦云、自相自性是空。故知、二師同許此義。問、既有四假四中、爾者俱是至道歟。爲當非二、非不二

體中爲中道歟。答、一云、非二非不二乃是至道。餘非正至極、不爲至道。二云、非二非不二是四重二諦中第三重眞諦、第四重世諦也。以離言寂滅。乃是第四重眞諦。即爲理也。前三皆是教門。若爾非至道。若以有無爲教、不二爲理、是利根境。此即不二爲理。若望中根、非二非不二爲理。考此意者、但是教理相對爲至道。非必非二非不二爲至道也。問、且有與無是教也、非有非無是理也。若但以不二體中爲中道、有無二用非主道耶。答、宗家以有無爲言教。未見有無爲理。若望此意、有無非至道也。三云、有無爲教。是一往義。故云、轉側適緣無所妨也。〈云云〉爲對由來有無爲理故、以有無爲教。以非有無爲理、引彼令入理。然實論之、有無並是佛智所緣。因緣二諦、亦即是中道。以一圓中、以爲至道。如空含萬像、海納百川、此道圓正。名爲至道也。

『大乘正觀略私記』『大正藏』卷七十. p. 198a3-c13

書き下し

第八、道門の宗極

夫れおもんみるに、至道は言無きにして而も不言無し、般若は無知にして而も不知無し、眞實際を動ぜずして諸法を建立すなり。諸法は即ち眞實際なり、故に云わく「生死の實際、及び涅槃の際、かくの如きの二際は、毫釐の差別無し」①と。又『華首經』を引いて云わく「衆の因縁生法は我、即ち是れ無と説く、亦是れ假名と爲す、亦是れ中道の義なり」②と。云云。八不の一一は即ち三世なり。一往に釋して云わく、因縁生法は、自性有ること無し、皆因縁に屬するが故なり、既に自性無し、即ち是れ空なり。因縁生法は、衆生の爲に假に説く、故に即ち是れ假なり。自性無きが故に有邊を離るなり。假の縁有るが故に空邊を離るなり。二邊を離るが故に名づけて中道と爲す。此れ青目の論意に依り一往に釋すなり。而も大師は具さに解して云わく、「有と無及び不二、此の三は皆假なり。此れに二意有り。一には、三種皆言説なるが故なり、言説は皆假の故に無なり。『二諦義』の云わく、一切の言説は皆是れ假なるが故なり」と〈文〉二には、眞俗は自らならず、眞俗は是れ非眞俗の眞俗なるが故に、眞俗は是れ假なり。非眞俗は自らならず。非眞俗は眞俗に由るが故に非眞俗なり。故に非眞俗は亦是れ假なり。『論疏』は八不を重牒して則ち此の釋有り。此れは是れ相

待の因縁なり。四縁生の若きは唯だ是れ有爲なり。十二縁の若きは唯だ是れ内法なり。其の義は是れ狹なり。相待の義は寛なり。故にこれに就いて以て釋す。

『二諦義』に云わく「假有假無は是れ用假なり。非有非無は是れ體假なり。有無は是れ用中なり、非有非無は是れ體中なり。復言わく、有無非有非無は皆是れ用中用假なり。非二非不二は方に是れ體假なり。體中合して四假四中有り、方に是れ圓假圓中なるのみ」③と〈文〉言う所の四とは、一に有なり、二に無なり、三に非有無なり、四に非二非不二なり。此の四は皆假、皆中なり。又、空は性實無し、假名有り。義在り始めに正なるが故に圓中と名づく。此の圓中即ち是れ宗極なり。問う、若し爾らば、何の故に『涅槃經』の内・外を合するが故、故に中道と名づくの文を釋して、一切遣蕩すと云うや。答う、大師は自ら山中の釋を引いて云わく「兩ながら去して、中に成らず」と〈云云〉故に知んぬ、非定の兩非を名づけて中道と爲す。然るに別義を顯すに唯だ遣蕩を用うるが故に、『涅槃疏』第十六に云わく、「然るに此の文は中道を辨ずるに正を以て中道と爲す。若し是れ空を見、不空を見れば、此れは是れ正しく名づけて中道と爲す。餘時の若きは兩非を以て中道と爲す。今明かすに、此れ猶お是れ偏なり。兩非は兩是に對す。今兩斷を取らば、則ち是れ邊にして是れ中道に非ず。今此の中に明かすに、中は空と有具するが故に是れ中なり」と。問う、前の文に云う體用とは其の義は定まるや。答う、『疏』に云わく「論文中の假を釋せんと欲するが爲の故に、一往、體用を立ち」④と〈云云〉體用は只だ是れ理と教のみなり。問う、眞如、法身、佛性、涅槃、常樂我淨等、亦是れ假名、因縁の法なるや。答う、此れ亦是れ假、因縁の法なり。問う、法性は自ら爾り、是れ聖教の説なり。云何が假なるや。答う、四縁所生に非ざるが故に自爾と云うなり。此れ亦因縁生法に對し説いて、縁非縁生と爲す。亦自爾と爲すなり。此れ即ち猶お是れ相待の因縁なり、文復、常等は皆縁成假なり。謂く樂我淨を以て之を説いて常と爲す。樂我淨を離るれば、即ち無常の自性は常の如く、既にち然り、樂我淨等、非有非皆亦是の如し。『勝鬘寶窟』に即ち此の義有り。淨影大師の『勝鬘經疏』に此の義を釋して云わく「是れ因縁の常なり、定性の常に非ず」⑤と。〈云云〉淨影の云わく、「不空宗の故に第四宗を解す」と。眞諦の云わく「相寂體有」と云云。不空を立つと雖も、亦是れ假を許す。亦云わく、自

相自性は是れ空なり。故に知んぬ、二師同じく此の義を許す。問う、既に四假四中有り、爾らば俱に是れ至道なるや。爲當に非二、非不二にして體中を中道と爲すや。答う、一に云わく、非二非不二乃ち是れ至道なり。餘は正しく非ず至極非ず、至道と爲さず。二に云わく、非二非不二は是れ四重の二諦⑥の中の第三重の眞諦なり、第四重の世諦なり。言を離るるを以て寂滅なり。乃ち是れ第四重の眞諦⑦なり。即ち理と爲すなり。前の三皆是れ教門なり。若し爾らば至道に非ず。若し有無を以て教と爲さば、不二を理と爲す、是れ利根の境なり。此れ即ち不二を理と爲す。若し中根に望まば、非二非不二を理と爲す。此の意を考うるは、但だ是れ教理相對にして至道と爲す。必ず非二非不二を至道と爲すなり。問う、且らく有と無は是れ教なり、非有非無は是れ理なり。若し但だ不二體中を以て中道と爲さば、有無の二用は至道に非ずや。答う、宗家は有無を以て言教と爲す。未だ有無を理と爲すを見ず。若し此に意を望まば、有無は至道に非ざるなり。三に云わく、有無を教と爲す⑧。是れ一往の義。故に云わく、轉側適縁にして妨ぐる所無きなりと。〈云云〉有無を理と爲す由來に對する爲が故に、有無を以て教と爲す。有無を理と爲すに非ざるを以て、彼を引いて理に入らしむ。然るに實に之を論じ、有無並に是の佛智所縁なり。因縁の二諦は亦即ち是れ中道なり。一圓中を以て、以て至道と爲す。空の萬像を含み、海の百川を納めるが如し、此の道は圓正なり。名づけて至道と爲すなり。

注

- ① 『中論』「觀涅槃品」に涅槃は即ち眞際であり、生死と涅槃は平等にして、不可得であるため、毫釐の差別もないと述べている四句の偈がある。即ち「涅槃之實際。及與世間際。如是二際者。無毫釐差別」である。『大正藏』卷三十. p. 36a10-11
- ② 『中論』「觀四諦品」に「衆因縁生法 我說即是無。亦爲是假名 亦是中道義」の四句の偈がある。『大正藏』卷三十. p. 33b11-12 『略私記』の中の引用經典の出處が違うが、珍海が「引華首經云」というのは、吉藏の『中觀論疏』「四諦品」の文「是華首經佛自說之。故稱我說即是空也」によると考える。『大正藏』卷四十二. p. 152b28-29

- ③ 吉蔵『二諦義』中には、この段落の引用文は見当たらない。吉蔵のほかの著作『大乘玄論』巻一の中に「體假用假」について同じ記述がある。即ち「問何物是體假用假。何爲體中用中耶。答假有假無是用假。非有非無是體假。有無是用中。非有非無是體中。復言。有無非有非無皆是用中用假。非二非不二。方是體假體中。合有四假四中。方是圓假圓中耳」『大正蔵』巻四十五. p. 19c7-12
- ④ 吉蔵『中觀論疏』巻二「因縁品第一」に「問單明眞俗是何中何假。直明非眞俗復是何假何中。答一往目之非眞俗爲體假。眞俗爲用假。眞俗爲用中。非眞俗爲體中。所以作此語者。爲欲釋論文中假。故一往立於體用。復爲對由來眞俗是體。無有非眞俗體故。明眞俗是用。非眞俗方是體。令其捨眞俗二見得迴悟耳」とある。『大正蔵』巻四十二. p. 27a29-b7
- ⑤ 吉蔵『勝鬘宝窟』に「問。涅槃實常。還見爲常。應是正見。何故言是邊見。答。涅槃雖復是常。是因縁常。非定性常。取爲性常。故是邊見」とある。『大正蔵』巻三十七. p. 76b26-28
- ⑥ 珍海『三論玄疏文義要』の中に四重二諦について次の様に述べている「問。就教諦中。有幾種耶。答。今大乘宗。總有四重二諦。一者有若世諦。空名眞諦。二者空與有并爲世諦。非空非有者。方爲眞諦。三者三二不二并爲世諦。非二非不二。方名眞諦。四者二不二非二非不二。皆是世諦。言忘慮絶方是眞諦」『大正蔵』巻七十. pp. 238c24-239a1
- ⑦ 珍海『三論玄疏文義要』の中に「第四重眞諦爲理」について「第四重教理具足。就此四重。前三皆是教門。第四重若細論之。四重皆有理教。初重有理教者。以有空言教是教也。所詮因縁。空有是理也。又凡轉爲聖。謂由空有之教。其空中聖人實知性空亦是理也」と述べている。『大正蔵』巻七十. p. 239a3-8
- ⑧ 吉蔵『浄名玄論』の中で、有無を教と爲すについて、以下の様な記述がある。「以有無爲教。略有五義。一對理明二諦。是教。以至理無二故。非有非無。今説有説無。故有無爲教。二者聖縁。聖人體道未曾有無。今説有無。此爲教物。故有無爲教。三爲技見。舊義執有無。是理。由來既久。則二見其根深。難可傾拔。攝嶺大師。對縁斥病。欲拔二見之根。令捨有無兩執。

故說有無能通不二理。非是究竟。不應住有無中。故有無爲教。四者以有無是諸見根本。一切經論。盛可二見。斥於有無。如凡夫著有。二乘著無。又愛多者著有。見多者著無。又四見多者有。邪見多者執無。又佛法中五百論師執有。聞畢竟空。如刀傷心。方廣執無。不信因果。又九十六種外道所執。不出有無。諸佛出世。復云有無。是二理者。便增諸見心。何由可秬。故今明有無是教門能。能通不二之理。不應住有無中。以欲息諸見故。經論明有無。是教門也。五者稟教之徒。聞有無是教之能。能通正道。虛心不染有無教廢發意即起乎凡聖。故有無爲教生意得矣」『大正藏』卷三十八. p894a18-b8 珍海『略私記』の中に説いている「三云。有無爲教」とはこの『浄名玄論』の文章を指す。

テキスト

第九、佛道遠近

肇公云、道遠乎哉、觸事而眞、聖遠^①乎哉、體之即神。〈云云〉眞者眞理、神者覺知、覺眞不遠者、則成佛近矣。重牒八不云、以階級之無階級唯一無生觀。無階級之階級故、有五十二位不同。〈云云〉准此、若得無生觀者、初心一念即成佛道。智論亦云、神通乘者、一聞般若便成佛道。問、說神通乘云、曾於無量劫積集善根故、一聞即得道、〈取意〉既無量劫積集善根、云何速耶。答、有所得修經無量劫。若無所得一念便成佛。故云神通乘。若不爾者、何異馬乘。問、大師不引之、何汝恣引證耶。答、大師釋前已出畢。又欲更知者、釋仁王經一念信此經、超百劫、千劫、十地等功德文云、超百千劫有相十地。故知、無得一念超無量劫有相十地、即神通乘也。又疏第三引大品云、菩提易得耳、以一切法無生即得菩提。〈文第二十四卷文也〉問、壞三大僧祇、而一念成佛歟。答、不壞三大而一念成。法花玄第九明三世無礙義云、乃至一劫攝一切劫、一切劫攝一劫、以有因緣無礙故、得如此也。若有定性、何猶能爾。〈文〉若望此義、以僧祇爲一念故、成佛速也。若望一念無生者、直是一念。即名佛也。而約階級不壞者、亦經五十二位。約不壞、亦經三祇、長短無礙、即無所畏。此宗亦有超悟菩薩。如法華疏、此義廣論、如文義要。

『大乘正觀略私記』『大正藏』卷七十. pp. 198c14-199a12

注

- ① 大正藏經テキストは「聖乎哉」であるが、欄外注記に「聖+遠」とする。意味上に「聖遠」の方が通じやすいので、今改めた。

書き下し

第九、佛道の遠近

肇公云わく「道は遠きかな、事に触れ而して眞、聖は遠きかな、これを體すれば、即ち神なり」と。〈云云〉眞とは眞理、神とは覺知、覺眞して遠からずとは、則ち成佛に近きなり。八不を重牒して云わく「階級の無階級を以て唯一の無生觀なり。無階級の階級の故に、五十二位の不同有り」^①と〈云云〉此れに准じ、

若し無生觀を得れば、初心に一念して即ち佛道を成ず。『智論』に亦云わく「神通乗とは、一たび般若を聞いて便わち佛道を成ず」と。問う、神通乗を説いて云わく、曾て無量の劫に於いて善根を積集するが故に、一たび聞かば即ち得道し、〈取意〉既に無量の劫に善根を積集すれば、云何がして速なるや。答う、有所得は修して無量の劫を経る。若し無所得なるは一念にして便わち成佛す。故に神通乗と云うなり。若し爾らざれば、馬乗と何ぞ異なるや。問う、大師はこれを引かず、何ぞ汝は恣に引證するや。答う、大師の釋は前已に出だし畢んぬ②。又更に知らんと欲さば、『仁王經』に一念に此の經を信じ、百劫、千劫、十地等の功德を超ゆるの文を釋して云わく、百千の劫と有相の十地を超ゆと。故に知んぬ、無得の一念は無量の劫と有相の十地を超ゆることを、即ち神通乗なり。又『疏』の第三に『大品』を引いて云わく「菩提は得易すきのみ、一切の法は無生なるを以て即ち菩提を得」③と〈文 第二十四卷の文なり〉問う、三大僧祇を壞して、一念にして成佛するや。答う、三大を壞さず而して一念に成ず。『法花玄』第九に三世無礙の義を明かして云わく「乃至一劫は一切劫を攝し、一切劫は一劫を攝し、因縁無礙有るを以ての故に、此の如くを得るなり。若し定性有れば、何ぞ猶お能く爾るや」④と。〈文〉若し此の義に望まば、僧祇を以て一念と爲すが故に、成佛速やかなり。若し一念に無生を望まば、直ちに是れ一念なり。即ち佛と名づくるなり。而して階級を壞さざるに約すは、亦た五十二位を経る。壞さざるに約す時、亦た三祇を経て、長短無礙、即ち無所畏なり。此の宗亦超悟の菩薩有り、『法華疏』⑤の如き、此の義を廣く論ずるは、『文義要』⑥の如し。

注

- ① 吉藏『中觀論疏』卷二の中に修道の階位について以下の様な記述がある。「若心無生即無所依。離一切縛即便得中道。故五十二賢聖皆就無生觀內分其階級。初信諸法本性無性故名十信。稍析伏生心令不起動念。故名爲伏忍。即三十心人。以折伏生心不起動念即無生稍明。順諸法無生不墮於生。故名爲順忍。初地至六地也。生心動念不復現前。無生現前故名無生忍。七地至九地也。生心動念畢竟寂滅。無生妙語了了分明。故稱寂滅忍。十地等覺妙覺

地也。以階級無階級唯一無生觀。無階級階級故有五十二位不同。所以五十二位並作無生觀者。良由二諦本來無生。故因二諦無生發無生觀」『大正藏』卷四十二. p. 24c6-18

- ② 大師は吉蔵のことを指す。「釋前」は前文の「重牒八不云」の文を指す。注二を参照。
- ③ 吉蔵『中觀論疏』に「如大品云菩提易得耳。以一切法無生即得菩提也」とある。『大正藏』卷四十二. p. 38c28-29 『略私記』にある引用文後の割り注に「文第二十四卷文也」とあるが、『摩訶般若波羅蜜經』第二十四卷の検討結果、引用文に合う記述は見当たらない。しかし、第二十五卷に小異がある記述がある。即ち「汝當如是思惟瞋誰。誰是瞋者。何等是瞋事。是一切法性空性。空法無有所瞋。如是須菩提。菩薩摩訶薩行般若波羅蜜時。以是因緣建立衆生於性空。次第漸漸示教利喜。令得阿耨多羅三藐三菩提」である。『大正藏』卷八. p. 401b20-25 『略私記』の中の引用文は、珍海が吉蔵の『中觀論疏』の記述により、取意の引用である。
- ④ 吉蔵『法華玄論』卷九に三世に自在無礙の義について「乃至一劫攝一切劫。一切劫攝一劫。以有因緣無礙故得如此也。若有定性何猶能爾」と述べている。『大正藏』卷三十四. p. 441a16-18
- ⑤ 『法華疏』の如き 吉蔵『法華義疏』に以下の様な記述がある。「此は無階級階級故開諸位不同。不如有所得人一向定作淺深之解。所以然者。經中階級之說無定。或說初發心時便成正覺。或說久劫行行方證菩提。或勸起道意令住不退轉。或說實無發心亦無退者。皆是善巧化物。不可定相執之也」『大正藏』卷三十四. p. 564a24-29
- ⑥ 『文義要』の如し 珍海『三論玄疏文義要』の中に以下の様な記述がある。「無階之階級。初後宛然。階級之無階。發心即佛。此則因果一異。無有相隔也。言從佛智慧出者。於佛智慧有十種別。即此十種分爲十地。十地具足。便名爲佛故。十地者。從佛智慧而開出也」『大正藏』卷七十. p. 314b19-23

テキスト

第十、大乘無礙門

疏第三云、又中は無礙、眞諦定絶、遂不得不絶、既其是礙、云何名中。〈文 此詳他師眞諦四絶義也〉第四云、令此觀心、於一切法通徹無礙。〈文〉二諦義云、有所得定性義如此耳。乃至如是、眞俗皆是障礙法門。今明、諸佛菩薩、無所得、空有因縁無礙。〈云云〉佛性義中、釋衆生不成佛、草木成佛等云、無性不得、是故得名大乘無礙。〈云云〉大集經中、說菩薩出要、名無礙法門。〈第十四卷〉淨名玄第三、第五同之。疏第四并四論玄明容入義。或引釋鏡入寸瓶、或懸寸鏡照萬物爲喩。或引夢境爲喩。法花玄第九、明三世無礙義云、以有因縁無礙故、若有定性何能爾、〈云云〉因縁無礙者、法性無礙也。無定性者、遮執性也。又云、菩薩得諸法實相、所以能如此也。〈云云〉二諦章上卷云、只就有中一切法無礙。如華嚴所辨、三世無礙。淨、穢、長、短佛刹無礙。得無礙道。使諸法無礙、良由諸法無礙故。又云、以諸法自無礙故、菩薩得無礙觀、得無礙通、得無礙辨。〈云云〉今考此等文、有四種無礙。一、諸法無礙。二、正觀無礙。三、身通無礙。四、言説無礙也。又諸法中、有法無礙、空無礙、法中道無礙。又總言無礙者、遣情無礙。離障礙故、法性無礙、法自爾故。又大智論第三十云、以智慧力、能以千萬劫爲一日。如毘摩勒説七夜爲劫壽。〈云云〉又五十云、佛有無礙解脫、菩薩有不可思議三昧、能令多時作少時、少時作多時。亦能以大色入小、小色作大。〈等文〉凡諸無礙、皆以法性無礙爲本。無得正觀要在於斯。

『大乘正觀略私記』『大正蔵』卷七十. p. 199b15-c3

書き下し

第十、大乘の無礙門

『疏』第三に云わく、「又中是れ無礙なり、眞諦は定んで絶、遂に不絶を得ず、既に其れは是れ礙なり、云何が中と名づくるや」①と。〈文 此れ他師の眞諦の四絶義を詳するなり〉第四に云わく、「此れ觀心して、一切法に於いて通徹無礙ならしむ」②と。〈文〉『二諦義』に云わく「有所得の定性の義は此の如くなるのみ。乃至是の如き、眞・俗は皆是れ法門を障礙す。今明さく、諸佛と菩薩、無所得なり、空有因縁は無礙なり」③と。〈云云〉『佛性義』の中に、「衆生は不

成佛、草木は成佛等を釋して云わく。無性は得ず、是の故に大乘無礙と名づくを得」④と。〈云云〉『大集經』の中に、「菩薩の出要を説き、無礙の法門と名づく」⑤と。〈第十四卷なり〉『淨名玄』の第三⑥、第五⑦はこれと同じ。『疏』第四並びに『四論玄』に容入義を明かす。或は鏡を寸瓶に入り、或は寸鏡を懸て萬物を照らすを引いて釋すを喩と爲す。或は夢境を引いて喩と爲す。『法花玄』第九に、三世無礙の義を明かして云わく「因緣無礙有るを以ての故に、若し定性有れば何ぞ能く爾るや」⑧と。〈云云〉因緣無礙とは、法性無礙なり。無定性とは、執性を遮すなり。又云わく「菩薩は諸法の實相を得、所以に能く此の如くなり」⑨と。〈云云〉『二諦章』上卷に云わく「只だ有の中に就いて一切の法は無礙なり。『華嚴』に辨ずる所の如く、三世無礙なり。淨・穢・長・短佛刹無礙なり。無礙道を得。諸法無礙をして、良に諸法無礙に由らしむるが故なり」⑩と。又云わく「諸法自ら無礙なるを以ての故に、菩薩は無礙觀を得、無礙通を得、無礙辨を得」⑪と。〈云云〉今此れ等の文を考え、四種の無礙有り。一に、諸法無礙。二に、正觀無礙。三に、身通無礙。四に、言說無礙なり。又諸法中に、法無礙、空無礙、法中道無礙有り。又總じて無礙を言うは、遣情無礙なり。障礙を離るるが故に、法性無礙にして、法は自ら爾なるの故なり。又『大智論』第三十に云わく「智慧力を以て、能く千萬劫を以て一日と爲す。毘摩勒に七夜を説いて劫壽と爲すが如し」⑫と。〈云云〉亦た五十に云わく「佛に無礙解脫有り、菩薩は不可思議三昧有り、能く多時をして少時に作し、少時をして多時に作さしむ。亦た能く大色を以て小に入り、小色を大に作す」⑬と。〈等の文〉凡そ諸の無礙、皆法性無礙なるを以て本と爲す。無得の正觀は要^{かなら}ず斯に在り。

注

- ① 吉藏『中觀論疏』卷一に「又中は無礙。眞諦定絶遂不得不絶。既其有礙云何名中」と述べている。『大正藏』卷四十二. p. 11a20-21
- ② 吉藏『中觀論疏』卷四に、一切の經論は次第があり、その次第は更に「隨義次」と「隨根次」の二つに分けられるとしている。また「隨根次」は三義がある。即ち「一歴法次第。令此觀心於一切法通徹無礙。二者衆生取悟不同。自有聞破生滅不能得道觀去來即便了悟。三者欲釋大乘中要觀。經中

或就無生無滅明中道觀行。或就無去來明中道觀行。但佛在世時衆生根利聞略説即得道。末世鈍根聞經略説未解故。論主廣釋之。方乃取悟。」である。

「隨義次」は七門がある。即ち「一明八不爲論大宗。因縁品釋八不之始。二者上破四縁。遍破一切法名爲總觀。三者破於去來爲成無生。外云因謝滅即是去。果續起即是來。既有去來寧無生滅。數人但有一種三世。謂從未來來現在。從現在謝過去。論人有二種三世。一實法三世。略同數。二假名轉變三世。從過去來現在現在轉作未來。若無四縁之生寧有三世來去。故舉去來以成生義。四者有二種觀。一約於事觀。事觀者觀即目所見動靜去來明無所有。二理觀者直觀四縁無有生義。五者望成實義前品破生。六者上因縁品末結無能生之縁所生之果。七者上品求生不可得。外人便謂。生病息則是去。無生觀生則是來。故生滅之執乃傾而去來之病便起。故次破去來明本無生病」である。『大正蔵』卷四十二. p. 53a8-b16 珍海『略私記』の中に説いている「此れ觀心して、一切法に於いて通徹無礙ならしむ」は「隨根次」の三義の第一義である。

- ③ テキストには「二諦義云」とあるが、『二諦義』の中で、テキスト原文に合う記述は見当たらない。吉蔵の『大乘玄論』卷一の中で、テキスト原文の引用と合う次の様な記述がある。「有所得定性義如此耳。世諦自是説。若無所説即屬眞諦。眞諦自無所説。若有説還屬世諦。如此眞俗皆是障礙法門。今明。諸佛菩薩無所得空有。因縁無礙故」『大正蔵』卷四十五. p. 24a6-10
- ④ 吉蔵『大乘玄論』卷三の中に、草木成仏について以下の様な記述がある。「問衆生無佛性草木有佛性。昔來未曾聞。爲有經文爲當自作。若衆生無佛性。衆生不成佛。若草木有佛性。草木乃成佛。此是大事。不可輕言令人驚怪也。答少聞多怪。昔來有事。是故經言。有諸比丘。聞説大乘。皆悉驚怪。從坐起去。是其事也。(中略)迷故失無佛性。悟故得有佛性」『大正蔵』卷四十五. p. 40b21-28
- ⑤ 曇無讖訳『大方等大集經』卷十四に菩薩の出要行について以下の様な記述がある。「爾時世尊。説諸菩薩出要之行。名無礙法門莊嚴菩薩道。成就佛法諸力無畏」『大正蔵』卷十三. p. 93a28-29
- ⑥ 第三 無礙の法門について、『浄名玄論』卷三に小異がある記述がある。即

ち「明非凡夫行非賢聖行。是菩薩行。雖有而常行空。雖空而常涉有。空有無礙。故名解脫也。以有解脫故名不思議。又對有功用位。以不能空有任運無礙。故名爲縛。非不思議。以無功用心空有無礙。故稱解脫。名不思議也」である。『大正藏』卷三十八. p. 873b12-17

- ⑦ 第五 無礙の法門について、『浄名玄論』卷五に以下の様な記述がある。「今明。大品云。菩薩無礙道中行。佛在解脫道中行。無一切暗弊。詳此文意。無礙解脫。俱有斷不斷義。若一念正觀。惑不現前。則無礙正斷。解脫出居累外。故解脫不斷。故云佛在解脫道中行。無一切暗蔽也。若言解脫續於無礙。鎮前無惑之處。遮未來或。令不得續生。則有遮斷。故名斷。無礙正斷。故得言金剛或盡。未有解脫。遮未來或。得言不盡。故盡與不盡。二說不違」『大正藏』卷三十八. p. 888b29-c8
- ⑧ 吉蔵『法華玄論』卷九に「如現在現在爲未來。未來爲現在。又云過去劫攝現在劫。現在劫攝未來劫。長劫攝短劫。短劫攝長劫。有佛劫攝無佛劫。無佛劫攝有佛劫。乃至一劫攝一切劫。一切劫攝一劫。以有因縁無礙故得如此也。若有定性何猶能爾」とある。『大正藏』卷三十四. p. 441a13-18
- ⑨ 吉蔵『法華玄論』卷九に「華嚴云。無量劫一念一念無量劫。無來無積聚而現諸劫事。以法無定性故。菩薩得諸法實相所以能如此也」とある。『大正藏』卷三十四. p. 441a23-25
- ⑩ 吉蔵『二諦義』卷上に無礙について以下の様な記述がある。「唯就有中一切法無礙。如華嚴所辨。三世無礙淨穢長短佛刹無礙。如此無礙名曰聖諦。菩薩得無礙者。非是諸法是有礙。菩薩得無礙觀。令諸法無礙。得無礙通使諸法無礙。良由諸法無礙故」『大正藏』卷四十五. p. 85b12-16
- ⑪ 吉蔵『二諦義』卷上に「以諸法自無礙故。菩薩得無礙觀。得無礙通。得無礙辨也」とある。『大正藏』卷四十五. p. 85b19-20
- ⑫ 龍樹『大智度論』に以下の様な記述がある。「所謂小能作大大能作小。能以千萬無量劫爲一日。又能以一日爲千萬劫。是菩薩世間之主所欲自在何願不滿。如毘摩羅詰經所説。以七夜爲劫壽。以是因縁故。菩薩乘神通力。能速疾超越十方世界」(『大正藏』卷二十五. pp. 283c27-284a3
- ⑬ 龍樹『大智度論』に以下の様な記述がある。「佛有無礙解脫。菩薩有不可思

議三昧。能令多時作少時。少時作多時。亦能以大色入小。小色作大」『大正藏』卷二十五. p. 420b23-25)

テキスト

第三、總結宗歸

今略舉要者、在文八不偈、在法一圓中。在說強名在觀。即事在空宛然。宛然者如本也。無礙也。如說有即爲空等也。凡今論者、是窮深大教。滿字了義論也。教無不攝、理無不盡。況復無生正觀清而又明也。三解脱風、拂戲論之塵、一圓中月照正觀之水。弘誓勇猛、安愼百萬之僧祇。證入無礙、不隔一念之頓證。然則空有宛然。性空不捨幻有。中假常通。言說即寂滅也。一相平等、萬有如本。如此信、即初心佛。如是悟者、即初地佛。如此達者、即是等覺。如是窮者、即妙覺也。正觀旨歸、粗況如斯。

正觀大意一卷

長承三年正月十五日、沙門珍海私記

右天文十二年十月十三日、於南都東大寺、以觀音院御本馳惡筆、是併爲三論結緣也。

求法沙門快盛

『大乘正觀略私記』『大正藏』卷七十. p. 199b15-c3

書き下し

第三、宗歸を總結す

今略して要を擧ぐらば、文在り八不の偈、法在り一圓の中、說在り強いて名づけて觀在り。事に即して空宛然に在り。宛然とは本の如くなり。無礙なり。有を説いて即ち空と爲すが如き等なり。凡そ今論ずるは、是れ窮深の大教なり。滿字了義の論なり。教は攝せざること無し、理は尽さざることなし。況や復た無生の正觀は清にして、而も又明なり。三解脱の風、戲論の塵を拂い、一圓中の月は正觀の水を照らす。弘誓は勇猛にして、安ぞ百萬の僧祇を愼まんや。證入無礙にして、一念の頓證を隔てず。然れば則ち空有宛然たり。性空、幻有を捨てず。中・假常に通じ。言說即ち寂滅なり。一相平等にして、萬有は本の如し。此の如く信ぜば、即ち初心の佛なり。かくの如く悟らば、即ち初地の佛なり。此の如く達すれば、即ち是れ等覺なり。かくの如く窮まれば、即ち妙覺なり。正觀の旨歸、粗況斯の如しなり。

正觀大意一卷

長承三年正月十五日、沙門珍海私記

右に天文十二年十月十三日、南都東大寺に於いて、觀音院御本を以て惡筆を馳す。是れ併に三論結縁の爲なり。

求法沙門快盛